

灰の旅路

ぎんしゃげ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無口無表情な灰の妖怪がどんどん勘違いされながらも美味しいものと美しい風景を求めて旅をする……!

※古代スタートに妖怪のオリ主です。

生存確認用のTwitterアカウントです。

どれくらい進んだかとか、灰の旅路、ハーメルンに関することを呟いたりしています。

投稿時間の報告なんかも基本Twitterでしています

<https://twitter.com/rxwfa83lyjalb5?sll>

2l&t||7Bddi4W|lQhSG6HlWW3i9g

目次

魚好きつ子と2人旅	
第一話 灰の妖怪	2
第二話 魚がうめえ!	12
第三話 実は食に対する欲は高かつ	21
たり	
第四話 白墨(はくぼく)	31
命蓮寺と灰	
第五話 ヤンキーにバイクで追いつ	46
さるレベルの不幸	
第六話 初めて食べる美味いもん	56
第七話 旅をすつと言つたな、あれ	
は嘘だ	
第八話 もうこれお約束では?	69
第九話 亀裂の入る音	81
第十話 たびくは道連れ世は情けく	90
第十話 100	
第十一話 博麗の巫女	113
盲目の灰と地底の世界	
第十二話 暗い場所	128
第十三話 鬼が面倒をみてくれるらし	
い	
第十四話 地底の世界での賢い生き方	137
	146

第十五話	厄介事の種	156
第十六話	「饅頭怖い」	168
第十七話	楽しく生きる為に手を抜いてはいけないこと	185
第十八話	攻撃	192
第十九話	節目	204
第二十話	ふざけた交渉	219
式神な灰と幻想郷		
第二十一話	新人式神白墨くん	233
第二十二話	幻想郷流の治安維持	244
第二十三話	人里と警備員	254
第二十四話	肉友同盟	265
第二十五話	久しぶりの地底	274
第二十六話	振り回される人達	288
第二十七話	季節の変わり目	300
第二十八話	八雲紫の苦笑い	309
第二十九話	はじめてのとくべつにんむ！前編	319
第三十話	はじめてのとくべつにんむ！後編	330
第三十一話	後日談みたいな何か	344
第三十二話	厄神さまのお夕飯	

517	第四十二話	灰の天敵	後日談	490
	第四十一話	灰の天敵	後編	471
	第四十話	灰の天敵	中編	454
	第三十九話	灰の天敵	前編	431
	第三十八話	多種多彩の花と灰		417
	第三十七話	太陽の畑		406
	第三十六話	博麗大結界		394
	第三十五話	天狗の性格		384
	第三十四話	灰と神社		372
	第三十三話	日々の中で		

	第四十三話	時間の進み	528
	博麗の巫女と灰		
	第四十四話	幼い巫女と灰	557
	第四十五話	幻想郷経過報告―異常な	570
	し		
	第四十六話	古い友人	578
	第四十七話	頭痛が痛い紫様	586
	第四十八話	博麗の巫女との共同作業	598

魚好きつ子と2人旅

第一話 灰の妖怪

サラサラと砂の落ちる音が聞こえる

否、それは砂より細かく、軽く、煙っぽかった

砂、いやその灰の山の上に座っていた男は目を覚ました

薄汚れたような灰色の髪の毛を持った男だが同時にどこか儂げな顔立ちであった



なんだ!?

いや何処だここ!?

俺はなんで灰の上になんか座ってんだ!?

拉致か?それとも監禁?

恨まれるほどの交友関係なんてないぞ？

おもむろに記憶を探る

大学行つても変わらさずボツチだった俺は学校の帰り道、誰かに遊びに誘われる訳もなく速攻帰宅してお昼寝したはずだ

考えてもさっぱりわからない、とりあえずこつから出たい！暗くて怖い！

不安と恐怖で半泣きになりながらも光が差す方へ歩を進める

というかこのちっさな洞窟ではそこしか行く場所がない

数分もしないで出口に着く、先日雨でも降っていたのかそこには水溜まりがあった
水溜まりに顔を覗かせ自分の輪郭をぺたぺたと触る

知らない顔、誰だこいつ

俺これもしかしなくても知らないダレカサンになっちゃった？

知らん人の体を俺の魂が乗った感じ？それとも昼寝をしている時に自分でも気付かずボツクリ逝っちゃったから神様の慈悲で転生した感じ？

でも転生だったら俺の親どこよ?!都合よく俺の転生までの経緯を話してくれる便利な神様どこよ!?

わからない…

更に俺に追い討ちをかけるように意味のわからない光景が映り込んでくる

洞窟を出たは良いけどそこは俺の見慣れた高層ビルの建ち並んだ都会ではなくTVでも見ないような木々の生い茂る大自然だった

緑と生命に溢れた大自然、そんな自分にとっては全くの異世界を歩く、歩く、歩き続ける…

道のない自然の土は木の根や大きく盛り上がった地面、ゴツゴツとした岩で都会育ちの俺にとつては思つたよりも歩きづらいものだった

未だにわからないことばかりだがとにかく歩き続けた
ざつと5時間程歩いてわかつたことがある

この体は体力が底なしなのか歩き続けても全く疲れない、息が上がることも無いし、歩こうと思えば無限に歩き続けられそう

そしてその事につきさきまで全く違和感を抱かなかつた。もうなにがなんだか…
それとこの森が異常なのかこの世界がおかしいのかわからないが化け物がいる

目が4つほどあるデカイ狼だったり、腕だけ異常にデカイヤバそうなやつとか…
なんだここ地獄か？

俺なんか悪いことしたっけ？あれか、ボッチはりア充世界にはいらなから化け物いる森に放り込んでけきたいな感じか？

おのれ神許さん

ただのボツチだった俺を一人でこんな人外魔境な場所に送り込むなんて絶対許さん
…ただ少し怖いから化け物の類を見つけたらササツと隠れてやり過ごしていくぞ。
既にメンタルはボロボロなんだ

歩く、歩く、歩く…

お腹も空かないし、喉も乾くわけでもない、疲れもしないから歩くだけ

別に急ぐ理由もないし、休憩しようとも思わない

ただとりあえずこの森から出てここがどこなのか知りたかった

しばらくするとそんな非日常にも慣れてくる。慣れると今度は飽きが来る、何せ目が
覚めてから歩いてるだけだ、暇すぎて歩きながら手をコネコネさせる

ぼーっとそれを続けていると手から灰が出て来て風に乘ってそのまま飛んだ

初めは最初にいた場所にあつた灰が服に付いてたんだろうなあつて眺めていたけど、
しばらく経つて自分の手から出ていることに気付いた

体から灰を出せる…なんだそれ？

さつき口からビーム出してる狼を見たから驚かないけど体から灰を出せるってなか
なかに凄い！だつて無から何かを作り出してるんだからなんか凄いでしょ！

そんな思考で最初のうちは喜んで灰出しまくって居たけどよくよく考えたら灰が出

せるから何？砂遊びでもするの？

って感じだしちよつとテンション下がった

ただ飛んでいく自分が出した灰を見るとなんとも言えなかった、多分意味なんてないんだらうけれど

灰を出すのも飽きて、また手をコネコネしながら歩き続けてしばらく経った頃だった

俺の第六感とも言える何かが反応した

何となく俺はその方角へ走り、少しして森を抜けた

上を見上げるとさつき手から出してた灰が再度風に乗って飛んでいくのが見えた

教えてくれたのか？

前を向く、長い間歩き続けた森を抜けた先には人里が広がっていた

目が4つある訳でもなく、腕がめちやくちやデカい訳でも無い、俺の知識に当てはまる二足歩行の人型

見ると予想はしていたが木造建築ばかりでとても現代とは思えなかった

しかしそんなことはどうでもよかった！人だ、そう人なのだ、それだけで良かった

「おおー！」

俺は喜んだ、柄にもなく顔を緩めて声を上げて一直線に人里に向かった

俺は大喜びで人里の門まで行く

森で、1人で不安だったからか凄く安心した

大喜びで近づいて行く俺とは反対に、門の前にいる三角帽子を被った男は段々と顔を険しくしていき、今度はみるみるうちに顔を青くしてこう叫んだ

「な!?いつの間に妖だと!?ぐっ!刺し殺してやるわ!」

おい!待て何でだよ!

ちよつと待てよと焦っているうちに次から次へと騒動が大きくなっていく

「よ、妖怪だあ!しかも人型だぞ!油断するな!」

ドタドタと複数人の足音が近付いてくる

そこで俺はやつと冷静になった、なんと初めてのコミュニケーションは刃を交えて行うらしい

ようやく冷静になって逃げようと考えるも流れるように囲まれる。

長く先の尖った槍をこちらに向けて警戒しているのがよく分かる

あれこれやばくない?刃物に対抗する手段なんて俺は持ってないよ

俺が灰を出して許してくれないかと真剣に考えていた時、視界の端を黒い何かが横切った

人間達もそれに気付いたらしく上を見上げた

瞬間俺は連れ去られた、もちろん俺は反応できない

ほんとに一瞬、人間達が上を向いた瞬間に黒い何かがある場所を猛スピードで離れていった



「あんたバカでしょ！」

この時代では珍しい制服姿に黒い羽の生えた少女、姫海棠はたてがそれを見つけたのはたまたまだった

ほんとにたまたま人里を遠目から見ていて気付いた

「見た限り産まれたばかりの妖怪なんでしょうけど、人里に真正面から向かっていくなら死にたいの？」

「妖怪……？」

男は少し顔を驚かせて当たり前前のことと言った。まるで知らなかったと言わんばかりに

「当たり前でしょ？妖怪のあんたが人里へ行ったら退治されるなんて当たり前のことよ」

男がそれを聞いてまた無言になるが、はたてはそれを気にせずまくし立てるように話した

「いい、今回はたまたま近くにいたから妖怪のよしみで助けてあげたけど次はないわよ！自殺したいなら誰もいない所でやりなさい！」

はたては男が未だに黙っているのを反省しているからだと自己解釈した

なお実際はどうやって感謝の気持ち伝えればいいのか悩んでいただけである

男は絶望的に他人とのコミュニケーション経験が少なかつた

「私もこんなところでサボっているのがバレたらまずいんだから、これ以上あなたに構ってられないわよ！これ以上馬鹿な真似しないでね！」

はたてはあの状況で同じ天狗である訳でも無い男を助けたあたりお人好しだったが、はたてもまたコミュニケーションが下手くそだった

相手の返事など関係なしに言いたいことだけ言つて恥ずかしくなつて帰つた

男は感謝を伝えようと考えている間に逃げられてしまい啞然としていた

◆
驚愕の事実を知らされて俺はしばらく固まっていた

何故か俺を助けてすぐどこかへ行ってしまった少女をよそに今の状況を整理しよう

なんと俺は人間から化け物扱いされる妖怪だった……らしい

見た感じ妖怪と人間は対立しているっぽいというか親の仇のような目で見られていたからなんとなくそんな気はしてた

つまり人間とは話せないってことだ

人里入れないのかあ……

別に出会って速攻で殺しにくるようなヤツらと馴れ合うつもりなんかないし……

別にちよつとショックデカいなんて思っただけ……

心做しか歩幅は短くなり、ため息が小さく零れる

周りを見る

数時間前と比べて何も無い

歩く、歩く、歩く……

人間に追われてちよつとショックだが俺のやることは変わらなかった

俺はこの世界に来たばかりの時のようにひたすらに歩いた

やはりお腹は空かないし喉も乾かないから便利な身体だ

最初に見たあの森を思い出した

最初に見た人里を思い出した

なんとなく、本当になんとなく、強いて言えばまだ科学のかの字もない綺麗な風景を見て回りたいと思った。それしかする事がなかったとも言える

旅だ

便利なことにこの体は食事を必要としない

人間と力の強い妖怪にさえ気を付ければ大丈夫なはず

この今はない風景を目に焼き付けておきたいと何故か俺はそう思った

この小さな島国を旅する、やることのない今の第一目標としよう

男は人から拒絶され、人ですらないと言われてシヨックは受けたものの、まあいいかと済ませた

男は極端にまあいいかの精神だけ尖っていた

率直に言って、男は少しおかしかった

第二話 魚がうめえ!

歩く

ただ何も無い所に變化を求めてひたすらに歩き続ける

ただ意味もなく歩き続けていた訳じゃない

この体についてわかったことがある、まずお腹減らなくて喉が渴かない

これは前からわかっていたことだが1週間近く飲まず食わずでも平気だったからそもそも必要としないのかもしれない

それと灰をいっぱい出せる、ただ灰を出せるだけと思っていたがこの灰はドローンのような役割を持っている

例えば灰を風に乗せて飛ばすと飛ばされた灰からなんと地上の景色を見ることが出来る、これを知ってから定期的に灰を出して近くに何かないか調べてる

そして最後に妖力

使い方が分からない、今のところ火出して焚き火とするぐらいしか出来ない

でも多分これで妖怪か人を判断してるんだと思う、この妖力を他人に認識されないようにすれば見た目は人だし人里にも行けるんじゃないか?

ということだ灰を飛ばして見つけた小さい村へレッツゴー

そして、呆気なく簡単に俺は村に入れた



フハハハハハハ馬鹿め人間共！俺が妖怪とも知らず妖力を隠しただけで易々と里へ入れるなんて簡単すぎて笑いが込み上げてくるわ！

クツクツクツまずは何からやってやろうか

まあ別に人襲つたりはしないがな！こういうのは報復が怖いんだ

俺は地面に突き刺さった魚の串焼きを8本ほど奪い取って村を出る

ふははははは！この魚の持ち主には悪いけど、どうせ妖怪なんだから悪いことの一つや二つやつてもいいでしょ！…けどバレたら怖いから直ぐに村を出ていく

防犯カメラも何も無いなんてちよる過ぎる、人の目さえ気を付ければ余裕だ

俺は久方ぶりに手にする焼き魚をもつきゅもつきゅと食べていく

うーん塩がかかってないから微妙だけど久しぶりに食べたから思い出補正で60点、これからも見つけたら奪つ…貰っていこう

そうやって懐かしの焼き魚をしばらく食べ歩いていると岩を…いや岩の横でうずくまってる汚い人間?を見つけた

人間か? いやでも妖力持つてるし妖怪かうずくまって全く動かない妖怪を見る

長い白い髪の毛で顔はよく見えないが多分女だと思う。ひざから覗く片目はどこを見ているのか分からずちよつとやばそうだった

そして注目すべきがその妖力量、俺の10分の1程度もなかった
ははーんなるほどわかったぞ

こいつ俺と同じで妖怪になったばっかで人間に虐められた感じだな
いいだろう、俺もちよつと前によくわからん妖怪に助けてもらったばかりだ、情けは人の為ならずとか偉い人も言っていたし、焼き魚を1本分けてやろう
俺はうずくまってる女に俺は焼き魚を1本差し出す

「…え?」

焦点の合っていない目が段々と光を戻していき、やつと魚を認識した
恐る恐るといったふうに焼き魚を受け取り、しばらくしてゆつくりと食べ始めた

それを確認して俺も岩の上に座って残りを食べていく

初めはかすれた呼吸音のようなものに聞こえた

それは段々と大きくなつていき鼻声の泣き声に変わっていた

「うぐつ……う……うえ……」

堪えるように鼻を嚼る声、何度も涙を拭いながらも焼き魚を食べる

ええ……そんなに魚美味かつたのか……

まあ俺も塩がかかってたら懐かしさのあまり泣いていたかもしれない

うん彼女は余程魚が好きだったんだろう、ただ俺は急に泣かれてちよつと気まずくなつたから帰らせてもらおうか

5 本目の魚をパクツと食べて岩から降りる

じゃあな魚好きっ子よ

もちろん口には出さない、ただ手をヒラヒラさせて俺は歩き始めた

すると焦つたようにばつと立ち上がりこちらを振り向く

「ま、待ってー！」

うげつなんだよこいつ、まだ魚欲しいのか？なんて強欲な奴だやらんぞ！残りは全部俺のなんだからー本も渡さんぞ！

「ちよ、ちよつと待ってってばー！」

俺が構わず歩いていこうとしたらちよつと強めに引つ張られて仕方なく一旦止まる

「あんたこれから何処行くの?」

少し焦ったように聞いてくる

「適当」

特に目的地とかはない、行きたい場所もないからフラフラしてるだけだし

「な、なら私も連れて行つて!」

「やだ」

何言つてんだこの子

やだよ魚取られそうだし、つてか一人旅だから気楽でいいのに他人が居るとめんどく

さいから

うん却下却下めんどくさい

「お願いだよ、荷物持ちでもなんでもやるから!」

お?

今なんでもするつて…ふむふむ、気が変わったししょうがないたまには2人旅というのも悪くないねうん

ちようど一人旅に飽きてきたと思つてたんだ、そこまで言うなら連れて行つてあげよう

荷物持ちと雑用はしつかりしてもらうがなガハハ

俺は彼女に魚を一本渡す

「え？あ、ありがとう？」

彼女は戸惑いながらもそれを受け取った

よし受け取ったな、これで契約完了

その魚を受け取ったならキリキリ働いてもらおう、もう取り消しとかはさせないから
ふっふっふ、思わぬ労働力を手に入れたぜ。面倒なことは全部押し付けよう、これで
一人旅が楽になる

ん？あれでも俺別にご飯食べなきゃいけないわけでもないし、寝る必要も無いし、特
に大きな荷物を持つてゐるわけでもないしほんとにこいつ雇う必要あったか？

まあ何かあったら適当にやらせればいいか



軽い気持ちだった

いや今だからこそ軽い気持ちと言えるが当時はあれでいて本気だったはずだ

本気で本気の気持ちでかぐや姫が置いていった蓬萊の薬を飲んだ

黒かった髪は白くなり、老いることなく、死ぬことも無く妖怪でも人でもない蓬萊人になった

人でも妖怪でもない、けれど私は化け物だ

人里を追い出され、妖怪に殺されて何も出来ず覚悟はあつさり砕け散り人目を避けるように生きてきた

それでもお腹は空くし、喉は渴くし、体は疲れる

やがて飢餓を誤魔化すようにうづくまっていた。願わくばこのまま死んでしまえるように

いつから居たのだろう？

気が付いたら男が焼き魚を前に突き出して、しばらく経ってからそれを譲ってくれているのだと気が付き受け取った

それを見ると男は無表情のまま岩の上に座って魚を食べ始める

私もそれにつられて魚を一口食べる、そういえば誰かと一緒に食事をするのは久しぶりかもしれない

いや傍から見ればそれは一緒に食事をしているとは言えないだろう、私と彼は顔も合

わせず無言で食べ続けているだけだ

けど、それで良かった。ただ横に誰かが居てくれるだけで良かった

今の不安定な状態の私にとってこの空気がとても居心地が良いものに思える

ふと彼の顔を見る。彼は私と会ってから一言も話していない、それどころかずっと無表情だ

彼の考えていることがわからない、どうして私に魚をくれたのか、どうして私と一緒に居てくれているのか：同情？好意？気まぐれ？

それを彼の表情から推測するのは不可能だろう

気楽だ、もし彼が私の事を嫌っていたとしても恐らく私はそれに気付けない

私もそれを気付かないフリをして逃げることが出来る

そう考えてそれがとても魅力的なものに見えた、自分が傷つかずにいけるともとても魅力的なものに見えた

だからだろう、彼を引き止めたのは

私は化け物だ、化け物になった

人も妖怪も誰も受け入れられない化け物になった

でも、それでも覚悟が出来るその時まで誰かに縋っていきかけた

涙を拭いて前を向く

久しぶりに食べた魚の味は元貴族の私にとっては味気なくそれでいて優しいもの
だった

第三話 実食に對する欲は高かつたり

山を寺を村を行く

特に目的地なんてないし適當にほつつき歩いてるのを旅してると言つて楽しんでるだけ、同じ場所に長く留まりもすれば直ぐに出ていくこともある。それは気分だ

いいじゃない気分で、妖怪だもの

虫はいるし妖怪もいるし飯はあんまり美味しくないけど村の雰囲気も外の空気もまるで違う。それに今は荷物持ち：賑やかし担当の魚好きっ子いるし退屈はしない。しつかり計算してないが魚好きっ子と旅を始めてから恐らく一年ぐらい経つただろう。まだまだ楽しめそうだ

そうそう、魚好きっ子は妹紅つて名前らしい：上の名前は忘れた。面倒臭いし魚好きっ子つて呼び続けている、特に問題は無い。本人は凄い不服そうな顔をしていただけ問題無いたら無い

魚好きっ子と言えば初めの頃は3時間歩いた程度で直ぐに休憩しよーと軟弱なことばかり言っていた。妖怪の癖に疲れるなんて：と言つたら人間だ！と言ひ返された、どう見ても妖怪だろ：そしてもちろん休憩せず無理やり行つた

「なー次はどこへ行くんだ？」

いかにもアホそうなバカそうな頭の弱そうな感じで話しかけてくる魚好きっ子も諦めたのか休憩せずしぶしぶ付いてきている

「前みたたく人里で妖怪なのがバレて追いかけられるのは嫌なんだけど」

俺はその言葉に対して軽く顔を横に振る

違う、この前のはこの世界では珍しい砂糖をたまたま見つけたから拝借しようとしたところ警備に見つかったただだけだ。断じて妖怪だとバレたわけじゃない

警備の奴らが妖怪め！などと抜かしていたが俺の完璧な妖力隠しがバレるわけない、魚好きっ子は馬鹿だからばれたと思っただけだ

「あっそう」

魚好きっ子が諦めたようにそう言った

「それで結局この後はどこへ行くのよ？」

「適当」

実は飛ばした灰から変わった神社をみつけたのでそこへ行こうと決めてるけど、それを説明するのが面倒臭いから適当と言っておく

適当、素晴らしい言葉だ

面倒臭い時はこれを言っとけばなんとかなるし言葉を発する時もたったの4文字しかない

魚好きっ子が絶対嘘だろと言ってくるが知ったこっちゃない

ふっふっふ、この世は武力社会なのだよ魚好きっ子。俺より少ないその妖力でなんか言われようと取るに足らんわ

「へえ〜夕食の魚取ってきてあげないよ」

悪いことを思いついたようにニヤニヤしながら恐ろしい脅しをしてくる

う、うぜえ…

けど魚が…別に妖怪だから食べる必要は無いけど唯一の楽しみが…!!あいつ俺がどれだけご飯を楽しみにしているか知ってるくせに

ああでもそうだな魚の為なら言わざるを得ないな…最善だよ魚好きっ子

残念だ…軽蔑したよ魚好きっ子…まさか君が夕食を人質に取るといふ最低最悪下劣外道なことをしてくるなんて

「……近くの神社」

できるだけ軽蔑したように失望したように言う

「え!?!喋るなんて珍しい…」

自分から脅してきたくせに驚いたようにこちらを向く

そうだね珍しいね、代わりに君は僕の信頼を失ったけどね

「へへっ気分が良いし今日は多めに採ってきてやるよ」

前言撤回、君はめちやくちや良い奴だよ魚好きっ子



コイツは眠らない

こいつと旅を始めてからもう10年も経っていた、10年も一緒にいれば全く喋らないこいつの事も多少わかってくる

こいつは眠らないし、食事を必要としないし、喋らないし、表情を変えない

妖怪というより生物かどうかも怪しい

こいつは生き物がするであろう事を全く必要としない

おかげで初めの1年は本当に苦労した、私は不老不死だから死なないがお腹は空くし、眠くもなるし、喋るし、表情も変わる

だからこいつとは根本的に生活が違う、私がお腹が空いたから休憩しようと言っても初めのうちは全く止まってくれなかった、それどころが無言でスタスタ歩いていくので

私は2週間ほど水も飯も食わずに歩き続けた

いくら死なないからと言っておなか为空くから流石にキツイ、なんとか説得して今では1日2回食事休憩があるけどあれは恐らく私の事を氣遣って食事休憩をしているのではなく魚が美味しいことに氣付いたからだ

なぜなら私が夜だから寝ようと言って寝ていたら夜中に蹴り起こしてきて、そのまま昼間のように歩き始めたからだ

もう一度言おう、あいつは睡眠を必要としない

だから普通人間が寝るであろう時間も構わず歩き続けようとするのだ

私も何度か抗議しようとしたが結局夜には蹴られて無理やり起こされるし、無視すればそのまま置いていかれるから泣く泣くついて行くしかない

何度も文句を言ったりしてみたが見事にすべて無視された

あいつは基本的に喋らない。特に自分にとつて都合の悪いことと面倒臭いことは無視して進む

それ以外でも話しかけたとしても無視かジェスチャー、頷くぐらいしかやらない、ほんとに面倒臭い奴だ

だから私はこいつとのまともな会話は諦めた、まあ話しかけるのをやめるつもりは無いけど

しかしそんなこいつでも食事の時間だけはしつかりしている

こいつが唯一感情を露わにすること、それは食事だ、食欲だけは人並み以上持つてい
る

この前魚を釣ってきたら私が釣った魚なのに何故か半分以上奪われた

それに採ってきた魚が少ないと自分からは絶対に喋らないこいつがわざわざ少ない
と文句を言ってくるのだ

なんと理不尽な、そもそも私が採ってきた魚なのにほとんど持つていかれるのも納得
いかない

ほんとに食に関する執着心だけは凄い、人里や村を追い出される理由の八割があいつ
が食べ物に目を奪われて素っ頓狂なことをしてかそうとして追いかけるのがほと
んどだ

折角名前を教えたというのに変な呼び名で呼び続けるし、だから私もあいつの事を名
前で呼ばない、それに魚好きなのはお前だとツツコんだが無視された、せめて何考え
てるかだけでも分かれば楽なのに：



久々に命の危険を感じる

神とか呼ばれている割に器の小さい奴め！良いじゃないか美味しそうなご飯のちよつとやそつと分けてくれるぐらい

「まさか神である私への貢物を盗もうとする妖怪風情がいるとは思わなかつたぞ…!!」

「おいおいお前ふざっけんなよ！何を考えたら神様の供えもんを盗み食いしようとか言う罰当たりなことが出来るんだよ！私まで巻き添えで死にそうだよちくしょう！」

勝手についてきた分際で魚好きっ子が何か言っているがもちろん無視する

お前は不死だから平気だけど妖怪の俺はあの神力で死にかねない

自慢じゃないが神に追われるのはこれが初めてでは無い、この世界の神はケチばっかだから神社に行く度に何かしらの理由で追われる、しかし未だ捕まったことが無い。まあ捕まっていたらこの世から既に去っているんだがな

ひよいひよいと神の攻撃を避けながら灰を飛ばし隠れられそうな場所を探す…見つけた

そこまでの最短距離を走っていく

「おい……壁があるから右へ行くぞ！」

何言ってるんだ壁があるからここまで来たんだよ

まあ逃走の何たるかを知らない魚好きっ子には分からないかもね

俺はそのまま壁へ直進して妖術で煙幕をはる、ただの視界封じじゃない

この妖術の煙幕は歩いていくとまっすぐ歩いているつもりでも真横に行ったり、平衡感覚をおかしくしたりと逃げるのに最適な煙幕だ

煙幕で姿を見失っている間に壁に手を当てる

すると石の強固な壁がサラサラと塵となつて分解されていき人一人分入れる程度の穴が出来た

魚好きっ子は足を掠つたのか片足を引きずつて歩いてきたから首根っこ掴んで今開けた穴に放り投げる

小さな悲鳴が聞こえた気がしたけど気のせいだろう

神に見つかる前に俺も穴に入ってまた壁に手を当てる

すると塵が集まっていきあつという間に穴が元通り、これは俺が最近知つた力

大体のものを触れることで分解させられる。そもそもつて分解し、作り替えることが出来る。もちろん分解した質量以上のものに作り替えたり素材を変えたりは出来ない

だがこれのおかげで壁に穴を開けて塞ぐぐらいの事が出来るため逃走にはうつつ

けだぜ！ゲヘヘヘヘ

「な！クソっ！どこへ行きやがった！探せ！まだ近くに居るはずだ！」

神ともあろうものが妖怪！人捕まえられないなんて無様なものだ、俺は念入りに自分達がいる場所を結界で隠蔽する

「お前…ほんとにふざけブムっ」

なんか大声を出しそうだったんで魚好きっ子の口を無理矢理塞ぎ、人差し指を出して静かにしろと伝える

「誰のせいでもこんなことになってるんだよ…」

額に青筋を立てながらなんか言ってる、こいつ馬鹿なのか…？潜伏中に声出してはいけないということがわからないなんて…

やれやれ

まあ魚好きっ子だし仕方ないか

なんか怖い顔して手から火出してるんだけど…大丈夫かこいつ

まあ人にはともあれ無事酒を奪えたぜ…お酒なんて飲んだ事ないけどさぞ美味いんだらうなあ…

今ここじや飲めないけど魚好きっ子にもこの酒を少し飲ませてやろう

何故か機嫌悪いしこれで機嫌を直してくれるだろう、今から飲むのが楽しみだ

グ
へ
へ
へ
へ

第四話 白墨（はくぼく）

俺も妖怪として生きてかなりの時間が経ったと思う

俺もそこそこ有名になった、神社や村で盗みを働く命知らずな妖怪としてだが

自慢じゃないが俺は色んなやつから追われてきて1度も捕まったことがない

神、神霊、一流の妖怪退治屋、陰陽師と数多くの者に捕まりかけたが年々高くなつていく逃走スキルでだ

妖力量も増えていき一般的に言われている上級妖怪レベルに片足突っ込んだ程度には俺も力をつけたのだ

いや勝つことは不可能だとしても逃げの一手に関しては大妖怪レベルの奴からも逃げおおせると謎の自信までついた

最近だと飛ばした灰から音を拾ったりと灰の使い道もどんどん増えていくし良いことだらけだぜ

「うん？今日はここで休むの？」

おうよ、近くに川もあるしちようどいいやろ、だからほらあれ取ってこい

指でちよいちよいさせて魚好きっ子に魚を取ってこさせる

「わかったわよちよつと取ってくるからあんたは火でも炊いておいて」

そう言つて魚好きつ子は川へ向かつていった

飯だ、飯

手元に手頃な木の枝を集めて妖術で火をつける

塩があれば完璧だがもちろんないので諦める

パチパチと火の燃える音が当たりに響く、周りがやけに静かな気がした



「よいしょつと」

服の袖を捲つて川に入る

いつものように魚を取りながら少し考える

もちろんあいつのことだ

私は最近になつてあいつは本当に頭がおかしいのではないかと思ひ始めている

そもそもあいつはなんの妖怪なんだ？

いくら妖怪だからと言って食事も睡眠も人からの恐怖も摂らずに存在するなんて聞いた事がない

例えどんな妖怪であっても人間の恐怖を糧に生きていくのだがあいつはそれすら必要としているように思えない

あいつはよく盗みを働いて怒りを買ってはいるが妖怪として恐怖されている姿を見たことはない

それも1日2日ではなくもう何十年も人からの恐怖を感じていないにも関わらず存在を保っているどころか妖力量が増えて強くなってすらいる

逃げの一点に関して言えばプロだ

しかし強いわけじゃない

そりやそこら辺の木っ端妖怪には勝てるかもしれないけど毎度毎度神を相手にして生きて逃げられているのは奇跡だ

なのになら、そこまで危険でいつ死んでも可笑しくないのであいつは必ず何かしらの食べ物盗んでくる

ほんとうにこれ以上はやめて欲しい巻き添いで毎回私が死ぬからだ

いつも瀕死になりながらも逃げ延びた後に盗んできた砂糖菓子を食べているがどう考えても頭がおかしい

そこまでして食に貪欲なのは死に慣れ始めている私も流石にも引く恐らくあいつは睡眠欲と性欲を捨てて食欲にパラメーターを振っているのだから、今も理不尽に私だけ魚を取りに行かされるのはあいつは魚の量が少ないと怒るからここにいる魚は極力逃がさないように慎重に捕まえる

「よっ、しー」

捕まえた魚を直ぐに枝で突き刺しまた他の魚を探す

そうやっていつも通りに魚を捕まえようとした時、空気が変わった

私がそれを避けられたのはただの偶然

本当にたまたまなんとなく右に動いたらそうなっただけ

なんとなく右に動いて：瞬間手首から先が消し飛んだ

「あつづツツ！」

なんだ？どこからやられた？誰だ？

辛うじて光の球が飛んできたのは見えたが正確な位置がまだ掴めない

場所が悪い

残った腕を川に突っ込み炎を出して水蒸気の煙で身を隠す

「地上人への攻撃を外した2発目の攻撃準備を始める」

「了」

「了」

「了」

仲間がいるのか!?少なくとも4人以上:

こちらの場所が割れているのに対して相手の場所が全くわからない

それに相手の攻撃は早い上に私程度簡単に吹き飛ばす程度の力がある

「冗談じゃねえ…クソっせめて姿くらい見せてみるよー」

こんな酷い状況だ悪態のひとつやふたつ出てくるつもんだよ

「既に貴女の目の前にいるのですが…まあ言ってもわからないでしょう精々楽に終わらせてあげます」

クソっなんて分の悪い…状況の悪さに思わず舌打ちが出る

…?あそこだけ草が…

草の近くに爆風を起こして見えない何かを吹き飛ばした

「な!?!なんで!」

爆発でそれが解けたのかそこには1人の妖怪がいた。

うさぎ耳で黒い筒のようなものをもった妖怪が驚いたような顔をしてこちらを向い

た

「なるほど、お前からまだかぐや姫を探してんのかよ逃げられたんだってな数十年前に……
そうだろ？月兎ども」

指をピストルのようにして自分の頭に向け、バン！と自分の頭を吹き飛ばす

やがて身体が炎に包まれ元の傷一つない身体へと戻る

「リザレクシヨン」

「リザレクシヨン!?!こいつまさか蓬莱の薬を！」

「絶対に逃がすな！無力化させろ！」

玉兎達はどうかやら私を捕まえるらしい

「つま大人しくするつもりは毛頭ないがな」

私はニイッと顔を歪めて大きく笑う

無数の光線が当たりを埋めつくした



なーんで魚好きっ子と兎が戦ってんの？

っていうかなんでこの時代に光線銃??うん?ダメだわからん!

分かるのはこうなってる以上魚が食べれないってこと

どうしよう

20分前

んー魚好きっ子がおーそーいー

これはあれだおしおきが必要みたいだな、魚好きっ子が帰ってきたら俺が待ちぼうけをくらった時間と同じだけ魚をお預けしよう

目の前に魚があるのに食えないなんて耐え難い拷問だろうが遅いあいつが悪いな
うん遅すぎる長い!

ハッ!まさか俺に内緒で先に釣った魚を食べてるとか!?!ゆるせん:
ちよつくら灰でも飛ばして様子を見るか:

そして今に至る

つーわけはどうしようか

にしても本当に凄いなんで光線銃なんてあるんだ？見た目完全にスター○オーズのあれだ

とりあえず魚好きっ子に何があったか聞か、声に出さないけど多分わかるでしょ！
わかんなかったら2、3発殴れば気付くはず

ス○ーウオーズな戦場に乱入する

あ？こいつらなんで俺を見てるんだ？

1番近くに居た兎が震えながら俺を見て

「うっ……き、気持ち悪い……」

思いつきり吐いた

流石の俺もちよつと泣く

「お前……いつ来たんだ!？」

魚好きっ子よこの状況を説明してくれ意味がわからん

お？なんだちゃんど魚取っておいでくれたのか、うんうんこれで夕食は問題なし後はちやつちやとこつから逃げちやおうなんかもうめんどくさい事になってきたし

「こ、ここれ以上近づくなああアアアアアアアアアアア!!!」

奥の兎が銃乱射してきやがった

急に撃ってくるなんて最近の兎はどんな教育を受けてるんだ

一応あれに当たるとシヤレにならなきそうだから避けるちなみにあらかじめ張っておいた結界は減速すらせず破られたので使い物にならない

見てから回避は間に合わないので銃の射線に被らないように逃げる

「あつ」

戦場に似つかわしくない気の抜けた声が響いた

当然俺はそちらの方を向く、どうやら声の発生源は魚好きつ子らしい

つられて魚好きつ子が見ている方向を見る。そこにはたった今光線銃によつて吹き飛ばす今夜の晩飯があつた

魚が消し飛ばす? ご飯がない? pardon? 俺の晩飯無し? え? 飯抜き? あれ?

兎を見る

今自分が吹き飛ばした魚のことなんて頭にないのか変わらず俺に向かって銃を乱射している

.....

本音を言うと、もうめんどくさい。だって俺関係ないしこの問題起こしてきたのは魚

好きっ子だし

けど、俺を狙ってきたし、俺を殺そうとしてきたし、実際あの銃が当たったらたぶん俺死んじゃうし

あつちが先なら仕方ないだろ

めんどくさいし殺っちゃおう、問題の最も簡単な解決法は暴力だ！
逆に今まで我慢してきた俺超優しい

正当防衛執行開始

銃を乱射している兔の頭を妖力弾で消し飛ばす

一瞬遅れて悲鳴が聞こえるのと同時に他の兔も動き始めた

悪夢だ

何故あんな化け物が存在する？

あそこまで穢れを溜め込んだ生き物なんてありえない。勝てない、勝てるわけが無い、あれは私達の天敵だ。まともな戦いどころが直視することすらはばかれる

視界にいただけで嫌悪感が湧くまるで心臓を鷲掴みされているかのような気持ち悪

さで全身から汗が湧き出る

なんだ？あれは…私達がかぐや様を探しに来ただけなのにどうしてこんな目にあっているんだ!?あれじゃあ、あれではまるで死という概念そのものじゃないか！

震える手でトランシーバーの電源をつける、これが唯一の希望

「きゅ、救援を！多くの穢れを纏った正体不明の化け物に遭遇！救援を！救援をお願いします！」

「ちよつと何言ってるのよあなた？だいたい地上の妖怪なんか警戒する必要なんて…」

「早く！早くお願いします！早く！はッ」

体に強い衝撃が加わり大きく吹き飛ぶ

「ぐっ…」

何か固いものに当たってトランシーバーを落としてしまった

早く、早く仲間にこのことを知らせなきゃ…

あっ…ああ…

私はトランシーバーを拾おうとして…自分の体が無いことに気付いた

認知し、体が痛みを感じる前に私の意識は暗闇に落ちていった

サーチアンドデストロイ！サーチアンドデストロイ！

フハハハ！見ろ！人がゴミのようだ！

妖力弾ばかり撃つのも飽きたので押し固めた結界をヨーヨーみたいに振り回して兎達を一掃していく

ゴキブリのように10、20と増えていくので1人も残さず殺していく

大抵のものは錯乱して乱射するか逃げようとするので能力を使い地面に手を当てて兎たちの退路に大きな土壁を建てる

「っ、っこんなの私は聞いてない！」

何匹かの兎が透明になって逃げようとしたので俺を中心に灰をばら撒く

ばら撒かれた灰がしばらくして見えなくなにかにくつついた、透明になっても実体がきえるわけじゃない

俺はそこに結界を投げて何かを潰したのを確認する

悪いな兎共恨むならご飯に手を出した愚かな者を恨むんだな、食べ物で粗末にするとかマジでありえねえから

20分もしないうちに兎達は居なくなっていた

「うへえ…えつぐいことになつてゐるな…たかだか魚数匹でこんなんするなんてやつばお前おかしいよ」

ちようど終わったところに魚好きつ子が私貴方に引いてますよといった目で見てくるがお前だけには言われたくない

骨が折れたという理由で自害する方が頭がおかしいね

「今のヤツらは多分玉兎だと思う、昔どこかへ行つて逃げたかぐや姫を追つてきた月の兎だ」

魚好きつ子が少し迷つたような言い方でそんな話をしてくる

ぶつちやけ興味無い、ただどことなく魚好きつ子が真剣な顔をしているから一応聞いておこう

「私はそのかぐや姫つてやつにちよつと因縁があるんだ、まだ会つたこともないけど一度会つて言つてやりたいこともある。もう会えないだろうと思つて諦めていたけどね…今回のことではちよつとかぐや姫を探してみようかなと思つて…それで…その…」

ああ、なるほど…お別れか…

なんだ魚好きつ子もやりたいことを見つけたのか、まあそれがなんだとは言わないが…なんだろう、なんだかんだ言つてかなりの時間を魚好きつ子と一緒に旅してきた気が

する

そう考えるとなんだか寂しく感じてくる

彼女を見る

未だに最後の言葉を言えずにもじもじとしているから俺から言う

すうつと息を吸って久方ぶりに口を開く

「妹紅」

「え!? な、なに?」

なぜだかとても驚いている気がする

そういえば魚好きっ子の事を妹紅とちゃんと呼ぶのは初めてかもしれない

まあ最後だしカッコつけるか

「妹紅、またいつか」

「!!」

「ああ! お前も…いや白墨もまた今度! その時まで死ぬんじゃねえぞ!」

どこか吹っ切れたような笑顔を妹紅が見せた

俺も軽く手をヒラヒラとさせて妹紅の行く方と逆の方向へ歩を進める

こういうのはすぐ行動した方がスッキリしていい

妹紅もそれ気付いたのか俺と逆の方向へ歩き始めた

久しぶりの一人旅：俺はいつもと変わらず歩く

けれど今日は少しそういう気分じゃない俺は初めて一人旅で休憩をした
人生は果てしなく長い、時には休憩を挟むことも大切なのだ

命蓮寺と灰

第五話 ヤンキーにバイクで追い回されるレベルの不幸

妹紅と別れて3日、前と同じように俺は寝ないで歩き続ける

ただ飯だけは別、今まで妹紅が採ってきた分自分で採ろうとすると案外面倒臭い
：いやまじでご飯食べるって大変なんだなって先人達には頭が上がらないね

それにしても妹紅は今どうしているかな、魚だけ採って俺に送ってくんないかな…手
掴みは結構キツイ

とまあそんな感じなんで実は人里から釣竿をパクってきた

へっへっへっ

どうせ大して釣れないんだろなあ…と思っていたらこれが案外釣れる

それに楽しい！いや、なんだこれ楽しいぞ！うっほほい！4匹目！

釣った魚を適当に血抜きして枝に刺してく

ふふん♪これを食べるのが楽しみだぜ！いやまあ俺の才能ありきの話なんだけどね
ちよつと釣れすぎて困っちゃうわーこんなに釣れちゃうなんてもうウツハウハよ

あと2、3匹は欲しいなひよいと釣竿をふって新たな魚を釣る

あと塩さえあれば完璧なのになあ〜

「あと塩さえあれば完璧なのにねえ〜」

ホワツツ!?

わじゅ!? わつ! わじゃん!? じよつじよじよじやあん!?

「あら? 貴方素人そうに見えてよく釣るじゃない」

ななななななんだってばよ!?

は? いやいやいやまじなんだこれ!?

ピタツて固まって身体が動かない!?

ってゆうかこいつ何!?

声からして多分女の人だけど身体が動かないからその姿が見えない!

首をちよこつとだけ曲げて姿だけでも見たい…ついや駄目怖すぎる! 身体動かした

ら殺される!

後ろから聞こえる怪しい声がめちやくちや怖い!

「あら自己紹介が遅れましたわ、私八雲紫と申します。こんにちわ灰の妖怪さん」

八雲紫!?! こいつ今八雲紫って言ったか!?

聞いたことがある、妖怪の山にいる鬼の四天王に匹敵するほどの神出鬼没な大妖怪が

いるということをし!

ああなんてついてない！なんて惨い！田舎で歩いていたらトラック3台にひき潰されたような気分だ！

というかこいつ灰の妖怪とか言ったよな！俺のこと知ってるのか!? っていうか俺って灰の妖怪なのか!? いや結構接点あるから何となくそんな感じはしてたけどなんで貴女がその事知ってるんですかねえ！とにかくその寒い消してよ！めっさ怖いんですが！

「ああああ酷いわねえ…無視なんて、せめて声ぐらい聞かせて欲しいわ別に取って食おうって訳じゃないもの」

ひっ！死ぬ！絶対殺される！なんか怖い空気強くなつた！怒ってる！絶対死んだ！殺される！死ぬやばいマジで死ぬ俺みたいななんちゃって妖怪と違ってマジの大妖怪だ

戦ったら勝ち目どころが文字通り灰すら残らない

落ち着け、戦ったら死ぬし話しても殺される…逃げよう、本気で逃げよう

やるなら、やるなら今ア！

妖術で右の木の根を爆発させる出来るだけ大きな音が響くように

来た！八雲がつかれてそちらに視線を動かしたら瞬間自分の周りにいつものように煙幕を張り急いで駆け出す

こと逃げの一点に関して言えば自信がある、それこそ大妖怪にも通じると
森を駆け抜け抜け所々地面を触り、自分が走ってきた道を地形を能力を使い変えていく
走る、走る、走る、走る、走る、走る

俺は食事でも睡眠も必要ないが体力はあるらしい

久々に本気で限界まで走ってめっちゃくちや疲れた。途中何度も後ろを振り向いたけど
どうやら追いかけては来なかつたらしい

とりあえず一安心

近くの岩に腰掛けてため息を吐く。なんだったんだ今の

本気で死ぬかと思ったあーこええ

「あら？…まだ話の続きよ、どこへ行くの？」

……!?

女は、八雲紫は空間の切れ目のようなものから上半身を出して、妖しい笑みでこちら
を見ていた

声が出ない

元から全く話さないが、まるで喉を潰されたかのような気分だ

と、とりあえずまた煙幕を張って…煙幕が出せない!?

あれ？なんで？なんか形にならない！

「はあ、だから殺さないってただの話し合いよ」

ダメだ……！こいつはムリだ、絶対に

ダメだもう諦めよう、ここまでされたらお手上げだ

全く信用出来ないが殺す気はないらしいし、いいか……

「こんにちは」

よし、十分会話できたなだから帰らせてくんねえかな……

「ええこんにちは、それで話を聞いてくれるわよね？」

脅しに近いってか話聞く以外に選択肢なんかないだろうに

肯定の意味を示すために適当に頷く

「結構、助かったわまた鬼ごっこをするのも疲れるもの」

出来ない、とは言わないのな

結構というかかなり悔しいが相手が相手だから仕方ない

「私は今ある計画の準備をしているのだけれど実は人手が足りないのよ、そこで手順な式神が欲しいのもちろん酷使したりはしないわ八雲の式になる代わりに安全と衣食住を保証するわよ悪い条件じゃないと思うのだけれど」

そう言つて八雲は扇子を広げた

つまりだ部下になれつてことだな

なーにが「衣食住を保証する」だ、つまりそれって泊まり込みで働かなきゃいけないぐらいブラックってことだろ！

そののどがいい条件…あつそういえば今の時代は強い妖怪の傘下になることは誉れとして扱われているんだっけ？

だからそんなに自信満々なのか、残念ながら俺は他人の元で働くなんて絶対に嫌だけど確かに他の妖怪からしてみれば命の保証あつて強い妖怪の傘下に入れるってかなりいい事つてなるな…俺は絶対に嫌だけど

「断る」

相手の目を見てはつきりと否定の意を告げる

「ある程度貴方の願いを聞いてあげてもいいと言つてもかしら？」

スッと目を細めて睨んでくる

ある程度つてところが詐欺師っぽいな、出来ないことならやらなくてそんな曖昧な条件ででやります！なんて言うか

首を横に振つて距離をとる

こうなつてしまえば結果はわかる

「はあ、こういう方法はあまり好きじゃないのだけれど、貴方未だに私から逃げれると、勝てると思つているの？最後に聞くわ、力づくで式にされるか貴方から式になりになる

かどつち?」

全く酷い話だ

選択肢に俺が逃げるってのが入ってないじゃないか

俺は返事の代わり八雲に向かって中指を突き立てる

呆れたようにため息を付く八雲に俺は勝ちを確信する

八雲紫は俺を舐めている、舐め腐っている

だから知らない俺がこと逃げの一点に関して言えばプロだということを!

「な?」

八雲が驚いたように目を見開く

俺の体は足の先からまるで灰のように風に散っていく

急いで向かってきた八雲紫が俺の体を掴むがまるで実体がないかのようにサラサラ

と手のひらから崩れ落ちていく

当たり前だなんせ八雲紫が掴んだのは灰だからな、灰の塊を掴めるわけない

やがて俺の体は肩まで無くなっていた

最後に八雲紫の顔を見る

実に、実にいい!初めて悔しそうに顔を歪めた八雲の顔を見て笑いが込み上げてくる
今まで見下すような妖しい笑みを作っていたが今初めて八雲らしい顔を見て満足

だ！驕り高ぶり見下してるからこうなるんだよバーカ！

「絶対に…」

うん？

「絶対に逃がさないわよ…どこへ逃げても見つけ出して首輪を括り付けてやるわ…フツ
フツ…」

え？何それ怖い、まつ！ちよつ待つ！待つて！話をしよつ

不穏な言葉を最後に俺の体は完全に灰となって消えた



…

…

う、生まれたー！

俺はこの世界に来たばかりのように灰の山の中から体を起こす

はー危ねえ

ていうか最後のやつすつごい不穩なんですけど…

適当に灰を払って外へ出る

今使った灰になるやつは俺の本当の奥の手

体を灰のように散り散りにし、自分自身は灰の塊から復活する最強の逃げだ

灰になって体を飛ばしている訳では無い。使っていた体をただの灰にして捨てたんだ

ちなみにこの大盛りの灰は俺が妹紅と旅している時に気まぐれで作ったりスプーン地点みたいなもの、ここその他にもあと10個ほどこのような灰の塊を作っているのでもそこへワープすることが出来る

これは妖術を使っている訳ではなく、恐らく俺の妖怪としての灰の力だと思う

妖術を使っていないからそれを辿られて八雲紫に隠れ場所が見つかることも無い
真正銘の奥の手

良かった妹紅がいたら絶対に逃げなかった

ともあれ困ったな、あんな化け物に狙われるとか冗談じゃないぞ…次はなにか対策されて逃げれないって可能性もあるし…うーん…

うーん…うん！面倒臭いしとりあえず放置！また会ってもどうせ逃げられるだろの

精神で行こう！

そもそもこの日本は広いんだからそうそう会うことなんてないだろう、へーきへーきそんなことよりちよつと気になってた場所があつたんだ

なんだつけ灰を飛ばして聞いた話だと妖怪が通う寺があるんだそうだな

道教だつけ？浄土宗だつけ？そこら辺の知識はほとんど忘れてるけど妖怪が寺へ行かつてのは少し面白そうではある

そのお寺の名前なんて言つたつけな…確か名前は、命蓮寺

第六話 初めて食べる美味しいもん

ふざけた妖怪がいる

それはここ数十年でよく耳にする妖怪だった、恐怖ではなく怒りで

なんでも中級妖怪程度の力しかないのに毎度毎度神や陰陽師、神霊まで相手にして逃げ延びているという妖怪

曰く、その妖怪は全身灰色、目も髪も服すらも灰色である。そして無口で無表情。何に対しても動じず、何に対しても無頓着である

曰く、そいつは必ず喧嘩を売るように取るに足らないものを奪っては目の前で逃げていく

曰く、そいつは恐怖ではなく怒りを買っている……

他にも聞けば幾つも上がってくる異常なまでの食への執着心があるとか誰にも話したことの無い秘蔵酒が奪われたとか……

とても信憑性に欠けるものばかりだか噂だけをまとめれば自ずとその人物像が見えてくる

恐らくはある程度の力を持った状態で産まれてくる典型的な妖怪

自分の力を過信し格上相手に喧嘩を売っては馬鹿にするだけ馬鹿にして逃げていく
：

取るに足らない物ばかり奪っている事から目的は物を奪うことではなく相手を怒らせてから逃走することによって得られる快樂

若い妖怪が下手に力をつけるとよくこうなる

昔山の若い鴉天狗がその速さに物を言わせてイタズラばかりしていたことがあった、
当時は結局鬼にバレて半殺しにされて済んでいたが噂を聞く限り例の妖怪は未だ捕まったことが無いらしい

別にそれだけなら取るに足らない若いのがヤンチャしてるだけと失笑しているのが問題はいつまで経ってもその噂が消えることなく逆に大きくなっていく事だ。

中級妖怪程度の妖力量で1度もミスすることなく逃げ延びていて、それ相応の計画性と情報網を持っている：

欲しい

私が今欲しいのは力ではない

率直に言うとな手が欲しい。ある計画：人と妖怪の樂園を作るのに当たって私だけではどう足掻いても時間が足りない、ある程度信用出来て、独自の情報網を持っている妖怪、指図め諜報員と言った所だろうか

そういった仕事をやらせれば私は他の事に集中出来て時間短縮が出来る
欲しい、本当に欲しい

思えば私はその妖怪の居場所を探すのに必死になっていた…

そして何年も探して…探して…見つけた

信用に関しては式にしてしまえばいい

あとは天狗になっていているだろうその長つ鼻をビビらせへし折ってしまえば簡単に使
える

私は直ぐに行動に移した



「なによ、これ…」

手のひらから零れ落ちていく灰を見る

まさかここまで逃げることが出来るとは思わなかった、完全に油断していた、ちよつ
と力をつけて良い気になっている程度の認識だったが甘かった

少し本気でビビらせようと思いきや軽く敵意をぶつけてみたが動揺するどころが顔色一
つ変えずに冷静にこちらの注意を割かれて逃走された

調子に乗った青二才なんてレベルじゃない

本当に逃走スキルだけを見れば彼を捕まえるのは至難の業となりそうだ

でもその分式にした時の期待値は十分以上に上がった。やはり欲しい…彼を式神にすればかなり計画を早く進められるはず…そう思い噂の信憑性にやや驚いた

風が吹き、手に残っていた灰が宙に舞っていく

ああ確かにこれは少しイラつくな、と



「あそこだろあの山を登ったところにあるお寺さん」

「ああ、有り難い六波羅蜜をお教え下さる」

「なんでも毘沙門天様がいらつしやるとか」

宗教つてのは恐ろしいな

特にこういった時代の宗教はほんとに皆好きだ

俺は街のはずれから灰を飛ばして例のお寺について情報を探る。探ると言ってもみんながそれについて話しているのので灰を飛ばしているだけだが

日常会話で宗教のお話なんて現代だったら考えられないな。これも今だけしか見れないものだ

まあそんなことはどうでもいい、重要なのは寺だ寺

宗教なんて所詮は金稼ぎの道具さぞいいものがあるに違いない：塩とか砂糖とか

この前取ってきた秘酒とやらはホントにマズかったので今回のお寺には期待しておこう

え？お寺なんだから欲を規制するために贅沢なものは無いつて？バツキヤロイ！あんなん適当に言ってるだけでお偉いさん達は皆美味しいもん食つとるわ！

民衆を騙し、騙し取った金で自分たちは美味しいもん食べるなんてけしからん！俺が直々に貰ってやろう！

それにしても面倒なところにあるな

長い坂を登って1つの木造建築が目に入る

っていうかくっさ！妖怪臭い！ここほんとにお寺か？お坊さん達がいる所だよな？なんて言うかペットショップに入った時の獣臭さの妖怪版がする

実はお坊さんが妖怪に食われてましたーみたくなつてない？

い、一応警戒しながら倉庫？みたいなところに入ってみるか…
「君、そこでなにしているんだい？」

…ツツ！ビクウってなった！

こ、こいつ俺の完璧な隠密を見破っただと！

ちっこい少女のくせしてやりおる…ん？

よく見るとその少女は灰色（というよりネズミ色）で大きなネズミのような耳を生やしていた

なんだネズミか同じ陰に属する者、屋根裏の守護神とさえ呼ばれているコイツらにならバレても仕方ないな

うん普通の妖怪ごときに俺の完璧な隠密がバレるわけない、こいつは例外だ

「いや私は何をしているのかと聞いているのだが…私の子ねずみ達が反応しないってことは人じゃないみたいだが？」

バレテラ完璧にバレてらー

さあなんて言おう

A：強盗です

ぶち殺されそう、却下

B：修行僧です

うん我ながら最高の言い訳だ天才かもしれない

「修行僧」

この場所において完璧な発言だな

「嘘つけ君のような不誠実な修行僧がいてたまるか、早く本当の理由を言った方がいいと思うけど」

ば、バレテラ

なんだコイツ覚りか!?

や、やっべえなんて言おう…バレたら甘味強奪とかいう話じゃ無くなる

ここに来る時なんか有益な情報を聞いたっけ…あつ!

「毘沙門天」

「ん?なるほど毘沙門天様に…参拝客か、それならこつちだよ」

お、おお

なんか知らんがとりあえずオツケー

「それより君、様を付けなよ私じゃなかったら殺されているよ」

あつはいすいません…

というかなんで妖怪が仕切ってるんだ???

「この先にいらつしやる人達はいずれもお偉いさんだから失礼のないようにね」

一応感謝の意味を込めてネズミーにお辞儀をしておく

え？言葉でやれつて？やだよめんどくさい

「ようこそ旅の者よ今日はなにゆえこの命蓮寺に？」

わお毘沙門天様…かの武神様は女性だった

とりあえず手合わせておこありがたありがたや

「えっ？いや、あの私は別にそんな大層な者ではなくただの修行僧でございます」

違つた？

「コンニチワ」

初対面の人と会話するのはやつぱし疲れる。これやんなきゃダメかな？

「はいこんにちわ、私は聖白蓮この命蓮寺の僧侶です。貴方は？…いえ言わなくても解ります、その佇まい…さぞ高名な僧で在られるのでしょうか？既に悟りの境地にいらつしやる」

何言つてるんだこいつ？

悟りの境地つて何？俺が僧つて…別にハゲじゃないんだが

あれなんかこの人の目怖い

「あらゆる煩惱を捨て去つたその貫禄…私もまだまだだと思ひ知らされました」

とりあえず適当に頷いておく

なんかもう誤解を解くのにどれほど喋らなければいけないかを考えたら誤解されてままでもいいやって思ってきたし適当に頷いておこう

頷くつてのは最強だ、なんかとりあえず頷いておけば向こうが勝手に合わせてくれる。

「ああやつぱり！こんなところではなんですからこちらへ！」

ほらな

とそんな茶番をしていると誰か上から降ってきた…セーラー服？

「何してるの聖？」

「村紗！良いところに来ました、今お客さんが来ているところです」

「お客さん…その妖怪は参拝客？」

毎度思うけどなんでここの奴らには妖怪つてバレてんの？

「いえ、この方は恐らく私よりも高名な僧ですよ！妖の身でありながらよくここまで…さぞ厳しい修行をしてきたに違いありません」

「ふーん、私にはただの感情薄い奴にしか見えなないけどなあ…」

「こらっ失礼ですよ村紗お茶の準備をしてきて下さい」

「はい」

なんかよく分からないけど平和的に進んでるからヨシ

うん平和は大切だよね俺も最近平和への字も知らないような妖怪に追いかけて回されたから身に染みて平和の有り難さを知れたよ

兎狩り？あれはノーカン

「失礼、旅の御方名前をお聞きしてもよろしいですか？」

「白墨」

「ありがとうございます、白墨さんで宜しいでしょうか？」

首を縦に振る

そう言えば妹紅にも名前を教えたのにあいつ1度しか名前では呼ばなかったな……なんてやつだアイツ常識ないのか？

その後は色々質問攻めされた、何をしていたとかどうして妖怪で僧侶になろうとしたのかとか

正しく地獄であったと言えよう。これなら八雲に追い回されている時間の方がマシだった……いややつば嘘あれは本当に怖い表情出たら泣き叫んでた

とにかくこの時間は地獄だった、もう甘味とかどうでもいいから帰らせてくれと思つた……そもそも俺僧侶じゃないし……

筆談ならまだしも口を開けて喋るとか本当に苦痛

なんとか天才的なジエスチャーとうんという言葉を使って切り抜けたぜ…実際は何故かあつちがいい感じに勘違いしてくれただけだけ…知らない内に勘違いがどんどん大きくなっていつて取り返しがつかなくなってる気がする

まあそんな地獄もやつと終わった長かった…

「今日は本当にありがとうございましてとても為になりました」

「ほんとかなあ…つていうかこの男喋った？」

あー疲れた泣きそう早く帰して

俺がやつと帰れると思った矢先、聖が良いことを思いついた！といった風にこちらを見た。帰して…

「すいません白墨さん長い間喋っちゃって疲れましたよね？夕食食べて行きませんか？」

「いやだからこいつ喋って無くない？」

…

ぶつちやけもう帰りたいけどご飯があるならもうちよつとだけ居ようかな

だつてここまで大変な思ひして収穫ゼロは嫌じゃん

「出来ましたよー」

しばらくして気の抜けた声が聞こえてくる

そう言えば誰かが作った物を食べるのは初めてだな。妹紅が作った物って魚に枝刺して焼いただけだし、俺もそれしかやらないし

そう考えるとちゃんと調理された料理を食べるのは前世以来か

「いただきます」

「え!?! 喋った? こいつ今喋った!?!」

「村紗、食事中にうるさいですよ見なさい白墨さんを静かに丁寧に食べて…な、泣いてる!?!」

「は? はあ? な、なんで泣いてんの? 本当に分からないやつ」

美味い美味すぎる

え? 料理されたご飯ってこんなに美味しいの? やばい感動で前が見えない…

おいこの料理を作ったシェフを呼んでくれ。あつひじりんか

誰だよ修行僧とか言ったやつもう最高だよ完璧だよもう極まっちゃってるよこの人、え? 俺が高名な僧? 安心しろお前がナンバーワンだ

感動した、これが文明の力か…本当に体が震える

「な、なにかマズかったでしょうか…」

「うーん、聖の作ったご飯はいつもと変わらず美味しいけどなあ…」

いつも!?

いつもこんな美味しいものを食べているのか!?

「住む」

「え?」

「え?それってここに居候するって事?」

俺はいつもより強くはつきりと頷く

「な、なんと、ここまでいってまだこの命蓮寺で修行僧として高みを目指そうと…感極まりました、是非とも命蓮寺でお努め下さい」

「絶対になにか解釈違いを起こしている気がする…」

なんか知らんが許可も貰った

これはつまり毎日聖のご飯食べていいよということだろうか、いやきつとそうに違くない

あんだけ美味しい物が毎日…

たとえどんな理由でも人は食欲に逆らえない生き物だ

つまり俺はここに居候する、ご飯のために

第七話 旅をすると言ったな、あれは嘘だ

M g M g e a t i n g !

今日も今日とてメシが美味しい、命運寺に居候して初日の朝

相変わらず人の手で作られた料理は美味しいものだいやほんとにマジで美味しい

別に魚がダメとは言わないけどこれは別格だよ、ここで一生ダラダラしてたい

と考えながら食べていると何かが近付いて来るのを感じる

……人の気配!

「あなたが姐さんの言っていた居候ね」

水色の髪に水色のフード?のようなものを被つたいかにも尼さん(色を気にしなければ)といった見た目。残念人ではなく妖怪だった

とりあえずいつも通り適当に頷いておく

へっ! 巷で噂の居候とは俺のことだぜ!

「…へえ、その居候さんはここに來てから何をしているの? 姐さんからは高名な僧だと聞いていたからさぞ素晴らしいことをしていらっしやるのだろうと思っっているんだど」

話している間が勿体ないのでもぐもぐと口にご飯を含みながら考える

どうして俺と話す人達はみんな青筋を立てているのだろうか？全くもって心当たりがない

更年期か？

そんな事を考えながらもぐもぐと口を動かしているとあちらの顔も含みのある笑顔のまま頬をヒクヒクと痙攣させていた

口の中にある食べ物を飲み込んで尼さんの方を向き口を開く

「朝ごはん」

我ながら今の行いを的確にかつ簡単に伝えたつもりだ、けれど確かに何かグツと切れる音が俺の耳にも聞こえた

「はたらけタダ飯喰い！」

直前、朝なのに命蓮寺に雷が落ちた



もうやだ、疲れた、お家帰りたい、帰ってご飯食べたい、甘いものもいい、砂糖、金平糖が食べたい

「ほら、早く歩いて」

間違ってる……こんなの非人道的だよ……

現在俺に強制労働をさせている尼さんこと一輪とご飯が美味しいと俺の中で評判の聖と共に里中を歩いている

なんでもありがたーい話をしてるんだってよ、よく分かんが恐らく宗教勧誘的なあれだろ

馬鹿みたいだ、神なんてどれだけ頼んでもどれだけ信仰してもなんにもしてくれやしない……現に色んな神々にご飯ちょうだいと言っても分けてくれなかったし、あいつらケチだ

そんなケチな奴らにお願いするくらいならそこら辺を暇そうにあるいる白髪の不死人に魚取ってこいと言っている方が余程有意義だ

「今度はあつちでもやるからよろしくねー」

こいつ尼さんではなく悪魔なのでないだろうか

およそ人に持たせる量ではない重々しい何かが詰まった風呂敷を背負い直す

多分あの怪しい宗教勧誘の誘い道具かなんかだと思うでもまあ中身はどうでもいい、ただそんな重いものを俺に持たせて歩かせるという拷問にも近い非道な行為を許してはいけない

美味しいご飯がなかったら文句をいってとつくに逃げ出しているのに：

忌々しげに一輪を睨む、でも悲しいかな、表情筋が死んでいるのかピクリとも動かない

少し時間が経って聖が里の外へ歩き始める

どんなに良い宗教でも口ばかりで何もしなければ信仰も集まらないらしい

なんでも里の近くにたむろしている妖怪を退治するんだとか

悪いやつを倒して人気を得る、いいじゃないわかりやすくしてシンプルで簡単だ

そこで俺は荷物持ち兼妖怪退治の手伝いとして働かされている（強制）

今日も同じように聖達と妖怪退治だ

しかし聖は宗教家のくせして妖怪だし、妖怪なのに妖怪を退治するし、でも妖怪と仲がいいし、とよくわからない

本人曰く妖怪と人との共存を望んでいるらしい、よくわからんから領いていたら何故か俺も人と妖怪との共存の手助けをすることになっていた。まー俺は美味しいご飯が食

べられるならなんでもいいや

今回の妖怪退治の依頼も依頼主には退治と言っているが実際殺しはしない

妖怪がもう悪さはしないと誓うまで聖がひたすらにブン殴るだけ、晴れて悪さはしないと誓った妖怪は命蓮寺で修行して心を入れ替えるらしい。それってただの強制労働じゃ：何も言うまい

まあでも連れてこられた妖怪達も半年ほどたつとイキイキしながらやってるから別にいいか、妖怪寺と呼ばれているのも頷ける

「ほら着いたよボーとしてないでシャキツとして」

言われて一輪に肩を叩かれる

わかったから叩かないで欲しいただでさえ重いもの持つてるんだから

「仕方ありませんね、少しお灸を据えてあげましょう」

目的地に着いて聖が妖怪達に何か言うのが当然の如く拳で語り合おうとなってインファイトになった

聖強いな一人一発ぶつつ沈めていく

俺も結界をぶん投げて一人一人気絶させていく

「白墨、あんたは殴って戦わないの？」

それに対して俺は頭を横に振る

俺の体は残念なことに人間程度の身体能力しかないので肉弾戦なんてやるだけ無駄だ、妖力で身体強化して殴るつてももあるけど無駄に妖力使う割に対して役に立たないから普通に結界を投げてる方がいい

あれ？もしかして俺弱い？…涙出てきた

「つそ、まあ私はバリバリの肉弾戦が好きだけどね、いくわよ雲山！」

デ、デカア!!

瞬間一輪の上にあつた雲に人の顔と拳のようなものが現れ妖怪達をばったばつたと吹き飛ばしていった

ええええ、なんじゃそりゃあ！

ものの数秒で妖怪達が毛散らされていく、これほんとに俺いらんじやないか…



モグモグ

「美味しい」

うんうん一輪が作る料理もなかなか美味しい

「いつも全然喋らないのに」ご飯食べる時だけ自己主張するのによ…まあ言われて悪い気はしないけどね」

呆れたように一輪が言ってくるが知らん知らん

あの後結局何回か別の依頼とかで妖怪退治を行ったがぶつちやけ俺いらぬのでは
と思い、聖に言ったら俺だけ遠い所の妖怪退治をすることになった

理由はこんな感じ

行きは飛んで行かなきゃ行けないけど帰りは灰になって数秒で戻れるから

遠方の妖怪はさつきひじり達が戦ったみたいな知性がある妖怪ではなくて、知性のない
妖怪だから殺しちゃってもいいし、弱いから俺だけでも倒せるから

報酬は寝床とご飯

寝床はあつてもなくてもどつちでもいいけどご飯があるとやつば違う

ふつつつふ、美味しい食べ物があるってだけで人生の価値観は10倍変わるね

そんな生活を続けてほしい何年か経った、いや何十年だったっけ？よくわかんない

しいーか

いやね、旅をするとは行つたけどもう何年もここに居座つちやつてるんだよ

別に悪いことではないんだけどなんというか居心地がいいと言うか飯が美味いとか、ご飯が美味いとか、米があるとやっぱり違うなあとか色々離れ難い理由があるんだよ、あるんだよ

命蓮寺の連中はというとこれもまた大して変わっていない

聖は相変わらず殴つて説法だし、村紗はでっかい船の上でぐーたらしてるし、一輪は聖の手伝いしてるしでそこまで変わらない

ああ、あとは何気にここで初めてあつた屋根裏の守護者ことナズナズナズーリンとはたまに顔を合わせるだけ

聞くとご主人？がいるらしいけど特に会う理由もないから会つてない

でも多分知らないだけで何回か見たことはあるんだと思う、興味ないからいいけど

まあこんな感じでほんとに全然変わっていない

外を見る、まだ太陽が出たばかりでポカポカしてて気持ちいい

こんな日は人里にでも散歩していこーかな、気が向いたら魚でも釣つて時間を潰すかー

そうと思えば即行動適当に下駄を履いて戸に手をかける

「あれ？あなた今日依頼を受けてなかったっけ？」

ピタリと体が止まる

……。

気のせいか、よしちよつと出かけるぞ

「あつサボりか、聖に言いつけちゃうよ？夕飯抜きにされるかもね」
……。

よし決めた、今度配膳する時は村紗のやつだけ少ないのにしよう



「いつも悪いねえ、こんな誰も受けたがらない遠いものばかり取ってもらって」
悪いと思つているならこんな依頼作るな

もちろん口には出さない、いつも通り無言で準備をする

何が面白いのかそんな様子をニコニコしながらおばちゃんは眺めていた

うん、特に問題なし。依頼料金ももらったし、さっさと行って帰るか
するとおぼちゃんが何かを思い出したかのようちよつと待ちと言った
まあめんどくさいので無視するが、さっさと帰ってご飯たべたいし、
「今おむすび持って来てあげるから」

何分でも待とうじゃないか！いい人だなおぼっちゃん！



目的地的なのを確認してから飛行を止める

帰りは一瞬だけど行きはしつかり自分で行かなきゃならないから仕方ない

まあ、飛べるだけ他の人よりも早く行けるからマシだけど

適当に灰を飛ばして辺りを確認する

おー確かにこの辺妖獣が多いな、なんか狼っぽいのがいっぱい居る

早速狼達に近付く、俺の存在に気づいたのか警戒したように俺を見ながら歩いてくるハツハツハ！残念だった犬畜生！昔ならいざ知らず今の俺ならお前ら程度のワンコなんて何百匹来ようが怖くないわい！精々ストレス発散にひき肉にしてやるわ！

何匹かがこちらを威嚇するように吠えてくるがぬるい、ぬるすぎる

大妖怪の威圧感を間近で食らったことのある俺からすれば屁でもない！そうそう懐かしいなああの時もこんな感じの吐きそうなぐらい重苦しい空気だった、た………うせやろ？

それは忘がたい重み、記憶の奥底に鳥の糞のようにこびりついた取りたくても取れないトラウマ

「お久しぶりね灰の妖怪さん」

ギチギチと音を立てながらなんとかして首を回転させる

ハハハ、お、おひ、お久しぶりですねユカリさん

やったね前回と比べて首を曲げてすっかり視認出来たよ！ハハ…笑えない気がつけばあんなにいた犬共はほとんど皆逃げた

俺も逃げられないかな…ダメですか、さいですか…

「少し、お話をしていきましょう」

ああ、クソほんとについてない

八雲の放つ威圧感が一気に強まった

第八話　もうこれお約束では？

トラウマ、それは恐怖の根源

理解が出来ないもの底のしれない得体のしれない不気味なものを人は本能的にまたは意識的に恐怖し、嫌悪し、突き放そうとする

要するに、理解の出来ないものを理解しようとして刺激する

だが大抵理解のできないものと言うのは人の手には負えない脅威である事が大半だから元来人々は本能的に備わった危機管理能力を元に理解のできないそれを遠巻きに見るだけに留めるものだ、時たま力の持った阿呆がそれを刺激して惨事を起こすの言うまでもないが

そう人間のほとんどは本能的に訳の分からないものから離れようと、厄介事に絡まれるのを嫌うように離れていく

かく言う俺もそのような人間の1人だ

生前というより前世、転校してきたばかりの素性のしれないソイツが虐められているのを俺は助ける訳でもなく、そそくさとその場を離れて遠目に見ているだけだった

そう！俺もただの一般人だったのだ！転校生を虐める場面を遠目に見ながら「ああ、

「バカなやつらだなあ」と適当に考えるだけの一般人側の人間だったのだ!!!
話を少し戻そう

何故か昔の日本に妖怪として生を受けた俺のトラウマとはなんだろうか？

そもそも妖怪になってから恐怖なんて感じる事があつただろうか？

そりや自分よりも強いやつは何人もいると知っているそこまで能天気じゃあない
でも俺が逃げる事が不可能な敵は？

例えばそれが悪名高い妖怪の山の四天王と言われている鬼どもからだつて逃げ切れる
自信がある

そう、俺は妖怪となつて適当に旅を続ける上でどんな奴からも逃げ切れるという自信
と逃げ切れないことなどあるはずないという謎の自尊心がそれを消し去ってしまった
のだ

本来人として生きていた時に持っていた筈の理解の出来ないものを刺激しないよう
にとする防衛本能を

俺のトラウマ

それは間違いなく八雲紫だろう、安全だと思つていたその場所にある日突然現れて俺
の力を一つ一つ翫るようにへし折つていった。遊びのようにかかるーく、まるで本気を出

せばもつと早く捕まえることなんて出来た言わんばかりのたつぷりの余裕顔で

いや実際八雲が本気で俺を殺そうとしていたら最初の瞬間に一撃で殺されていただろう

それこそ逃げるなどといった行動すら起こす間もなく首チョンパだ

そこで俺は奥の手を使った、そのまま逃げれば良かった

そのまま逃げていればきつと今受けているこの尋常じゃない殺気も少しは和らいでいるはずだ

え？何をしたかって？

俺のちっぽけな自尊心が、恐怖でへし折られたプライドが、勝ちを確信してその汚れてしまったプライドを取り戻そうとてあと何となくあの八雲の余裕顔にムカついて

あろうことか中指を立ててしまったのだ弁明の余地もないぐらいの綺麗な一本指を差し向けてしまった

分かるだろうか？やってしまったのだ俺は

バカにしていたはずの刺激する側になっていたのだ。後悔はしている反省はしていない

いや反省したら許してくれると言うのならいくらでも反省しよう

けどもう遅いのだやってしまったのだ、俺は八雲紫という超人的な意味不明の化け物

に喧嘩を売ってしまったのだ

怖い

今なお暗黒微笑を浮かべながらゆっくりと歩いてくる八雲がとてつもなく怖い

無表情な俺の仮面に隠れた魂は失禁しながら涙を撒き散らし恐怖に怯え泣いている

なら、ならなぜそんな緊急事態なのにこんな事をつらつらと冒頭から話し続けているのだらうと、早く前と同じ方法で逃げてしまえと思うだらう

いやむしろここまで見た人なら分かるだらう

逃げれないのだ

八雲を見た瞬間に体を灰に崩して逃げようとした、しかしまるで初めからそんな力がなかったかのようになんか一つ反応しない

つまりだ死を悟っているが故の謎の冷静さ、あれだ賢者タイムってやつだ

そうだこれはきつと疲れが俺に見せる幻覚なんだ瞬きをして、目を開けたらそこは命蓮寺で俺は聖の作ったとにかく美味しいご飯を食べている

覚悟をして目を開ける

.....。

うおおおおおおおおい！

逃げろ逃げろ逃げろ早く灰になれ！絶対死ぬ！世間的に大妖怪と呼ばれる存在に中指を立てたんだぞ！捕まればヒツドイ拷問の末グズ肉にされて食べられる！イヤだア！食べる側はいいけど食べられる側にはなりとうない！ああ、食べ物的事を考えているせいでご飯が恋しくなってきた：ああ！こんなことならもつといっぱいご飯食べて来ればよかった！今になっておばちゃんのかくれたおにぎりの有り難さが身に染みる

「ふふふやっぱりね、なかつたでしょう？自分の奥の手を封じられるなんて」
ハッ！危ない現実逃避の末意識が空中分解する所だった

八雲がいかにも悪そうな顔でクスクスと嘲笑っている

「あなたのその力は本当に厄介だったわ。足跡どころが妖力を使った痕跡すらないのだから。いくら私でもその転移を使われてしまえば捕まえるのはほぼ不可能、ここで貴方に会えたことも久方ぶりの奇跡と言えるでしょうね」

ああ本当に大変だったわと付け加え、それから心底嬉しそうに俺の顔を見た
そんな奇跡俺は欲しくなかつた：

続けて八雲の話は加速していく

「私は貴方の後を追うのは諦めその転移を使わせない方法を模索したわ、仮説になるけど貴方のそれは一種の幽体離脱のようなもの肉体から魂を取り出し、そのままどこか別

の場所に新しい肉体と共に再生する…大体こんな感じかしら？タネが分かれば簡単よ、精神を、魂を閉じ込める特殊な結界で覆ってしまえば使えない、でも油断は禁物よね。万が一貴方が走って逃げてしまうことも考えて硬度の物理結界も同時に張ったのが見えるかしら？頭上に広がる青い結界の膜を。貴方はもうここから逃げることは出来ないわ」

イヤアアアア

バレてる！バレてるよ俺の奥の手！

たった一回で!?あの一瞬の一回で弱点見破ったつてのか!?正真正銘の化け物じゃないか!や、やばい!まさかこんな簡単に見破られると思わなかった

ここまで脳のスペックに差があるのは反則だろ!

「もう一度、選ばせてあげるわ今ここで私の式神になるか、それとも力づくで式神にされるか…さあどっちを選ぶ?前も言ったけど式神になるならそれなりの要望は通してあげるしそこまで悪い提案じゃあないと思うけど」

ヒ、ヒイツ!やつぱり選択肢もクソもねえじゃねえかよクソ野郎!

せめてもつとマシな選択肢用意しろ!ゲームだったら誰も買ってくれないぞこんなクソゲー!

「そう……また無視ね、正解だわあ……下手に慣れない会話をして弱みを探られるより一貫して無視を決め込む方が得策ね、貴方の心情を知りたい私に比べて貴方は私のことを知る必要なんて特にないのだから、そしてそれを実行出来るだけのポーカーフエイスマ完璧、対する私は未だに貴方から情報の一つも引き出すことが出来ていない……期待以上ねえ」

どす黒い笑み、あれだへびが獲物を丸呑みする時多分あんな顔をする

半分以上何言ってるかわからないし、めちやくちや怖いし、保ってきたプライドズタズタだしようやだおうち帰りたい

しよぼしよぼしながら後ろを見る

素人目に見てもなんかすごいんだらうなとわかる青い結界が俺の逃げ道を塞ぐようにある

コンコンと叩いてみる

うん無理だ、どれぐらい無理かと言うと現代人に素手で鉄に穴を開けると言うくらい無理だ、万が一にも俺じゃこの結界を壊せない

いやこれほんとに硬すぎないか？聖でも多分壊せないぞ

試しに本気で押し固めて作った結界を思いつきり投げてみる

うんダメだよっぱり俺の全力なんかじゃあビクともしない、チートだこんな

コンコンの次はぺたぺたと触る…ん？

「んふふふ無駄よ、その結界は私と同じかそれ以上の妖力でも持つていない限り傷ひとつつけないわ」

「八雲」

「あら？これまで無言を貫き通してきたのに珍しいわね、やっと観念したのかしら？」

「バイバイ」

勝ちを確信し、心の中でニヤリと笑う

「ツー」

瞬間自分の周りに煙をたき、力いっぱい結界を殴った

ガラスの割れたような音が辺りに響き渡る

「ツー…この！待ちなさい！」

地が空が異様な眼の空間に包まれ、世界が飲み込まれかける

慎重な奴だあれだけ強力な結界を張っておきながら破られた用に作動する罠まで作っている、けど遅いあとコンマー秒遅い

既に俺の体は半分灰に散っていく、ここまで来たら俺の勝ち、ここから負けはありえない

「な……んで？ 一体どうやって……」

八雲は有り得ない事柄を目の前に目を大きく見開いて言葉を絞り出した

無理もない、あの結界は相当な自信作だったのだろう。それこそ俺みたいななんちやつて妖怪じゃあ絶対に割れないような

勝ちだ大勝利だあの大妖怪に2度目の勝利……

・それは愚かゆえの行動、危機管理というものが大々的に欠如してしまっただがゆえの過ち・

その男は未だに鳩が豆鉄砲をくらったような顔をした八雲に向かって……”馬鹿にしたように下を指した”

人の根本とはそう簡単には変わらない、そう人という生き物は過ちを繰り返すのだ

第九話

亀裂の入る音

フ、フヒツ

やつちまつたつぜ…後悔はしてない

嘘ですめちやくちや後悔してます…いやだつてせつかくあの八雲紫から逃げ切れたのに戦利品のひとつもなしなんて寂しいじゃんか！そーだよそーだよ！これは正当な権利であつて悪い事ではないね！

いやにしても本気で焦つた、今回ばかりは死ぬと思つたうん

たつた1回で俺の灰逃げ（今名付けた）の弱点を看破してそれ用のキチガイ地味な結界を不意打ちで張つてくるなんて用意周到すぎじゃない？八雲紫…あいつは些か慎重すぎる1度使つた技は全て対策されていると思わないとダメだ

めちやくちや強くてめちやくちや慎重で1度使つた技の対策なんて見ただけでも出来るほどの天才…誰だよこんな化け物作つたやつ…

まあそんなムリゲーチーターバグ野郎の結界を楽々壊して逃げ出せたのにはもちろん理由がある

俺はあの時八雲の作つた結界を“ぺたぺた”と触つたそう触れるのだ

俺は触れた物を分解し、作り直す事が出来る

今風に言うのなら「触れたものを作り直す程度の能力」触った物を壊して別の形することが出来る別の物質に変えたり質量以上のものを作り出したりは出来ないもちろん触れないものも変えられない

八雲の結界は触れることが出来た

だから運良く俺の能力が効いて結界を壊す事が出来た

しかし俺は考えた

恐らくそのまま適当にぺたぺた触つて能力を使えば灰逃げと同じように対策されると、だからわざわざ煙で視界を封じてまるで殴つて結界を割った様に見せかけた。今頃あいつは俺の体にある筈もない超人的パワーを疑つて頭がハテナでいつぱいだろうなあ

天才と、呼んでくれてもいいんだぜ

フウハハハハハハハハハ！自分の逃げスキルの才能が高すぎて怖いぜ！

フウハハハハ…あつ！ただいま！聖ごはん作つて！



「村紗それは本当でしょうか？」

やや重い空気の中ことは始まった

「うんまだ噂だけど本当にあるよ」

「いえ、元より隠し通せると思つていません、いずれ公に明かさねばならない事です仕方ありません」

いずれ聞かされるであろう報告に聖も覚悟を決めた

「妖怪寺…ですか正しくその通りです、私達妖怪が関係しているととなるとそれはもう大問題になりますよ姐さん」

「でもまだ噂程度だからしばらくは平気だと思つ…たぶん」

「ええ、今はまだ平気でしょう。でもいつかそれもバレます、けれどしつかりと話し合えばきつと分かり合える筈です悪くない妖怪もいるのだと…。しかしそれは今ではありません私が発表するまで隠しておいて下さい」

それに対してふたりははつきりと頷いた

始まりは無骨滑稽だと思つていたとしても今ではそれは立派な夢になっていたけれどそれぞれと同時に心の隅に一抹の不安を抱えているのもまた事実であった

「あつねえねえ聖、これって白墨には伝えるの？」

場の空気を入れ替えるようにいつものようすで投げかけた

「どうしましょうか？でも一応協力してもらってますし言っておいた方がいいと思うのですがどう思いますか？」

「いやいや私は無理だと思うよ。だってほらご飯を食べてるもんあいつ、たぶん言っても聞いてないよ」

見ると普段は仏頂面の顔が遠目に見てもわかる程上機嫌だった

「あいつって何でご飯食べてる時だけあんなにわかりやすいんだらうなあ」

「さあ？」

「きつと日頃から自然に感謝し食べているのでしよう」

「私は姐さんがいずれ悪い男に騙されなにか心配だよ」

「？」

キョトンと首を傾げた聖を見て村紗と一輪は小さくため息を吐いたのだった



「もおくなんつなのよあれ！」

癩癩を起こしながら紫は他人の家でヤケ食いをしていた

「また例の妖怪ですか？」

紫の式神である八雲藍は前々から言っている話に呆れ半分興味半分といった様子で主を見た。なおそれについて自分を頼ってくれていない事に少し不満を感じているが頼りない自分を不甲斐ないと考えているあたりやっぱり面倒くさい性格なのだ

「大体少しくらい話を聞いてくれたって良いじゃない！別に条件だつて悪くないのになどうしてああも頑なに逃げるのよ！」

「先ほどの場面を思い返しやはり理不尽だと考える

自分の最高傑作と言つていいほどの結界をあんな妖怪に破られたとプライドを傷付けられただけでなくあまつさえ煽りも忘れずやつてくる事に少なからずいやかなり苛立ちを感じていた

「まあまあ大事にならなくつて良かったじゃない、人間死んでしまえばそれで終わりのよ。」

「私は幽々子みたいに弱くないわよ。それに油断しててもあんな三流妖怪には負けない

わよ」

「良いのよ私には妖忌が居るもの」

相変わらずぼわぼわとした感覚で話す病弱な少女

いつの間にか打ち解けてしまった人間の少女、親や親戚は居なく大きな屋敷に住んでいるにも関わらず使用人なども庭師の妖忌ただ一人滅多に人の来ない場所故に気が付けば紫も疲れた時の気分転換にここへ来るようになっていた

西行妖

人の血を死を吸い肥大化した妖気を蓄えた桜

皆気味悪がつて近付かず、しかし人を死へと誘う妖怪桜

何故幽々子はそんな木の近くに未だ留まり続けるのか

紫は聞く気もなければ興味もなかった

憐れに思うし同情もする

だが紫が思うのはそれだけだった

「……………っ」

「何か言った？」

「いいえ、ただこれからどうしようかしら…っ」

「そんなこと考えているの？紫って案外変な事も考えるのね、明日の事なんて考えなく

でもどうにかなるわよ」

「相変わらずお気楽でいい事だわ……」

あまりに脳天気な考えに思わず呆れてため息吐く

「もちろん！だからいつか紫の夢も叶うわよ、ええきつと誰かの居場所になるような優しい場所ね」

「……」



くっらくい！

真つつ暗

さつきまで太陽サンサンのいい天気だったのに突然周りが真つつ暗になった

あれだタコの墨みたいな黒さ光とか黒光りとかもなーんもないただただ暗いだけ

気分転換にやっていた釣りを一時中断してどうしたものかと考える

考えた、考えても無理つてのがわかったし釣りするか、どーせ時間が経てば元に戻るだろう

…

…

…

釣れない…1匹も釣れない…あれえ？きつきまでポンポコ釣れていはずなのに

おつかしいなあ…こうなると暇になってくる

いつもなら周りの自然を見て楽しんだりして待つけど生憎と周りは真っ黒で何も見えなかった

その時視界の端に何かが映った

黒い、けど黒だけじゃなくて黒いモヤ？みたいな感じ、なるほどこの世には黒い雲があるのか

10秒程考えてとりあえずパクツと雲を食べた

味はない…ちよつとひんやりしてるだけでもお腹に入ったような感覚もない…うん存在価値ゼロE判定わたあめになってから出直してこい

「…ニンゲン何をしているの？」

不意に声が聞こえて周りを見渡すもそれらしき姿は見えない

「釣り」

とりあえずよく分からないからやっていることは言っておく

相手は確定で妖怪だし機嫌悪いと何されるかわかったもんじやないからね

「釣りつて…いやそうじゃなくて…なんでニンゲンこんな所にいるのに平気そうなのよ…」

あーなんか勘違いしてるぞあー、勘違いは正さなきや聖みたくめんどくさくなるえー
とこういう時つて何を言うんだ

あーえーつとんー、

「妖怪」

「つくならもつとマシな嘘をつけニンゲン、まーいいかニオイは覚えた。ワタシは今お腹いっぱい眠い、お前は幸運なのだ」

そう言いソイツは多分どっか行って気が付けば太陽サンサンになっていた

終始よく分からないこと言っていたがきつと知能の低い低級妖怪なのだろう、賢い俺には分かる。何がわかるつて魚は焼くと美味いつてのと塩があると尚更美味いつて話

何故か村紗が隠し持っていた塩を取り出し（勝手に持ってきた）魚に振りかけ食べる
うんやっぱり塩とこの香ばしさがたまらないね！

村紗の奴め、常に目となる灰を里中にバラまいてる俺に隠し通せると思っていたのか？ 幸せは共有しないとな！

適当にだした灰が風に乗ってびゅんびゅんと飛んでいく

なんでも灰の噂によると隣町から人が消えたらしい。争いの跡とかもなーんもないまま人だけが一夜にして消えたとか何とか：ほへー怖い話もあったもんだな

最近だと里の人間と命蓮寺の関係が変な感じで聖がへとへとになつてるしなんか美味しいものでも買つて帰つてやるか

村紗の金で

第十話 たび～は道連れ世は情け～

俺は今怒っている。過去最高レベルのイライラだ

それはこの反吐が出るほど何度も何度もしつこく追いかけてくる事じゃない。もつと別の理由だ

しかし困ったことに俺が怒っている相手も俺を見ながら静かにキレているのだ。だが、どちらの方が怒っているなんて言うまでもないだろう

「お久しぶりね〴〵白墨〴〵さん？今度は逃げないのかしら？」

とてもどうでもいい話だが、今俺の目の前には静かに拳を握りしめた八雲がいつものお決まりの言葉である「お久しぶり」とあたかも偶然出会ったかのように話しかけてくる。当然無視でいつもなら当然逃げているのだが今度ばかりはそうはいかない

俺はちようど今開けたばかりの木製の弁当箱に蓋をして今もなお吐きそうな程の恐怖をばら撒く八雲に対して1歩前へ出た

「…ツツ!!」

その今までにない俺の行動が予想外だったのか一瞬驚いたような顔をした

が!!しかしそんなことはどうでもいい!!かの傍若無人のクソ野郎の顔面に1発いい

のをぶち込まねばと気が済まない!

「…驚いたわね、貴方もそういつた感情を持ち合わせているとは知らなかったわ。一体何に対して激怒しているのかは知らないけれど…」

知らない!?! よくもこんな簡単に嘘をつけるもんだよ

突然現れてめちやくちや脅してくるのは許そう

有無を言わず恐怖で俺の心をボキボキに折るのも許そう

だがな! 俺が仕事終わりに楽しみにしていた弁当タイムに吐き気を催すレベルの妖力をぶつけて台無しにしたことだけは絶対に許せねえ!

例えば言うなら楽しみにしていたご飯の時間に唐突にう〇この画像を脳裏にこびりつけて食欲を無くさせるぐらい最低だ!

その怒りは無表情の鉄壁仮面から空気を通じて確かに八雲の体をヒリつかせる

「呆れたそもそも怒りたいのはこちらの方なのだけけど? あの日去り際におかしたハンドマークは一体何なのかしら? でもその微弱な妖力で歯向かう根性は認めるわ。はあ…思い違いだったのかしら…」

ハッ! 言つとけ馬鹿野郎

スカツとするためにやるべき事はただ一つ! あの澄ました横顔に右ストレートをぶちかます!

「あなたもしかして怒ると短絡的になるタイプ？でもあなたみたいな人にとってそれは致命的じゃないかしら…」

八雲が頭痛が痛いといった様子で頭を押さえているがそんな事は関係ない！むしろ油断をしていてやりやすい！

妖力溜めてぶん殴る！

おおおおおおおおおおおおお！！！！！！



「ほんとに無策で突っ込んでくるなんて…買い被り過ぎた…？いやでもこんなにも呆気なく…？」

俺はこめかみを抑えてブツブツと独り言を言う八雲に文字通り椅子のように尻に敷かれていた。無様だ…

今だとなんでさつきまであんなに熱くなっていたんだと疑問で頭がいっぱいになるくらいには冷静になった。うん頭おかしいねなんでイケると思ったんだ？

戦いは一瞬で終わった。達人同士の戦いだと1秒で決着が付くみたいなのと同じ感じだ

俺が右手に妖力を溜めて八雲の顔に殴りかかった。まずその時点で俺の肩が脱臼した

なけなしの妖力で強化された俺の拳は人が放つそれよりも幾分か強めに射出された、しかし悲しいかな…どれだけ妖力で強化しても俺の体の耐久性は人間レベルだ。

人間レベルの耐久性で人間以上のパンチを、殴り方も知らないド素人が放った

もちろん普通のパンチが繰り出される訳もなく俺の肩はいい音出して外れてしまった

けれどそこまでは良かったんだ…

肩が外れても勢いよく飛び出した俺の拳は八雲に向かって飛んでいく

しかし無情にも殴る瞬間、俺と八雲の間に生まれたスキマから大きめの岩が飛び出し衝突

俺の指は本来曲がらない方向にねじ曲がり、八雲はぽかんと呆けた顔をしながらとっぴりあえず勝手に自爆した俺を拘束して椅子にしながら難しい顔をしてブツブツと何かを言っている

自分で言っていて悲しくなるような結果だ恥ずかしくて死にそう

そんな放心状態の中、未だにズキズキと痛む右手を見る

おっふ…とても人に見せられるような形じゃないね…

そう思っていると、俺の右手を包むように灰が集まり5秒程してその灰は散らばった。灰で隠れていた指は完全に治っており、痛みも綺麗に消えていた。

試しに折れていた手をグーパーグーパーさせる。おーすげー！これが妖怪の再生力か！便利！

「あなた…それ…」

八雲の目が鋭くなったのを見て思わず身構える

「いや今は時間が惜しい、私も困ってるのよあなたが思いの外マヌケな捕まり方したせいで、当初の計画がめちゃくちゃよ。どうしてこうも思い通りにいかないのかしらねえ…」

知らないよそんなこと。というか重いからどいてくれ

じたばたと動くも八雲が重いからか、結界の拘束のせいか思うように抜け出せない

…おうふ!?

「何となくムカついたからチョット大きめの重りを置かしてもらおうね。知り合いの庭師の練習道具なのよ」

肋が！肋が折れる!?

上でもう一個増やしちやおうかしらなんて言いながら重りをチラつかせる八雲に戦慄すら覚える。あつ待つて下さいほんとに折れちやいます

「まあいいわ、本題に入りましょう？」 白墨「さん」
ん？なにか違和感あるけど…

「酷いじゃない、私には教えてくれなかったのに妖怪寺の人達には名前を教えるなんて」
からかうようにニタリと八雲は笑った

サーっと血の気が引くのを感じた。その含みのある笑みが最悪の展開を予感させる
…こいつさては見てたな

「そう遠くない場所に変装すらしてないあなたを見つけないほどマヌケじゃないわ。
でも意外ね、てつきりあなたは一人で行動して拠点などは持たないと思っていわ。何か
気を引くような物でもあったのかしら？なんてね、余程仲が良かったみたいだけど大丈夫
かしら？」

ああやつぱり苦手だよこいつトラウマだ

大丈夫ってなんの事だ？何か引つかかる。嫌な予感だ、嫌な奴と話すと嫌な予感も
膨らんでいく

「数十分前ぐらいから、人と例の寺で抗争が起こっているみたいね」

何事もないかのようにあつげらかんと八雲は言った

瞬間身体中に妖力を張り巡らさせて最大限の力で何とか八雲をどかそうとするが、案の定ピクリとも動かない

マズイ事になった

最悪のタイミングで八雲に出会って最悪のタイミングで問題が起こった
じたばたするが変化なし。結界のせいで灰逃げも使えない

「どいて、お願い」

最終手段でそう訴えかけると気味悪く笑った

「ああ、そう。反応してくれるのね…いいわよ、1番知りたいことが知れたから」
すると八雲は驚くほど素直に退いた

これまた気味の悪いぐらい都合良く頷くもんだ…なにか裏があるんじゃないか？いやきつとある！

「何構えてるのよ？早くしないと着いた頃には誰もいないかもしれないわよ？」
「？」

てつきり助けて欲しかったら命乞いをしながら靴を舐めなさいこのウジ虫野郎！とか言ってくると思ってた

本当に意図が読めない

重い体重のプレスも結界も気づけば無くなっていた。それを確認して体は灰になる

体が灰になるのを眺めながら未だに満足そうに笑う八雲の顔を見る

それは何もかも意味が無いようにも見えるし何もかも意味があるようにも見えた



あやふやな感覚がゆっくり時間をかけて覚醒していく

ここは…命蓮寺だ当たり前だ。いつも使っている定位置みたいなもの、変わることは無い

上にうつすらと膜が見える

結界だ。たぶん聖か一輪あたりが張ったやつだろう。それが今にも割れかけ…いや、割れた——続いて誰かの怒声が辺りに響き渡る

何が起こってるのか全くわからないが馴染み深い気配を頼りにその方向へ向かった

「あーよかった帰ってたのね、でもちよつと今回ばかりは逃げた方がいいかもしれないわよ」

汗を滲ませそう提案してきたのは聖ではなく一輪だった

八雲に言われてここへ来たただけだからなんで襲われてるのかとか聞きたいけどめんどくさいので一番重要な部分だけを聞きたい

え、えーと簡単に短くするとなんて言うんだこういう時

良い天気ですね？いやこれはダメだな定番すぎる

本日はお日柄もよく…いやいや今そういう会話じゃ無くて…

「？あんた何やってるの早く離れた方が良いわよ今回ばかりは私達の話だし」

いや逃げるけどね？逃げるけど現状把握だけしたいからえーと

「聖、どい！」

「！」

「そう、なんだかんだ言って付き合ってくれるのね…ありがとう。姐さんなら今一番ヤバイ奴を説得するために此処には居ないけど、きっと大丈夫。姐さんの私の強さと、拳の撃鉄は私達が一番よく知ってるから」

んんんん？いや一輪がヤバいってこういう奴がいるの？逃げるよ？何故か一緒にやるみたいな流れになってるけどそんなの当然逃げるよ？

そうこう行ってる間にドタドタと決して一人ではない数の足音が近付いてくる

しょうがない、逃げる為の時間稼ぎはしよう。だつてやらなきや俺も逃げれないし

やがて足音の正体である者たちが姿を表した

いや…えっこれほんとにどういう状況？

足音の正体は里の用心棒達がほとんどだった。用心棒だけで妖怪に立ち向かうほどの力を持つものでは無かった

「止まりなさい！あなた達の言いたい事はわかっていきます！ですが！今一度時間を預けては貰えないでしょうか！私は逃げも隠れもしません！全てを話す覚悟を持ってここに立っています！」

「お願いします！今一度だけ、あなた方と話す時間をわたしに下さいっつ!!」

そう言つて一輪は両手を広げて訴えかけた

覇気のある声だったと思う。もし空気が可視化されていたとしたら本当に揺れているのを確認出来る程度には力を持っていた

1人の男が前へ出た

「なら、何故もつと早くに言つてくれなかった…何故私らに信じさせてくれなかった…嘘を付き続けてきた者の代償はでかい。あなた方の代償は我々の信頼だ、最早止まることなど出来ぬ…ここににいる者は全て命を捨てる覚悟で立っているのだ。今すぐここで納得出来るだけの、今までの信頼を取り返すだけの証明を、ここでしてくれ」

「私だけでは…。それは出来ません…」

たつぷり20秒ほどして一輪が絞り出すように声を出した

「そうか、残念だ……」

話の内容がわからない、けど上手くいかなかったことだけはなんとなくわかる。一輪の顔を見れば苦虫を潰したように顔を歪めて下を向いていた

こうなってしまうえば後はわかる

用心棒達が武器を構えたのを見て俺も妖力で警戒態勢を取る。だけどきつと勝負にすらならない。

ただの人間なら、一輪どころが俺ですら簡単に倒せる

何人かが先のとがった鉄の槍を投げた。しかしそのほとんどが空を切って落ちていく…はずだった。

ううつと呻くような声を上げて一輪が後ろに倒れた

は？いやっえ？なんで

横を見れば、今しがた投げられた槍が一輪の肩に深く突き刺さっていた

妖怪の鋭い爪の切り裂きを大樹も折れるような攻撃だつて簡単に避けていた。こんな遅い槍に当たるなんてありえない

い、いや今はそれよりこれを何とかした方がいいんじゃないか???

槍を抜こうとして手が止まる

こういう時って抜くと余計に血が出て危ないんだっけ？それとも止血つてのをすればいいのか？止血つてどうすればいいんだ？傷口に布を詰め込めば出来るのだろうか？

不味い、じわじわと血が青い服を濡らしていく

血が、止まらない。なんでだ？妖怪だろ？もつとこう、シューって傷が塞がるんじゃないのか？

傷の治し方なんて知らない、そんな力の使い方なんて考えた事すらない

一輪の顔を見ると汗をびっしりとかいて辛そうに息をしていた

やばい、どうするんだこれ治んないぞ。聖だ、聖に頼めば多分何とかしてくれる

サツサとこいつら退かして聖の元に連れていこう。それで解決

一輪を横にして男達に向き直る

1歩、前へ出ようとして足を掴まれる

足を掴んでいたのは一輪だった

「すぐ、終わる」

「つ……ダ、メ」

ハッハと不規則に呼吸をしながら一輪は俺を引き止めた

「私……達が、ここで殺し合えば、姐さんの……姐さんのやってきた事が全部、無駄になるッ

から……」

意味がわからない

それがどれだけ重要なかわからない。けれどそれが抵抗しない理由になるのか

「死ぬ」

出来るだけ抑揚のない声に、お願いしているように、懇願するように言った

「私は……妖怪だから……！ 姐さんと会う前なんて人だつて殺したことある……だから、こうなつても仕方がない……から、だから、大丈夫」

「……」

痛みからか、一輪の目には涙が溜まっていた。なのに安心させるように笑顔を浮かべている、変な顔だ

周りに浮かべていた妖力弾を消す、代わりに右腕に溶けるような熱い妖力を注ぎ込む。掴まれている足を無理やり払い、その勢いのまま踏み込んだ

大きく踏み込んだその脚は思いのほか遠くに飛び相手との距離を縮ませる

勢いに身を任せ、型もクソもない素人パンチで相手の体を吹き飛ばす

後に残ったのは呆けた顔の一輪と、用心棒、それとまともに握れなくなつたぼろぼろの右手だけだった

第十一話 博麗の巫女

白墨の周りから消えていく妖力弾を見て張っていた力が抜けていく。そしてそれが私の勘違いだと言ふこともすぐにわかった。

刹那、空気が変わった。

物理的にも感覚的にも文字通り肌でわかるほどはつきりと変わる。少し渴いた風がそこから吹いてきた

赤、それはぼうぼうと燃え盛る炎ではない、火事の時の焼け落ちてしまいそうな熱さなどない。ただそこに静かに「ある」というのが分かるだけ。

無炎燃焼

昔ある人の葬式を見た時を思い出した。皆が一樣に哀しそうな顔をして佇む姿を。

ただただ静かに炎を出さず燃える赤い線香の火だけが時を刻んでいた。

なぜ今それを思い出すのか——理由はわかりきっている。

彼の、白墨の身体の所々が鉄を熱した時のように赤く、淡く、静かに燃えていた

踏み込んだ足は誰にも止めることは出来ず、大雑把に振り上げられた拳は荒々しく感情の起伏のない彼には珍しく、その静かな怒りを表すようだった

振り抜かれた拳は骨の折れるような音ともに人体を吹き飛ばした。

ああ、やつてしまった。起こってしまった

つまるところ白墨は優しかったのだ。自分に利益のある事しかしないと、身の危険を感じればすぐにでも逃げてくれると願望にも近いことを勝手に思っていた。

どんな考えがあつたとしても妖怪が人を殺してしまった。

そこから始まるのは人と妖怪の終わらない対立だ

白墨は——

「パンチ」

白墨が握りきれない拳を見せつけ子が親に言い訳をする様に言った

「……………え？」

「拳、だから…ケンカ…」

そう言つて誤魔化すように走り出した

「…ふつく、あつはつはつは！そんな子供みたいにつくふつふつふ、そうねそれなら殺し合いにもならないわね。にしてもあの鉄仮面の裏は案外子供っぽいのかしら」

私の身体は今度こそ安心して張っていた力が抜けていく

疲れて薄くなつていく意識の中である女を見つけた

あいつは確か姐さんが…

それを白墨に伝える前に私の意識は沈んでいった



ダツラア！

1体4理論でボコスカ殴っていく！強靱！無敵！故に最強！

右でパンチ！左でパンチ！後は雰囲気で蹴り飛ばす！相手は死ぬ！いや殺しちやダメだった！

兎狩り以来の多人数戦だがそれをもとせずに突っ込んでいく

妖力で強化した身体は一瞬でボロボロになっていく。腕は拳も握れない鈍器と化して感覚が無いし、腰あたりにはいつ当たったのか、槍が1本突き刺さっている

痛い、めちやくちや痛い。ほんとにマジで泣き叫びたいほどの激痛が身体全身を駆け巡っていく——がそれも数秒のうちに灰が集まり癒されていく

ボロボロの腕は傷一つない新品に、腰も同様に完全回復する

身体が完全に治ったことを確認して再度妖力を込めてぶん殴る

埃かぶった服を払って歩を進める

そうやって何気なく振り向いた時にヤツが居た

やや露出の多く思える赤い巫女服を身にまとった大柄な女だ

いつから?とか誰だ?とかそんな疑問をすつ飛ばして今まで生きてきた全てが理屈を壊して俺の脳に訴えかけてくる——ただ1つ“逃げろ”と

全身の毛穴から汗がブワツと一齐に溢れ出るほどの錯覚を覚える。体がサーッと冷えていくのを感じながら目だけは逸らすまいと必死にその巫女を凝視する

この時代のしかも女にしては珍しく190cmは行っているだろう体格に、筋肉質ながらも女性らしい体つき、長い髪はサラサラと纏められ、その目には感情の起伏を感じさせないよく知るものがあつた

「まだ、いたのか……これをやったのはお前か?いや、関係ないか……」

周りを軽く確認すると女は拳を構えてこちらを見据えた

来る!?俺のなんちゃって武術の適当な構えじゃない——ただ積み重ねてきた年月を彷彿とさせるような芸術にも似た構えにそれだけでプレッシャーがのしかかる

「……ッ!」

あまりの圧に耐えきれず1歩後ろに下がった瞬間虎のように狙いを定めて突撃してくる!

大丈夫なはずだ巫女との間にまだ50mほどある、近距離にさえ持ち込められなければ！

決して目で追えない速さじゃない、人間にしては恐ろしい速度だが天狗のように弾丸のごとき速度で突っ込んでくるわけでもなければ紫のような理不尽な長距離ワープもない、ただ単純に突っ込んでくるだけだ！

少しでも距離を取るために後方に跳びながら両手には手馴れた妖力弾と投擲用の結界を作り巫女に向かって投げつける

この間に距離を取れば…!?

巫女は減速するどころが更に速度を上げてそのまま妖力弾と結界を両手で添えるように触れてはじき飛ばした

!?

考えてみればそりやそうだ。最初の1歩目から最高速度なんて出来っこない、遅い走り始めから徐々に速度を上げて向かってくる——それはまだわかる！だが冗談だろうか!? 2つの俺の攻撃をもともせずにはじき飛ばして来るのか!?

あれ一応木ぐらいなら簡単に吹き飛ばせるんだぞ！

煙が晴れ、気がつけば巫女は目の前にいた。この間約3秒

それまで一応目で追えていたその動きが殴るモーションだけフツと右腕が消えたよ

うに視界からいなくなる―否、無くなったように思えた右腕は俺のみぞおちを的確に撃ち抜き爆音を轟かせる

たった一撃、それだけで俺の肋骨はひび割れ内臓に確実なダメージを残し、水平方向に吹き飛ばされていく

急激に変わっていく景色と血染められていく体に現実味がなく呆けたようにしていた意識が壁に衝突することで引き戻されていく

体にかかるGがやばい

再び身体にダメージが入り、血を吐き膝を付く

どこまで飛ばされたんだ？

痛い、体が痺れて動かせない…それでも体を起こそうと震える手を無理やり動かそうとし、喉に突つかかっていた血が再び口から吐き出される

やばい、クラクラしてきた。目が震えて涙が…出ない。

こんな時ぐらい感情変化を起こせよ！涙の1つでも出してなきややつてらんねえ！

灰が集まりガクガクに震えていたポロポロの体が元のイケメンボディに戻っていく

大丈夫、治る。めちやくちや痛いし怖いけどやっぱりこれは妖怪のアドバンテージだ「確かに人体を壊した感触があつたが…？その再生能力は妖怪という枠組みでもバケモ

ノクラスだな…手早く済ませるとしよう」

治ったことに安堵しているとそんな恐ろしい言葉が奥から聞こえてくる

やめろよ！俺だつてどこまで治るのかわかんないんだぞ！

それにやばい！あの女はやばい！踏み込みが早すぎるんだ、足捌きや体重移動、体の運びが“完璧”すぎる

地に足ついたあいつ正面戦闘は下策……とにかくあいつを地面から引き剥がす

そう考えて手を地面の上に置く

単純な話だ。地面と足を離したいなら“地面”ごと動かせばいい

久方ぶりに使う能力に戸惑いつつも形を作る——そして地が破裂する

地面が大きく揺れて水平だった地面が地割れを起こしたように傾き、大地から槍のような物が飛び出し巫女に襲いかかる

俺の「触れたものを作り直す程度の能力」はこういった使い方だつて出来る！

今や俺の触れている大地全てが巫女の敵だ

最初の4、5発は上手く躲すが床が傾きどこから攻撃が来るかも分からないような状況、次第に無理な体勢で躲そうとする。

そして！バランスが崩れかけた瞬間ほぼ全方位から迫る攻撃を巫女はどうとう“ジャンプ”して避けた

きたっ！

この時をずっと待って高く飛び上がった巫女に向かって前から溜めていた最高火力の妖力弾で狙い撃ちする

自分でも十分な威力を持った攻撃だったと自慢気に思えるほどの一撃だ。

既に空中で回避行動を取っていた巫女では避ける術もなく絶対に当たると確信すらしていた

妖力弾が巫女に当たる寸前、俺の放った最高火力の妖力弾が“消えた”

少し遅れて大地から突き出ていたいくつもの槍が“何か”に潰され粉微塵になって消えた

一瞬のうちにして巫女の周りにあつたはずの全てが消えていくのを俺は黙ってみているほかなかつた

陰陽玉、巫女を中心にして回るあらゆる法則を無視したような2つの玉が全てを壊したのだ

「そんな見た目をしてお前、人なのか？人間よりもドス暗く、妖怪よりも数が多い…いや人間なんかよりもよっぽど…」

巫女は何かを言いかけそして諦めたような顔をし、そして陰陽玉を蹴つて再び空高く飛び上がり、そのまま重力に身を任せ恐ろしい速度で俺に向かって落ちてくる

巫女の接近を許す…それは俺にとって死を表すことに他ならない

しかしもう避けられない！俺は焦って素人みたいに頭を手で覆い隠した
はるか上空から放たれた刃物も何も付いていないただのかかと落としては、まるで紙で
も引き裂くかのように俺の右腕を両断した

◇

爆発音にも似た音により耳がキーンと麻痺する

こんなダイナマイトみたいな音が人間のかかと落とすしだって？笑っちゃうよ

もう潮時だ、こいつには勝てない。八雲と同じかそれ以上の力をこいつからは感じ
る、もうお前人類最強だろ。

逃げたいさ、めちやくちや逃げたいよ。

人間のくせして八雲レベルに強いなんて馬鹿げてる、こんな奴からはさっさと逃げて
美味いものでも食べるに限る…だが、恐らく無理だろう

灰逃げは発動までに1秒程度の無防備な時間がある

今までは何とか誤魔化して時間を稼いでいたけれど、恐らくこの巫女相手には1秒も
の隙なんてありもしない…よってこの場からの逃亡は不可能だろう

もし本当に逃げるつもりならこの女を見た瞬間に使ってしまえばよかったのだがも

はやそれも後の祭りだ

しばらくして足音が聞こえてくる

どうやら無様に吹き飛び片腕を失った俺にとどめを刺しに来たらしい

やがて足音の主姿を見せた

「驚いた…まだ再生するのか…」

…え？

言われて気づいた

先ほどまで軽くなっていたはずの肩に綺麗な腕がくっ付いていた

マジかよ腕が吹き飛んでも治るのか、想像以上に妖怪つてのは理不尽だな

でも腕があってもなくても状況は大して変わらない

アリの足の本数が1本2本変わったところで獅子がそれを恐れるだろうか？

「…むっ？」

一瞬何かに気付いたように横に目を向けた巫女に対してヤケになって結界を飛ばした

飛ばして、それが直ぐに消される。俺にはもうほとんど妖力なんて残されていなかった

攻撃を流された後に来るのはカウンターだ

頭を、腕を、足を、心臓を、殴られ、千切られ、潰されて、意識がだんだんと朦朧になっていく

ふわふわとした感覚の中悲鳴も上げずにただ殺され続けるさつき飛ばされたはずの足が再度無くなる

上を見ていたはずの視界が一瞬にして黒に染まる

このままだとまずい

なんでまずいんだっけ？ああいやだめだ、このままだと死んでしまう

死ぬのはマズイ、もう美味しいものもなにも食べられなくなる

逃げないと、足はどこだ？どうやって？何から逃げるんだっけ？

ああまずい。大事な所のはずなのに食べ物の事ばかり思い浮かんでくる

絶対にそういう場面じゃないのにそればかりが思い浮かんでくる

「四肢をもぎ、頭をはねて、心臓を潰して尚こちらに向かってくるのか…これが、これが

この世に生を受けた者の末路だとはなんとも酷く、憐れなものだな…」

女が俺に何かを言ってきた。赤い女だ返り血と、元の服の色で全身が真っ赤に染まっ

ている

そうだ、そうだ巫女だ。こいつは強いんだ、逃げれない。

いや…今なら逃げれる。油断している…1秒程度の時間なら誤魔化せる
逃げて…適当に美味しいご飯でも…あれ？聖はどうしたんだ？

そうだ一輪が怪我をしているんだった確か血が出ていた。早く聖の元に連れてかないと。このまま逃げるのはダメだ

倒さないといけないんだった

でもどうやって？

妖力がもう無いんだ、妖力がある時の最高火力でも俺は傷一つこの女につけてない
今じゃどうやったって勝てない。ああでも倒さなきや

何とかしなきや

妖力は本当に残ってないのか？よくよく探れば残りカスみたいなものだけどほんの
少し残ってるじゃないか。妖力弾1回分にも満たない少ない量だ

“右手”を前に出す

それと同時に前に出した右手の小指が切り飛ばされる。巫女の投げた針が小指を骨
ごとえぐり飛ばしたんだ

けれどまだ指は4本残ってる

体の中で結界を構築する。いつもはほぼ無意識のうちに作ってる結界がぼんやりと
した意識の中で構築される

でも弱い、俺の結界は半透明ないつもの結界を薄く伸ばしたように弱々しかった
妖力が少ないからこんなんじゃないやダメージを与えられない。

その薄い結界を折る、何度も何度も半透明だった色が白と見分けがつかなくぐらいま
で何度も折る

なんでそんな事をしようと思ったのかはわからない。

ただ何度も折り曲げて長細くなった結界を苦し紛れの一撃を、俺はあの巫女に向かっ
て放った

鉄と鉄がぶつかり合うような音を出した後何かが砕けるような音がした

もうほとんど自分の放った攻撃も見えなくなっていたがはつきりとそれが防がれた
ということだけはわかった。

ただ女の腕からぼたぼたと血が流れ落ちてるのがわかった

それはただの返り血か、俺の苦し紛れの一撃が幸をそうしたのか……ここは都合よく俺
の最後の最後の一撃が運良く当たったという事にしよう

「■■■■」

ああ……まずい、女が何を言っているのかもわからなくなってきた……

ほんとに……意識が……

「▲▲！ ■■■■！」

意識が落ちるその寸前

誰かが俺と女の間割り込んできた

聖か？それとも一輪か？もしくは：

頭で思い浮かんだ少女を思い、無いなど目を瞑る

あの少女と俺は仲が良くないきつと聖か誰かだろう：

今度こそ俺の意識は暗闇に沈んでいった

そしてこれがこの場所での最後の時間となった

盲目の灰と地底の世界

第十二話 暗い場所

『血』が流れる

女にとってそれは誰のものでもない久方ぶりに見る自分の血だった

「本当に驚いた……まさか中級妖怪がこれ程までの一撃を放つとは……」

死にかけの存在が苦し紛れに放った一撃は外れ、巫女を殺しきるまでには至らなかつたものの、たしかに1つの領域へと“完成”したものだつた。

それは巫女の自らの経験と確かに流れる生暖かい血が証明している

かすり傷のようなものだ、出血は激しいが跡に残るようなものではない——しかし決して油断し、胡座をかけられる様なものでも無い

巫女は感慨深く特異の妖を見た

与えた傷はまるで何も無かつたかのように綺麗さっぱりと消えている、しかし最後の
一撃を放つたこの妖怪は確かに瀕死で今にも事切れそうなほど衰弱しきっている。

巫女の仕事とはただ1つ。故に弱る妖怪にする事も既に決まっている

振り上げられた腕は綺麗に弧を描き妖怪へ振り下ろされ——「待って！」

しかしそれは止められた

必死に体を震わせ、それでもなお妖怪を守るように大きく広げられた手を張る妖怪の少女によつて

それに対して巫女はあからさまに顔を歪めた



「待って！…本当に死んじやうよ！」

私——村紗水蜜の反射的に動いた体と口から出た言葉はソイツを前にした瞬間大きな後悔へと繋がった。

幸運にも振り上げられた腕は私の頭の真上で止められる

「船幽霊…まだ、居たのか」

「…ひっあ」

底冷えするような低い声、圧倒的な靈力の強さが声を通じて体をいつそう強く震わせ

まともに相手を直視するなんて、出来こつない

格が違う。無理だ。無理に決まってる。目の前にいるのは紛れもない人類最強の女だ。

妖怪がとか人間がとかのレベルで推し量つていい類の生物じゃないんだ

少なくとも妖怪という身で、妖力を持つような生き物がこの女に勝つことはありえないとそんなことさえわかってしまう。

なんだよお前

お前こんな怖いやつ相手にこんなボロボロになるまで戦つてたのか

戦闘能力なんて全くないっていつも言つてたじゃんか、もし格上を相手にしたら直ぐに逃げられるって珍しく自慢気に話していたんじゃんか

なんだよ、なんでそんなボロボロになるまでここにいるんだよ。

こんな奴に勝てるわけないじゃんか、私なんて睨まれてるだけで体すら動かせないお前がこんな奴を前に死にかけてるから私まで馬鹿な真似しちゃったじゃんか

女は、いや博麗の巫女はこちらを見据えて見定めるように立っていた

「そいつは一秒でも早く殺さなきゃ面倒になる——」どけ」

「……ッッ」

カッはと途切れ途切れに息を吸う

とんでもなく恐ろしい。恐怖で体から力が抜けて床にへたり込む立つことさえ出来ない。

助けにきたはずなのに怖くて、縋るように白墨の手を小さく握る

既に気を失っているためか握り返されるような事は無い…その代わりに手のひらから伝わる暖かさが温もりが、何ものにも代え難い安心感を感じる

「私も白墨もここに来たら何も悪いことなんてしてないっ！だから…だから、もうやめてよ…本当に死んじやうよ…ほんとうに白墨が、しんツ死んじやうから…」

怖くて、情けなくて涙が出てくる。言葉に嗚咽が混じる

それでも。そんな言葉を言っても。

巫女がゆっくりと巫女が近付いて来るのが分かった

どんな理由があろうと、命乞いをしても。

巫女のやる事は変わらない

巫女が私たちに腕を向ける

最後の抵抗として私は巫女に背を向けて、守るように覆い被さるように白墨に抱きついた

目をつぶる

じんわりと体に伝わる白墨の温かさに場違いも安心する

ああ、何やってんだ私

こんなことをした所で助からない

2人とも殺される。私の行動は結界1枚分の防御にすらならない

巫女が止まった。もう目の前にいる

「……そこは暗く、今では忌み嫌われた者たちの最後の楽園。もう二度と地上の光を見る事は出来ないだろう」

「……？」

「しかしそれでもお前のその体は危険すぎる。故に1つ貰っていく。何も映さない暗い世界で達者でな」

痛みは無い。代わりに軽く人差し指で押される

軽く押されて体勢が崩れ、浮遊感に襲われる

ハツとして後ろを見るが、後ろにはあるはずの地面など既に無く、ただただ暗闇だけが広がっていた。

気が付いた時には周りに何も無く、変わらない景色によって自分が落ちているのか、登っているのかさえわからない

それでも強く抱いた腕の中には白墨がいた、今なお暗い世界で温かさを共有し合える者がいた。

私は何があつても離さないようにしっかりと腕の力を強めた。

もし離してしまつたらこの真つ暗闇な世界でひとりぼっちになつてしまうのではないかという恐怖を紛らわすように、強く、強く、握つた。



死して物言わぬ骸となつたそれに、口汚く罵る者がいた。何度も何度も悪態をつき、あまつさえもう魂の入つていない死体に唾を吐きつけ辱める。それはきつと恨みの類であつただろう。

死んだ者に対し、嘆き悲しみ涙を流す者がいた。死したその者にせめて天上の世界では心安らかにと願いを込めて。

しかし両者の声は思ひは、死んだ者には届かない。当然だ死した者に声だけは届いて欲しいというのは人間のエゴであり意味なんてない。

ならその死者に向けた2人の声は思ひは、一体どこへいくのだろうか



あれっなんか体が重いし、ちよつとだるい

どこだここ？

「▲▲▲▲▲▲」

何か声が聞こえる、誰だ？

あつ段々意識がはつきりとしてきた気がする

確か理不尽な巫女に大人気なくボコボコにされてたような…

「もしもし、聞こえてますか？」

なんだうるさいな。聞こえてるよ

「あつ気が付いたみたいですね、良かったです。このままずっと起きなかつたらお昼に間に合わなさそうだったので」

ん？

お昼、俺もお昼食べたいな。にしても暗い、電気ぐらい付けてくれよ

いや電気なんてないからランタンか

「へえ、こいつが紫の言ってたやつか」

また声だ。つて今紫つて聞こえたぞ

うげえ……急に逃げ出したくなってきたな

というかここ何処なんだ？真つ暗だし何も見えない

「ええ、まあそうですね。順を追って説明します。私は古明地さとり、ここ旧地獄にある地霊殿の主をやっています」

旧地獄？地霊殿？えっえ？命蓮寺は？聖達は？

「聖、という人は知りませんがあなたと一緒に何人かが、ここに落とされて来たので探せば見つかると思いますよ。まあ状況を理解するのに時間がかかると思うのでゆっくりと理解して下さい、私はそれまで本でも読んでいますから」

えっちよつ落とされた？んん？どういうこと??

とりあえず生きてるってことは見逃してくれたのか？と、とりあえず喜んでこう、ラッキー

にしてもなんでこんなに暗いんだ？おーいさととりさーん明かりを付けてくれよー

そうやってここで初めて言葉を発しようとして――

「……残念ですが、明かりはもうついていきます、はつきりと」

……え？

少し言いづらそうな声が聞こえる、多分声の主はさとりという人だろう

「なんだお前、目が見えないのか？」

さとりじやない、もう1人の声が追い討ちとなつて現状を把握する

顔を触つてみるが、分からない

さつき声がした方向を向いても、何も無く誰かがいるような気配がするだけ

試しに軽く周りを見てみる

そこにはどこを見てもただぼんやりとした黒が永遠と広がっているだけだった。

それを理解して俺は自分の指の皮を噛みちぎり、流れ出ているであろう血を舐める

怪訝そうな声が聞こえてくるが無視して進める

あの巫女と戦った後、俺は視力を失った。

だが俺はそれでも安心していった

無くなったのが味覚じゃなくて本当に良かった!!!

第十三話 鬼が面倒をみてくれるらしい

「お願い？」

「ええ、鬼のあなたに私からのお願いよ」

それを聞いて分かりやすく鬼は顔を歪めた

妖怪の、それも八雲紫からわざわざ「お願い」なんて言葉が出るんだから誰が聞いたって顔を顰めるだろう。それが感情の起伏がわかりやすい鬼なら尚更だ

「あの日、あなた言ったわよね？これは貸しにしてくれって」

「ああ、わかつてる。わかつてるよ、約束だ嘘はつかないさ。それよりお願いって…紫から言ってくるなんてどんな面倒事だ？」

鬼は——星熊勇儀は諦めたような脱力したようなふうにそう聞いた

それに対し八雲紫は嬉しそうにニタニタと笑みを浮かべる。鬼相手におちやらけた雰囲気ですすから周りの評判まで悪くなるのだと、当の本人は全くもって気にしていないが

「んふふ、もうしばらくすると一人の妖怪が落ちてくる」

「そいつはまた…」

ここ旧地獄の地底で落ちるといふ言葉は他の場所とは意味が違い、外の世界から忌み嫌われ封印される事に他ならない。それはまたとびきりの面倒事だと確定付けるには充分だった。そして勇儀は妖怪が落ちてくる事を何故か知っている八雲紫にまたもや嫌気が差した

「あなたにはね、その妖怪の“面倒を見て”あげて欲しいのよ」

勇儀はそれを聞いて1度目をつぶり、大きく息を吐いた

「…なあ紫、鬼に世話を頼むってどういう意味かわかつてるよな？」

「ええ当然、だからこそあなたに頼むんですもの」

「わかったよ、鬼の四天王が1人星熊勇儀の名にかけてそいつがどんなやつだろうが”

面倒”を見てやるよ」

「確かに聞いたわ、それと間違っても殺さないようにね」

「ああわかった、多少の怪我なら良いんだろ？」

「ええ、それは」

目的が果たせたからかその妖怪は嬉しそうに笑った。

後に星熊勇儀はその八雲の顔を軽薄な笑いだのため息をついたという



目が見えないってのは案外不便なことで、急に壁にぶつかったり段差がある事を知らずに体が1段下がってめっちゃビビったり：

それを見たからかさとりが杖をくれた

これで老人みたいに地面をトントンして歩いている

なんでも目にめちやくちや強力な封印がされていてそのせいで目が見えないらしい

めちやくちや強力な封印：：心当たりしかないな

恐らくあの巫女にかけられたのだろう、そして同時にこの地底という場所に封印された

「はい、大体合ってます。恐らくあなたと一緒にいたお仲間さんも地底に落とされていますので探せばどこかにいると思いますよ」

：

おかしいな、まだ一言も話していませんけど

「はい、そういう妖怪なので。あなたが想像している通り悟り妖怪というものです」

ということとは、こいつ！直接脳内に…!!ごっこが出来るのか！

「表情からは分かりませんが喜怒哀楽の激しい方ですか？ポーカーフェイスがご上手ですね…いや生れつき？また周りから色々と勘違いされそうな性分ですね…」

？そんな場面1度もなかったけどなあ

「…まあ良いでしょう単純で裏表のない方がペットと同じで私にとっては好ましいですから」

おお！珍しく初めから好印象

じゃあ明日も泊めてくれるんだな！

オレは期待を込めてさとりんの顔を見た

「え…普通に嫌ですけど、適当な空き家で寝泊まりして下さい」

神は死んだ



よよよ、..、

金なし文無し光無し……いつの時代も社会って冷たいね

これじゃあ住む場所ないどころが今食べるものすらないよ。川なんて近くにないから魚だつて釣れないし……

聖達を探すにも目が見えないから出来ない

食ぶなくても平気だから死ぬつてことは無いだろうけど死んだようなもんだ

がやがやと賑やかな音はするのに真つ暗。恐ろしいね

ほとんど酒の匂いで消されているけど温泉っぽい匂いもする。

地獄と言うからどんな所かと思つていたけど案外ここに住んでいる者たちは満足しているのかもしれない、唯一欠点があるとすれば陽の光が届かないことだと思うけどそれも目の見えない俺からすれば関係ない事だ

……やめよう、珍しく憂鬱な気分になりそう

自然とため息が吐かれる

けれど誰も聞こえないような小さなため息はそれを大きく上回る大きな声で掻き消された

「ん？ おお！ 白墨じゃないか！ 長い話は終わったか？」

声がかい、姿は見えないけど既に嫌な予感がする、そんな声色だ。確か目が覚めた時にも居た気がする

あれだ前世で言うところの体育会系って感じた。多分「いいもん持つてんな、オラ！ それ全部寄越せよ！」みたいなこと言うヤンキー系だ…！

特に八雲と関わりがあるという時点でマトモな奴じゃない…

「何やってんだ？早く来い、適当な空き家と飯ぐらいならある」

…!?

「ちよつと訳ありでな、紫の奴があんたの面倒を見ろつて言うんでちよつと来な。まあわざわざ紫からそんな事言われなくてもいつもやつてるんだけどな。今回は1つ多い」

ゆ、勇儀の姉御オ！

ヤンキーじゃなくて頼れる姉貴分だ！

にしても紫が？あの紫が？…いや普通に考えて同名の別人さんだな

紫なんかと間違えるなんてすまんね同名の紫さん。今度会ったらお礼しとこう

「ああ、そういうやお前さん目が見えないんだったか？…ほら握つとけ、迷子になるぞ」

おお助かる！

俺は渡されたであろう何かを握ろうとして2回ほど空中をスカったあとやつとそれを握った

「…あんたの本当に見えないんだな…でも悪いが私は約束は絶対に破らないんだ」

なんだ急に？俺はお前と何かを約束した覚えなんてないんだが…

にしても硬いな、なに握らされてるんだこれ？硬くてゴツゴツしてる…岩？これ岩握らされてるのか？

「聞いた話だが、お前さんは現博麗の巫女と戦ってここに落とされたんだって？」

なんだ？よく分からないけどとりあえずコクコクと頷いておく

目は見えないけど、何となく雰囲気が変わった気がした。なんとというか、さつきまでの豪快な感じが消えて少し大人びた声になった

さつきまでも子供のような声ではなかったけれど、姉貴から近所の頼れるお兄さんに代わったみたいなの…

「実は私も過去にやり合った事があるんだ、今の博麗じゃ無かったけどね、当時の博麗の巫女、それに数名の退魔師。今思い出しても震えるよ、あの時強い退魔師があと一人でもいれば私はここに居ないと確信出来るほどには僅差だったさ。後にも先にも人間との殺し合いであんなに興奮したのはあれつきりだね。そんな存在に代は違えどお前さんは立ち向かったらしい、結果はこうでも私は少なからずそこは評価してるんだ、普通の木っ端妖怪じゃ戦うことすら許されない存在に確かに“戦った”と紫は言った。

だからな白墨、私は期待してるのさ」

なんだ…それってどういう——

「覚えときな白墨、鬼に面倒をみてもらうってのはこういう事だ！山の四天王の一人星

熊勇儀！本気で来な！じやなきや紫の言うよう半殺しにするよ！」

は!?ちよつ待つて!?

「ぶん殴るツツ！」

「いッ！」

地震が起きた

そう錯覚するほど体が揺れる。いや、既に足と地面が離れていた

しばらくしてから浮遊感が無くなり地面に背中を勢いよくぶつけた

2秒ほどしてから地面から背が離れる、違う…地面だと思っていたこれは天井だ、この地底の高い天井まで一瞬でぶつ飛ばされたんだ

笑えない…笑えないぞこの状況は…

うぐぐう…ちくしょう！なんだよ！紫つてやつぱりアイツかよちくしょう！あいつそんなに俺の事が嫌いなのかよ！

「なんだア？星熊の奴と喧嘩か？」

「ブアツハハ！新参がケツでも触ろうとして飛ばされたんじやねえか!？」

「誰か酒もつてこい！あの星熊とやり合った何分もつか見ものだぞ！」

ガヤガヤと部外者の愉しそうな声が聞こえる

「にしてもよりもよつて喧嘩を売る相手が星熊なんてアイツ相当根性あるぞ！」

下の方からふざけた声と酒の匂いがする

ちくしょう誰かこんなふざけた現場を助けようとしてくれる奴はいないのかよ！

目が見えなくても馬鹿みたいな顔したアホ面の野次馬が俺の死に場を肴に美味しいものを食べてるのが目に浮かぶ……！

「蹴るぞオー・白墨！」

目が見えないからどれくらいで地面に着くのか、どの方向から蹴られるのかすら分からない

ああクソツッ！もう！またかよ！ちくしょうツツ！この前博麗の巫女にやられたばっかだつてのに！

汚え、汚えぞ八雲紫イイイイ！

俺の体は馬鹿みたいに熱狂的な観戦と強い酒の匂いに包まれ、勢いよく吹き飛ばされた。

第十四話 地底の世界での賢い生き方

俺は冷たい床から目を覚ました

ややポロつちい家と：なんだこれ豆？いやこれ米か？多分米だと思うつぶつぷとやけに多い酒が置いてあった

あの時の約束通り寝床と食料は貰えるらしい

ただ少し歩くだけでギシギシと床から軋む音が聞こえるのが難点だろうか
結局あの後無様に意識を失ってここに連れてこられたんだろう

とりあえず米炊いて食べよう：

明日からのこと考えると憂鬱だが、米は美味しい。美味いから偉い

適当に美味しいものを食べて明日からどうするか考えよう

適当に一合ほど炊こうとして俺は固まった

目が見えない無いのにどうやって米を炊くんか…？



派手な音を立て、家屋に纏めて風穴を開けるながら吹っ飛ぶ人影

それはもうこの地底では日常になりつつあった

「勇儀さあん！毎度毎度勘弁して下さいよ！」

「悪いな酒屋の旦那、今日中には建て直しておくよ！」

恐らくは吹き飛ばされた家屋の家主であろう男の悲鳴も最早馴染み深いものになつた

「よう旦那！運が無かったな、まあもう起きちまつたんだ諦めろ、それより今日こそやるのかい？」

男はガハハ！と豪快に笑いながら肩を叩いてくる鬼を恨みがましく睨み、その赤く染った顔を見てため息をつく

「ああクソっ！やけだ！賭けてやるさ！」

男はやや強引に鬼の持っていたひょうたんを受け取り一気に飲み干した

「そりゃあいい！さあどっちに賭ける？多いのは2時間だ」

「いや俺は1時間だね、あんな勇儀さん相手に2時間も耐えられるとは思えねえ」

そう言い、いくらか銭の入った袋を鬼に投げ渡す

気がつけば鬼と、妖怪たちが酒を片手に集まっていた

「俺ア大穴狙って、アイツが勇儀さんに反撃するつてのに賭けるぞ！」

声高々に宣言した大男の手にはギツシリ詰まった銭袋、それを見て集まった暇人どもは興奮したように声を上げた

つまるところ、この地底の妖怪たちからすれば過程や原因などはどうでもよく、ただただバカ騒ぎといくらかの酒さえ飲めれば何でもいいのだ

「いやいやアンタよく見てみろよ、勇儀さんのあんな一撃食らつてまた立ち上がれると思うのかい？ いやあ俺には無理だと思うね、鬼だつてあんなキツイの食らえばひとたりもないつてのにあいつはただの妖怪さ、妖力だつて並以下だぜ？」

続けて「そんなわけで俺はここでリタイアに2日の食費賭けるぜ」と言つて小男は下品に笑つた

大金を賭けた大男の目にやや不安の色が映る、いやそれでもまだ…といった淡い希望を抱いて目を細めた

なんともしようもないことであるが、この2人としては重要な戦いの真つ最中だそんな静寂を打ち破るかのようにな誰かが声を張り上げ指を指した

「おい！あの兄ちゃん起き上がったぞ！」

「なんだとお!？」

「よおしっつ!」

流れるように続く言葉に崩れ落ちてくゝ一人の男、小声で女房になんて言えば…なんて
呟いている…実に哀れだ…戦いとは虚しい…例えそれが賭博という小さな戦いでも残
酷に勝者と敗者に分けられていくのである

「いやっおい!あの兄ちゃん走つて逃げてるぞ!」

「んなああ!?!なんだと!」

…続けて崩れ落ちてくゝ大男の肩に手を置く小男…戦いとは勝者と敗者に分けられる
残酷なものだ…が、賭博という戦いは時に敗者だけが生まれる、愚かなものだ。

そんな残酷で時に優しい戦いに男達は今日も銭を投げる
いつか勝者に返り咲く、そんな光景を待ち望み



ふあつきゅー!

ふざけんなよ！人の不幸で賭け事なんか始めやがって！

走って走ってとにかく走る

転んで壁にぶつかってそれでも走る、走り続ける。目が見えないけれども後ろから迫り来る威圧感に本能に任せてとにかく走る

「白晷！アンタも男ならちつとは反撃してこないか！」

馬鹿野郎！目も見えない上に圧倒的な力の差があつてなんで反撃なんかしようと思うんだよ！こつち来んなよ脳筋バカ！

怖い

勇儀は俺を殺さないように、けど確実にダメージが残るように的確に痛めつけてくる俺は痛いのも死ぬ時の身体がバラバラになるような喪失感も大っ嫌いだ！

あんな戦うことしか考えてないような脳筋ゴリラは俺が一番苦手なタイプのやつだよ！ちくしょう！いつだって世界は俺に厳しい道を歩かせようとする！

それもこれも全部八雲のせいだ！

泣き言を心の中で呪詛のように言いながら後ろから迫る瓦礫の山に、俺は吹き飛ばされる

いつもそうだ、俺ばかりが理不尽なやつに捕まって虐められる

八雲のやつも博麗の巫女も勇儀もそうだ

逃げてやる…こんな地獄からはさっさとおさらばして温かいご飯を食べるんだ！

固く決意し踏み込んだ先にあつた地面は、唐突に消滅して俺の体を隣の区まで吹き飛ばした

今回は何をされたのだろうか？俺が走っている地面ごとひっぺがして投げ飛ばしたとか案外ありそうだ

吹き飛ばされてポロポロになった体で考える

勇儀が追いかけてくるような気配はない。

今回は終わったみたいだ

勇儀は大体俺を満足するまでポコるとどこかへ消えていく、その時は決まって宛が外れたようにため息をつくからわかりやすい

勝手に来て勝手にポコって勝手に失望してどっか行く、失礼なやつだがそこはもう諦めたのでいい

今の俺課題はこんな感じだ

・地底から出る（最重要）

・目を見えるようにする

←

・安心安全な環境で自由気ままに美味しいご飯を食べて好きなことする。（最終目標）

簡単に話していかうか

まあまずは地底からの脱出だ

これはいつものように地上のどこかにある俺製灰の山にいつも使ってる「灰逃げ」の瞬間移動で一発解決だと思っていた

この言い方から分かるようにこれは失敗した

そもそも灰逃げが発動しなかった、身体が灰になっていくようないつもの感覚も来ない。

俺はこれを知っている、ちょっと前に八雲に使われた魂と精神を閉じ込める結界にそっくり…というかまんまそれと同じ結界がこの地底全体に張られている

だからどんなに頑張っても地底の外へと灰逃げをすることが出来ない

そこで俺は考えた

結界があるのなら八雲の時のように俺の能力で壊してしまえばいいじゃない

忘れられがちだけでも俺の能力は触れたものを粉々に分解できる

八雲の時のように結界が可視化されていないからどこから触って壊せばいいのかは分からないけど、この地底のバカ高い天井を分解しながら上に突き進んで行けばいつかは地上、もしくは結界にたどり着けるだろうと考えた

まあわかると思うが結果を言おう、ダメだった

途中までは良かったよ、うん。

天井を2mぐらい掘った辺りでポコポコと奇妙な音を鳴らしながら、たつた今掘った穴が塞がれた

俺の能力は万能じゃない、1秒で一気に何十メートルも分解したり、出来ないのだつまり俺が天井を掘り進めるよりも天井の穴が再生する方が圧倒的に早い

…参った

これ俺専用の牢獄なんじゃないかと疑うレベルには地底の監禁レベルは高かった

俺の地底脱出大作戦はたつたこれだけで不可能だということだけが証明されてしまった

そんなわけで割とガチでこの地底から出れなくて困った

俺は割とガチでシヨックを受けた

…次は忌々しい巫女の封印によって見えなくなった目についてだ

こつち割と簡単に対策が見つかった。というのもそこまで便利なものじゃないが…

最初は前やってたように灰を飛ばしてドローンみたいに灰から視覚を得ようとしてみたがこれは眼の共有なので結局何も見えなかった

そこで考えた案が灰バリアだ

自分の半径10メートルに灰を飛ばしまくる、とにかく飛ばしまくる

例えば丸い物体の周りに灰が付着することによって、何となくそこに丸い何かがあるってことがわかる

とにかく灰を飛ばしてセンサーみたいにするんだ。電波飛ばして地形を読み取るみたいな感じ

色は分からないし形もアバウトな感じでしか分からない、その上半径10メートル以上にも灰を出すと頭がこんがらがって分からなくなるから10メートル以上先は変わらず何も見えない

でもこれのおかげで段差に気づけるようになったしコップとか茶碗がどこにあるか簡単にわかる…ないよりマシだ

整理しよう

今の段階では地底から抜け出すことは不可能

目は半径10メートル以内なら形と距離感だけわかる

そこで地底にはランダムエンカウントの勇儀とかいう八雲級のバケモノが襲ってくる

……

気が遠くなりそうだ…

俺は一生ここから出られないのか？俺は一生目が見えないのか？俺は一生あの脳筋に追いかけて回されるのか？

うん？いい匂いが…ご飯が炊けたのか

パクパクと静かに米を食べる

不安はある恨み辛みも少なくない…けどまあ、米は美味しいし何とかなるだろ！

米は美味しいな！

第十五話 厄介事の種

私は考え事をしながら酒を呑むといつも酔うことがない。

ただ無意識に酒をあおる。そうすると、火照っていた身体は外気で冷え、いつもは感じないほどの小さな風の変化にすら敏感になる。

残念ながら私は仲間の鬼である萃香や、妙に根回しの早い紫と比べて頭が悪い

深く、深く考え込んでも結局分からず、酒をあおるように呑んでは忘れようとする。

ただそんな時に限って酔いは逃げていき、どこか釈然としないモヤモヤが胸の中に広がっていく



「勇儀さん、勇儀さん！」

「んア？おおう、なんだ？」

「どうしたんだよ勇儀さんさつきからずうつと上の空で、もしかしてもう酔っちゃまったんか？」

「馬鹿言え私があんな安酒で酔うかよ」

「その安酒で酔った勢に俺の家を壊したのはどこのどいつだ？」

「んん？あつた…、いやあつたか？そんな事」

「やつぱり忘れてんじゃねえか！しつかり直して貰うからな！」

「分かった分かったから、悪かったよ」

私はやつぱり記憶にないがよく酔つては萃香と喧嘩して近くの家をまとめて吹き飛ばす事が多々あつた、今回もたぶんやつたんだろう

適当に平謝りをして頭を冷やす

「なんだ勇儀さん、また酔つて誰かぶん殴つたのか？」

「だからアタシは酔つてないって」

どうやら酒に酔つた私の行動は余程信頼がないらしい

何十年も共に居た仲間から言われてしまう程なら余程のものかもしれない。

まあ鬼でそんなことを本気で気にするようなやつはいないだろうが、私はそんな事にちよつと気まずさを感じた

しかしそれが本来のあるべき鬼の姿なのだろう

みみっちい悩みなんか吹き飛ばすように酒を飲み、酔ってはバカをして誰彼構わず迷惑をかける

それこそが鬼

それだと言うのによく考えると私は存外鬼らしくない

嘘を嫌い、戦いを好み、酒を好いては自分勝手に好き放題する。嗚呼なるほど、表面上は確かに鬼らしい

だがその実どうだろう？ 小さなことにいちいち気を取られては酒にも酔えず、物思いにふけるなんて…

今だってこんなどうでもいい事がどうにも気にかかる、もやもやしてはむしゃくしゃして酒を呑む。こういう所は鬼らしい

「んで勇儀さん、なんだってあの妖怪に付きまどつてんだ？ 実の所おれアそれが一番気になってんだ」

私が酒を飲みつつもいつに無く真面目に考えているからか、わざわざ気を逸らすように話題を変えた

こいつめ、一体いつからそんな気の利かせ方なんて覚えたんだ？

「ああ、それは俺も思ってたんだぜ。力の勇儀ともあろう者がなんであんな弱い奴に喧嘩吹っかけてんだってな。なんだ、もしかしてあの男に惚れたのか？ いつの間に男の趣

味が変わったんだ？」

「馬鹿言うな、ありやア私が一番嫌いな人種だね。男のくせして根性つてのがまるで無い、私を見るや否やいの一歩に逃げようする。ダメだね、ダメダメさ、反撃する度胸もなければ私から逃げきる力もない、根性無しと罵倒し、煽ってみてもピクリとすら反応しない…あれにはプライドなんて欠けらも無いね。私は例え弱くても心が強いやつは好きだ、戦いはてんでダメでも信念の強いやつは好感が持てる。けどあれは…真逆も真逆だ。ああクソ…期待してたんだけどなあ…」

少し嫌なことを思い出して顔を顰める

「そりゃひでエ。ならなんで執拗に追いかけて回してんだ？わざわざ弱いモノイジメするほど若くないだろ。あんたなら、嫌いな弱えや奴は視界に入れすらしないだろうに」

その言葉にはウソは許さないといういつに無く真面目な意志を感じられた

「…別に、私だって好きでやってるんじゃない。つまらないし、何よりアホらしい…なんだって紫はこんな事言ってきたんだか…」

私は今更ながらこんなことを紫と約束してしまった事を後悔していた

初めは巫女相手に善戦したと聴いて期待してたんだけどなあ

「紫？紫って八雲のか？」

「ああ、紫からちよつと面倒な約束を受けちまつてな…」

私に聞いてきた鬼はなるほどなあ…と納得したように頷いては席を立った

「なあ、勇儀さん俺は頭が良くないからわかんねえが…やつぱり八雲のやつと絡むのはやめた方がいいぜ、ろくな目にありやしねえ…」

「ああ、わあつてる。私だつて不本意さ」

鬼がそうか…と呟くように言い残して去っていった

その時の気持ち悪いような温かい湿った風が妙に頭に残っていた



「あの…帰ってきてくれませんか？」

嫌です帰りません

ご飯作って下さい

「いやあの貴方がここにいると勇儀さんとのケンカに地霊殿が巻き込まれると思うので帰って…あ、あなた…！その事が分かっていながら来たの！？勇儀とのケンカに巻き込まれたくなかつたら早くご飯作れ…？な、なんて凶々しい…」

俺は今最終手段で地霊殿にたかりに来ていた

なあ頼むよさとりん、他に頼れそうな妖怪なんていないんだよ

「頼むって言っても大体あなた食事なんてしなくても平気ですよね…あとさとりんはやめて下さい」

ジト目でそんな事言わないで欲しい。俺はご飯食べないと精神的に死んでしまうんだ

「別に米ぐらい炊けるでしょうに、視力だってその…灰バリア？で何となくわかるんでしょう？」

火は形がないから見ええないんだよ！だから弱火だと思つてたけど実際は強火でお米が真っ黒に…

「ああ、まあ確かに火加減分らないと出来ませんね…ん？いや食べたんですか？その黒焦げご飯…あつはいそうですか」

キメ顔で親指を突き立てながら頷く

という訳でたかりに来たぜさとりん！飯を出せ、さもなれば勇儀との喧嘩に巻き込まれて色々吹っ飛ばしましょう

「別に、勇儀さんには後から言つてここでは喧嘩しないで貰うようお願いすれば済みますよ。あとさとりんはやめて下さい」

そんな風に勝ち誇った顔で言ってくる、心なしかジト目がどこか誇らしげだ

ペツ陰湿悟り妖怪が！どうにかして勇儀との喧嘩の流れ弾が当たるように調整してやる！

「こつこの妖怪！ダメだとわかるとこの態度……！言うに事欠いて私を陰湿だなんて……間違つてはいませんが今の立場ではどう考えても貴方の方が陰湿です！ああもうわかりましたって、作りますよー食ぐらい。その代わりに食べたらすぐ帰って今後は来ないで下さい」

やた！久々のご飯だ！今ならご飯炊くの失敗してお粥になつても我慢するぞ！

「そんなミスしませんよ、というかホントにこれつきりにして……今暇になつたらまたたかりに来ようとか考えませんでした……？あつこらちよつとちゃんところち見なさい！目を逸らしても心は読めるんですよ！」



「やつと帰りましたか……」

食べ終わつた後に口直しの珈琲まで要求してくるとは……

これからも来るとなると勇儀さんだけでなく、あの妖怪を地底に落ちるように手回し

た八雲まで来るかもしれないよ……

勇儀さんだけならまだいい、あの人私を嫌ってはいるけど単純で表裏もないから別いい。心労が少し増えるだけです

ただあの妖怪に釣られて八雲まで来るとなると話が変わります。

八雲紫はどういう訳か心を読めないようにしている上、何を考えているのか普通の人よりも分からない。

心が読めない。ただそれだけでも気持ち悪いというのに胡散臭くて何が目的なのかすら分からない。私の天敵のようなやつだ

そんな八雲がチラチラと気にしている妖怪が今後不定期に私の地霊殿にやってくる……考えるだけでも胃にきそうだ……

「……珈琲でも飲んで休憩しましょう……。」

珈琲を入れようと席を立て……

「あら、だったら私も一杯頂こうかしら」

そこには問題の大妖怪が席に座り、薄っぺらな笑みを浮かべていた

「ほらあ……こうなるじゃないですか……」

だから、だ！か！ら！嫌だったのに……

「あの……帰ってくれませんか？」

「嫌よ？ 珈琲飲むまで帰らないわ」

後でお隣に胃薬頼んでおこう…。



「それで、何の用ですか？」

自分でもわかるほど顔をげんなりとさせながら珈琲を一口呑んだ

「あら理由もなく来ちゃいけないのかしら？」

「少なくとも私は嫌いな人の所へ理由もなく来ませんね」

「ふうん、自分が誰彼構わず嫌われていると思ってるの？」

冗談じゃない、私も嫌いだし貴女も私を嫌っているでしょうに

相思相愛の真逆も真逆です

「少なくとも貴女には嫌われていると思っっていますよ」

ほら帰れと手でしっしと催促するが効果は期待できない

「そうとは限らないわよ？」

嘘をつけと睨んでみるが本人はどこ吹く風といった風だ

「なら心を読めるようにして下さいよ、でなきや信じられないもので」

「それはまた今度ね」

はいはいと適当にあしらっておく、どうせ期待していなかったし今後そんな時があるとは思っていない

「それで、本題はなんですか？私この後珈琲飲みながらゆっくり休憩する予定だつてんですけど」

「んふふ、なら美少女と話せて一石二鳥じゃない」

「あつ私帰りますね、さようなら」

「ちよつちよつと待って、冗談よ冗談！大体帰るつて貴女の家はここでしょうが！」

白々しい…けれど流石に話を聞かないと帰って来れなさそうですね

私が再び席に着いたのを話を聞く姿勢と思つたのか再び話を始めた

「こほん、単刀直入に聞くわ…貴方は白墨を”見て”どう感じたかしら？」

八雲の顔がさつきまでのおちやらけた感じからガラリと人が変わったように真剣なものになった

どうやらこれが本題らしい

「白墨…ああさつきの変わった妖怪ですか」

「ええ、ただ簡単に率直な感想でいいのよ」

「なんでそんな事を気にしているのか…」

あの妖怪がなにか八雲に関係あるのだろうか。聞きたくないですね…

「私の方でも色々探ってみただけで、どうやら想像以上にポーカーフェイスが上手いみたい。考えを探るにもちつとも分からない上に相当頭が回るみたい」

…は？ポーカーフェイス…？頭が回る？

ポーカーフェイスと言うと微妙ですが、ピクリとも動かないあの表情筋は確かに凄い。恐らく本人も意図していない事を除けば…

それにあの妖怪は終始ご飯のことしか考えていなかった、実際に食べている間も美味いと考えながら美味いとわざわざ言っていた。そういえば最初に起きた時も自分の指の血を舐めて味覚の有無を確認していましたね…

あれ？ひよつとしなくてもあの妖怪ご飯の事しか考えていないのではないか？

「一体何を考えているのか…」

「多分ご飯の事しか考えてないと思いますよ」

「ふふつ地霊殿の主も冗談を言うのね、ご飯？いやまさか、彼はあんなようでも私の本気の結界をいとも容易く壊して逃走してみせたわ。全くもって妖力量と釣り合っていないあれはどういう原理なのかしら？」

あの妖怪が仮にも大妖怪の八雲の結界を壊す？

いつも勇儀さんにボコられている姿を見ている私からすると、とても強そうには見えませんが…

「私にはあの妖怪がご飯好きだと言うぐらいで他は何も…」

「ふうん…まあいいわ。別にそのうちわかるだろうし」

どこか疑いの目を向けられるが、そんな風に見られてもご飯の事考えてるぐらいしか本当に言えることはない

「…もう来ないで下さいね」

「わかってるわよ、私も極力来ないように考えておくわ。珈琲美味しかったわよ、それじゃあさようなら」

不気味なスキマが閉じるまで見届けたあとため息をつく

…貴方のせいですよ白墨さん…。

私は脳天気な妖怪を恨みがましく思いながら冷たい珈琲を啜った。

第十六話 「饅頭怖い」

「こんにちは、どう？地底の生活は」

久々に聞きたくない声が聞こえる

俺も最近ないから油断していたな

まあいいじゃないか、ひとまず落ち着こう

俺は目の前のテーブルの上に置かれたティーカップを持ち上げた

目の前のテーブルと言ったが、実はここがどこかは分からない

歩いていたら急に地面が無くなって落ちたら椅子に座っていた。何を言っているか

分からないと思うが俺にも何が起きたかわからんのだ

そもそも目が見えないから落ちた瞬間に灰バリアが無くなり、一瞬で暗闇だ。辛うじ

て自分が椅子に座っているということだけが理解出来た。そう思っていた矢先にこの

声だ

そうこう考えながらカップに口をつける

「あら、出された物に毒があるとか考えないの？それとも毒が入っていない、もしくは毒が入っていても平気と思ったのかしら？それとも…こんな所でも平気という余裕の表

れ：かしら。まあどちらにしてもその紅茶にはなんにも入れてないけれど。でもそうねえ：次から頭の片隅ぐらいいは入れておいた方がいいわよ？」

へえ、これ紅茶なんだ

さとのりので珈琲は飲んだけど紅茶はまだだったから不思議な感じだ

前じゃ紅茶なんて午後に飲むあれしか飲んだことなかったから、すっかりしたものを飲むことが出来て嬉しいね

うん、美味しい

「それともう一度聞いわ、楽しい？地底の生活は」

：

それに対して俺はゆっくりと顔を横に振った

再び紅茶を飲み、ふうつとため息をつく

よし現実逃避はこの辺でやめておこう

八雲は俺の答えに満足したのか、それはもう嬉しそうにニンマリと笑った

なんでわかるかって？雰囲気だよ、こいつこういう嫌なやつなんだ。だってほら、なんか凄い人の不幸を喜んでそんな感じしてる

「ええ、それもそうよね、なにせ目が見えなくなつた上に山の四天王とまで言われる鬼に、会う度に半殺しにされ、逃げたくても逃げれない：出れないんじゃないの？この地

底から」

…。

改めて聞くと酷いな今の俺。可哀想なんてもんじゃないぞ

「…ああ。」

「ふふつ、災難だったわね、博麗の巫女に会うなんて…それも歴代最高の。きつと後にも先にもあの娘を超える巫女は…いえ人間は産まれられないでしょうね。そんな存在に狙われるなんて妖怪の身としては不幸以外の何物でもないわ」

やっぱり胡散臭い声で、ちつとも災難と思つてなさそうな感じで言われた

「辛いでしよう？目も見えない暗闇でただひたすらに殴られるのは。逃げられない場所で、いつ終わるかも分からずに、いつ出られるのかも分からずに…」

八雲の言葉が抵抗なくスルリと頭に入ってくる。馴染み深く親しみやすい、そんなおぞましい勘違いを起こすような…そんな言葉

…そうだ辛い、辛いに決まつてる。何が悲しくて毎日骨を折られて臓器を潰されるような痛みを味合わなきやいけないんだ

地上にいる時だって、珍しく悪いことなんてほとんどしてこなかった

前はよくしていた窃盗とかの犯罪だつて命蓮寺に入ってからは一切してない。あと
はせいぜい村紗に対しての地味な嫌がらせだ

いや、例えていたとしてもこの仕打ちはあんまりだ

地底に落ちた時も何度も何度も俺をサンドバッグのように扱いやがって言葉も交わせない旧人類が！つて何回かキレた：無意味だった。そりやそうだ、相手は鬼だぞ。攻撃しようとした瞬間、恐怖で身体が強張っては逃走にソフトチェンジだ

「逃げ出したいでしょう？この現状から：戻りたいでしょう？あの地上に」

するりすると、ゆっくりゆっくりと：脳が侵食される。知らず知らずのうちに自分の中の期待が高まる

そして――

「もし貴方が私の式神になるのなら…」

その期待が最高潮に達する時…

「もし貴方が私の式神になるのなら、その暗闇しか映さない瞳の封印を解いてあげましょう。もし貴方が私の式神になるのなら、その虐げられている現状から救いましょう。もし貴方が私の式神になるのなら…この地底から解放し、地上の日の光を見せてあげましょう」

それは願ってもない話。俺の今最も願っていること

それは甘美な響きだった。思ってしまった、もし目が見えたら？もしあの鬼から逃げられるのなら？もし再び地上に出られるのなら？

「ねえ白墨、私の…式にならない?」

そこには…笑みを一層深くした悪魔がいた

あの日、もし八雲が何も言ってこなかったなら…俺は巫女と接触することも無く地底に封印されなかったかもしれない

もしかしたら、八雲は全部俺にとつて都合の悪い未来になるように行動したんじゃないか?

そんな疑問が浮かんでくる

だから…だから嫌いなんだこの妖怪は!

強いだけじゃない…信用出来ないし何を考えているのかさっぱりだ。もしここまで計算しているなら、本当に性格が悪い

あくまで自分の手ではやらず…でも俺がYESと答えるしかないようにじわじわと追い詰めていく

八雲の顔を見る

俺の灰バリアじゃ輪郭はわかってても表情までは読み取れない
けれども放たれているその嫌になる空気で想像はついている

「ねえ白墨…貴方はどちらを選ぶ? 自由を選ぶか…不自由今を選ぶか…もちろん前にも言った通り、式になっても多少のわがままは許容するわよ?」

でもそうだ、俺と八雲の関係だって短くない…少しは八雲の事も分かってきた

だからそれに対して、俺はしつかり八雲の方に向き直り、珍しく語尾を強めて答えた
「やだ」

「そう…なら今回は諦めるわ」

へっ！何を言われたって式神とかいう鎖の付いた見せかけの自由なんていらな…あれユカリさん？思ったよりあっさり諦めるんですね

なんかもつとこう…驚かれたり、引き止められとかすると思つてたんですが…

「別に今すぐじゃなくたって構わないもの…人間、逃げ道があると知りながら耐え続けるのは難しいものよ？ふふふ、何時でも私は構わないわ…それじゃあ、また今度」

……。

アイツは1度自分の性格を見直した方がいいと思う



ガラガラと飯屋の戸を開けて中に入る。

「いらつしやい！つて…臆病者じゃないか！」

「おお！ほんとだ臆病者だ」

「ああ、あのいつも勇儀さんに見つかっては一目散に逃げる臆病者だ…！」

ええい！うるさい！入るなり人を臆病者 臆病者と罵りやがって！自然界で生きて
く為の生存本能だわ！

未だにチラチラと周りに見られていながらも、それを気にせずズカズカと席まで歩いていく

「おい！来るなんて珍しいなあ臆病者！金はもってんのか？」

首を横に振り、適当に返す

働いていない俺が金なんて持つてるわけないだろう

「おいなんだ冷やかしか？金なきや食えねえぜ？」

筋肉質な店主が呆れたように言ってくる

まあまあ待て待て。金は無くても金になりそうなものも持っている

俺は懐にしまっておいた酒瓶を二本差し出す

この酒は俺が地底に住んでから定期的に米と一緒に送られてくるやつだ

いっぱい貰ってて申し訳ないが俺は酒はそんなに好きじゃない。酒にするなら別の

美味しいものをくれと思つたが、この酒好きしかいない地底だと時と場合によつては金より高価なものになる

「おお……臆病者そりやあなかない酒じやないか、よし！いいだろう何を食う？」
よし！これで無駄にいっぱいある酒の使い道が出来た！

「この店で一番美味しいの頼む」

俺は自信満々にそう答えた

「お、お前さん話せたのか……」

何当たり前なこと言つてんだこいつ

しばらくして料理が出てくる

肉だ。何の肉なのか分からないが肉だ。強いて言うなら謎肉だ

ナイフで一口大にカットして食べてみる

……うん。美味しい。美味しい……けどなんだろう……この、肉焼いて醤油ぶっかけましたみたいな味は。

結構味が濃いめで雑だ

いやまあ美味しいんだけど、やっぱり命蓮寺にいた頃のご飯が恋しい
肉だけじゃなくて汁物とか卵焼きとかそういうのも欲しい……。

この地底はみんな料理が適当だから地上のようなバランスの良い美味しいものはそ

んなに無いのだ。さとの所で食べたやつが一番家庭的だった気がする

けど地底の飯屋なんて殆どがこんな感じだろう…食にうるさいのはやつぱり日本人だな…ちくしよう今更になってちよつと八雲の提案が魅力的に感じてくる…

だって信じられるか？この地底には甘いものが存在しないんだぜ？

甘味屋つてのが無い。みたらし団子も餡子も金平糖すら売ってない…

のおおお…

そんな風に悶絶していると店主にさつき渡した酒が店の奥に仕舞われていた

めちやくちや酒の入った棚だ。床には鬼殺しと書かれた樽がゴロゴロと置いてあった。なんだあれ？

「…ん？ああ、あの酒は今度の宴会用さ。毎週飲みたい食いたいやつらが適当に集まってはアホ騒ぎするのさ」

都合よく聞いてもないのに店主が話してくれた

食いたいやつ…か。

「招待状とか…」

「ああ？んなめんどくせえもんねえよ、みんな適当に集まんのさ。ああけど、酒でもつまみでも何でも良いからなんか持ってくんだな、手ぶらなやつに食わせるようもんじゃないだろ」

な、なるほど！

ならこの無駄に家にある酒を持っていけば宴会に参加できるのか！

「それって…いつ？」



ガヤガヤと人の集まる気配がする

いつからそうなったかは知らない。確か最初は私ら鬼が辛気臭い地底の空気を吹き飛ばそうとして始めた酒盛りだ

馴染み深い顔のヤツと昔話に花を咲かせて酒を飲むだけだった

少しづつ楽しい霧囲気に当てられて鬼以外の奴らも集まって酒を飲む。

私知ってる奴も知らない奴も各々好き勝手に酒を飲むだけ。

そうやって、気付いたらこの日に毎週集まって呑むことが地底での習慣となつていった

「勇儀さんあつしの酔が作ったこれがなかなか酒に合うんですよ、食ってみてくれ」

「おう、つまみとして貰おうか」

「勇儀さんこの酒が―」

「ああ、ありがとう吞ませてもらうよ」

「別に、私の所に持つてこいなんて…一言も言つてないんだけどなあ…」

ただ断る理由もないから有難く貰っている

前ならここらで酔つ払つた萃香あたりが私のツマミを奪つて喧嘩になるもんだが、最近はそれすら起こらない。

「またいつもみたいにとどつかで暇を潰してるのかね…」

横では顔を赤く染めた鬼が100年も前の人との殺し合いを嬉しそうに話している。もう何度も聞いた話だ、周りもそれを知つてか分かつたようにはいはいと頷いている

「なあ、勇儀さんあいつ呼んだのつてあんたか？」

言われてそいつが指を指した方を見ると、意外な奴がいた

「うん？ありや白墨か？珍しいなあ…あいつから私の目の前に現れるなんて」

いつもは私を見るなり全速力で逃げていくあいつの事だからこの宴会には来ないと思つていた

好いてはいないがわざわざ追い返すような必要も無い。私が主催者つて訳じゃないしね

それに今夜は酒の席、今日ばかりは「世話」すんのもよしてやろう

それだけ言つて再び仲間の話に耳を傾ける、気付いた男も私が気にしないのを見ると、興味を失つて酒を飲み始めた

にしてとあいつなんで今更来たんだらうか…

いい感じに酒が回つてきた時一人の妖怪に饅頭を渡された

「おお、ありがとうな」

いつもの様に酒なりツマミなりを渡すならまだしも酒の席で饅頭なんて合わないにしてもこの地底で饅頭なんて珍しい。どうやって手に入れたんだか

「あそこの妖怪に…」

そう言つて指さした先にいたのは白墨だった

「うん？白墨に付てことか？まあ酒に饅頭は合わないしな、不服だが渡しといてやるよ、あれ？」

最後まで言う前に饅頭を渡した妖怪は居なくなつていた

随分とせつかちな奴だな…

「おーい、白墨これお前に…うおっ！お前いつからそんな近くに居たんだ」

ちよつと前まで遠くの方で肉を食べていたと思つたんだがいつの間…

「その饅頭…」

「あ、ああお前に渡してくれって言われてな、というか喋るんだな……」

肩に穴を空けてやった時ですらうめき声一つ出さず無表情だったのに、何だこのキラキラした目は……！お前そんな顔する奴じゃないだろ！

白墨は無表情なのに目だけキラキラしてるといふ変な顔をしていた

それに対して若干引きながらも饅頭を渡すと丁寧に右手で握って食べ始めた

「おいおい……」とここで食うなよ、と続けようとして言葉が止まった

その“血を吐く白墨の姿”を見て

「……ゲホッ……オ」

そしてまた数度咳き込み、地面を汚した

明らかに普通ではない咳き込み方だった。

なぜだ。なんで白墨は饅頭を食べた直後に血を吐いた？

——それじゃまるで、毒を盛られたみたいじゃないか

不意に毒を盛られた白墨の姿と過去の自分が重なった

私が、私らが地底に籠るキツカケだ

なんでもない話だ。ただ殺しあつた人間達と最後に酒を飲んでいたあの日、それまで正々堂々戦ってきた奴らが毒を盛った。きっと人の世界では卑怯でもなんでもない鬼を倒す手段だったのだろう。人は卑怯になったのだ。

毒は鬼に効かなかった、代わりに人に裏切られたという事実は死よりも虚しい毒と
なった。

周りの奴らも白墨に何かあったと気付いたみたいだ

鬼の驚いた顔がやがて怒りに変わる

そうだ、私らはそれを許さない、誰よりもその虚しさを知っているはずだ

誰かがあの饅頭に毒を盛った。よりにもよって私らの目の前で

それは私——星熊勇儀という鬼にとつて許容の出来ない事だ。例えそれが星熊勇儀
にとつて嫌いな奴だったとしても関係ない

鬼にとつてそれは…その行為だけは…ツ！絶対に許してはならないものだ

「…誰だ…ツ！誰だアアツ！」

鬼の、星熊勇儀の咆哮が地底に響き渡る。

もう見ないで済むと思つていた、言葉にならない失望感を抱かなくて済むと思つてい
た！裏切られた、裏切られた！また裏切られたツ！よりにもよつてこの地底の！私達の
仲間によつて！

弱いやつが嫌いだ、嘘が嫌いだ…そしてそれ以上に裏切りが嫌いだった。

手の中にあつた酒瓶が握りつぶされ地面を濡らす

他の奴らもさっきの怒声で気付いたのか怪訝な顔で白墨を見ていた

周りの鬼達は何が起こったのか理解したらしく、私と似たような顔をしていた
当然だアイツらが…私の仲間の鬼が犯人な訳ない

「ゲホツ…水を…」

「…ツ、おい！誰か水を持ってこい！」

忘れていた、今は怒るよりも先に白墨をどうにかしなきゃならない

毒の治療なんて私らじゃ出来ないからさどりの所に連れていかねえと…！

白墨は水を受け取ると、一杯口に含み、血と一緒にペツと吐き出した

「おい、大丈夫か白墨…安心しろ私はあんたのことをいけ好かないやつだとは思っているが今回は別だ、この毒の入った饅頭を持ってきた奴を必ず見つけてお前の前に連れて来てやる」

そう言つて白墨の右手にある饅頭を取ろうとして…その腕を白墨に掴まれた

何を…と言おうとした時白墨と目が合った…目なんて見えていない筈なのに。凍えるような冷たい瞳、いつもの無表情な顔と何ら変わりはないはずの瞳に睨まれた。殺し合いの時によく感じる強い殺気を伴つて…

そして白墨は再び毒入り饅頭を食べ始めた。食べて、飲み込み、血を吐いては水を口に含んで吐き出して…

異様な空間だった。饅頭を食べて…血を吐いてはそれを気にもとめずにひたすらに無表情で食べ続ける

誰一人としてその異様な空間で言葉を発することは出来なかった。

静かに咀嚼する音と血を吐き、咳き込む音だけが聞こえる

なんだ？なんで…こいつはこんな事してるんだ…？一瞬フリーズしかけた頭を叩く

…いや、あれはもしかして水で口を洗って饅頭を食べているのか…？

普段から何を考えているのかわからないが流石にそんなこと…

やがて毒入り饅頭を完食した白墨は両手を合わせて言った

「ご馳走様でした」

この地底で宴会に参加していたもの全員がそれを見ていた

「勇儀」

「な、なんだ…？」

突然話しかけられて一瞬声の上擦る

「この饅頭を持つてきてくれた奴に言ってくれ、『美味かった』と」

嘘じゃない…長年生きてきた鬼としての勘がその言葉が本心だと知らせてくる

それを言うのと満足したように…白墨はぶつ倒れた

私はもう堪えきれなかった。

「クツ、は…はっはっはっはっ！おい！今日はもうお開きにしよう。私はこの食い意地の張った馬鹿を地霊殿に連れていく、それと…もしあの饅頭を持ってきたやつを見つけたら言ってくれ、美味かったってよって伝えなきゃいけなくなつた」

未だに唾然として固まっているヤツらに向き直つては私は笑いながらそう言つた
未だに笑いを堪えながら気絶している白墨を持ち上げる

「紫…お前とんでもないヤツを連れてきたな」

いけ好かないが…面白いやつだ。

気分が良い…当たる夜風が心地よかつた

第十七話 楽しく生きる為に手を抜いてはいけないこと

水から顔を出した時のように急激に周りの音が聞こえるようになってくる

よくある眠りから目覚める予兆、しかし妖怪になってから一度も寝ることがなかった俺からすると初めて感じる意識の覚醒

「おはようございます、気分は…案外平気そうですね」

横から声が聞こえてくる

どうやら俺はベッドで寝させてもらってるらしい。ということは隣に居るのはさとりんか

ぼーつとしていた頭がハッキリとする、やがて珈琲の独特な匂いとパラパラとめくられる紙の音がする

本でも読んでいるのだろうか？

「流石の私も勇儀さんの頭を覗いた時は呆れましたよ、まさか毒入馒头を完食してぶっ倒れるなんて…あなた自分が死なないからって適当すぎじゃありませんか？痛覚はあるでしょうに…ここまでバカだと出てくる笑みも苦笑いですよね」

失礼な！せっかくの甘味なんだから贅沢言わずに完食するのが当たり前だ

実際美味かったし、平気だったぞ！

「ああ、はいそうですか。なら次からは毒キノコとかに当たっても適当に1人でぶっ倒れていて下さいね。どうせ放置していたら勝手に治るのでしよう？

：なぜあの八雲紫がこんなポンコツにこだわっているのか分かりませんが、その再生の速さだけは西洋の悪魔にも引けを取りませんね」

褒められたのでどやっておく

俺もそこはすごいと思うんだよね

呆れた声が聞こえてくるが、饅頭は美味かったし、俺は数時間意識が無かっただけで無傷だからヨシ！

「……はあ。」

心底疲れたというようにため息、ストレスでも溜まっているのだろうか？

まあでも朝起きたらまずはあれだよ！俺は未だにパラパラと本をめくっているさとりに向き直った

「朝食待ってます」



酷いぞさとりん：何も追い出すことないじゃないか…。

突然吹つ切れた様に大声を出したと思つたら「あ、あなたが居ると八雲紫が…私の平穩が…それに加えて星熊勇儀まで…」と今度は小さな声でぶつぶつと暗い顔しながら何かを言っていたし、終いには「持つてる酒を金代わりにして外で食べてくれば良いじゃないですか!」つて言われて追い出された…鬼が作る料理は豪快過ぎてちよつと合わないんだと言いたかったがさとりんもストレスが溜まつているのだろう口に出すのはやめておいた

今度話でも聞いてあげた方がいいかもしれないな。俺の朝食のためにも…

そんなストレス?もきつと時間が経てば無くなるだろう

今日のところは諦めて適当にお店を探そう

あつさりとした肉じゃがが食べたい

あの味の染み込んだじゃがいもとご飯を食べたい気分だ

…まあ地底の飯屋で出てくるものは大抵謎肉ブロックなんだけどな…あれほんとに
なんのお肉なんだろう

出てすらない心の涙を拭き取り歩を進める、今日はやけに人通りが少ない

俺が起きた時を勝手に朝と言っただけで、実際は真夜中とか？地底じゃお日様が見えないから今何時か把握しづらいのだ

ただ腐っても妖怪の街

夜にやつてる飯屋ぐらいあるだろう、元々やつら夜行性なんだから無い方がおかしい……そのはずなんだがおかしいな、少ないというか誰もいない

店がやつてないとか云々より、通行人すら一人も見えない

地底は広いが、出ることは出来ない、散々試したが不可能だ

だから俺が氣を失っている間にみんなでお引越しかはさすがに考えられない柄にもなく少し不安になってきたぞ

言葉じゃ言い表せないけど、誰もいない夜の街つてのは凄く不安になる

同じよう違う世界に迷い込んだようななんとも言えない不快感と不気味な雰囲気特有の何かが起こる気配が肌をヒリつかせる

中学生のころ、お昼寝していたら次の授業が移動教室で起きた時には誰もいなかった時の焦りを思い出す

いつも橋にいる嫉妬深い女の子とかは居るかもしれないが……

今からさとりんの家に行こうか悩んでいる時、ようやく灰バリアが人の形をキャッチした

「よう、半日ぶりだな白墨」

目の前に居るやつが勇儀だとすぐに分かった

2番目に会いたくないやつに会ってしまった……という気持ちとやつと知ってる人会えたという安心感でなんとも言えない気分になる……しかしそれもすぐにかき消された……圧倒的な強者の“威圧感”によつて

俺は知っている、この感覚を

1度、これ程までの重圧を1度だけ感じたことがある。あの日、博麗の巫女と初めて会った俺にとつて最悪の日

あの巫女が放っていたものとよく似た恐怖

勇儀にはいつも追いかけて回されてボコボコに殴られているが明らかにその時とは違うとわかる

いつも、手足をへし折られたり穴開けられたりと結構本気だがその比ではないとにかく俺はその感覚を感じ取った瞬間本能に身を任せて逃げようとした

実際あと1秒でも遅ければ灰逃げを使って反対方向に逃げていた

そうしようとした時、勇儀はとんでもないことを言った

「丁度今さつき、地底中の飯屋の食材を全部私が奪つてきた！」

「!?」

灰バリア越しにもわかる様に勇儀がニイっと笑う

そしてただでさえ声がでかいのにすうっと息を吸って声をさらに張り上げた

「ここにある食材が欲しければ私を満足させてみせろ！別にいらぬならここで逃げ帰っても構わないが、その場合地底の飯屋は一生閉店だ！さあどうする白墨！向かってくるか!？」

そう言つて横にある大きすぎる何かをバシッと叩いた

恐らくそのでかいシルエツトが地底中の飯屋の食材なんだろう

おい、いやそりゃあやつちやダメだろ：

逃げようと考えていた身体がピタリと止まった

俺の旅の目的として1番に美味しいものを食べるが来て2番目に綺麗な景色を見るというのが来る

その2つは、それだけは何物にも代えがたく、妥協してはならないと俺は考えている

勝てる勝てないとか、そんなものはもうどうでも良かった

重要なのはこのまま逃げた時に起こる俺の食生活の変化とか、俺が満足して生活出来るかとかで、それ以外の全ての理性的な考えは本能にかき消される

他人とか自分以外のなにか重大な事なんて、昔から大して重要視してない

1度そう考えるとあんなにうるさかった心臓の音は正常に、焦っていた頭の中は不思議なほどクリアになっていた

1歩、2歩、勇儀に近付き右の手のひらを向ける

勇儀の口から怪訝な声が漏れた

作りあげるのはあの日の一撃

あの日、地底に落とされるその直前、巫女に放った結界弾

いつものカクついた四角形だったりではなく、創造するのはあの日の鋭い槍

負ければいつも以上に痛い思いをするかもしれないとかそのあとの恐怖なんてものはかき消えた

ただ結界弾を作るのに深く集中する

薄く、薄く薄く伸ばした結界を何度も何度も折って折って一枚の薄い結界が何重にも細かく折り重ねられて角張った1つの槍のような結界弾を形作る

それを、あの日巫女に届いた唯一の一撃を、俺の最大限の結界弾を、俺は勇儀の脳天目掛けてぶちかました

周囲を巻き込む爆風と、鉄と鉄がぶつかり合う様な耳をつんざく爆音が辺りに轟いた

第十八話 攻撃

それは確か白墨の“世話”を任されて数ヶ月ぐらい、いい加減うんざりしてきた頃だった

『なあ紫、こんなこととして意味あるのか？お前はなんのために私にこんなことさせてるんだ？言っちゃあ悪いが白墨からは私をどうにかしようっていう感じが全くない。なんて言うかな…無表情なんだけど、まるで覇気がないっていうか戦う意思すら感じられない。あんな逃げ回るだけの奴をぶん殴るってのもつまらない』

私の問いただすような言い方にも顔色一つ変えずに、相変わらずの胡散臭い笑みで反応する

『別にあなたに指導してもらって強くさせたいとか成長させたいとかはないのよ？ただこの地底で逃げ回る白墨を捕まえて殴れるような人があなたしかいなかったのよ。だから別に白墨をどうにかなんて考えないで今まで通り殴ってくれただけでいいのよ、彼にも痛覚があるっていうのは分かっているからそれだけで十分』

寄りにもよってそんな理由…。うんざりしてため息をつく

昔から紫のやることは曖昧で矛盾だらけのように見えて一貫してただ一つの目標の

為に動いている。全く意味が無いように見えてもその全てに意味がある

私はまったくめんどろな貸しを作ってしまった

『ああ、そう…それはいい、ああそれはいいんだ…別に紫が白墨を追い詰めて何しようとしているのかつてのはもう地上の話だ、私ら地底の妖怪が首を突つ込むべきじゃない。だから、そこはいい…私が気になつてるのは1つ、ほんとはもつとあるがあえて一つだけだ。なあ紫、あんたは一体“白墨に何を”見てる？あいつは今や目も見えず妖力だつて中級妖怪がいいとこだ、そんな妖怪をなんで特別視するんだ？そんなに大層な秘密でもあるのかい？』

『別に、ちよつとした諜報員みたいなのが欲しいだけよ。今の時代力よりもそういった能力を持ったの方が貴重なのよ。それに、もしかしたらあなたにとって都合のいい展開になるかもしれない』

『何？あいつが？』

『…ふう、ここに落とされる時ね、博麗の巫女に1発だけ傷を負わせたのよ』

杯をゆつくりと傾け、息を吐いたあと、なんでもないことのようにそんな興味深いことを言った

『へえ、傷を…』

博麗の巫女と言えばそりゃあ妖怪にとっては天敵中の天敵

サシでやり合えばどんな妖怪であれタダでは済まない。それに白墨が戦ったのはその歴代博麗の巫女の中でも群を抜いて“異常”だったと言われるようなやつだ。そんな相手に中級妖怪に毛が生えたレベルの白墨が一矢報いたというのはなかなかどうして興味深い

『ええ、油断していたとはいえあの巫女の手にはほんの少しだけ傷を付けたのよ』

紫は大して興味無さそうに、強いて言えば私にやる気を出させるためだけに言っているだけで、紫自身そのことをあまり重要視していないように感じた。

それが大きな違いを生むと思った

『あの白墨がねえ…』

どう考えてもいつも相対しているあいつからは想像出来ない

ただ、紫がわざわざ嘘をつくと思わな…いやそうだ紫はこういう顔して平然と嘘をつく様なやつだった。

つまりは与太話程度で期待しないでおこう

そんな過去の話

大した事ないとほとんど忘れかかっていた記憶をふと思い出した

白墨が右の手のひらを私に向けて静止する

私はそれに油断して近付く。鬼ならば油断してこそ礼儀のようなものだ

これからやり合うつてのにいつもの癖で紫の言葉が、自分の中の疑問が、グルグルと頭の中を掻き回す

本当に私は鬼らしくない

白墨と殴り合うのなんていつもやってるのに今日に限って強い違和感を覚える
グルグルグルグルとループする紫の言葉、もやもやと肥大化していく強い違和感

辺りは静寂……そんな中、白墨がなにかアクションを起こすその寸前、それまで回っていたあらゆる疑問が、違和感がパツと消えてただ1つ、思った。

『ああ、そう言えばこいつが攻撃してきたことってないな』、と

——瞬間、視界は白く、辺りに爆音が轟いた



「う……んあ……？なんだ……？」

ぼやけた視界でふらつきながらも何とか立ち上がる

なんだ？今更酒に酔って道端で寝こけたか？

ふらつく頭に手を当てようとしたがヌルりと手が滑る

「んだ、これ…水…？」

また酒を樽ごと頭から突っ込んだりとかやったっけな？

ぼけーつとぼんやりとした頭で自分の手を見つめた

「赤い…んん？…なんなんだ…これア…血？…ツ！——白墨ツ！」

霧がかつたような視界が一瞬にして開け、辺りの吹き飛んだ家屋の破片が散らばって
いた

私が眠っていたかと思っていたところは道端でもなく倒壊した家の瓦礫かよッ！

ああちくしょう数瞬氣イ失った！

前を見ると家の壁を派手にぶち破った穴が何重にも先まで続いている

それこそ元いた広場が見えないほど遠い所だ

「ここまで吹っ飛ばされたのか…？ボケつとして何くらったか覚えてねえ、殴り飛ばされたのか？蹴り飛ばされたのか？それとも…ああクソッ！アイツめ脳天を直で狙ってきやがったな…やるじゃないか…まだ視界がグラついてるよ」

（ああクソッ！私は本当に何を食らったんだ？蹴りか、拳か、それとも…それとも紫のよ
うな…）

体が熱い、流れる血と痛みが鬼としての私の本能を刺激する！

(一発飛ばしたッ！だがわかつてる、一発だけじゃないんだろッ!? そいつはッ!!)

腹に力を込めて無理やり上体を起こし、そのまま今度は右足を二歩分前に跳ばして地面に近い位置まで体を落とす

予想通り恐ろしい速度で、恐ろしい精度で、私の脳天目掛けて白い槍が飛んでくる

左腕はダメだ、今の一撃を防ぐのに完全に痺れちまってまともに機能しない

残されたもう右腕を構える

「来いッ！」

一撃目よりもより洗練により力を込めて弾き飛ばす

「オラアアッ！2本目ッ！」

一撃目よりはマシとは言え右腕も左腕は同様にボロボロになったが今度は後ろに飛ばされそうになることもなくその場で踏ん張る

「1発、2発ときて…来るか、3発目」

1発目は急に来て、なおかつまだ頭がふらついていたから受け流す他なかった

2発目は1発目を防いだ余波で体がよろけて咄嗟の回避が出来なかったから受け流した

だが3発目は？

別に頭がふらついてるわけでも体勢が大きく崩れた訳でもない

なんなら両腕は使い物にならないことも入れれば避けた方が良いし、横へ転がれば避けれるだろう

だが、そんな勝負はいらない

鬼らしく、真つ向から

常人なら受け止めるところが受け流すことすら不可能だ、だが：

「だがぬるい。さあ！来な白墨！」

むずかしく考えることなんて必要ななかった、ただ自分のしたいようにやりたいように戦えばいい

いつも通り超スピードで白い槍が向かってくる

両腕は使えない、そのことを理解しながらニイツと大きく笑う

飛来する槍に対し、私は強く地面を蹴ってジャンプし、体に軸を作りながら大きく回転し、回し蹴りを叩き込む

そうして力を乗せたただの回し蹴りはその白い槍を真横に吹き飛ばした

「くうう〜！最っ高に痛いねえ！最初にくらった左腕もまだ完治しない」

槍を蹴り飛ばした左足は足首辺りが外側に大きく曲がり、血に混じって骨が見え隠れしている

そして私が3発目を防ぐのをわかっていたかのように4発目の槍が来る
両腕と左脚は使えない

未だ健在の右脚さえも使えなくなれば機動力がなくなつて攻撃を防ぐ手段も無くなる……だからこの右脚だけは使えない

唯一健在な右脚を地底の硬い地面に足首まで強引に埋め込む

曲がつて骨の突き出た左脚も構わず地面に押し込む

ここからは私の意地の張り合いみたいなものだ

飛んできた槍を前に大きく口開けて横を向く

「ツシヤアアアアア！」

声を出せば強くなると言わんばかりに張り上げる！

口の端が切り裂かれ、赤く粘り気のある血が顔を汚すのも構わずただひたすらに声を張り上げる

これは私が始めた意地の張り合いだ、真つ向から打ち砕く鬼の、私流の戦い方だっ！
体が熱された鉄のように赤く染まり、湧き出る汗が水蒸気のようになる

「ぬあああああああおあツツツツ!!」

やがてその槍にヒビが入り、そして……飛来した槍は噛み砕かれた

汚れた顔を乱雑に手で拭い、折れた歯を吐き捨てる

もう我慢など出来なかった、いやする必要なんてあるはずない

「は、はははっ！すまないねえ白墨、あんたを小さく見ていた！ちようど身体も温まってきた！今度は一撃で気絶するような腑抜けたやつじゃない、本気の…本物の私も見てくれよ！」

言葉と共に駆け出す壊れた左脚なんて忘れたように地面にクレーターが出来るような音を響かせ全力で駆けていく

あんまり力強く走るものだから左脚足の出血が激しくなる

だが今はもうそんなこと関係ない、ちようどいい準備運動も終わったことだし今度は私から行きたい

ようやく慣れてきた両腕を犬のように使って四足歩行で地を駆ける

家屋の壁なんて避ける時間すら惜しい、そのまま行く

吹き飛ばされた残骸を更に吹き飛ばし、ようやく最初にいた広場が見えてくる

—行きたい、行きたい！

この体の興奮が、傷が無くなる前に…1秒でも早くこの焦がれるような感情を発散したい！

—あと2歩、いや1歩！

最初には白墨に吹っ飛ばされる前の広場によく着いて、そして—

「来な！白墨！山の四天王が一人！星熊勇儀が本気で……あ……う！」

そこには、待ち焦がれていた白墨の姿は……無かった……。

「あえ!?お、おい!う、嘘だろう!?私はここにいるぞ!それともあれか!?逃げながらの引き撃ちか!?いい、いいだろう!私の趣向と外れるが無理やり追いついてとつ捕まえてやるさ……!?!」

そんな小さな願いは虚しく地底に響いた

近くで隠れているとかではなくて、気配が……しない。

「じよ、冗談だ!冗談だろう!?!ここまでやる気にさせて逃げたのか!?私をここまで本気にさせてか!?本当に撃つだけ撃つて逃げやがったのかい!?白墨め!いいのか!?男として!?!」

興奮で熱く赤く染まった顔を青くして頭を抱える

パツと横を見ると私が奪ってきた地底の食材が丸々全部無くなっていた

私がここに戻ってくる前に飯だけ取って逃げたってのか……?

—勇儀は知らなかった。白墨が中級妖怪レベルの妖力しか持つておらず、その肉体は人間のように脆く弱い。しかし、こと逃げの1点に関して言えばプロレベルなのだ、とそれこそあの八雲紫でさえ頭を抱えるほどの。

結局その日はもう白墨を見つけることは無かった。

第十九話 節目

原因不明の変死体、犯行時刻と合わない死亡時刻、謎が謎を呼ぶ文字で語られた恐怖の伝播。ペラペラとページをめくる度にまるで自分が物語のキヤラクターとなり歩いているような錯覚すら感じる巧みな文章力

本を掴む手が力み汗が溢れ出てきて顔を上げる

ふう……とため息を一つ。カラカラと乾いた喉に気付き机の上の珈琲に手を付け一口。それまで感じていた緊迫感が解けてリラックスする。

「やはりいいものですね……ミステリーホラー小説というものは」

特に猟奇的で狂气的であるほど肌の粟立つ興奮が心地いい

それは無意識に他者の心を読んでしまう私にとっては“現実よりもリアル”な恐怖なのだ

別にグロテスクなものや残酷な話が好きな訳では無い。続きが気になる話や、心臓がバクバクと音を立てるような興奮する小説が自然とこういったものに絞られただけだ

もう一度珈琲を口に含んだ後、本に目を向けようとしたところ扉の叩く音が聞こえたお隣か最近顔も見せない神出鬼没の妹か……疑問に思いながらも本に葉を挟んで机の

上に置いた

「どうぞ、入ってきてもいいですよ」

そう言うのと静かな空間にドアノブを捻る音が響いた。同時にやけに丁寧な印象覚えるゆつくりとした動きでドアノブが回される

さて一体誰なのか……続きがいい所だから出来れば手短に済ませてくれるとありがたいのだけれど……

扉がゆつくりと開いて……

やや長身の灰色の男が顔を覗かせた……

先程葉を挟んだ本を持って全力で扉に投げつける

何かがぶつかると音がした後ボタンと扉は閉まった

しかしだからといって何か大きく変わる訳では無い、この程度で帰ってくれるような繊細な心は持ち合わせてないのもよく知っている。だから強いて理由をあげるなら私の八つ当たりだ

その証拠に今度はさつきよりやや強めに扉が開かれた

「はあ……一体、今度は何の用ですか？ さつきぶりじゃないですか……もうお腹いっぱいなんです」

精神的な意味で、ですが……と後に続け、改めて彼を見た

髪も服も瞳の色も……その全てが灰色で統一されており、表情はほとんど変わらず常に真顔。

少し文句を言いたそうな顔をしながらおでこに手を当てている、と言つてもほんとに文句を言いたそうな顔なんてしているのかは知らないが……雰囲気ですう感じただけだ別に関更その程度の痛みなんて気にするような人でもなくせに白々しい……あついやほんとにちよつと痛がつてる

そしてその文句言いたげな後ろには大量の肉やら何やらの食材があつて……待て、なんだそれは？なんでそんなもの持つて地霊殿に……そう言えば少し前に勇儀さんが色んな呑み屋の営業を停止させていたとか……

私はすぐさまサードアイの瞳を手で隠した

効果はあまりない、ただこうすると心を読んでしまう距離が少しだけ狭くなる
それと私の精神安定法だ。

何があつたかは分からない、分からないがこのことには勇儀さんが関わつてる
少し白墨さんにも悪いとは思いますが帰つてもらいましょう

「ストーツプー！いいですか？白墨さんそれより前に進まないで下さいね絶対です、あの……ちよつと足ふらふらさせておちよくるのはやめて下さい……やめてくだ、や、やめつ、やめろつてつ言つてるでしょうが！……ふう、白墨さんいいですか？ここに來てから割と

良くしてあげている私の胃を大切に思うなら今日のところは1度帰って下さい」

それを聞くと心無しかしよんぼりしながらもコクコクとうなずいた。思いのほか物分りのいいことだ

「申し訳ないですが今日はこれで…何か要件があるなら今度でお願いします。その時にまた構ってあげますから今日は勘弁して下さい」

やっぱり心無しかしよんぼりしながら帰ろうと扉に手をかける

何故だが微妙に申し訳ない気持ち芽生えながらも帰ってくれることに安堵し、ホツとする

とりあえず今日の平穩は守られたと安心したところ、白墨さんがこちらを向いてグツグツと親指を立てた

——ものすごく嫌な予感がした

——白墨は反転し、大きく1歩こちらに踏み込んでくる

——私はコーヒーのカップを手に持った

私も笑顔で応える

「フリじゃ…ないですよツッ！」

パコーンと珈琲のカップが白墨の顔面に直撃する

——これ程の食材を手に入れるまでの経緯が頭に入ってくるまで残り1秒

私の胃はお釈迦になった



「本気で追いかけてくる勇儀さんから食糧パクって逃げた…？前々から逃げ足だけは自信ありげでしたが…」

さとりんもフリというのを知っていたのか、まあやるなって言われたらやれ！の意味だしね！

何故か頭に手を当ててぐったりしてるさとりんを尻目にパクってきたご飯の数々に目をやる

ふふふ…今から楽しみだ…

さとりんはぶつぶつとうわ言を呟いた後ハツとしてこつちを見た

「いや違う、今はそんなことよりも勇儀さんがここに来る事の方がやばい…！白墨さん？帰りませんか？一旦お家に帰った方がいいと思いますよ？というか帰って下さい」

「…(´)はん」

「はっ倒しますよ」

…それは困る、ご飯作ってもらうために来たのだ…あつ！もちろんさとりんも食べていいぞ！いっしょに食べような！

「そういう意味じゃないですよ！バカ！絶対来ますよ勇儀さんも…勇儀さんがわ、私の地霊殿で…私の平穏な日々が…うつ…」

むう…やはり勇儀もこのご飯を狙っているのか…あの脳筋も急に殴ってきたりしないなら食べさせてあげても良いけどなあ…

いやいやダメだ！手足がもげかけてたのに嬉しそうに四足歩行で迫ってきたのは普通に怖すぎる！絶対に見つかつたらひき肉にされる…！

「いやでも勇儀さんとは地霊殿で暴れないように…と約束をしているから…は？あなた…！白墨さんそれ知ってここに逃げ込んできたんですか!? つということはこれから何かあつたらここを避難所代わりに使われる…？あつ！ちよつとなに目を逸らしてるんですか!? こつち向きなさい！」

俺はぼこぼこ叩いてくるさとりんから目を逸らしてる口笛を吹いて誤魔化した。

…

…

…

よく膨れたお腹をポンと叩いて道を歩く

満腹満腹！なんだかんだ言つてさとりんは虚ろな目をしながら作つてくれるから
ちよよいな！

結局ご飯を食べた後直ぐに追い出されてしまったが、残りの食材を地霊殿に詰め込んでからまた来よう！

俺はキョロキョロと周りを見ながら万が一勇儀に出くわさないように気をつけて外を歩く

今、勇儀は橋の上にいるからちよようど真反対だ

にしてもこれからもあんな獣のように追いかけて回されちゃ敵わないぞ…

地底じゃ誰かに守ってもらえるなんてないからなあ…昔は怖い妖怪を見ても聖に助けて貰つてたから楽だった…

そう言えばさとりから聞いた話だと船幽霊も一人落ちてきたらしい

恐らく村紗のことだろう、てつきりあのヤバイ巫女が来た時にはとつくに逃げて隠れてると思つたがしつかり見つかつて他の妖怪達と同様に地底に封印されたらしい、へつさまあねえな！つま俺も地底でかれこれ数十年は囚われの身なんだがな！早くこつから出て甘味が食べたいよ！



やや下手くそに巻かれた包帯が余計に違和感を感じさせる

鬼のそれも怪力乱神と呼ばれる星熊勇儀が……だ

だと言うのに本人はとても満足そうに酒を飲んでいた

まだあまり飲んで欲しくないのだけれど……酔って会話にならないなんてことになったら面倒だ、と思いそれが鬼相手には無駄な思考だということも理解していた

馴染み深いスキマから杯を取り出し自分も一口飲んだ

「あれ？珍しいね紫あんたも飲むのかい？」

「どつかのボロボロな鬼さんが話をする前から盛ってるからね」

「ハツハツハそうかいそうかい！だがね紫、鬼が酒を飲まない時なんてそれこそ飲む暇もない程の戦いをする時ぐらいだよ」

皮肉が効いたか効いてないか……勇儀はいつものように豪快に笑って酒を飲む

「そうそれよ、今日は別のことを聞きに来ただけだけど今はそれよりその包帯のことよ。」

「一体どうしたの？それ」

そう言うのとトントンと手足の包帯の巻かれた部分を指してニヤニヤとし始めた

「このことかい？いやあ残念ながら傷自体はもうないんだ、この包帯は心配性な姫さんが強引に付けていったものさ」

そう言ってしゆるしゆると…ではなく鬼らしく力づくでビリビリと包帯を破いて言った

勇儀の言っていた通りそこにはもう傷らしい傷はなく完治していることは一目瞭然だった

続けて勇儀は嬉しそうに語る

「紫、あんたの勧めてきた白墨さ」

その答えに紫の余裕ありげな顔が少し崩れて目が見開かれる

「冗談、あれにあなたをどうこうするだけの戦闘能力はないわ」

思わず、否定する

そうであって欲しくないという願望も少しあったかもしれない

ただ客観的に見ても中級妖怪程度の妖力量で大した技術も持っていないあの妖怪に鬼を相手取る力はないと思っていた

「恐らく紫の言っていた巫女に一撃を与えたやつと同じだろう…それしか考えられな

い。紫の言っていた通りあの攻撃は「完成」されたものだった」
「巫女に、一撃を与えたもの……」

その言葉であの日の事を思い出す

あの日意識を失う寸前に白墨が放った白い結界で構築された槍

巫女に致命傷を与えることさえ出来なかったもののあんな妖力でカスリキズだけでも与えられるだけいい方だとは思っていたが……

「速さはピカイチ、威力も並の相手なら正面から粉碎出来るほどの貫通力、一発屋では終わらない連射力、そしてなにより目が見えないとは思えないほどの正確性だ。本当に目が見えないか……いや見えていたとしてもありえない命中精度だった」

「……ずいぶん高く評価するのね」

いつも彼女と会う度に白墨の愚痴を聞く身としてはあまりに高い評価をする姿に少し驚いた

そしてそこまで言わせる白墨の攻撃にも興味が湧く

酒を飲みながらもどこか神妙な顔つきで話を続ける

杯を揺らし踊る酒を細めた目で見る彼女の姿はヤクザのような貫禄があった

「わたしはね、嫌いさあいつのことは。嘘はつくし、弱いし、男のクセして戦う気概も無い、すぐ顔を合わせる度に一目散に逃げようとする奴だがたった一つだけの事には確か

なプライドのような物を持っていた、そこだけは気にいつてるんだ」

「プライド?」

思いもしない言葉が出てきた

白墨とは無縁の言葉だとすら思っていた。尤もあの表情に寡黙な姿からは彼の人間性を図ることなんて出来ない

だからこそ人を見る目のある勇儀の言葉に興味を引かれる

白墨については少しでもどういう人柄なのかということについて知っておきたかったからだ

「食いもんだよ、美味しいものさ。ふざけた話に聞こえるかもしれないがあいつは食事だけに強く反応するんだよ、試しに食べ物の事を引き合いに出してみたら今まで逃げの一点だったあいつが初めて向かってきやがった」

食べ物? ご飯? そんなもののために勇儀に立ち向かう?

思っていた答えと全く違ったものに困惑する。…そろそろ頭が痛くなってきた…

「…なにかの勘違いというの?」

「ないね、聞けば白墨のやつ美味しい物を食べる為だけに地霊殿へ行つてはその主に作らせてるっていう変人だ。それだけのために嫌われ者のさとり妖怪に心を読まれに行くものかい?」

知らない方がまだマシだったかもしれない

最近ようやく掴めてきたように思っていた彼の像が一気に遠ざかった気がする

いや元から私の考えていた白墨の像なんてただの偶像なのか

「どちらにしろ、わからないことが余計にわからなくなっただけだわ……」

勇儀はそんな混乱してる私を見て愉快そうに笑う

「もう、そんなにおかしいものかしら？」

「ああ、かの大妖怪八雲紫をここまで引つ掻き回せるんだから白墨のやつも大概大物だな」

「私だってわからないことばかりよ、少し顔を合わせてるだけでどういふ奴か感覚でわかってしまうあなた達の方が余程ズルいわね。動機と裏付け、それでようやく全貌がハッキリするものじゃない？」

「理不尽な物言いに不平を零してしまう」

私は万能とは程遠い、仮定し、少しづつカケラを集めていくようなタイプの妖怪

全知全能やら数刻話だけで自らの全てを掌握されてしまうなどと言われているのを見ると思わず『誰だその八雲紫とかいふ妖怪』と呆れてしまう

そういうタイプより直感でわかってしまう者の方が余程理不尽だ

「なるほど今のは素の紫か？ハッハッハ久々に面白いものも見れた、案外ストレスも溜

まってるんだなそんな時こそ呑んで忘れてしまえ」

あんたらは関係なしにいつも飲んでるだろうに

トク、トクと注がれた酒を強引に飲み干す

ヤケ酒じやい

「おぉー、いい飲みっぷりじゃないか」

「ほんとよ、ほんと。最近だと幽々子だつて桜が美味しそうだの意味のわからないことを言うし…」

酒で舌が濡れるとよく回る。良いことも、悪いことも

「あんたはずつとそうやって苦労し続けそうだ、元々が苦労人気質なんだな」

「嫌な予感ね」

「それでも無いさ」

何がそんなに愉快なのかクツクツと笑う

なんとということだ、野生の勘EXTRAの鬼にお前は一生苦労人と言われてしまった
何となくそつういふ感のない私ですら納得してしまうのが憎い

「今日は…そつうね…らしくないわ、もうお開きにしましょう」

「そつうだな…ああそつうだ紫聞いておきたいことがあつたんだつた」

酒瓶をポイツと乱暴にスキマへ投げ捨て立ち上がり帰ろうとしたところ、予想だにし

ない問いかけをうけた

「あいつは『ヒト』なのか？」

勇儀自身珍しく少しだけ歯切れの悪い感じで聞いてきた

あまりに意図の読めない問いかけに言葉に困る

「ああいやそりゃあああいつの体は妖怪でも珍しい速さで傷が塞がったりもする、とても人間のようには見えなかった。だがありゃあもつと根本から人間よりもヒトらしい。あれは本当に妖怪なのか？」

やはり問いかけの意味がわからない

そこで言うヒトが何を指しているのかどうヒトらしいのか…

ただ勇儀も自分でよくわかっていなさそうにも見えた

「よく分からないけど、私からは妖怪だとしか言えないわ」

「そう、か…引き止めて悪かったな。今度は良いツマミを持ってきてくれよ？酒ならこつちでいくらでも用意するからね」

「はいはい、軽く何か持つてくるわ。それじゃあ」

スキマを通って地底を後にする

結局この言葉の意味は私にはわからなかった

私には分からず、勇儀には分かる違和感が少し胸に引っかかった

酒と共に流れてしまうような小さな違和感だ

第二十話 ふざけた交渉

「こんにちは、そろそろ覚悟は決まったかしら？」

真つ暗な空間に響き渡る恐ろしいほど透き通る声

俺の心臓はかつてないほどに鳴り響いていた

また再びトラウマとご対面したから？——それもある

突然上から落とされて混乱してるのもある……だがそんな不満が全て吹っ飛ばすほどの衝撃がそこにはあった

俺の光を映さない眼が、それでもテーブルのある一点に注がれる

テーブルに並べられたそれは、紛うことなきショートケーキだった。



今日も今日とてさとりの家でお腹を膨らませて来た俺は満足気に地底の道を闊歩する

怖いので勇儀の位置を常に確認しながら偶然会うなんてことのないようにしている。

今は勇儀とは地底の街の対極に位置する所にいるから遭遇することは無いだろう

ちなみに勇儀の居場所は身体から出した灰を付着させることでGPSのようにして常に把握している

俺の灰は俺より優秀で、空気中にぶかぶかと放っておくだけでその周りの音だったり、景色がわかる。その応用で身体から出した灰をGPS代わりに使つてるといふことだ

ちなみに勇儀に結界の槍をぶっぱなした時にちやつかりくつ付けた

ふふふ、この地底の様子は全て俺にお見通しということなのだ！

例えば今だと俺に持つてかれた食料の弁償として地底中のご飯屋さんへ勇儀がお金をばらまいているらしい

あんなに強いのにペコペコと謝りながら酒だつたり宝で弁償しているのか…

まあ自業自得だよ

他だと賭博場でイカサマしてる蛇女だつたり腕相撲に命をかけてるやばい奴らだつたりと割と地底も賑やかだ

最近では勇儀に追い回されたりすることもほとんどないから安心だ

やや、というか恐らく一ミリぐらい頬を緩ませながら固い干し肉をガジガジと噛んで適当にほつつき歩く

決して美味しいわけじゃないけど固いから食べるのに時間がかかって良いのだ
地上にいた時は綺麗な四季の移ろいや、吹く風の気持ちよさだったり、釣りだったり
とそれなりに楽しみがあつたけど地底は暇なのだ。

娯楽がないし甘味もないし：

そうやって今日も暇だと独り言を口にしようとした時、突然穴が目の前に出現する
何度も言うようだが俺は目が見えない

故に身体から出した灰をセンサー代わりにして歩いている。もちろん地面にも灰を
張り付かせている

そんな地面から一箇所だけ円状の丸い穴が出来た。突然だ

勇儀は腐つても徒歩だから灰で位置を確認しておけば安心だが、こいつは違う

こんな事してくるやつなんてあの頭のおかしい八雲紫だけだ……！

俺も同じ手には引つかからない

反射的にジャンプし、浮遊する

…危ないところだった。だが、甘いな！前回も同じ方法で落とされたんだ、足元はい
つも以上に警戒しているに決まっておろう！馬鹿な大妖怪め！

ひとしきり優越感に浸った後華麗に逃げさせてもらおう！

…しかし！甘かった…

その不可避のトラップを避けたことによる喜びで後頭部付近に生まれた新たな穴に反応出来なかったのだ。

突如生まれたもう一つの穴から細い腕が一本出てきて俺のか弱い頭をぶん殴る

絶対、確実に！私怨の籠っていたであろうそのパンチを食らい、俺の体は一直線に最初の穴へ吸い込まれていった。

…頭蓋骨が割れるほど痛かった…。

強烈な痛みと一瞬で失われる平衡感覚で胃から朝ごはんがせり上がってくる中、硬い地面に顔をぶつける

いや、地面ではなくそれは椅子だった

顔面と後頭部の痛みに耐えながらも椅子に座り直す

はあ…。

ため息が零れる…予想通り、そこに居たのは俺の大嫌いなトラウマ、八雲紫だった。しかしその落胆が覆る

驚きと地底に似つかわしくない甘い匂い、非現実的な物に意識が奪われる

「こんにちは、そろそろ覚悟は決まったかしら？」

真つ暗な空間に響き渡る恐ろしいほど透き通る声

俺の心臓はかつてないほどに鳴り響いていた

また再びトラウマとご対面したから？——それもある

突然上から落とされて混乱してるのもある……だがそんな不満が全て吹っ飛ぶほどの衝撃がそこにはあった

俺の光を映さない眼が、それでもテーブルのある一点に注がれる

テーブルに並べられたそれは、紛うことなきシヨートケーキだった。



「こんにちは、そろそろ覚悟は決まったかしら？」

そう言ってニコリと笑う

相手の、白墨の目が見えない事を知っているが身体に染み付いた癖は簡単には抜けな
いらしい

生意気にも足元のスキマをひよいと避けた白墨の背後を軽くコツンと小突いて落
としたが……本当に目見えないのよね？

そうこう考えてるうちに椅子に激突した白墨がのそのそと頭をさすりながら起き上がった

まあ、ちよつと強く小突きすぎたかしら…

復活し椅子に座り直した白墨は私という天敵を気にもとめずにある一点を凝視していた

目も見えないのに何を見ているのだと呆れていると、じつと机の上に置いたけーきを見ている

紅茶だけじゃ寂しいなと思い、何気なく外の世界で売られ始めた“けーき”なるものを紅茶のついでに置いていたのだ

「それで、式神になる気にはなつた？」

「……………」

無言…。それは私にとってはある意味でいつも通りとも言える光景だ

相変わらず無表情の白墨の顔からは何を考えているのか想像するのは難しく、その上寡黙な性格のせいで何が目的かすら分からない

そう、いつも通りだ。……その目がやや下、テーブルの一点に注がれていることを除けば、だ。

奇妙な沈黙が訪れる

やがてその沈黙を破るように白墨の手がごく自然な動作でけーきを取ろうと行動する

ゆつくりと伸ばされた白墨の白い手は、しかしけーきを掴むことはなく、他ならぬ私によつて遠ざけられた

「あつ……」

「……………」

一応補足しておく、言葉を発したのは私ではない

身長の高い白墨の身体からは想像もつかないような細かい声が漏れたのだ

再び奇妙な沈黙が訪れる

その光景を見ながら、あつそういえば幽々子とお菓子食べてる時もこんなことあったなあ……と関係ないことを思い出す。だつてあまりにも似ていたのだから……あの脳天気な幽々子と明らかに冷たそうな白墨が、だ

いつもは身動き一つしない人形のような白墨が、今日はいつもましてそわそわと体を揺らす

……まるで私にお菓子を取られた幽々子のように

「……………ねえ」

私の声に反応してピクリと動きを止め、そこで初めて私の顔色を伺うようにチラチラ

と私の方を向いた

『多分ご飯の事しか考えてないと思いますよ』

いやいやあんな冗談を真に受けてどうする

ないわよ……ないわよね？

そうでないと最近やつと掴めてきたように思えた彼の人物像がボツコボツに吹っ飛んでしまう

顔をブンブンと振って心を落ち着かせる

白墨の方を見ると私が横に顔を振ったのに対抗するように顔を縦にブンブンと振っていた

……もうわけがわからない

けーきを右に左にとゆらゆら揺らすとそれに釣られて白墨の顔がほんの少し、けれど確かに右に左にと揺れていた

「……。」

『食いもんだよ、美味しいものさ。ふざけた話に聞こえるかもしれないがあいつは食事だけに強く反応するんだよ』

……。

私はもう考えるのをやめた

「ねえ、もし私の式神になったらこのけーきをあげるって私が言ったらどうする?」

夢か疑いそうになりながらも自分が今ふざけたことを言っているのを理解する

そんなふざけた問いかけに白墨は……

「なりません」

「……………」

即答だった。

私はもう胃が痛かった

「……………式神になるということは正式に八雲の傘下に入り、私の部下として働くことになるわよ」

頭を抑えながらも言葉を絞り出す

「な、なりません」

「……………」。ならけーきはなしね」

「なりません」

「そうなら式神に……」

「な、なりません」

からかわれているのかと思いい白墨の顔を見る

いつもの無表情からは想像もできないほど目をキョロキョロさせながら私とけーき

を交互に見ていた。口はパクパクと開いたり閉じたりしながらも言葉を発することはなく奇妙な光景だ

白墨は過去最大級に動揺していた

ここ数百年間見ようとしていた極めて人間的な表情の変化がそこにはあったい、いや逆に考えるのよ！これはチャンスだ

明らかに動揺している白墨は今なら式神になつてくれるかもしれない

「こ、こほん！式神になるのならけーきもあげるし、地底から地上に出すことも出来る…それにその見えない目の封印も解いてあげるわよ？」

「……!!」

明らかに動揺が大きくなっているがまだ足りない…

「…契約するなら毎日あま〜い甘味が付いてくるわよ？」

「……ッ!!!」

ガタツ!!つと白墨が椅子から飛び上がるように立ち上がる

しかしすんでのところで拳をギリギリと握りしめて椅子に座り直した

ぐっ…まだ折れないの!?!ふざけた理由だけれどそろそろ折れなさいよ!?

これまで腹に穴が空いても、身体を真つ二つにされても無表情だった白墨の顔がとて
も辛そうに震えていた

「……っ！……、し、式神は自由がないから嫌だ……」

こ、この男！これだけの好待遇でまだ文句を言うの!?

しかし、まずい……！

さつきまでけーきに釘付けだった白墨が今やプイツと顔を背けている

時間が経てば経つほどこの交渉はこちら側が不利になっていく

ここで完全に心の整理が付いてしまえばもう二度と式神にする機会が失われるかもしれない……！

ふざけた理由だけでも！ふざけた理由だけでも……！

あともう一押しなのに……

時間は私の敵だ、早く決断しなければ……！

しかたない……

「…仮契約ならどう？」

「……っ？」

不思議そうに首をかしげる白墨に説明をする

まず前提に式神の契約には両者の承認が必要だ

そして正式な契約を受けければ契約主……つまり私は白墨に対して絶対命令権を得る、代わりに白墨は私の妖力の一部を使えるようになる

そう説明するとやっぱり白墨は顔をプイツと背けた

「次に仮契約について…ね」

こちらにも正式な契約と同じで両者の承認が必要だ

しかしここからが違う、契約主から式神への絶対命令権は無い、それに伴って私の妖力の一部を使える…というの無い

双方にメリツトの薄い、いわば形だけの上下関係のようなものだ

式神が契約の内容を違えるとその時点で契約時の毎日けーきが貰えるというのは無しになる

つまりは命令に従ってくれるなら報酬だすよ

という式神の契約の中でも至ってシンプルなものだ

それを聞いて考え込むように白墨は黙り込んだ

一見この契約には意味が無いようにも思えるが表面上だけでも八雲の傘下に入れば色々と使える…それにここで契約の場を永遠に無くすよりも一度仮契約を結んでおけばそのうち正式な契約を結べるかもしれないという打算もある

屈辱だ…！苦渋の決断だ…！だがこれならどうだ！

これ以上は流石の私も曲げれない…！だからこれが最終手段だ

1分…2分…：…熟考した後、白墨がとうとう口を開いた



口いっぱい広がる甘い味、それに舌鼓をうちながら紅茶でリセットする
ショートケーキに必須のいちごが乗ってないのが残念だがそんな事よりも甘い、甘い
のだ

まだ時代が追い付いていないのかケーキというよりホロホロしたクッキーにめい
いっぱいクリームを塗ったみたいなものだけどそれで充分美味い…だって甘いのだ、そ
りや美味しい、美味しいから偉い

紫はというと肘をつきながらこちらを見ている。どんな表情なのかは知らないが一
つだけわかったことがある

ケーキを食べ終え、再び紅茶を飲む

「ゆかり」

「へ？」

「お前良い奴だな……」

「やかましいわよ……」

あつ今も表情見えないけど何となく頬をヒクヒクさせてた気がする

にしても自分でも静かなタイプだと思ってるけどやかましいのか？

「まあ、とりあえず契約はしたし……明日からは私の保護下で働いてもらおうわよ？どんな事するかも明日説明するから今日のうちに地底のお友達と別れの挨拶しておいたら？」

そつか地上に出れるのか……なんだかんだ言って数十年以上は地底に居たから少し感慨深いな

特にさとりんのご飯が食べれなくなることが辛い……いや地上に出れば地底と違って美味しいご飯屋さんがあるのでは!? オラわくわくしてきたぞ！

「はあ……本当に大丈夫よね……？ 私損するようなことはしてないわよね？あれ……なんか物凄く不安になってきたわ……」

青い顔しながら八雲紫は何か気付きつつもそつと記憶の底に仕舞った

どうか未来の私の苦勞が減っていますように、と

式神な灰と幻想郷

第二十一話 新人式神白墨くん

「ん〜〜!!」

広い地霊殿のある人部屋にて、気の抜けた声が聞こえる

「あれ? さとり様いっになくご機嫌ですな」

そう、今の気の抜けたような声は他でもない私のご主人様の口から出たものだった
腕をピンと伸ばしていつも以上にリラックスした様子…

いつもの静かな印象を受ける優しいご主人様にしてはやや浮ついた場面だった

「あらお燐、わかるかしら? 重い肩の荷がおりたのよ」

そう言つてソファにぐでーつと寝転ぶさとり様

可愛い

肩の荷がおりたというが一体何があつたのだろうか? そもそも最近そんなに神経質になるような事があつたっけな?

「白墨さんが正式に八雲紫の傘下に入つて地上にいくらしいのよ、どんな話し合いがあつたのかは知らないけれど…そんな事よりこれで八雲紫と勇儀さんの重圧から解放

されるわ」

そう言ってあまり動かさない表情を少しだけ緩ませている

休日前の人みたいだ

「白墨さん…ああ！あのよくさとり様の所に来ていた妖怪ですか、ご友人だったのですか？」

そう聞くとさとり様は少し悩んでから口を開いた

「友人…と言うほど親しい仲ではないですよ、まあでも…お燐、あなた達の次には好ましい人だったかもね、良くも悪くもアホだったので考えていることと行動がわかりやすい、動物みたいな素直なアホだったので」

あ、あほ!?

さとり様には珍しく口が悪いので少し驚く

でもわかりやすい…？私が見た時は全く表情を動かさない冷たいヤツと言う印象だったけど

アホ…？

でも基本的に人との交流を嫌っているさとり様にしては珍しくそこまで嫌がっていないのだなと思った

…ということはやっぱりご友人？

「だからそこまで親しい仲ではありませんよ…難しいですね」

さとり様は本気でなんと言おうか悩んでいるような仕草で考え込んだ

「…？まあ次地霊殿に来たらちよもてなしておきますね！」

「いや次見かけたら門のところまで追いかけて…いや、どうせもう二度と地底には戻ってこないと思うし、別に好きにしてもいいわよ。でもこれで…本当に安心して生活が出来る…お燐、珈琲を入れてちょうだい」

「はい！」

結局さとり様と白墨とかいう妖怪の関係は良くわからなかったが、究極的に仲が悪いということは無いためだ

自分ではよくわからないが悟り妖怪のさとり様が言うのだから間違いないだろう
ご機嫌なさとり様につられて鼻歌交じりに珈琲を入れた



「ええ!? 帰った!?!」

「ええ、少し前に地上に出るからと挨拶して帰ったわよ…直ぐにそうやって帰れるところはやっぱり地上の妖怪ね…妬ましい」

「いくら嫌われてると言っても家も食うもんも面倒見てやったのに一言もなしかい!？」

鬼は…勇儀は酷くないか!と驚き声を荒げていた

「全く妬ましいわね…嫌われ者の地底の妖怪でさえ鬼がこれほど帰りを惜しむなんて」
橋上でパルスィは目を細めてそう呟く

「いやあ…私もあいつの事は嫌ってたけどどさあ…ハッハッハ…こりや参ったね!ア
タシは地上に行けないし、戦いの続きはまた今度かあ…」

勇儀は戦いを懐かしむように今はもうない傷を撫でながら諦めたように上を向いた

「出たいなら出ていけばいいじゃない…1人はそうしてるわよ?」

「萃香か…あいつの自由さは羨ましいけどね、アタシは鬼で地底の妖怪さ、それを違え
ちやならないよ」

パルスィは分かったようなわからないような感情を、きつとこれは鬼にしかわかるま
いと押しとどめた

「地底の妖怪と自分で言えるその自信が妬ましいわね」

パルスィの無理に押しとどめた感情が意味の無い言葉となつて口から漏れた



何も見えない暗闇で肩を押される

「真つ直ぐと進みなさい、そのスキマの先が地上に続いているわ。あなたがこれから行くのは地上と陸続きのある山奥……これから出来る理想郷よ」

紫の言葉を聞いて歩を進める

相変わらずスキマとやらの中は不思議で、灰バリアを使っても何もわからない

つまり質量が無い……まるで宇宙空間にできた道を歩いているような有り得ない奇妙な感覚だ

暗闇を進む恐怖が徐々に大きくなったところで突然世界が現れる

目に広がるめいっぱいの緑、春の暖かな風が頬を撫でた

暗く肌寒い地底と違って生命の溢れた風が吹いてくる、それがあんまりにも優しく暖かいものだから思わず息をするのも忘れてしまいそうになる

「ああ……」

それは間違いない歓喜の心だった。自然の力は偉大で、そばにあるだけで心が晴れや

かになる。

「どう？目は見えるかしら？」

言われて自然に自分の目元に触れる。初めて気付いた、今自分がこの光景を自らの瞳で観測しているのだということに

長年色を映さなかつた瞳に色鮮やかな自然が入り込む

地上はやつぱりいい場所だ：閉鎖的な地底にはきつとない：いや、もしかしたら地底にもあつたかもしれない、目の見えなかつた俺にはそれが分からなかつただけかもしれない

惜しいな

「改めて、ようこそ幻想郷へ」

久々に見る紫の顔はいつものブチ切れた黒い顔ではなく綺麗なものだつた

：多分ずっとその顔しとけば胡散臭い年増妖怪なんて陰口たたかれないと思うぞ…。

そうやって俺が感動しているとふわふわと一人の妖怪が降りてくる、それもかなり強力なやつが

「お帰りなさいませ紫様」

「ええ、藍もいつもご苦労さま」

そいつを見て冷や汗が流れる

冗談じゃないぞ：

藍、と言われた妖怪…その特徴的な黄金色のいかにももふもふしそうな毛はともかく、その背後の九本の尾は…ヤバい…

知識不足な俺でも知っている九尾の妖怪…歴史に名を残すような大妖怪じゃねえか！

え？この大妖怪すらも紫の式神？ほ、ほーんやるじゃん…え？これ俺いる必要あるの？この九尾さん以上の働きを求められても困るよ!？」

「紫様、この妖怪が例の？正式な式神としての契約はないように思えますが…」

「ええ、まだ仮契約みたいなものなのよ、甘味で動く期待の新人…なはずよ…」

「はあ、契約内容もそうですがそこまでの力があるとは思えませんが…」

「なんだが訝しげな目で見られているがとりあえず先輩には敬意を払っておこう」

「まああなたら大妖怪に比べればそこら辺の妖怪なんてみんな力不足もいい所だと思
うよ、うん。」

「何十年も鬼に追いかけて回されても技術の向上は無かったし、これ以上強くなったりとかは無さそうなんだよな、才能の差ってやつかもしれない」

「まあ戦力的な価値は期待しないから大丈夫よ、それよりもどう？結界の様子は、私のいない間になにか変化はあったかしら？」

「結界？なんの話だ？」

「例の結界ですが、やはり対象が曖昧で多すぎるためかいくつかの綻びが生まれ始めています、調整が必要かと……」

少し言いくくそうに藍が結界とやらについて報告している

結界と言えば地底にあつた結界を俺はどうやってすり抜けたんだ……？謎が多すぎる……わからん、もう美味しいもの食べたい……

「ああ、やっぱりそうなのね……はあ……先が思いやられるわね……1つ直せば2つの問題が生まれてくるし……」

「……心中お察しします……。」

苦勞してそうな顔でため息をつく紫と同じような顔で疲れたため息を吐く九尾さん……なんだか急に空気が重いよ

「そうねえ……どこから説明しようかしら……。藍！説明お願い！」

「え!?は、はい!……このこと結界についてですか」

「ええ頼んだわ」

途中まで考えていたのに自分の式に説明を丸投げした紫を尻目にこれまた苦勞してそうな九尾の方を向く

「ええと、幻想郷がどういふ場所かは知っているな？」

いや知らないけど…ぶんぶんと首を振る

あつおいちよつと面倒くさそうな顔するな

「近年…といつても数十年前から妖怪はその数を緩やかに減らしていき、それとは対象に人間は増え、文明という力もつけた。その事に危機感を覚えた紫様が幻と実体の境界という境界を…あー、簡単に言うると少なく世界に散らばった妖怪達をここ幻想郷に訪れるような境界を張つたのだ。」

俺がわからないですと頭を傾げると馬鹿でもわかりやすい感じに話してくれる九尾の妖怪は有能だ。つまりさつきまで言つてた境界はその幻と実体がなんちゃらの境界のことだな？

「この境界によつて存在の弱くなつた妖怪からここ幻想郷に呼び寄せる事で衰えた妖怪の勢力を何とか保つことは出来るようになった…が、現在その境界が問題を起こしている」

そんなまねきねこみたいな効力の境界をこの馬鹿でかい土地全体に張つてるの…？

チラリと紫の方を見ると、私頑張りました！という感じでドヤ顔していた

おおー、とばちばちと手を叩いておく。…ん？問題があるとか言つた？

「…聞いているのか？まあいい、その問題とやらが深刻でな…力の弱まった妖力を持つたものをなんでも引き寄せてしまうのだ、その効力は凄まじく、例えば妖力を持った花

だったり、意思すら持たない半端なものまで幻想郷に呼び寄せてしまう…そうやって無理に色んなものを呼び寄せた結果、結界に綻びが生まれ、その綻びがどんどん広げられていってしまったている。このまま結界の綻びが大きくなっていけば、そのうち存在しない伝染病について書かれた妖魔本などもこの幻想郷に呼び寄せられ、最悪が起るかもしれない…」

ダメじゃねえかその結界

チラリと紫の方を見ると、ぴゅ〜とかびゅ〜と下手くそな口笛をして目を逸らしていた

「ま、まあだから私達はその結界の修復と修復と修復…：そしてまた修復…：で忙しいのよ…：ええ本当に…：」

そう言つて暗い目でぶつぶつと呟く

俺結界の修復しろとか言われても出来ないんだけど…：俺が使う結界なんてめっちゃ細長く折つた結界を早く飛ばすぐらいなんだけど…

不安に思っていると再び紫が口を開いた

「それにこのままいくともう1つの問題が生まれることも予測しているわ…：そうなるともはや妖怪だけではどうすることも出来なくなる。だから博麗の巫女と連携を取って人と共存していく形をとる必要があるのよ」

妖怪が人と共存？それに妖怪絶対殺すマンみたいな博麗の巫女と連携？

話す紫は未来のことでも考えたのか憂鬱そうだ

「博麗の巫女とは既に話をつけて、人里の方にも説明はしてもらったわ：けど弱者である普通の人間が突然そんなこと言われても到底受け入れることは出来ないでしょう？だから人と妖怪の垣根を取り壊す：まではいかなくても妖怪と人が共存できる”そういう”ルールがあるのだと納得させる必要がある」

そう言い、紫はゆっくりとこちらに歩を進める

そして俺の前まで来ると持っていた扇子を俺に向けた

「あなたには、結界の管理で忙しい私達の代わりに人里での妖怪と人間の共存を納得させてほしいのよ」

ここで初めて紫は俺に仕事の内容を言った

……それは、もっと明るくて警戒されにくい妖怪でなきや無理じゃないか!?

第二十二話 幻想郷流の治安維持

「…とーいうことで頼んだわよ」

そんな無常な言葉を投げかけられ固まる

うそ、だ……でも仕事しないとケーキ食べれないし…何とかするしかないのか…？
俺がガツクリとしていると九尾が不思議そうな顔をした

「先程から返事も相槌もありませんが、この男は話せないのですか？」
紫を見る

「いや、話さないだけよ」

話さないだけです

「話すのがめんどくさいらしいわ」

話すのがめんどくさいだけです

「そうですか、私の方で教育しておきましょうか？」

ごく自然な感じに九尾がそう聞いた。とても事務的な感じだ

「いや、もう諦めたからいいわ！」

諦めたらいいです

「そうですか、それなら私からはもうありません。先に結界の修復へ行っておきますね」
九尾……いや藍は最初からよく分かんがそれだけ確認してまた飛んでいつてしまった

知らない場所だし地形も覚えないと……

にしても説得かあ……説得……

俺がうんうんと悩んでいると、何故かまだそこにいた紫が口を開く

「私もそれなりに付き合いが長いから貴方が言いたいことも何となくわかるわ、でもそんなに難しいことをする必要はないわよ？」

そうやって紫は愛想良く指をピンと立てて提案してきた

「幻想郷のルールを周知させれば良いのよ」

ルール？

「幻想郷のルール、”妖怪が人里に入っても構わないけど、人里内で妖怪が人を襲っては行けない”これが幻想郷のルール。貴方はこれを人里に住む人々に絶対的なものとして周知させれば良いの、人里内では何があっても妖怪が襲ってくる事は無いんだってね」

そうやって茶目つ気のある顔で話す紫は俺のイメージとはだいぶかけ離れたものだ
怖い顔だったり胡散臭い顔のことが多いが……ほんとに色んな顔をする

それにしてもその人里内が安心つてルールを広めるためには具体的には何をすればいいんだ？

人里内は安全ですよー！つていうプラカードでも掲げて歩けばいいのだろうか

「つまりね、貴方はこうしてるだけでいいのよ——」

そうして言われた初仕事はさっきの話からすると拍子抜けするものだった



「ただいま〜」

気の抜けた声と共に特徴的な瞳の空間に馴染み深い紫様の“スキマ”が生まれる

「おかえりなさいませ紫様、一応私の方で結界の修復をしていますが…すみません、私だけではこれ以上は……」

力になれず自分の能力不足を恨みながら例の歪みを見る

「十分よ藍ありがとうね、ここからは私がやるわ」

そう言つていつもより少しだけ機嫌が良さそうな紫様は恐ろしい速さで結界の綻びを埋めていく

流石と言わざる負えないその手際は私にはとても真似することは出来ない

いや、恐らく幻想郷中で見てもこの速さで穴を塞げるのは紫様ぐらいだろう。だからこそこの結界の管理は紫様以外には務まらないのだから…

「紫様、一つだけ良いでしょうか？」

ただ一つだけ引つかかっていることを忙しいのを承知で聞いた

「んー？どうしたの？」

「あの男、白墨についてです。失礼ですがあの男に里の人間を説得できるだけの話術もカリスマも無ければ、人にとつては重要な親しみやすさも感じません。あれならまだ人里の寺子屋にいる半妖に任せた方が良かったのでは？」

紫様は、確かにあの無口無表情な顔は初めて見ると冷酷な印象を受けるわよね〜と、笑いながら話し始めた

「でもね……でもね藍〱それでいいのよ〱いや、むしろあの一見怖いという印象を受ける無口無表情なあの顔だからこそ良いのよ〱

それがいい？逆効果では無いのだろうか？

私のその困惑した雰囲気感じ取ったのか紫様は結界の修復の速度を落とさず、さらに話を続けた

「彼にはね、人里でただ普通に生活してと頼んだのよ。特に里の人間に何かするものもいも全て任せる…と言ってね〱

「すみません、ますます分からなくなってきました……」

「あらダメね藍、まだまだ頭が固いわよ？」

「すみません……」

特に叱られてると言った訳ではなく紫様はどこか楽しそうだった

「人里では、未だに妖怪に対する恐怖が残っている、それは信頼出来る半妖が1人いたところで変わらない。もしかしたら人里にいても妖怪が襲ってくることもあるのでは？妖怪が嘘をつかない保証はあるのか？きつとそんな当たり前に持つ不安が蔓延しているのよ」

それはそうだ。今まで争い続けてきたのにある日突然人と妖怪は共存していくなどと言われて、直ぐに認識を変えることのできる肝の据わった人間などそうそう居ない
そしてそれは……

「そしてそれは妖怪側も同じこと。一応幻想郷中の妖怪たちにこのルールを知らせたけど……きつと出てくるでしょうね、人里で暴れようとする妖怪が。」

……そうだ。初めからこのルールはどちらが双方をどこまで信頼出来るかにかかっている。これまでが最悪だったのに……だ。

ある程度の妖怪なら紫様と博麗の巫女を同時に敵に回すことを理解しているから人里で暴れるなんてことをしないだろう。

だが生まれたばかりの力の弱い妖怪などから必ず人里で人を襲おうとする妖怪が現れる、若いから、単純に馬鹿だから、理由は色々ある、だが必ずそういう者が出てくることは明白だ

そして一度でも妖怪による被害が出ればその時点でこのルールは意味の無いものになる

やっぱり妖怪は信用出来ない、妖怪とは相容れない…と。

その被害を出した妖怪を退治したとしても関係ない、一度でも被害が出ればその時点で終わりなのだ

「だからね、彼には二つだけ絶対の命令をしてきたの、一つは人里で生活すること…もう一つは、人里で人に害を成そうとした妖怪を、被害の出る前に問答無用で絶対に殺しなさい…と。」

その最後の言葉だけがとても冷酷なものだった

でもなるほど…

「つまりは、見せしめ…ですか？」

「それも妖怪と人間、どちらに対してものね」

「それは……」

「彼はね、ある一つの事柄を除いては絶対に表情を動かさないし、滅多なことが無ければ

話すことすらしない。でもそれが良い。藍、何事も丁度よく回さなければならぬの、人は妖怪を恐れなくなつてはダメだし、かと言つて妖怪と敵対しすぎてもダメ。ちょうどいいと思わない？人の味方である寺子屋の半妖と得体の知れない、人に仇なす妖怪だけを殺す感情のない化け物」

そこで私は初めて紫様の考えに気付いた

そうだ…紫様はいつだつてずつと先のことを考えている人なのだ

「白墨が人里の被害を出さなければ、『人里内は気味の悪い妖怪が徘徊していることによつて安全だ、だがソイツは信用出来ない』それも時間が経てば日常となる。恐怖を残しながらも」そういう「ルールがあるのだと納得させることが出来るわ」

「人里の外はこれまで通り妖怪は人を襲つていいのだから危険が伴う。それでも人間は人里内だけで物資のやり取りをする事は出来ないから必ず外へ出る必要がある、危険が伴うから博麗の巫女の必要性は失われず、危険な仕事だからこそ貰える金は多く、それによつて人里内の経済は回るようにできている。時間はかかるけどこれが幻想郷を安定させる最も簡単な方法よ」

たしかにその方法なら確実だし、悪いことと言えば時間が掛かるということだけだ。それもルールを定着させるという意味ではそこまで大きな弊害にはならない

なるほど、紫様が言っている通りこれなら確実だろう

ただ……

「紫様、白墨がどんな行動を取るかは予測がつかないのでは？」

そうこの作戦は白墨の行動が全てこうなるだろうという推察から来ているものだ

あの妖怪がそこまで考えて動いているようには見えなかった

「ふふふつそれこそ一番心配しなくていい事だわ。確かに白墨は何を考えているかわからないわよ？けれどこれでも何百年も観察してきたのだから行動パターンは知り得ているわ。あれは必ず私の予想通りに動くはずよ、だって今までがそうだったもの。そもそもあれはそこまで他人を重要視しているようには思えない」

いつに無く自信ありげに紫様は言った

私は紫様のことを疑わない。ならそうなるのだろう

「お茶、入れてもらえるかしら？」

結界の修復も一通り済んだのか、こちらを向いて私に命令した

「後10年もすれば藍にもわかるわよ」

後ろからそんな呟きが聞こえて私は外へ出た



「ひっ…」

どこからかそんな引き攣った声が漏れる

先程まで少年を襲おうとしていた妖怪が目の前で血を吹き出しながら弾けた

異様な光景に人々は誰一人として言葉を発することは無かった

身長の高い無機質な男が少年に近付き、そして次に何かを確認するかのように周りを見渡した

そうだ、目の前の少年を襲おうとした妖怪を殺したのは他でもないこの男だ。

突然人里にやってきた八雲家の名を借りた謎の妖怪

みんな不気味がつて誰も近付こうとせず、その妖怪も自分から誰かに接触しようとすることは無かった

だが突然魂を取り戻したかのように動き出し、少年を襲おうとした妖怪を一瞬で何の躊躇いもなく殺した

とても無機質な行為に、その妖怪が少年を助けたと思ったものは誰もいなかった。

先程の妖怪なんかよりも余程恐ろしい、命をなんとも思っていないさそうなその目が何より不気味だった。

「すまん……ちよつと通してくれ！おい！何があつた！」

そのちよつと焦つたような声を聞いて少しだけ安心する

この人里に住んでいる者なら誰もが知っている慧音先生の声だ

「一体何が……！」

人混みを割つて入つてきたから慧音先生はそこに転がる妖怪の死体と、その妖怪を殺した男を見て事情を察したらしく、顔を険しくさせた

「八雲、紫の……！とりあえず、みんなはもう帰つてくれ……あとは私がどうにかしておく……。」

その言葉に従い、少しずつその場を去っていく

皆不安気にチラチラと振り返りながらも慧音先生を信頼して、その場を後にした

博麗の巫女が突然やってきて幻想郷のルールとやらと八雲紫について説明してきたのが数日前、その3日後にやってきたのがあの灰色の男……。

幻想郷は少しずつ、けれど確実に八雲紫の思惑通りに進んで行った

第二十三話 人里と警備員

身体が強ばるのが自分でもよく分かる

長い人生の中それなりに緊張することには慣れていたと思っていたが存外そうでも無いらしい

それほどまでに目の前のソレは異質だった。私が出会った中でも最も人間味が薄く、最も機械的で、その目は冷酷なものだった。そしてその殺し方もまた異質だ。

急に動き出したかと思うと、一瞬の躊躇いもなく妖怪の頭を吹き飛ばした

私だって人里を守るためなら躊躇いなく妖怪を殺すだろう、ただそれは誰かを守るといふ事のために他の命を奪うのだ、だがこいつは違う。

話だけを聞いたならあの少年を助けるために動いたように見えるだろう、だがあれは、違う。あの目は違うのだ。あれは誰かを守るとか、誰かのためにとかではない。一つ動かさず、まるでそうなるのが当然かのように妖怪を殺した。

その無機質な目で、一切の無駄なく、あたかもその妖怪を殺す為だけに存在しているかのように。

あの目で見られると身体が強ばる、身体が一瞬で冷たくなり嫌な汗が頬を伝う。まる

で生物とは思えないその異質さに経験した事の無い種類の恐怖が身を襲ったのだ。

数瞬迷ったあと、意を決して言葉をかける

「まずは、人里の子を守ってくれたことを感謝する：私だけなら間に合わなかったかもしれない。ただ、何も、人里内であんな殺し方する必要は無かつたんじゃないか：？それだけの力量差があるのなら無理に里の人を怖がらせず他の場所に移したり、里の人々が居なくなつてから殺すことも出来ただろう：」

なぜあんな不気味に、里の人々を怖がらせるような真似をするのか、と私は問うた
相変わらず無機質な顔で初めてその妖怪が口を開いた

「仕事だ。」

その言葉で嫌な相手に結び付いた

「八雲…紫か…。」

目の前の妖怪の持っている木彫りのそれが他でもない八雲の使いを示すものだ。少し前に博麗の巫女と稗田家の当主という幻想郷では決して無視することの出来ない二大勢力が共に妖怪との擬似的な共生を発表した。

その時にいた八雲紫という妖怪がそのルールを守れるように手配すると言っていたのを思い出す

それが、そのルールを守れるようにする者がこの妖怪なのか。

私は八雲紫もこの妖怪も信用することなんて出来なかった。

決して大妖怪程の力がある訳じゃない、目の前の妖怪はせいぜい中級妖怪がいい所だ、例え争いになったとしてもきつとて楽な戦いでは無いだろうが勝つことは出来るだろう、ただ里の人間にも攻撃が及んだら？

私は全てを守りきれぬ自信がなかった

俯いていると、頭の潰れた妖怪の死体に、まるでうじが群がるように砂のようなものが付着していく、その気持ちの悪い光景を目の当たりにして思わず1歩後退する。

「何を、しているんだ…？」

声は震えていた。妖怪の死体は周りに飛び散った血も含めてまるで地面に沈んでいくように死体が消えていく

「……だと、汚いから、掃除」

淡々と妖怪の死体を片付けると、先程まであったはずの死体や血の跡は少しもなく、まるで何もかもが無かったかのようなようだ。

それを確認すると八雲の妖怪は興味を失ったかのように離れていく。

私はその光景を見て、しばらくそこから動けなかった。

もし自分が死んだら、ああやって処理されるのだろうか？

そんな嫌な考えが、頭から離れなかった



人里で人を襲おうとした妖怪を殺す、分かりやすくいいじゃないかすっごい単純な仕事だ。

それに人里内でそういうことする妖怪のほとんどは小物も小物、雑魚ばっかだ。間違っても勇儀みたいなバグキャラは来ないときた。雑魚狩り、正に俺にぴったりだ。

手からサラサラと出していった俺の灰は既にこの人里中にばらまかれている

つまりは、いっどこで妖怪が暴れだしたとしても直ぐにわかるのだ。なんなら今人里で話されている全ての会話だって把握出来る。面倒臭いから暇な時にしかやらないけどね！

ということでのこの人里内は俺特製灰の監視カメラと盗聴器で何が起こっているのか丸わかりということだ

極めつけに人里の至る所に灰の山を作ってバレないように安置してきた、これによって離れたところにいたとしたも直ぐに灰逃げを使ってその暴れている妖怪の元へ駆け

つけることが出来るのだ

ふっふっふ……どうよこの完璧な仕事体制……!

なんなら俺は寝る必要がないから24時間稼働中だぜ……フツ俺の職場はブラックだな!

なんとも楽な仕事か!クズを殺して食う甘味は美味い!俺の給料(甘味)の為に文字通り塵になつてもらうぜ!

ただ甘いものばかりだとバランスが悪いのも事実……ということであれは味噌汁が飲みたい!健全な大和魂を心に宿したのならみんな大好きな心温まる最強のスープだ

そんなわけで人里内を歩いて、目的の場所へ行く

そこには子供がやる気のなさそうに店番をしていた

ゆかりからは普通に人里の施設を使つていいと聞いているから俺も当たり前のように活用する

良さなんてわからんが適当に大根を1本持つていく

「お兄ちゃん客?大根1本130円ね」

相変わらず俺は金なんて持つてないのでいつものあれを取り出す

懐から地底の時にご飯代として物々交換してもらつていた勇儀特性の酒だ

それを1本少年に差し出した

ほらその大根と交換じゃ

「……お兄ちゃん金ないの？それじゃあ売れないよ」

「えっ……」

そう言つて少年は大根を戻してこいと手をヒラヒラさせた

なんだと……地底じゃ何よりも高価な酒だったのに……！俺が絶望して固まっていると奥から焦つた様子で女の人が向かつてくる

「春水……あんた何やって……！……すいませんッ！その大根ならいくらでもあげます、代金は取りません！」

物凄い勢いで焦りながらその女性はペコペコと頭を下げた

ついでにその少年の頭をガシツと掴んで無理やり頭を下げさせてもいる

「な、何言つてんだよ母ちゃん、ちゃんとお金貰わなきゃ……」

「あんたは黙つておきなさい！」

その迫力にこつちがビビる……

と、とりあえずこの大根貰つていいの？あ、ありがたいけどちよつと怖いぞ

ちよつと気ままずくなつて言われた通り大根一本だけ貰つてそそくさと店を出た

でもまあタダでくれるって事は良い人？だな！今度なにかあつたら助けてやろう……

うん。とりあえず今日はスタコラサツサと逃げる、特に逃げる必要も無いが逃げた。

人里からほんの少し離れた草原の？少し盛り上がったところに座って生の大根を齧る

うん。これはこれで悪くないけど料理にしないとダメだな

でもなあ…物々交換ダメなのか…。俺金持ってないし…

生の大根…いやまあまあ美味いんだけど…。つというかわざわざ味噌汁の具を

買ったとしても作る場所がないじゃん

俺そういうええ家ないんだった

ゆかりにどこで住めばいいと聞いた時だ。

『あなた別に眠る必要ないのよね？』

『…？コクコク』

『貴方って別に特別なことしなければ疲れたりとか疲労が溜まったりとかしないのよね？』

？』

『…？コクコク』

『そうっ！じゃあ私は結界の修復をしてくるから契約よろしくね！』

(えっいや家…)

とまあこんな感じで、俺の雇用主さん俺にホームレスしろって言ってくるんだよね

確かに妹紅と旅してた時とかは何年も休まずぶっ通しで歩き続けたりもしてるし、一度も寝たことなんて無いけど、心休まるおうちは大切だ。

それが今じゃ開放的で風通しの良い土の床だよ

なんてこつた勇儀なんて食べ物と住む場所もくれたのにこの差だよ：

とにかく自分で作るってのはなしだ。作れる、作れない関係なしに作る場所がないのだからな

困ったな、そうなるとやっぱり人里のご飯屋さんで食べるのが理想なんだが、金がない

紫との契約で毎日お菓子だったりと言った甘いものは送られてくるのだが、普通に食べるご飯は無い

俺は1日2食は食べたいからなあ：流石に契約してる手前、紫に金をせびるのは無理そうだし……

しばらくは魚でも釣って、誤魔化そうかな：とか考えていると、ある1つの妙案が頭に浮かぶ

そうだ、ちょうど良さそうなヤツがいたじゃないか！頼むだけならタダだから言ってみよう



「…は？お小遣いが欲しい？貴様は何を言っているのだ？」

…俺は既に後悔している……。そう俺はこの地上で唯一面識のある九尾の藍さん：先輩にお小遣いくれー！と頼み込んでしまったのだ

怖い、むっちゃ怖い。というか顔が怖い。ゆかりみたいな笑顔でビビらせてくるタイプじゃなくて普通に顔が怖い

目は細められ怪しく光り、眉間にシワを寄せ、俺を眼力だけで殺せそうな目で睨みつけてくる

ドスのきいた声はヤクザそのものだ……。

ひえ、ひえっひえ……。

「それより貴様、人里はどうした？なぜこんな所まで来ている？わかっているのか？もし人里内にいる人間に妖怪による被害が出れば、紫様の計画は大きく遅れる…それほど重要な事なのに貴様はなぜここにいる？」

ひゅ…かひゅっ…

ひ、人里は灰をばらまいてるから大丈夫、；、今だって何かあったとしても、直ぐに灰逃げで駆けつける事が出来るから……

それを口に出して伝える訳にもいないのでとりあえず大丈夫ということを教えるために親指を立てて、大丈夫と一言だけ言った

「どこからそんな自信が…、いや何かそういう手段があるのか…？まあいい、あの程度のこと出来ないう無能でもないだろう」

藍が話はそれだけとその場を去ろうとして少し焦る

本題のお金を貰ってないじゃないか！

「お小遣い……」

言つて直ぐにまた後悔した

ギロリと明らかにイラついた目で再び睨まれる。

「貴様……いやしかし、それだけでやる気を出すなら安いものか……。」

そう言つて服の中ををゴソゴソと探し、やがて紐で結ばれた包みを取り出し俺に投げた

「1ヶ月後にまた来い、それ以上はやれん」

それだけ言うのと今度こそ用はないとその場を離れていった

包みから程よい重さが伝わる、これだけあれば朝晩飯が食える！やったぜ言つてみる

ものだな！

怖いけど藍も良い奴だな！怖いけどね！

よし、今日は何を食べようか？まあしばらくは人里で食べるとしても、釣りは好きだからな、それはそれとして釣竿でも作っておこう。

ふふふ、やはり地上は楽しいな

第二十四話 肉友同盟

俺は動かない。ただじつと置物のように、ピクリとも動かずにその時を待つ

きつと傍から見ればなんかのカメラで撮った静止画像のような印象を受けるだろう。

ただそれも釣り人という人種にとつては日常茶飯事だ。

やがて釣竿が重く引かれ、糸がグググと沈んでいく

ようやく動き出した世界で1秒ほど待った後に俺も、バツと動き始める

釣竿と釣り糸が切れないことを願いながら腕を力強く引く。突然かけられた力に為す術なく、その糸の先にいた獲物は中に釣り上げられた。

釣り上げた魚を直ぐに水の張った桶に放す

ぴちやぴちやと水を撒き散らしながらも魚は桶に収まった。

ふふふ…大量大量！今釣り上げた奴で5匹目だ

これだけあれば充分だ。魚の食べれない部分を取り除き、血を洗って串をぶつ刺す
懐かしいな、妹紅と旅をしていた時はよく魚をこうやって夕飯にしていた

あの時はなかった塩をまぶして地面に魚を突き刺す

河原で拾った手頃な石で魚の周りを固めて火をつける

これで完璧だ……!

別に釣りよりも自分で取りに行つた方が早い、ああやって待つ時間が楽しいのだ。いい天気の中、気持ちのいいそよ風を浴びながらする釣りはなかなか趣がある

パチパチと魚の焼ける音といい匂いがしてくる。堪らない……それが自分が苦勞して取つたものだとなお良い。

そんな至福の時間に嫌な知らせが入る

また馬鹿な妖怪が人里でやらかそうとしてゐるらしい、今週で2度目だぞ……?
めんどくさい気持ちになりながらも魚の火加減を見る。

……これぐらいなら5分で戻ってくれば大丈夫。

俺はその妖怪の場所を特定して灰逃げを使った。



「んー、絶妙な塩加減がまた……」

「……………」

人里の妖怪を殺して元いた場所に戻ると、そこには他の妖怪がいた。

敵だ、人の幸福を奪わんとする悪だ。そこにいるのは間違ひなく倒すべき悪だ。妖怪は少女の見た目をしている。

妖怪の髪は金色で可愛らしい赤いリボンを付けていた。

黒い大きなスカートを履いた妖怪はそれはもう美味しそうに俺の焼いた魚を口いっぱい頬張っていた。

妖怪はとても満足そうな顔をして両手いっぱいを持った焼き魚を食べる。ガツガツと見た目相応に口元を汚しながら美味しそうに食べる

深い悲しみと、後悔が押し寄せてくる。俺のお昼の楽しみが奪われたのだ。故も知らぬ妖怪に奪われた……。それを再び理解して今度は怒りがふつふつと込み上げてくる

許せん

固まっていた身体が怒りによって動かされる。突き動かされたと言ってもいい。1歩、確かに大地を踏みしめて1歩前に身体が動く。

しかし、身体は止められた。

他でもない俺自身の意志によって止められた。走り出さんとする身体が、そうしようとしていた本人の意志で止められたのだ。

：未だに俺に気付いていないのか幸せそうにもつきゆもつきゆと魚を頬張る少女。赤いほっぺをこれでもかと膨らませて、リスみたいに……

決して行儀の良い食べ方なんかじゃない……口や手を汚して……そんなことすら気にせず食べていく。とても……とても……美味しそうに……。

ふよふよと浮遊しながら欲張りな少女は……普通は捨てるであろう骨すらもバリバリと良い音を鳴らして食べていく……。

俺の魚だ……俺が苦労して釣った魚だ……。それをぽつと出の妖怪に奪われてシヨックだ。けど……だけれども……美味しそうに……！そんなに美味しそうに食べてくれるなら……食べ物への感謝を忘れず食べてくれるのなら……ならば……ならばあ……ううう……ならば……よしッ……それならば良いのだ……！

美味しそうに食べる姿勢は悪では無い、だから良いのだ……。そもそもあんな所に放置していた俺が悪い……ウウ……でもあの塩高かった……幻想郷の周りには海がないから……だから高かった……俺も……食べたかった……。

少女は全て食べきって満足したのか、小さく幸せなゲップをした後に両手を合わせ、やや苦しうにご馳走様でした、と言った

それを聞いて、固まっていた身体はプツリと糸が切れたように沈んで膝を着く。

「うっ……うう……」

声は意図せず震えていた

無くなってしまったものは仕方ない……。美味しく食べられてしまったのだからそ

りやあ無くなる。そう、仕方ないのだ

心じや理解出来ている…、ただ身体はそうとはいかなかった。未だにショックでガクガクと震える身体は抑えようがなかった。憎むべき相手などいない。

「…ん？なんだか嗅いだことのある臭いが…なんで跪いているのだ？」

やつとこさ俺に気付いた少女がそんな残酷な事を聞いてくる

「な、名前は…？」

相変わらず震えた声を絞り出すと、元気いっばいな声が返ってくる

「…？ルーミアなのだ！」

俺が震えながらさつきまで魚があつた方を見つめると、何かに気付いたルーミアはドキリと顔を震わせた

そうだ、処理された魚は普通に考えて、誰かの手が加わったものなのだ。自然に焼き魚がドロツプするような世界じゃあ無い

そこに処理され、焼かれている魚があるのなら、それを釣って、食べようとしていた誰かが居るのだ…。

ルーミアはそんな当たり前の事を今知った。

少し気まずそうに頬を掻くと口を開いた

「え、えーと…お、おいしかったのだ！」

な、ならば…よ、し…。



「いやー、すまなかつたのだ。お詫びにこれあげる」

そう言つてルーミアが差し出してきたのは肉だった。もう少し詳しく言うとなの手首らしき物だ

やめろよ！俺は人肉はなんかこう…ダメだろ！

ぶんぶんと顔を振つて断る。

「あつそう？美味しいのに…というかお前、やっぱり何処かであつたことあるのだ？」

そう言つてルーミアはスンスンと俺の体に顔を近づけて臭い嗅ぐ

しばらくそうしているとルーミアの顔は最初の脳天気なバカそうな顔から、何だかおかしな奴を見る目になつていった

失礼なやつだな…初対面の相手の臭いを嗅ぐほうがおかしいだろう

「お前…なんでまだ生きてる？」

その声は問いただすように、珍妙なものを見るような目で俺の瞳を覗いてくる
ゆるゆるときかせていた眼を大きく広げ、瞬きもせずにとだジつと…

「やっぱり…この臭い、そう言えばあの日も釣りをしていたのだ…。なんで…あれから何年経ったと思っているのだ、ニンゲンが生きていい年数を超えている…」

暇だからと、取り出した固い干し肉をガシガシと噛んで食べる

ちなみにルーミアはピタリと止まってずーっと興味深そうに俺を見てはブツブツと何か言っていた

奇妙な独り言は続く

「仙人にでもなったのか？いやでも全く臭いが変わってないなんて有り得ない…いい加減話してる最中に食べるのをやめるのだ…あと1つ私にもちようだい」

ルーミアと2人で固い干し肉をガシガシと噛みながら見つめ合う奇妙な時間が続く

不思議と嫌な時間ではなかった

それはルーミアも同じみたくで、変なものを見る目はしているが、嫌な顔はしていないかった、なんなら今は固い干し肉を食べる方が重要そうだ

「お前なんなのだ？空にいる干された干物みたいな連中達のご飯でも食べちゃったのか？」

一旦食べるのをやめて口を開く

「妖怪」

変わったとか何とか言っているが俺はずっと同じだぞ、産まれた時から髪も伸びないし、身長も変わらないし、なんなら服装だって一生同じだな

「…妖怪？」

それを聞いてから俺の体や服をベタベタと触ってくる

「…妖怪なのだ…。」

しばらくそうしていたのち、諦めたようにそう一言漏れる

失礼な、こちらら万年スーパー妖怪だぞ、激しい怒りで目覚めるタイプだな！

納得させるために妖怪っぽいポーズを決めて手から灰を出す

「うわっ煙たいな…にしても…うーん」

そう言っって少し悩んだ後に手を大きく叩くとさっきのさっぱりした様子になった

「まあ、いっか！魚もくれた恩なのだ！肉友同盟を結成するぞ！手始めにもっと魚を釣るのだ！結成祝いの魚パーティー！」

お、おう？

勝手に話を進めて勝手に俺の首に肩車をするように乗っかってくる

ただ単純に塩が欲しいだけのようないきなり乗っかってやろう

肉友同盟か…

まあ…良いか！肉友なのに結成祝いが魚なの？とかは置いておいて俺も魚は食べた
いからな！

小さな妖怪を頭に乗せて釣竿を再び持つ、肝心のルーミアは、わはー！とか言ってる
だけで全く手伝おうとしてこないがまあ仕方ない。

明日はどこへ行こうか、幻想郷は狭いようで1つ1つの場所が個性的で楽しいからな
…ここを旅するのは楽しいに違いない

そんなことを考えて釣りをする。この時間が好きだ

飽きて俺の髪の毛を引っ張って遊ぶルーミアに呆れながらもゆっくりと時間が進む

…あつ魚が掛かった

第二十五話 久しぶりの地底

旧地獄、地霊殿

ジメジメとした暗い部屋で、勇儀さんには虫みたいだと形容された私は変な納得をしつつも本を読む

実際は昔地獄であつた名残もあつて地霊殿は乾燥しているのだが：

本を読もうとして手に取り、数ページだけ読んでは表紙を閉じる

かれこれ4回は繰り返し返した行動だ

ため息を吐いて本棚に向かう

そこには本棚びっしり：とまでは言わないが決して少くない量の小説が置かれていた

私以外は誰も読むことは無いだろう知識にもなりはしないただの作り話

さつきまで読もうとしていた本を丁寧に本棚に戻す

本棚に飾られた本の表紙を優しく撫でては少し寂しい気持ちになつた

ここにある本は全て読んでしまったものだ

そして私がさつきまで持っていた本も既にずっと前に読んだもの

本を読む時、いつもドキドキと……きつと普段の私からは想像もつかないだろうがドキドキともワクワクとも言えるような興奮感に包まれながらページをめくる

きつとそこには私の知らない世界があつて、私だつて読み解くことの出来ない登場人物達の感情の変化があるのだ

それを想像して表紙を開いて、私の世界にはページをめくる音だけが響く

私にとつてそれはとても幸せなことで、同時に限られた幸せとも言える

一度読んでしまった作品はそれまでだ

記憶に鮮明に残るようなものでも、汗をびつしよりと書くような興奮するものだったとしても、一度読んでしまえばそれで終わる

その作品をもう一度読むということは、感動の焼き直しをするということなのだ

読んだ当時の興奮を、喜びを、今度は“二度目”として……知っているものとして読み直すというのは、どうしても無粋なものに感じる

確かに名作は二度読んでも名作だろう

だけでも、ああだけでも、きつと二回目を読んだ時、私はいつとも変わらぬ様で、あー面白かった、と満足することができずに違いない

ただふと思うのだ、一度目に読んだ時の興奮が、その感動が、上書きされてしまうのではないのだろうか、と。

ふと本棚を開いた時に目に入り、あーこの作品はあそこが面白かったな…あの場面ではとても驚かされたな、と読んだ当時のことを思い出すのが好きだ、まるでその時の喜びが甦るように心の奥をつついて来る

もし二度目を読んではしまったら、そうやって思い出そうとした時に一度目の感動を思い出すことは出来なくなる

あそこが面白かった、あの場面に驚かされた、と思い出し、最終的にはこの本はとてもいい物だったと決定付けるだけで、きつとそこにはあの心の奥をつついてくるものは無いのだ

だから私は一度読んだものは二度と読み直さないし絶対に忘れないように深く集中してゆっくりと読む

それでももやっぱり、読み直したくなって表紙を開くのだ

けれども思い出を穢すようで勿体なくてまた戻す

そうして戻す時に革の表紙のざらざらとした触感をそつと撫でて思い出す

その時の小さな興奮を、同時に読み終わってしまったことに対する少しの寂しさをセンチメンタルな気持ちになるこの行動が、私はそれほど嫌いじゃなかった

フツと小さく笑って椅子に座る

静かな休日、たまには珈琲を飲むだけの無駄な一日があつても構わないだろう

そうやって感傷的な気分には浸っていると、下の階から元気な、もう少し詳しく言うとなんか嬉しそうな声が聞こえてくる

お燐の声だ

「さとり様ー！お客様ですよー！お茶を入れてきますね〜！」

「何かしら？お客様…？」

はてそんな用事があつたのだろうか？それとも約束も取り付けずに来た者のだろうか？

今日は気分がいい…あんまり面倒くさそうな事だつたら明日にしてもらおう

大丈夫、お燐の声色から察するに八雲とか勇儀さんみたいなやばい妖怪っていうのではないでしょう

しばらくして、早くも遅くもない足音が等間隔に聞こえてくる

私は完全に油断しきつて珈琲を飲みながら待っていた

やがてノック音が部屋に響く

やけに丁寧な印象を受けた

「どうぞ、入っても構いませんよ」

次の瞬間、私は深い後悔とともに珈琲を吹いた

部屋に入ってきたのはもう二度と顔を合わせることには無いと思っていた白墨だった

なにがッ！来てやったぜさとりん、だ！



「けほつごほつ……んんん！私の感傷的な時間を返して下さい」

少しむせて咳払いをするさとりん

なんだか睨まれているようにも感じるけど気の所為だろう

地底にいた時のご飯のお礼とかしてなかったからな！

どうだ！来てやったぜ！さとりん！

それに、人里での会話を聞いただけだが、偉い人の所へ行くにはなんか持つていくのが礼儀らしいからな！地底に引きこもってるさとりんの為に色々持つてきたのだよ！

「……そもそも、偉い人の所へ行くならその前に話を通しておくのが礼儀です……八雲紫も勇儀さんもそんなこと一度もしてくれませんでしたけどね……まあ私も偉くないですが……ハハハ……。……それで……なんです？大した用じゃないなら帰って欲しいんですが」

なぜだかまるで精根尽きたように気力がないさとりん

まあそりゃこんな暗くてなんも無い地底にいたらそうなるのも理解出来る

俺だつて地上に出た時は気分が高まつて目をキラキラさせながら森を歩いたしね

「そういえば……なんでこつちに帰つてこれたんですか？また何か悪さでもして巫女に突き落とされました？……ああ。そうでしたね、あなた八雲紫の下についてるんですね。ああ、くれぐれも地底の住人を地上にあげるような事はしないで下さいよ？大問題になりますから」

相変わらず心を読めるというのは便利らしく俺がいちいち話す間もなく何となく理解してくれている

さとりんが言った通り俺自身がこの地底と地上の通行証みたいな役割をしているらしく、自由に行き来できるのだ

なんだか閻魔様からの許可を貰ったからどうこうといった話をしていたがよく覚えはない

まあそんなことはいいのだ

ほらお土産

紙で包まれた物をポイツとさとりに投げ渡す

ふつつつふ中に何が入っているかは開けてみるまでの……

「本……ですか？ありがとうございます」

……心は読めても空気は読めねえなあ！お前！

「そう言われましても……なにせそういう性分ですから。にしてもよく本なんて調達出来ましたね……私だつて手に入れるには結構なお金がかかるのですが……」

そう言つて少しチラチラと顔色を伺つてくるさとりん

まあ実際に本を買おうとすると高い

印刷技術なんて無いものだから本なんてめつちや高い、そもそも紙が高いんだから当然だ

だがまあ安心して欲しい、もちろん盗んできたとか言うわけでもない

幻想郷は案外便利なもので貸本屋みたいなところがあるのだ。本は返さなきやいけないけどその分安く済むからね

だからまた2週間後ぐらいに来るから本はその時返してな、そんでまた数冊適当に借りてきてやろう

「貸本屋……へえ……地上は便利な所もできてるんですね。ただ白墨さん、これら全部昔話じゃないですか。子供に読み聞かせるようなやつ」

しばらく真剣な顔で本を物色していたさとりんは気まずい顔を隠すように人差し指でカリカリと頬を掻いた

「……？本好きじゃないのか？」

「いや好きですけど、うーんなんて言いましょうか……本にも種類というものがあってです……私が読むのはそういう物ではなくて、えーと……」

うんうんと悩んでいたさとりはしばらくして立ち上がり後ろの本棚から適当に本を数冊取り出した

「貴方はこういうのを選ぶセンスが無さそうなのでこれでも読んで私の好みを学んでおいてください。それで今度本を探す時はこれに似たやつをお願い……いやでも貴方が内容を知っていると心を読んだ時、私にも伝わってしまうのでやっぱり中は読まないで何となくそれっぽいのを持ってきて下さい」

少し嬉しそうに条件を増やしていくさとりん

め、めんどくせえ！なんだか急に凶々しいぞ……

「貴方だけには言われたくありません。それによくよく考えたらあれだけ迷惑かけられたんですから少しぐらいのわがままは許されるはずですよ。ええ絶対に……というか割に合いません」

まあ、本はそこまで嫌いじゃないし良いけど……

「まあこれはこれでお隣達にでも読み聞かせるのに使わせてもらいますよ。……でそれは別に今日はなんの用件があつて来たのですか？」

珈琲を入れ直しながら優雅に聞いてくる

背が小さいせいか背伸びした子供にしか見えないが…

それと特別な用事とかは特にないぞ？暇だから来ただけだ

「…あれ？無いんですか？てつきり例の妖怪達の封印をどうにかしたいとかだと思つていたんですが…。まあ私に言われても封印なんて解き方もわかりませんけど。あと小さいは余計です」

さとりんは素でびつくりしたのかいつもは気だるげな目を少し開いて懐かしい話をしてきた

一輪達は別に死んでるわけじゃないみたいだしいいかな。封印されてるから会つたりは出来ないけど生きてるならいつかは出られるでしょ

俺単体じゃ封印とかどうすればいいか分からないし時間の無駄だしね

「相変わらず情が薄いですね。そのうち困りますよ」

困りますよと言いながらも当の本人はたいして興味もなさそうに珈琲を飲んでいる。

失礼な俺はそれほど酷くもないだろ

それに情が薄いつてならさとりんだってそうだろに

「私は良いんですよ、身内には甘いですから」

さとりんもその事を大きく見ていないのだろう、やっぱりどうでも良さそうに珈琲を一口飲んだ

まあいいや

それより地底は何か変わったか？俺が地上に出てからもう半年くらいは経ってるけど…

「変わっていませんよ、特に。そもそも半年程度で変わるような場所でもないって知ってるでしょう？一つ挙げるなら私の心に余裕が生まれたぐらいですね、それも今日で終わりましたが…」

そう言い、さとりはじと一つと俺を見ながら手でしつしとジエスチャーをした

何か思い詰めたことでもあるのかもしれない…

なんだかくたびれた様子のさとりんはベッドに体を放り投げ、ぐで一つとしながら足を軽くパタつかせた

「なんでもないです、ええなんでもないですよ…。…ああでも変わったことと言えば最近珍しく新しい妖怪が地底に落ちてきたというのを聞きましたよ」

ほく俺より後に落ちてきた妖怪は初めてだな

未だに適当な妖怪の封印所として使われてるのかここ

まあさとりと会話してすぐ地上にのめ味気ないし新たに地底にやってきた新

人君に先輩風でも吹かしてこよう

そうしてその後も適当に話したりはしたが、特に変わったこともなく地霊殿を後にした。



日差しのない薄暗い部屋で体を伸ばして楽になる。ペットの子達には見せられないけど…

そして今一度白墨さんの持ってきた本をパラパラとめくった

どれも最終的には神様は何時でも人の事を見ているから正しい行いをしなさいだとか宗教的な教訓話やらが大半だ

まあ暇つぶしとしてはいいかもしれないがやはり私には合わないな…と。少し残念次に期待しよう

「にしても人里警備隊…ですか。確かに合っていますね」

八雲紫はよくあんな意味不明なやつピツタリの仕事をさせられたなど少し評価が上

がる

心の読める私ですら頭を痛めているのだから雇用主である八雲紫からすればもつとだろう。

でもなるほど、その仕事は例の九尾ならまだしも他の妖怪にはそうそう任せられないだろう

一日中狭い訳でもない人里を監視するという事が出来る妖怪が少ないのもそうだが、人間を守るために同族をなんの躊躇いもなく殺せるような妖怪も少ない

プライドの高いやつなら尚更、それこそ鬼のようにキツパリとした妖怪か白墨さんのように自分以外はどうでもいいと考えている妖怪以外でなきやそうそうに無理だろう

一度や二度は平気でも、普通は心の中では小さな不満が少しづつ溜まっていくもの
妖怪は自分のやりたくない事は基本的にしない出来ない

わがままという訳ではなく妖怪という精神に依存した生命の構成上そうなっているのだ

またそれもあのおつかない九尾ならカンタンだろけど…何か忙しいのだろうか…？
ともかく、白墨さんはそれに関して言えば全くもって問題が無い

恐らく本人は意識していないだろう、白墨さんは本当に他人に対して関心が薄い
その者の交友関係から趣味嗜好、生き死にまでも興味が無い

ただ冷たいというよりも元からそういうのが当たり前なのだろう、その証拠に本人自身はわざわざ他人を遠ざけたり、孤独になろうとしたりとかは特にしていない

なんならほとんど話さないが割と気軽に他者と関わりを持つたりもする程だ

人によつては友達を相手にする時のような感情すら持つているかもしれない

ただ一般的な“友達”というものへの価値観が根本から違っているのだ

白墨さん自身は相手に対して友達のような感情を持ちながらもその者がどのような状況になつているかに興味が無い、例え次会う時が死体になつていたとしてもその事実を冷静に理解した後何事もなかつたかのように生活出来る

ある意味では冷たいと思われるだろう

だが彼からしたらそれが普通の友達との距離感なのだ

自分の都合がいい時は気まぐれか暇つぶしで会いに行き、居なくなればそれはそれ。

妖怪ならば決して珍しくは無い

人の生き死に頓着がない妖怪なんて多くいる。感傷に浸るなんて方法すら知らない。

そんな妖怪だからこそ八雲紫は何の心配もせずに人里を任せられるのだ

表面上は気軽に接してくるから普遍的な感情を持つ人里の人間達からしたら理解が

出来ないでしょうね

「…あついや気軽に接してくると知つているのは心が読める私だけ…か。あれ？地上は

想像以上に酷いんじや…」

無言無表情に躊躇いなく妖怪を殺し回る妖怪…

「八雲紫もえげつない手法を取りますね…」

白墨さんが地上に出てから約半年

そろそろそんな異質な白墨さんも人里に馴染めているのだろうか？……………。

…地上の事なんて考えないで地底に籠っている方がいいですね…本だけは楽しみに
来月まで待ちましょう

第二十六話 振り回される人達

懐かしい地底の街を歩く

灰をばらまいてるのであれば新しく落ちてきた妖怪というのが大体どの辺に居るかは分かっている

目的の新人は早くに見つかった

人通りの少ない道の隅っこで樽に背をもたれさせて座り込んでいた
ややボロボロで目はやさぐれていた

小柄で赤と青の羽とも飾りとも言えないようなへんな物を背中に着けた妖怪だ。妖怪はちらりとこちらを見たあと直ぐに顔を腕に埋めてしまった

奇しくもいつぞやのもこうのようだった。歳もちょうど同じぐらいのように思える、まあ妖怪だから見た目と実年齢なんて釣り合っていないだろうが

まあ俺はこのまともな先輩だ、どこぞの会って早々殴り飛ばしてくる野蛮な鬼とは違う

人里で買ってきたおだんごを一本だけその妖怪に差し出した

1分2分……しばらくそうしていると面倒くさそうに顔を上げた



「紫め…また厄介なものを引き寄せたな…」

幻想郷の賢者の一人でもある摩多羅隱岐奈はここ数ヶ月間観察していた妖怪、灰の妖怪を再び確認したため息をついた

ちなみにその妖怪は何故か地獄にいるはずの妖怪を地上に連れてきて一緒に釣りをしている

「あれ協定違反だろうに…」

その妖怪がある日突然紫の式神となり人里で動くことには疑問を抱かなかつた

隱岐奈にとつてもそれは都合のいい事であり総じて幻想郷の為になると判断したからだ

そんなくだんの妖怪だが最近見れば見るほど不明瞭な点が出ており、それが現在の隱岐奈の悩みに繋がっていた

別に紫がどんな妖怪を使役しようともそこまで深く干渉しようとは隠岐奈も考えていなかった、そう普通の妖怪なら

その妖怪は明らかに純粹な妖怪としての存在では無かった。中級妖怪として見るには異常な程の攻撃性を持った結界を生み出す程度なら想定内

ただ時折見せる桁違いの再生力は別だった。

そもそもの再生の仕組みからおかしいのだ、ただ再生が速いだとかの話では無い。

通常の自然治癒の延長上にあるそれとは違う再生方法、肉体を回復させると言うよりも壊れた部品を新品に取り替えると言った方がしっくりとくる

隠岐奈はこの異質な身体の構造から白墨という妖怪の不可解さを十二分に理解していた。身体が治るという結果は同じであれその過程が全くもって異次元なのだ

ただ隠岐奈は迷っていた。隠岐奈自身ここ数ヶ月の観察では白墨が幻想郷にとって良いものなのか悪影響を及ぼすものなのか測りかねていたからだ

何も悪いことは起きていない、ただ明らかに不可解な、妖怪とも人間とも言えるか怪しい存在を置いておくというのも如何なものか

そして何より紫がそのことについて理解しているかどうかが問題だった

平常時ならその小さな違和感すらも気付くかもしれないが、今の紫は毎日毎日過労で肝心の幻想郷のことすらまともに見れていない

あれでいて結構抜けている所があるのをそこそこ長い関係にある隠岐奈は知っていた

だからこそ今回の件についても伝えるべきか悩んでいた

もしそれが幻想郷にとつて悪影響を及ぼす可能性があるならすぐにも紫に伝えた方がいいだろう

しかし幻想郷に対して過保護になりすぎている紫がいつ過労でぶつ倒れるかも微妙な時にそんな爆弾ネタを安易に伝えるのもどうかと考えていた。

隠岐奈自身特に悪いものでもないのなら放置しておいても問題ないとすら考えていた、性質が違うだけで存在自体が幻想郷に悪影響を及ぼすことは無いと判断していたのも相まつての事だった。

そうやって納得しかけた時に起こったのが地底の妖怪と地上で魚釣り……だ。

隠岐奈は頭を痛めた、とても痛めた。地底と地上ではそれぞれの代表者である古明地さとりと八雲紫、そして平等に判決を下す閻魔によつて不可侵条約が結ばれている

なんてことをしているのだ、紫が見たら泡を吹いて倒れるぞ

隠岐奈は白玉楼に住まうかの亡霊に尋ねることを考えて直ぐにやめた

あいつが入ってきたら面白がって余計に話がややこしくなる様な気がしたからだ

悩んで、悩んで、隠岐奈は諦めた

特に今すぐ何かが起こるわけでは無いのだからほつとけと半ばヤケになって諦めた元を辿れば必要以上に幻想郷に過保護になっていて紫にも責任はある少々痛い目見る方が幻想郷の為になるだろう。

隠岐奈は適当に最もらしい理由をつけて考えるのをやめた



なんだかんだ言つて家でずーっと日向ぼっこしてる時間があとから大切に思えてく
ると思う。

この前は久々に釣りとか焚き火とかキャンプみたいなことしてたから疲れてしまっ
た。それはそれで楽しいけれどやっぱりこういう穏やかな時間も良い

それに荒れてる時はああやって思い切つて遊んだ方が健康にいい。

彼女も気分転換になつただろう、たぶん。

軽く背伸びをし、思い出したかのように湯のみに手を伸ばす

うん、緑茶。美味しい。

これで新聞とか読んでれば日曜のお父さんだなあとかなんとか考えてお茶を飲む
いや、にしてもこの緑茶美味しいな…

毎朝飲みたい

しばらくは鳥の鳴き声だけが聞こえる気持ちのいい天気、そこに極小さなやわらかい
足音が加わった

襖が開かれる

「おい」

気持ちのいい朝、座ってなきや気付かないような弱い風が程よく髪を揺らし——

「おい、貴様何してる？」

……。

驚くほど冷たい視線、俗に言うゴミを見る目とかだ…

いつも嫌われてる自覚はあるけど今日は一段と怒っている……

「身体が休まるところがなければ仕事に身が入らない、とふざけた事を言い出したから
住まわせてやってると言うのに何をしている？何故朝からさも当然のようにつらい
でいる？聞いているのか？貴様が、仕事を、するということから与えてやった、なあ？貴様
はなんだ？もしかして貴様は紫様の役に立つどころがただ邪魔をするだけの害虫なの

か？」

徐々に湧き出る怒りと、込み上げてくるそれを抑えるような冷たい声

流石の俺も背筋が凍る

「し、式神……」

「ほう？なら何故こんな所で茶を飲み暇を持て余している？そして貴様が飲んでいるお茶は私がいづも紫様に出している物だ、貴様の物じゃない。どうしても飲みたいなら枯葉を濾して飲め。わかるか？白墨、私と紫様は結界の管理でとても忙しい、貴様と違って休まる時間もないほどに多忙だ。だが、その頑張りも貴様が今のように遊び呆けてしにくじりでもすれば全て無意味となるのだ。なあ白墨、紫様が貴様に命じた事はそれほど難しいか？私が家を貸し与えて小遣いをやって、その上で頼んだ仕事はそれほど難しいのか？」

「い、いや……」

「そうか？なら少しでも幻想郷の、紫様の助けになることをしろ。最低限しかこなせない無能に渡すものは無い」

言うだけ言うと、くるりと背を向け部屋から出て行った

さ、さすがに1週間以上もダラダラするのはやり過ぎたか……

ほっとため息を吐いて湯のみを片す

このままで家から追い出されるどころがお小遣いも無くなりそうなので真面目にやろう

ゴミとして捨てられていたいくつもの紙を1度分解して元の綺麗な紙に作り変える
その紙に筆でスラスラと人里のことを書いていく

人里の数、子供の数

どの店が繁盛しててどんなものがトレンドなのか

今年は芋がいっぱい取れたぞとか

村人達が今の幻想郷に対してどう思っているのか：

挙げればキリがないようなことを余すことなく羅列していく

残念ながら人里にはプライバシーが無い

里中に俺の目に見えないほど小さな灰がある為、誰がどこで内緒話をしていたとして

もその全てが筒抜けだ

だから最近どここの家があくどいことしてるとかももちろん把握している

読書感想文の文字数を埋めるために関係ない話を長々と書いていた頃を思い出す

今の俺はまさにそんな感じだろう

とにかく先輩に仕事してるアピールをするためにどんなもの小さな事でも書いていった

多く、紙束となったそれを紐でまとめる

ちなみにこの紐は壊れて捨てられた下駄の紐だ。

まとめた紙束…あつ報告書つて書いておこう、それっぽい

その報告書を持つて藍の部屋をノックした

「なんだ？」

やや不機嫌そうにこちら振り向く

やはり顔が怖い

肉食動物みたいな目が突き刺さる

気にしないフリをしながら報告書を渡した

「報告…書？」

怪訝な顔付きで報告書を受け取り、読んでは思えない速度でパラパラと紙をめくっていく

かなりの量があると思つていたんだが…

1枚2枚とページをめくる事に藍の顔は真剣なものになったいった

「ふむ…なるほど凄まじいな、紫様が気にかけていたのもわかる。いったいどうやってこんな正確な情報を手に入れたのか…まあ今はいい」

真面目な顔つきになった藍はしばらく考え込んでから口を開いた

「充分だがもう少し丁寧にとめろ、私がない時にこんな読みにくいものを紫様に渡す気か？だが…そうだな…定期的に今のようにして持つてこい、分かることを全て書いていい、情報の取捨選択は私がする。それとは別にいつもと異なることがあればどんなに些細なことでも報告しろ。」

よしよし！じゃあもう当分はダラダラしてもいいよね！

特に引き止められるようなことも無く部屋を出る

俺は珍しくまともに仕事した自分へのご褒美も兼ねて団子屋に行った



相変わらず、人形のような顔付きで部屋を出ていく白墨にため息を付く

脅しをかけている時も、部屋に入ってくる時も変わらず無表情

それも最近だと慣れたものだった

「それにしても絞れば出てくるものだな…本当にどうやってここまで…」

凄まじいまでの情報収集能力

渡された報告書には自分だつてすぐには分からないような事や一見するとどうでも

いいようなことが長々と書かれていた

あのお店はお昼のときは混んでるだとか、この店は癖のない濃い味が美味しいだとか
…

どうでもいいと思ひ紙をめくろうとして手が止まる

“ ここのお店のお揚げはダシが効いていて絶品 ”

…でもまあ…：…しつかりと仕事をしてきているのなら問題は無い。ちよくちよく
サボるのが玉に瑕だが…

報告書を閉じるとすぐに先程までやっていた作業に戻り、時間をチラチラと確認しながらいつもより急いで作業をする

丁寧な事に報告書には店ごとの終わる時間が書かれていた

第二十七話 季節の変わり目

時に、俺は神という存在が嫌いだ

あの傲慢不遜で常に偉そうな態度が気に入らない。

持つてるものが違うだけで妖怪と対して変わらない癖に自分達は高位の存在と勘違いしている

そもそも、人間が居ないと存在を保つことも出来ない卑小な存在のくせに人に対して恩着せがましく接しているというのもおかしな話だ

伝説も神力もあのプライド高い性格すらも、全てが人によって形作られた存在、他者から貰うことでしか何一つ得られないただの受け皿

ちよつと前にもルーミアとその事について愚痴り合いながら魚をもぐもぐしたばかりだ

特にちよつと貢物を分けてもらおうとしただけなのに本気で殺しに来る所とか大嫌いだ

フレンドリーに接しようとしても殺しに来るし、ごはんの物々交換を提案しても殺しに来るし、終いには視界に映ったという理由だけで殺しに来た奴もいる

野蛮人め、許せん

ケチで傲慢で気まぐれで：そんなどうしようもない存在

それでも人は神を信じるというのだ

理解に苦しむ、正直神なんてどいつもこいつもクソみたいな奴だろうし実際そうだった。

みんなの思う理想の神様なんて存在しないんだと当時はショックを受けたものだ

だが、そうだな：幻想郷に来てから俺も少しだけ認識が変わった。

神なんてだいたいクソだ、だがそれでも、神はいた



大体秋の始まりの時

八百万の神のその一人、紅葉を司る神、秋静葉にとって初めは少し寝起きの調子が良
いなく感じる程度だった

次にいつものように秋に備えてせっせと紅い綺麗な葉を塗っている時、あれ？やっぱ

りいつもよりも調子がいいなあ……と妙な力の増幅を感じていた

妹の秋穰子が『私の時代がもうすぐ来る!』と張り切つて土をいじつてたのは記憶に新しい、何のかわりも無い、毎年恒例の事であつた

また秋穰子もそんな力の上昇を確かに感じていた。それは神として生きるならもつとも重要な力であり、自身の存在の証明でもある、いわゆる信仰心だ。

自分にとつてはちよつとテンションが高いなぐらゐの気持ちだつたが、いつもならそろそろ『穰子だけ人里の収穫祭に招かれてずるい……私も秋の神なのに……』といじけ始めるのに、今年はやけに楽しそうに葉を触る姉が印象に残つた。

心なしか自分の育てている作物、穀物も自分のテンションの高さに釣られてか、いつもよりも大きくすくすくと育つていき、今年の収穫祭は豊作になるだろうと予想出来たそんな少し変わったことがあつた数日後、時間も経つて不思議なことも薄れていった時期だ。

妖怪の山の麓のその近く、ギリギリ山天狗達の監視範囲の外でのこと。

ザクザク、と小枝を踏みしめる音と共にやや背の高い人影がこちらに向かつて歩いて来た。

灰色の着物を着た灰色の男。

頭には底の広い円錐形の笠を被つており、笠から覗く髪のもも、服と同じ灰の色

影のかかった顔は無表情で、穰子はひどく冷たい印象を受けた
他所から来たであろう妖怪

穰子は一応妖怪の山には入らないように忠告しておくかと頭を悩ませていた

一方静葉もその見慣れない変わった妖怪に気付いたのか作業を止めて様子を伺っている

結局何も思いつかないまま足音だけが近付いてくる

そして妖怪は丁度会話ができるほどの距離になつて止まった。

(ど、どうしよう!?!なんか怖い人に目をつけられちゃった…)

まさか自分の目の前で止まるとは思っていなかった穰子は顔を強ばらせ、姉に小さく
sosを送った。

静葉は無視した。

(あ、っ……)

あまりに自然に無視され、驚き固まる穰子

しかし時間は無情にも過ぎていく

灰色の妖怪がゆつくりと頭の笠を取る

穰子は、とうとう冬の妖怪が、冬を早める為に自分を殺しに来たのだと恐怖した

そして妖怪が口を開いた

「あなた方は妖怪の山にいらつしやると言う、秋の神様でしょうか？」

「…へ？そ、そうだけど…」

予想に反して丁寧な言葉で、尚且つ敬意が籠っていた。

今まで持っていた恐怖は一旦沈み、今度は困惑する

この妖怪に感じていた違和感、どこか全く関係のない者とは思えない感覚

同じように不思議に思ったのか、薄情者の姉が再びこちらに意識を向けた

「今年の秋も御二方のおかげで例年よりも豊作だと人里は活気づいています。しかし申し訳ない、私はまだ幻想郷に来てから日が浅く、御二方のことをつい最近まで知ることがありませんでした。遅れましたが挨拶に来ました、名前を白墨と言います」

話し方はたどたどしく、少し言い方もおかしいけれど、それは確かに感じる、実感できるときの信仰心

最近だと嫌味な天狗から雑魚神様扱いされたり、人里でも秋の季節以外では忘れられてるため、自分がれっきとした神だと自覚することすら少なくなっていた秋姉妹にとつては懐かしい感覚だった

ここ最近の力の出処がわかると同時にむず痒いような、そわそわするような感覚に襲われる

率直に言うとう気を大きくし、そして照れた

「へ、へえ〜！挨拶！挨拶ね！でも挨拶なんて言っても私達そんなに堅苦しい神様じゃないけどね！…ねっ！お姉ちゃん？」

「え？あつ！そ、そうね！でもほら！私達って秋そのものの神様だし？力こそ無いけど、そこそこ偉いわよね！」

静葉は心の中で自分の存在を2段階ほど格上げた

穰子にはやにやする顔を手で抑えて考えた

（素直に信仰してくれるのは嬉しい…！けどああいふ真剣な感じに來られた時ってどうやって対応すればいいの…!?か、神様つぽいつてなんだっけ？今更威厳ある神様なんて出来ないし…）

穰子は秋が来れば子供のようにはしゃいでまわり、冬が近付けばテンションが下がって地面を蹴ったりするような俗物的な神様だった

「え、えーとこほん！3日後同じ時間にまたここに来なさい、秋の味覚をちよこつとおすそ分けしましょう！」

彼女が精一杯考えた秋を司る自分にとつての神様つぽいこと。

それは1年のうちでも短い秋をたくさん楽しんで貰うことだった

そしてそのことは目の前の妖怪、白墨にとつてクリティカルとなった

「か、神様…！」

(あつ凄いぼわぼわした笑顔……)

あんなに冷たそうだった顔が溶ける姿を見て困惑しつつも、結局その日はぼわぼわした白墨の背を見て終わる事になった。

3日後、時間通りにやってきた白墨は秋穰子から栗やらさつまいもをたくさん、秋静葉からは綺麗な紅いもみじが描かれた扇子を貰った。

そしてそれから毎年この日に嬉しそうに山へ行く妖怪が一人増えた。
ある事件を知っている天狗達からすればいい迷惑である。



八雲の式神を名乗る妖怪が来てから1年

慣れた者もいれば未だに怯えている者もいる

良くも悪くもまだ1年

ただその少ない1年という期間でもそいつの話題は無くならなかった

置物みたいに人里内にいるかと思えば直ぐに消え、気付けば妖怪を殺している奇怪な

存在

殺される妖怪は決まって人里内で人を襲おうとした妖怪で、その全てが犯行前には死んでいた

眉も動かさず、表情も変えず、声を発さず殺すだけ。

ふらつと現れてはまた消えて、人が襲われそうになった時だけ命が宿ったように動き出す

そんなことを一年間繰り返してきて付いたあだ名が八雲の操り人形

本当に生きてはいない、八雲紫が送り込んだ自動で動く人形と言う意味と、ただ忠実に八雲紫の命令を聞いている人形のような奴という二種類の意味がある

なにせ奴は本当に殺すだけ、人が人を襲うような事が起きても無関心。ただし妖怪が人を襲おうとした時だけ瞬時に行動するのだ

その異様さは命を感じさせず、ただ命令をこなすだけの人形のように見えるというのだ。

送り込んできたのがあの八雲紫ときたもんだ、どんな存在か皆目見当もつかない。

そんな殺しだけをする冷たい顔のやつが周りから良いイメージを持たれる訳もなく、ただただ恐れられている。

しかし最近だと妖怪から守ってくれるのだから、恐ろしいかもしれないが良い存在だ

と言い始める者まで出てきていた

ここで言う良い存在というのは善性の妖怪という意味ではなく、良い利益をもたらすという意味ではあるが…

そんな妖怪も最近じゃあよく人里の飯屋に行くという

隣の蕎麦屋の店主が『アイツが来ると客足が遠のくんだ…』と愚痴っていた

店主曰く、良い存在では無いだろうけど確実に悪いとも言えない、少なくとも、金を払ってくれている間は客だとか…。商売魂が逞しい事だ。

たった1年、たった1年でこの幻想郷は目まぐるしく変化していた。

その変化が果たして俺ら人間にどんな影響をもたらすのか…

せめて子供が生きている間は何事もなければ良いのだが…。

第二十八話 八雲紫の苦笑い

「う〜ん…どうしようかしら…これ…」

白墨が幻想郷に来てそれなりの時が経ち、物珍しさも消えかかっていた。

肝の座った蕎麦屋の店員達なんかはもう慣れたようで普通に接している

未だにその不気味さは消えてはいないものの、人里に溶け込むという事は出来てい
る。最近だと姿を偽って人里に入る妖怪も増えてきた

まあ…思いのほかトラブルらしいことも無く順調だ

予定よりも早くに次の段階に進めるかもしれない、だが予定よりも結界が不安定、安
定化には程遠い

「あ〜あ…来るとは思っていたけれど、嫌なことつて重なるわあ…」

手の中にある手紙、妖怪の山の天狗達を示す印が付けられた手紙

再び視線を向けてため息を付く

印からして大天狗、一応そこそこの位に位置しているものだが…せめて天魔のものを
持つてこいと文句を言いたいところだ…

仮にも大妖怪に位置する自分に手紙を寄越すのだ、そのグループの長が書くのが普通

だ

それを大天狗の印なんて……

「舐められてるわね……確実に……いや、あえて部下に書かせたか……それとも部下が勝手に書いたのか……どちらにせよこれを書いた大天狗は私のことを舐めている……その事に変わりはないわね」

手紙の内容は今後についての軽い話し合い

天狗らしく長つたらしい分かりにくい書き始めからそれとなく幻想郷での立場について話が触れられていた

権利主張の問題か……

これまで妖怪の山とはお互いを認識しつつも不干渉だった

もちろん幻想郷を形作る上でいつかは話し合いの席を設ける必要があると考えていた

結界のことで時間を取りすぎたツ……!

この幻想郷の地に妖怪のためのものとはいえ勝手に大規模な特殊結界まで張っているのだ、向こうの妖怪達だつておいそれと流していい話じゃない……特に権利云々を大事にしている縦社会の天狗たちは黙っていないだろう

鬼が去ってから長い間この幻想郷で最も大きな勢力として君臨し、なおかつプライド

も高い面倒なヤツら……

「あーもう！あと数十年ぐらい我慢出来なかつたの!?!こつちだつて結界と結界と結界と結界の管理で忙しいつて言うのに……いくら天狗でも古株達ならおいそれと私に手を出そうなんて考えはしないし、やつぱり部下の勝手な暴走かしら……数だけ増えて邪魔なんだから……天魔も首輪ぐらい付けときなさいよ……!」

会食の招待は断れない……適当に断ろうものなら更に付け上がつて面倒だ、これ以上は時間も掛けたくない……断るのは論外……

結界が不安定な今、私自身が行くのは危険だから仕方ないけど藍に……

「らんー！ちよつとー！来てちよーだいーらー……ん……」

呼んでる途中で絶句した

「なんででしょうか……紫様……朝ご飯なら……さつき作りましたよ……?……あれ?それとも今はもう夜でしたか?すぐに準備しますね……すぐに……すぐに……」

フラフラとした足取りでふすまを開ける自分の式神

いつもは綺麗に手入れされている尻尾も放置されぼさぼさ、よれよれになった耳からは生気を感じず、しかし顔だけは綺麗な笑顔。

さ、最後に休みを与えたのつていつだったかしら……?

式神だし私と違つてある程度休まなくても動けるのをいい事に酷使し過ぎた……!

「あつ……ああ待つて藍、今はお昼よ……。それより貴女最近どれくらい寝れてるの……?」

いつもはキリツとして少しキツイと思わせるぐらいの鋭い目がぼーっとしてる

さ、流石の私も罪悪感が……

「最近……ですか? 今月は5時間ほど眠れましたよ」

「あら……なんだ確かに少し短いけどちゃんと寝れていたのね……」

「……? あつああ……いえ、〃 今月で〃 5時間です」

「寝なさい!? 今すぐに!」

「……? いえいえ、30分ほど仮眠を取らせてもらえればあと4日は動けますので……それに私は式神なので紫様と違って多少眠らなくなつて……」

「無理よ?!? いくら式神でも寝なきや倒れるわよ!?!? ご、ごめんね!?!? だ、大丈夫だから……ほ、ほら! 貴女の分は私がやっておくから! 寝ましよう? というかお願い寝て! 目がちよつと怖いわよ!?!?」

「は、はあ……分かりました」

そう言うと、わざわざ寝づらそうな固い椅子の上で……

「ふ、布団! 今お布団敷いてあげるから! そっちで寝なさい!」

こ、この子! 仮眠癖がついてる!?!? 椅子で寝るのに躊躇いがないわ!?!?!

「そ、そんな布団なんかで寝てしまつたら起きれる自信が……!」

「熟睡させる為に寝させるんだから起きなくて良いのよ！8時間でも10時間でも寝ときなさいっ！」

椅子で寝ようとする藍の手を引つ張つてズルズルと布団の中にねじ込む

「あ、ああ……これが布団の魔力……」

「はあ……天狗たちとの話し合いについては白墨に指示を出しておくから、貴女はしつかり休んどきなさい。私は結界の修復で忙しくなるから、多分貴女が起きた時には居ないわ。私が戻ってきた時に軽くまとめて報告だけしてくれれば良いから」

「は、はい……ありがとうございます……す」

それだけ言うのと少しの音も入り込めないように嚴重にふすまを閉めて部屋を出る

部屋を出る時に『半年ぶりの4時間以上の睡眠……！』とか聞こえたがきつと気のせいだ……気のせいだ……。



「……つということがあったから貴方がこの会食に出なきやいけなくなつたわ」

「行きます」

「話を聞きなさい……話を……」

最初こそ突然連れてこられて不機嫌そうにしていたのに会食の話をした瞬間やる気が上がった……

終わった……不安だわ……物凄く……

「……ふうー……。良い？白墨、これはただのお食事会じゃないわよ？会食とは名ばかりの腹の底の黒い天狗達による醜い権力主張合戦よ」

指をピンと立てて今回の話を深堀する

分かっているのか分かってないのか白墨の顔がピンと立てた指に向く

不安だ……

「恐らくあちらとしては幻想郷での上下関係をハッキリとさせたいのよ、鬼からの譲り物の山をねちっこく自分達のものだと言い続ける様な奴らよ、今回もこの幻想郷で一番偉いのは俺らなんだから、勝手なことばかりするとか何とか言ってくるはずよ」

天狗達は面倒くさい

その結果が有用なのかどうか置いておいて自分達の許可なし勝手に動かれるのを良しとしない。結果を張るならば、自分達が上と認知した上で、自分達が命令したという体で、そこで初めて結果を張らせてもらえる様になる

これから長い時を幻想郷で過ごしていくというのに、何かが起こる度に毎回毎回天狗達の顔色を伺って許可貰いにいくなんて御免だ

そもそもこちらも幻想郷を管理する大妖怪としてのメンツに関わる

一度下に見られれば面倒だ

幻想郷の新しいルールを制定した時だつてそうだ、恐怖されている大妖怪の八雲紫が言つたから多くの妖怪はそのルールに従つた

これが天狗達より格下の八雲紫だところはいいかない。何を言つたところで無視されるのがオチだ

一度でも妖怪の山に住む妖怪達に舐められればそれだけで一気に動きづらくなるだからこの会食は舐められない為にもとても大事な事なのだが……

コクコクと頷く白墨……

いつもと変わらない無表情……ああもう！不安だわ!!

絶対に無理……終わつた……!

私が行きたい……! 藍を行かせたい……! 白墨にそんな駆け引きなんてできるようには思えない……! ……!

「……ッ……いいかしら? 貴方はなにも特別なことはしなくても良いわ。いつも通りのその顔はこういう話し合いにおいて有利だし……無駄に多く喋らなくても構わない。貴方

がしなきゃいけないのはこの三つ、舐められないこと、別の日にまた会食の席を設けること、何も決定しない事」

白墨が分かったような分からないような雰囲気醸し出す

「まず最初に舐められないこと、これは当然の事ね、変に下手に出なければ大丈夫：貴方の場合黙ってるだけでもそれなりに妖怪っぽさがあるから特に意識しなくても良いわ。」

うんうんと小さく頭を縦に振る

そうそうそんな感じで良い、白墨のその顔は腹の探り合いにおいては少しの情報もこぼさないという点で最良だ、本人もほぼ話さないような性格も相まって有効だろう

「次に別の日に会食の席を設けること、これは3つ目とも繋がっているからしつかり聞きなさい。色々回りくどい話し方をされると思うけど適当に流すのよ、いつもみたいに『ああ』とか『うん』とかで誤魔化しなさい。そして、何よりも第一に別の日にもう一度会食の席を設けるようにしなさい。その途中で多少不利になっても構わないわ、とかそれだけをしてくれれば最悪他は無視しても良い。後日また話し合いの機会を設けられれば後は私が何とかする」

相も変わらず無表情でコクコクと頷くだけの白墨……

この子ほんとにわかってるのかしら……！

「3つ目は、何も決定しないこと、2つ目のことを除いて何かを決定してはいけない。何か言われても黙って無視するか断りなさい、いいわね？」

白墨は話に飽きてきたのか、懐から包みの中に入ったおにぎりを取り出して食べ始めた

人が話してんのに食ってんじやないわよ!!

びくびくと血管が浮き出そうになるのを抑えてため息を付く…

最近になってため息が多くなってしまった…

「……。わかったわ…ええあなたのことはよく分かつてるわよ…。…ボーナス！この仕事を成功させたらボーナスを出すわ！」

ピクっとおにぎりを食べる手が止まってこちらに意識を向ける白墨

…よしかかった！

「貴方が問題なくこの仕事を成功させられたならボーナスを出すわ。内容は外の世界の…それも外国の高級菓子！外国でも金持ち、貴族が買うような高級なものよ！」

「がんばる」

白墨は珍しく声を出し、真摯な目で見つめてきた

「よ、よし！偉い子！よく言ったわ！ほ、ホントに！ホントに頑張りなさいよ!?言ったこと覚えてるわよね!？」

大丈夫……と、頭を縦に振る白墨……

不安だわ……！不安しかない……！というかなんでこんな究極的に危機感が無いのよこの妖怪！

嫌な予感しかない……！けど……！けど……！今は白墨に任せるしかない……！

もうっ……！もういいや！なんかあつて失敗したら萃香達を山に投下して嫌がらせすればいいや！もうっ……！もうどうにでもなれ！

第二十九話 はじめてのとくべつにんむ！前編

静かな夜の山は、昼に見せた自然の雄大さは隠れ、どこかおどろおどろしい妖怪の山となっていた。

もちろん昼も妖怪の山のだが、それとは別に……もつと妖しい雰囲気醸し出しているのだ。

肌を刺す妖気は冷たく、身体が強ばるのを感じる。

歓迎されているという感じは薄い

妖怪の山に住む者は天狗だけでは無い。この前会った秋の神様や河童や、他にも多くの神、妖怪が住んでいるという。それらの妖怪達に警戒されているだけかもしれない初めてくるところというのは緊張する

俺はこっそり灰を流した、夜風が気持ち良い夜だ、きつと綺麗に飛んでくれるだろう。実を言うと、俺は生み出した灰を全て自在に操れるわけじゃない

離れれば離れるほど自分の意思で灰を動かすのは難しくなっていく。だから適当に灰をばらまいて、後は風が運んでくれるのを待つだけなのだ

特定の遠い場所の状況を素早く知るといえるのは難しい。適当に灰を流して、たまたま

その地域へたどり着くだけ。人里みたいにずうつと俺が居る所は別だ

あれは俺自身がその場所に赴いて灰を撒いたりもしている、紫のようにとんでも空間を作れる人間がいないなら問題ない

しばらくして灰が声を拾ってくる

まだまだデカい妖怪の山だ、さすがに全ての範囲に灰が行き渡った訳では無いだろう
親子連れの天狗が木編みのカゴに山菜なんかを入れている、ここらはよく〇〇が育つ
だとかなんとも聞こえてくる。良い事聞いた、今度俺も取りにこさせてもらおう。自然と共に生きているだけあってこういうのには詳しいのかもしれない

にしても案外天狗も人と変わらないところがあるのだな、出てくる料理にも期待が高まるというものだ

ワクワクしてきた…!美味しいご飯を食べに行くだけなのに美味しいご褒美が貰える…!俺にとってはまさに夢のような仕事だ!



「うーん、同じ天狗相手に新聞を作っても新鮮味がないし、何より妖怪の山で起こった些細なことなんて新聞にまとめるまでもなくみんな知ってるわよねえ…」

新聞のネタに頭を悩ませながらもメモ用紙に文字を増やしていく

「あーあー…もつとこう…インパクトのある出来事の一つや二つ起きてくれやしないかしら…」

ペンを置き、手首を休ませていると、視界の端に馴染み深い白色が写った

他でもない自分の生意気な部下だ

からかいも兼ねて何か面白いことでも起きてないか聞かためたにゆっくりとその白狼天狗に近付いた

「おーい、おーい、こんな夜まで働かされてる下っぱ天狗く」

白く綺麗な毛にオオカミのような耳、白狼天狗の椀は明らかに茶化した言い方にあからさまに嫌そうな顔をした

「なんですか？文さん、また酔ってるんですか？そうなんですか、仕事なので帰って下さい」

ピシヤリと言い捨てる生意気な白狼天狗

白狼天狗の上司に当たる鴉天狗、その一人である射命丸文は面白がって椀のほっぺをつんつんとつつく

当然、上司である文に反抗は出来ず、ただ嫌そうに顔を歪めた

「仕事と言つてもどうせまた来るはずのない侵入者とやらを探すだけ…つまりは突っ立ってるだけじゃない」

「山の監視も重要な…ああ…もういいです…それに今回は別の仕事です、監視は監視でも妖怪の賢者が来るのを監視しているのです」

「賢者?なんで賢者が来るのよ」

「…?知らないのですか?てつきりもう知らされてるのかと…」

文は眉をひそめて考え込んだ、ここ数日間新聞のネタ作りに飛び回って居たせいで仲間の天狗とも会うことは無かった

頭に嫌な想像が浮かんだ

「詳しいことはこれに…」

そう言つて椀が取り出した紙を半ば強引に奪い取つて読み進める

「なんて阿呆な…」

文は先程までの茶化すような表情が一変して真剣な顔つきになつていった

「椀、この手紙が出されたのはいつ?」

「天魔様達が出発してから2日後です」

文は嫌な予感の的中していたことを確信する

「これは…不味いことになったわね…」

こんな天狗が八雲紫に宣戦布告したようなものだ

最悪妖怪の山と八雲紫の間で戦争が…いやあの八雲紫がそこまで短絡的な手法を取るとは思えない…しかしただでは引き下がることを良しとはしない…

くだらないプライドで、よりにもよって一番喧嘩を売ってはいけない相手に売ってしまった。思わず舌打ちが零れる

(こういう若いバカの暴走を止めるのがジジイ共の役割でしょ！なんでそいつらは止めないのよ！)

「…い、良い!? 権！何があってもわたしの居場所は言わない！大事な用事があるってことにおきなさい！わかったわね！」

「え、ええ…それは良いですけど一体どちらへ…？」

「にげるのよ！付き合ってられないわこんなこと、こんなことで見せしめにされたらたまったもんじゃやない！天魔様が帰ってくる頃には戻るから！」

「は、はあ…」

権は何時もはプライド高い上司が一切の迷いもなく逃げると言い出したことに困惑した

対して文はそんな権の様子にため息を吐く

天狗社会において上に従順なのは良い事かもしれないが、もう少し自分で考えることもした方がいい

今回のことに関してには目に見えるほどの地雷だ、疑問に思わない方がおかしいとさえ文は感じた

鬼が去って調子付いた天狗達、鬼の時代を知っている古い天狗からすれば今回の事件の異常性に真つ先に逃げ出すだろう。

文は飛んだ、無能な上司に捕まる前に、関わる前に：知らぬ存ぜぬで逃げ切った



突然吹いた風に目を細めながら山中を進む

なんだろうか？上に飛ばしていた灰が一瞬で吹き飛んでいった：変な風だ

「そこで止まれ」

暗闇からの声に足を止める

キョロキョロと周りを見渡すと上から白い毛並みの妖怪が降りてきた

木の上に居たらしい器用な事だ

「何者だ、ここから先は天狗の領域だぞ」

凄む目線を気にせず堂々と招待状を見せびらかす

「お前が……?」

訝しげな視線に晒されながらも何とか分かつてもらえたみたいだ

白オオカミの小さな背中を追いかける

言葉数が少ないから分かりにくいけど付いてこいつて意味だろう

だって俺場所知らないし

また、人が寄り付かない場所だからだろうか? 不思議なことにこの辺じゃ見ないよう

な木や花が多い

好奇心に駆られて足を止めようとするも白オオカミちゃんに睨まれてしまう

急いで歩を進めて頭を下げると白オオカミちゃんもまた歩き始めた

生い茂る木々の隙間を縫うようにして進んだ先には自分たちを待ち受けるようにして建てられたいくつもの木造建築だった

貴族が大臣か、そんなお偉いさんたちの顔が浮かぶような立派な建物、綺麗な白い障子の壁、木も材質がいいのか統一された色に加えて、夜の森の空気と混ざりあい、怪しい雰囲気醸し出していた

まさに妖怪達の隠れ家って感じだ

でもそうか、もうここは妖怪の山の頂上なのか、歩いている時は登っている感覚なんて全くというほど無かった。不思議な場所だ

夜の闇から現れた大層豪華な服を着た一人の天狗が白オオカミちゃんを下がらせる

「……ちらだお客人よ」

どうやらこつからはこの人が案内してくれるらしい

俺を見た時、顔を顰めた事だけ気になるが……そんなに変だろうか？白オオカミちゃんも真偽を疑うようにチラチラ見てきたのが心をざわつかせる

ここら辺でも一番大きな屋敷の中へと進む

こうまで凄い建物へ行くのは初めてだから緊張する、大ききなら地霊殿も全然負けていないが、日本式の和を感じる場所は初めてだ

命蓮寺はもつとこじんまりとしてたし……記憶違いでなければ初めてなはずだ

なんだろう……初めてお高いフランスのコース料理店に行く時みたいな謎の緊張は

いつもは動かさそうとしても動かない顔を、今度はニマニマしないように手で抑えて歩いた

畳の縁や敷居を踏まないようにして部屋に入る

やや広い部屋には縦長のテーブルに向かい合うように10人ほどの天狗達が座って

いた

もう既に準備は出来ていたみたいで一つ空いた座布団とお盆の上には美味しそうな料理の数々があつた

す、すごい！7品近くもお皿がある！

豪華だ、そこにあるのはただただ豪華だつた

おひたしに煮物……それにあれは天ぷらか！当たり前のように海苔もあるじゃないか！安そうなちよつとへにやつとしたやつじゃなくてちゃんとパリパリしてるタイプ
の海苔だ！胸が踊る

感動してる場合じゃなかつた

改めて天狗達に向き直つて頭を下げる

「今日は主の八雲紫の代わりとして来た、式神の白墨だ」

挨拶してから席に座る

食べていいか？

しかし……何故だろう、天狗達の反応が良くない

挨拶の仕方がダメだったのだろうか？正直、座つてから言うのか座る前に言うのか、どちらが正しいのかわからなかつたんだが……

天狗の一人が大袈裟にため息を付いた

他の天狗とも目を合わせてやれやれと言わんばかりに頭を振る

見覚えがある、昔妹紅とやんちやしてた時、よく似た目で神様とやらに見られたものだ。侮辱するような、見下したような目。相手を格下と思つて隠さない、そんな目だ

なんだ…なんだつてんだ一体

やがて面倒くさそうに何人かの天狗が一際偉そうな天狗を見た、まるで…言葉を待つように

「…はあ…良い、〃落とせ〃」

それが合図となつた

神速をもつて放たれた剣技、抜刀の瞬間を見ることすら叶わなかつたそれにテーブルごとお盆の上の夕食が吹き飛ばされた

驚く間もなく蹴り飛ばされる

無様に地面を転がり、すぐさま起き上がろうとする身体を押さえつけるように足で踏まれる

胸が苦しい、骨が軋む

あえぐようになんとか息を吸い込み、自分を踏みつけている天狗を見る

しかしそれすら許さぬと言わんばかりに刀の切先を突き付けられた

「頭が高いぞ痴れ者め、…八雲紫本人か、もしくは八雲の九尾ならまだしも、名前も知ら

ない木っ端妖怪とはな…わからんか？貴様程度では話にならないと言っているのだ…
八雲紫にこいつの首を送り返してやれ」

「八雲紫も…こんなのを寄越すとは程度が知れる」

ちくしょう、痛つたいな…好き勝手言いやがって

別に紫が馬鹿にされてるのは良いがなんで俺に八つ当たりするんだよ

ようやく周りが見れるようになって

そして…困惑が怒りに変わる

言い表せない多くの怒りが胸の中心からじわじわと広がっていくのを感じる

怒りの理由は色々ある

理不尽に呆れられたり、地底を出てからはなかった痛み、楽しみにしてた気分を台無しにされたこと…

でも一番は、ご飯を粗末にしたこと

最悪の気分だ、ふざけんな、そんな怒りがふつふつと湧いて出るのだ

ゆつくりと自分の怒りを認識するうちに、それは唐突に切れた

それまでであった怒りが、突然沸騰するように身体を内側から刺してくる

怒りはやがて熱となり身を焦がす

赤く、火の粉を散らし、そして静かに燃え始めた

第三十話 はじめてのとくべつにんむ!後編

八雲紫には一つの誤算があつた

いくら天魔の居ない時だからと言つても、直接的に大妖怪八雲紫との争いになるような事は避けるだろうと考えていた

あくまで立場をはつきりさせたいだけで、会話の機会も無く敵対することなんてありえないとすら感じた

しかし、事態はただの若い天狗の暴走だけでは無かつた

大妖怪でありながら人里の有権者である稗田家の者と接触を図り、あまつさえ妖怪の天敵とまで言われている博麗の巫女とも協力関係を築いた存在

そんな妖怪が最近になり、幻想郷に大きく影響を与える大規模な結界を幻想郷の最大勢力の一つである天狗達に許可なく作り、我が物顔で幻想郷の人里内での人間への攻撃を禁止するルールとやらまで作り始めた

妖怪の山に居るものたちからすれば面白いわけがなかつたのだ

特に人里内での人間への攻撃を禁止するというのが決して少くない反発を生んだ

妖怪の山に住まう妖怪達からすれば八雲紫なんて存在しか知らない、彼らの表向きの

大将はいつだって天狗達であった

納得し切れない、しかし力じや敵わない

そんな不満が少し、また少しと自分たちの大将である天狗達に向けて溜まっていった、そして天狗達自身もその事に不満を感じていた。

そんな欲求不満を抱えた妖怪達が天魔の不在に若く、しかし権力のある一人の天狗を担当あげた事が始まりだった

もしくは天魔が居ればこうはならなかったかもしれない、しかしそうはならなかった誰かが始めたのでは無い、気が付けば止まらなかつた

若い天狗は気を良くして筆を走らせた

今回の事件は天狗だけでは無い、言ってしまうえば妖怪の山全体の不満が暴発した結果なのだ

偶然が重なっただけとも言える

八雲紫がもつと結界に対する理解を広めさせていれば——だが、そんな時間は無かつた

天魔は自分がしつかりと山に居座り、天狗達を、妖怪の山に住まう者たちを抑えることが出来れば——しかし、天魔は急用があると言い山を出た

偶然は重なり、不満は止まらず、事件は起きた

あるいは、担ぎあげられた天狗が別の者だったなら…
あるいは、古い世代の天狗が保身に走らず止めに入って入れば…
あるいは…、



部屋の気温が少しだけ上がる

ほんの少しだけ…

けれどそれでも確かに変わる

身体が熱い、嫌な感じではない。冷静さを失っているのだと理解出来た。

未だにこの身体は天狗に踏みつけられて動かない

相手が油断している隙に自然な形で”手のひらで床を触る”

「なんだ…貴様のその身体は…赤い…?」

目の前の天狗の警戒が低くなった瞬間を狙って一気に行動に移す!

土で出来た大地と違い、畳と木の床では出来ることが限られている…だがそれでも地面を作り替えて軽く揺らす程度ならできるんだよ!

「貴様……なにをッ……」

体勢が崩れた天狗を突き飛ばして何とか立ち上がる

やっとなんて体勢を立て直せた

かなり強く踏みつけられていたのか身体が痛い。気合いで動かす

「……ックソ！ 困え！ 逃がすな！」

周りの天狗達も刀を抜き、こちらに向けてギリギリと近付いてくる、だがまだ遠い俺を踏みつけていた天狗に対して結界の槍をぶっぱなす

右手から発射された結界の槍がいつも容易く叩き斬られる

一応その技勇儀にも効果あったんだけどなあ……。まあ距離が近いから仕方ない……

急いで二発目を放とうとするも、それより速く動いた天狗に右腕を斬り飛ばされる
地底で散々味わった苦しみが再び蘇った

まずい、結界の槍も防がれた、右腕も切断された

ああもう！ この天狗も普通に強え！ っというか天狗と言うだけで並の妖怪とはレベルが違う

でも不思議と身体が興奮する！ なんだか知らんがテンション上がってきたぜ！

「出てこい肉友同盟ルーミアー！ ご飯を粗末にする不埒者共を殲滅せよ！」

ノリで言った後に少しだけ後悔する、ちよつとだけ恥ずかしい！

恥ずかしいノリをアドレナリンパワーで誤魔化して動こうとした時、自らの背後に出来た影が揺れて、そこから誰かが飛び出してくる

「呼ばれて出てくるルーミアちゃん参っ上!とうとうその気になったか我が同志よ!手始めにこの山から殲滅じゃー!」

わはー!と飛び出してきた予想もしないゲストキャラに、たぶん、敵も俺も一瞬止まった

呼んだ俺だつて驚いたのだ、天狗達もさぞ驚いただろう…だつてほんとに来るなんて思つてなかつたんだもん

「構うかあ!低級妖怪が一人増えたところで!」

一瞬惚けていた周りの天狗達がとうとう斬りかかってくる

それに対してノリノリでこの場に似つかわしくない幼女が躍り出る

なんだか楽しそうだが…

「フツ、漆黒の暗闇のダークな感じのあれに呑み込まれるが良い!」

斬り掛かれるその寸前、片目を瞑り指を鳴らす

ノリノリのルーミアのスカッ…とした指パツチン

そんな締まらない音とともにルーミアを中心に暗闇が広がり、一瞬で視界が封じられる…そう俺ごとだ…

俺にも効果あるのかよ！

なんかそれっぽく言っていた割にはただの目くらましだがその絶妙なチョイスはまあナイスだ。

未だに突然の出来事に対応出来ず、騒いでる天狗をよそに、急いで灰を展開する。

封じられた視界、懐かしい感覚だ。一体俺がどれだけ長い間暗闇で生きてきたと思ってる

この空間で誰よりも練度が足りてないのは俺だろう、だがこの暗闇で誰よりも早く動いたのは俺だった

暗い世界は慣れっこだ、展開された灰から全員の位置関係を把握していく

何をしに来たのか分からないバカは自分の作った暗闇で自爆し、壁に頭をぶつけて目を回していた

なんで自分の技を食らっているんだよ

天狗に察知されないように急いで走る、いくら視界が封じられてるとはいえ油断は出来ない

「わわっ！」

未だに目を回しているバカの首根っこを掴み、障子を蹴り破って外へ出る

「……ッ！逃げたぞ！」

怒声とともに1人の天狗が刀を投げ飛ばし、肩に深々と突き刺さる

ああもう!痛つたいなあ!

相手も目が見えないはずなんだけどなあ!あれか!?風のゆらぎとかでも感じられるタイプの奴なのか!?

「こんな妖術!斬り払え!!」

やや遅れてルーミアの展開した闇が天狗達によつて斬り払われる

「ええ!?うつそお!」

闇を斬り払うという意味の分からない行動に俺もルーミアと一緒に目を丸くする

結果的に見ればルーミアの目くらましは一瞬しか効果がなかった。10秒も無かつたかもしれない

ただそれだけあれば充分…!充分なはず!天狗相手だからもつと距離を取っておきたかつたが仕方ない…!

風向きが大きく変わり、天狗が本気で自分を追ってくるのを感じる

ルーミアもそれを感じたのか急いで口を塞いでキョロキョロし出した

お前ほんとになんで来たんだ…?

「逃がすな!奴は山の地形を知らない!地の利は我らにある!」

そりやそうだ、なんせ俺は今日初めてこの山に来たのだから知っているはずは無い…

だが忘れてもらつては困る、この山は既に俺が適当にばらまいた灰がそこら中にある地形の把握なんて基本のキだ、問題ない

走りながら地面に触れる”

速さじゃ敵わない、けど技術で劣るつもりは毛頭無い。

俺の通つた場所が隆起と沈降を繰り返して形を変えていく

坂道が谷に、通つた道は木々で消え、足跡は一つも残らない

しかし、突然背後から気配が消える

「奴め、明らかに慣れている…よせ！深追いはするな！今すぐに犬走を呼べ！」

「既に呼ばせております！」

なんだ…？追つてこないのか？

追つてこないのならこつちからやる。さっきみたいにくとは思うなよ。

「おー、おー、なんだか凄いことになって来たけど、お礼はお肉で構わないよ」

ルーミアは何かを察したのか再び俺の影に隠れていった。それはどういう原理なんだ…

右手の先に結界の槍を構築し、狙いを定めて力を込める

食べ物の恨みは怖いんだ



男は——天狗は突然予想外の方向から放たれた”何かを” 刀で弾く

「つ……狙われているぞ!警戒しろ!」

再び別角度から飛んでくる白い槍のようなものを先程と同様に弾こうとし……天狗は横に飛んで避けた

(なんだ……今のは、最初に屋敷で撃ってきたものと同じなのか……?)

1 発目の屋敷で撃たれた時は危なげなく弾き飛ばすことが出来た、2 発目も最初よりも強いが何とかして弾くことは出来た……3 発目は刀で受けることを危険だと判断して横に避けた

なら4 発目は……?

段々と威力の上がついていく攻撃に初めて危機感を覚える

嫌な汗が背中を伝う

刀を強く握り、さつきよりも一層警戒を強めて周りを見る

仲間の天狗達も同じようにして顔を強ばらせている。

相手の場所は掴めず、射撃技も油断が出来ない……もしかしたら逃げるべきなのは既に

：

音が聞こえた。自分の横脇めがけてそれが飛んでくる

そして誰よりも早く反応して迎え撃つ

あまりに速く、月光に照らされて白く輝く槍

それを見て、避けることも防ぐことも無理だと直ぐに悟った。

それでも刀を使つて何とか軌道をそらす

「ぐ……あああつー！」

左腕の肉が引き裂かれ、赤い血が服を汚す

歪む視界に、息を切らせてやって来た犬走が写る

「犬走です！今来ました！」

仲間に応急手当を施され、ぜえぜえと息をしながらも声を張る

「——ッは、ッは……犬走！お前の眼でさっきの男を探せ！」

「……はっ！」

白狼天狗である犬走椀の眼は普通と違い、千里先まで見渡すことが出来る

特定の誰かを探すならこれ以上ない適任だ

犬走が敵を探している間にも例の槍が飛んでくる

それを自分以外の天狗が同じように傷付きながらも何とか対応して時間を稼ぐ

「……来た!来たぞ!撃ってきた!東の方角だ犬走!」

「……居ました!距離70m!走り回りながら地形を変えて撃ってきます!」

飛んできた槍を1人が受けて、撃ってきた方向から犬走が場所を特定し、3人がその場へ向かう

そうして対応するも結果は著しくない

「どうだ!?!」

「ダメだ、また近付いた瞬間に砂になって消えた」

その報告を聞いて爪を噛む

まただ、何度繰り返しても白墨を捕まえることが出来ない

速度ならこちらが大きく上回っている、場所さえ分かれば造作もないと思っていた

……

しかし何度やっても近付くと砂になって消えるという……

厄介な特性だ……

4度目の逃走を許すと、突然あの槍を撃つて来なくなつた

さつきとは打つて変わつて嫌な静けさと虫の鳴き声が辺りに響く

「探せ、犬走。まだ遠くへは行ってないはずだ」

「はっ！」

犬走にそう命じて自分も周りを警戒する

そして――

「なんだ……？」

数人の天狗が異変に気づいたようで当たりを確認する

音が、した。空を裂く音、風を斬るような音だった。

キイイイイイン……という耳鳴りにも近い不快な音が段々と大きくなっていく

ぶわつと嫌な汗が噴き出すのを感じ、直感に従って叫ぶ！

「散開ツツツ!!!」

全員がその場を飛び退き、そして瞬きする間もなく地面が噴火でもしたかのように破裂した

地面が破裂し、土や小石が散弾のように弾け飛ぶ

吹き飛ばされた砂や土が壁となつて視界を塞ぐ

何が起きたのか理解が出来ない

相手は新兵器の大砲でも持ってきたのだろうか

耳が馬鹿になるほど轟音が未だに収まらず、夜の静けさを破壊した

土埃が酷く、目を細めて状況を確認し、絶句する。

「は……」

誰が呟いたとも知れない乾いた声

ただそれ程の惨状が広がっていた

地面は抉れ、クレーターを作っていた

急激に意識が現実に取り戻され、そして理解する

「犬走い！今すぐにヤツの居場所を探れえ!!」

「今探してますーし、しかし！居ません！この山には……もうどこを見ても……」

青い顔して叫ぶ犬走にそんな莫迦な事があるかと悲鳴にも似た怒鳴り声を被せる

しかしそんな叫びも再び山を抉る爆音によつて途中で遮られる事となった

自分たちのやや上を狙つて放たれたそれは、木々を吹き飛ばし、土砂崩れを引き起こす

尋常では無い被害、明らかに中級妖怪程度が出せる威力を超えたもの。

反応することすら出来ず、ただ当たらないことを祈つて飛び回る無様な空の支配者が

そこにはいた

悲鳴や怒声が飛び交う中、未だに冷静に状況を把握しようとしていた自分の耳に絶望

したような声を拾った

「対象……発見しました……。場所は人里……上空、超遠距離からの狙撃がきます……。」

「なんだと……?」

耳を疑いたくなるような事だった。

男はこの妖怪の山から人里までどれほど離れているかを知っていた、天狗であっても1人を除いてこれほど素早く移動できる者を知らない

もしかしたら、もしかしたら……

それほどの距離から狙撃しているのか……? さっきまで木々の影から放つてたものと変わらない、それどころが屋敷で最初に放つた物と同じ、あの白い槍を……

再び空を裂くようなあのキイイイイイン……という音が近付いてくる

男は自分の顔が引き攣るのを感じた

もうどうしようもない

「全員、やまの——

声は最後まで続かず、再び放たれた相手の攻撃によつて遮られる

あまりの爆音に自らの声が届かない——

男は再び息を大きく吸つて声を張り上げた

「全員、山の裏側に退避しろお!! 速度を緩めるな! 当たれば即死だぞ!!」

苦虫を噛み潰したように顔を歪ませ、砕けた石や木の破片が雨となつて降り注ぐ中、ただ、必死に逃げた

第三十一話 後日談みたいな何か

たった一度の会食から始まった戦いは、未明から明け方まで続いた砲撃音によつて終わる事となつた

人里の上空から八雲の式神白墨によつて放たれた砲撃、その威力は凄まじく、山の頂上部分の土が軒並み掘り返され、木々は弾け飛び、消し飛びこそしなかつたものの、固く踏みならされていた地面は今も柔らかく、多くの木々がなくなつた事により土砂崩れが頻発している

初めに交戦していた10人あまりの天狗達は遠距離からの長距離砲撃に為す術なく、山の裏側に退避する事によつて事なきを得た

また白墨から放たれた砲撃が山を貫通することこそ無かつたが、天狗達が山の裏側に撤退した後も砲撃を止めず、およそ3時間近くの間、絶え間なく撃ち放たれた砲撃が山の表側を穴だらけにする事となつた

騒ぎを聞きつけてやって来た山に残された天狗達が30人近く集まつたもののいたずらに被害を拡大するだけとなつた

その後、満足したのか夜明けと共に攻撃は止まり、白墨は姿を消した…

「こんなところかしら…」

先日起こったことを適当に纏めながら新聞に載せる文面を考える

今回ばかりはあまり詳しく書きすぎると上から文句が出てくるかもしれない

中級妖怪が引き起こしたにしては被害が大きく、また天狗達のプライドもズタズタだろう

なにせ守るべき自分達の山を格下相手にめっちゃくちやにされたというのだからその情けなさは考えるまでもない

ただいつもは威張り散らしている大天狗様達も、夜の間ずっと撃たれ続けたのがよっぽど効いたのか、パンツ！という音を聞く度にビクビクと周りを警戒する様は見ものだ
つくづくさっさと逃げておいて正解だったと胸を撫で下ろす

なんでも白墨は近付くと砂になって消えてしまうという、そんな面倒な特性を持った妖怪を相手するなんて絶対に御免だ

意識を戻してペンを握ろうとした時、ドタドタとやかましい音が聞こえてくる、思わず集中力が切れてそちらに目を向けると予想通りの人物が襖を壊しそうな程勢いよく開けた

「聞いた文?!なんだか先日凄いいことがあったらしいわよ!なんと妖怪の山の頂上部分が穴ぼこだらけ!きつと大ニュースになるわよ!」

案の定、ずかずかと部屋に入ってきたのは同じ鴉天狗の姫海棠はたてだった

はたての同じ新聞記者とは思えない情報収集の遅さを嘲笑いながら答える

「相変わらず情報が入るのが遅いのね、そんな事昨日の内に山中に知れ渡ってるわよ。というか逆になんで山で引きこもってたあんたが知らないのよ…音とか凄かったじゃない」

「道理でなんだかうるさいと思つたら」

道理でうるさいと思つたら…じゃない、山から離れたところに居ても聞こえたのだ。はたては山にいたのだから気付いていない方がおかしい、というかただの騒音騒ぎだとしても3時間もぶっ通しで鳴り続けたら何か異常があるんじゃないかと思うだろうに…

「それで…ほら！見てみてよ、今朝ちよつと念写してみたら例の妖怪かバッチリ写つたのよ」

そう言つて出された写真を手取る

バッチリ写つた…という言葉に嘘はなく、写真には灰色の髪に灰色の服を着た、長身の男が写っていた

「念写で人や妖怪を撮るのは難しいって言つてたけど、やけに綺麗に撮れたわね」

「まあね、私の念写も日々進歩するつてことよ…ただ引つかかる事に何処かであつた気

がするのよねえ……文は見たことある？」

そう言つて念写で写し出された写真を色んな角度から見ても、眉を八の字にした

「さあ？ 少なくともここ一〇〇年くらいはこんな無機質な顔見た覚えがないわ、そんな事よりいい加減その使い勝手の悪い念写は辞めて、自分の足で取材したら？」

もう興味が失せたと言わんばかりに適当に話題を変える

「なっ……私の新聞には念写を使った他の人には真似出来ない個性があるのよ！」

突然の言われように声を荒らげて反論するはたてを笑い、声を潜めて言う

「いるわよねえ……底辺が何故か自分にしか出来ない個性がある……とか何とか言つて、成功したことも無いのに成功者みたいに講釈を垂れ始めるやつ」

「あ、あんたねえ……その性格の悪さはいいい加減直しときなさいよ！ そんなんだからもみじにも嫌われてんのよ！」

ふるふる震えながら負けじと言い返してくる

ちなみにはたての新聞、花果子念報は記事の内容に新鮮味が無く、人気が無い

「部下に嫌われるのも上司の辛い役目ね……私やもみじ以外とは殆ど話さないあんたにはわからないかも知れないけど……」

「ッ！ つ、次の新聞大会では覚えてなさいよ！ この花果子念報が一位を飾るんだから

！」

ちらりと横目で見ながらとどめを刺すと、流石に堪えたのか、勢いよく机を叩きつけて立ち上がり、目尻に涙を溜めながら部屋から逃げだした



清々しい日だ

紫との約束とは少し違ったけど、まあ問題ないだろう！

念入りに結界の槍を撃ちまくったし報復に来たりは無いはずだ…多分。

ルーミアに関しては…あいつはなんで来たんだ？

まあルーミアが来たおかげで数秒とはいえ天狗達から距離を取ることが出来たし役には立ったけれど…特に結界の槍の適正距離的な意味で

初めに屋敷で結界の槍を撃つた時は簡単にあっさりと防がれたのにその後の結界の槍が相手にダメージを与えることが出来たのにはもちろん理由がある

そもそも結界の槍は地底に落とされる前、博麗の巫女と対峙した時、残り少ない妖力で作った薄い板状の結界を何重にも何百重に折り曲げ続けた結果、たまたま槍のような形になった物だ

意識が朦朧としてたからどういう折り方をして作ったのか分からないし他人に作り方を教えることも出来ない。俺がやってるのは、ただあの日巫女に放ったその結界の槍をコピーしてただけだ

何重にも折り重ね続けたからか、信じられない程固く、頑丈だ

ただそんな結界の槍にも勿論弱点がある

一つは狙って撃てないということ

結界の槍はくねくねと動かしながら撃つたりは出来ない、あくまで直線的に、出来ても角度を少し付けるぐらいしか無理だ

そこに俺のへっぽこ射撃スキルを合わせると、20メートルも離れていれば動いてる敵に当てるのはほぼ不可能となる

だから俺は結界の槍を狙って撃っていない

今回の騒動の時だってそうだ、俺は天狗なんか見えちゃいない。どんなに目が良くても1〜2kmも離れば人なんて認識出来ない

そもそも勇儀と戦った時なんて目が見えてないのだから狙えるはずも無い

俺はただ、例えば目が見えなくなっただとしても存在を感じられる、自分から生み出した“灰”だけを見て攻撃しているのだ

俺は攻撃する時に相手を見ていない、ただ敵に付着した灰からどこにいるのか感覚的

に把握しているだけなのだ

相手に付着した灰と結界の槍の先端部分が磁石のような関係になっていて、結界の槍は吸い付くように灰に引き寄せられる

目も見えていないのに結構正確に当てられる理由がこれだ

結界の槍は放たれると同時に対象に付着した灰へと角度を修正し、加速しながら向かっていく

そう、“加速”するのだ

何故そうなったのかはよく分からんが、この槍……というより灰に引き寄せられるという効果が原因で、距離が離れば離れるほど勝手に加速していく

離れていけばそれだけ角度を修正しやすくなって命中率も上がる

だからこの結界の槍は離れているほど速く、当たりやすく、そして強い

逆に言えば至近距離で撃つても遅いし、相手に当たるかどうかが俺の発射角度によって決められるため命中率も悪い

しかしこの槍にはまだ弱点というか使いづらい点がある

結界の槍は離れば離れるほど強いというのに、肝心の灰を相手に付着させるために一度近付かなきゃいけないのだ

いつも適当に生み出しているものとは違う、特別な灰だから10メートル以内まで近

付く必要がある

遠い方が強いというのに近づかなければ攻撃出来ない……この矛盾した戦法がちよつと面倒くさい

まあそれでも格上への対抗手段がこれしかないから――

「おい白墨、さつきお前が渡してきた報告書なんだが……紫様は本当にこれをお前に命令したのか……?」

ぐつぐつと眠ってたらしく、いつもより顔色の良くなつた藍がおずおずと言つた様子で聞いてきた

ああもちろん、紫様は生意気な天狗共の鼻つ柱をへし折つてやれつて命令を俺に出したんだよ。報告書に嘘は一切無いとも!!

俺は勢いよく頭を縦に振る

こういうのは勢いと自信が大事なんだ

自信を強く持つて領いておけば何も問題は無い!

「そ、そうか……うーむ……わかつた……とりあえずそろそろ紫様も帰つてくるはずだからその時に私から報告しておこう」

いつもキツイ印象を受ける藍だが、自分が休んだ事によつて紫に負担をかけた事を気にしているらしく、いつもより簡単に引き下がつてくれた

それはそうと俺は急いで荷物を纏める

紫との約束を全部破って会食をめちやくちやにしてしまったのだ

大した問題では無いとは言え簡単にキレル紫の事だ、きつと今回のことで怒らせてしまうだろう

だが人の怒りは時間経過で薄れていくものだ

紫が冷静になるまで時間を置いて、忘れた頃に何食わぬ顔で挨拶すればきつと解決するだろう

俺は少し考え込んで自分の考えに問題が無いことを確認し、家を出た



「それで……白墨に任せた件について……どうなったかしら……？」

私の言った通りにしつかりと休めたのか、いくらか気色が良くなつた藍に恐る恐る尋ねた

「は、はい……それより紫様、報告の前にお休みになられては……？先程からふらついており

ますし……私が休んだ分を負擔させてしまい申し訳ありません……。」

「良いのよ……ええ良いの……。それよりも報告をお願い……これを聞かなきゃ怖くて寝れないわよ……大丈夫……最悪な結果ならいくつも想定してきたから心の準備は万端よ」

白墨の事だ、何事もなく……という事は無いだろう……。

問題はそれがどの程度まで行ってしまったか……だ。

しかし、予想に反して藍の顔は心配するような顔から一転、安心させるように柔らかくなった

「ああ……それならご安心を、紫様の命令通り完璧に出来た、問題無いと豪語しております」

耳を疑った、そして同時に歓喜した

憑き物が取れたように晴れやかな気分になり舞い上がる

「ほ、本当?!ほんとに?!よかつ良がった……!それだけが心残りだったから……!これで安心して寝れるわ」

ホツとして胸を撫で下ろす

色々心配していたが、どうやら彼は真面目にやってくれたらしい

安心するとどつと疲れが来る。白墨に任せてからずっと寝ないで動いていたから久々に疲れたようだ

「ん〜！安心したら眠くなつてきちゃったわ、完全に眠くなつちやう前にどうなったかだけ教えて」

「はい！白墨曰く、紫様の命令通り、天魔の居ない間に山の頂上付近を穴だらけにし、壊滅的な被害を与えたと……紫様？」

「……は？」



疲労の溜まった身体を寢床まで引きずる

藍からひと通り話を聞いて大体の事は分かった。

出来れば話し合いという確実な方法を取りたかったから、今回の事は胃がきしむばかりで安心出来ない事が多い

鬼ならまだしも天狗相手にこんな事になるなんて想定していなかった

天魔が居ない時とは言え、天狗達からすれば何よりも大切な山を穴だらけにしたとなればあつちの面子も丸つぶれだろう

そこから天狗側が穩便に済ませるか、それとも溝が深まるだけか。

「いや、まだ大丈夫……。先に手を出してきたのは天狗側らしいし、その上で返り討ちにしただけなら正当防衛って事になるし、逆にこつちが有利に要求を通せるはず」

これが他の妖怪ならどちらが先かなんて些細な問題で何も意味をなさないが天狗は違う

奴らはそういう所を気にする。天狗はそういう妖怪なのだ

なのだが……。今回は明らかにやりすぎだ、妖怪の山と戦争をするかのような勢いだ
そうなつてくると天魔がどう出てくるか分からなくなる

ちよこつとその場に居た天狗を吹き飛ばす程度ならまだしも山を頂上付近だけとは
言え壊滅させたのだ

……。

「……。寝よう……」

寝てから……。とりあえず寝てから考えよう

白墨への給金代わりのお菓子を無しにしてやろうかとも思ったが、一概に今回の事は
白墨が悪いとも言えない

それこそただ何もせず逃げ帰ってくるよりはまだマシかもしれない

それも寝てから考えよう

スキマを開き、一刻も早く布団の中に潜ろうとした時、突然人の気配を感じた
「待ちなさい、八雲紫」

説教臭く感じる声に足を止める

後ろを振り返る

そこには左側だけ伸びた緑の髪に、頭には大きな紅白リボンの付いた帽子、そして何より特徴的な笏を持った少女が居た。

いや、少女と言うのは不適切か……何故ならそこにいるのは幾千万にも及ぶ者の死後を裁く地獄の裁判長、四季映姫その人に他ならない

「……多忙な閻魔様ともあろう御方が、一体何用で？」

「ええ多忙な身ではありませんよ、前々から貴女とは話をしておかなければならないと思ひ、こうして時間を作りやって来ました」

言外に今話すべき内容で、断ることを許さないという意志を感じる

一刻も早く帰りたいくて断り文句を考えていたというのに出端を挫かれた

映姫は乗り気になれない自分を無視して話し始める

「……あまり長引かせたくなさそうですね……。単刀直入に言いましょう、今回は貴女の行なつた契約違反に対して注意勧告をしに来ました」

流石に今の私を見て気の毒に思つたのか、いつもの長い前口上はなかった

しかし相手の言葉に疑問を感じる

「契約違反……？私が……？」

「ええ、やはり自覚はありませんか……ですがこれから今までのように過ごすなら注意していかねければなりません。特に貴女にはその責任がある」

その言葉を聞いてもピンと来ず、首を傾げた

眠気とストレスに耐えながら続きを待つ

「貴女の式神である白墨が地底と地上の不可侵条約を侵し、地底の妖怪を地上に連れ出す事がありました。幸いその妖怪はその日のうちに地底に戻る……いえ戻されましたが、立派な違反行動であり、その責任の一端は貴女にもあります」

「……？は、はくぼく……？」

「良いですか？今回連れ出された妖怪にその気がなかったから良かったものの、これが鬼などであつたらどれ程の被害が出るか……。その辺を自らの式神に言い聞かせていなかったのは白墨だけではなく貴女の落ち度でもあり——そもそも、貴女の式神という立場にありながらあの妖怪はそのことを全く理解しておらず、八雲の式神としての自覚も足りず、普段の行いから問題だらけで——その事も本来貴女が管理しなくてはならない部分でもあります。コレが一介の妖怪ならまだしも、この幻想郷という地で重要な位置にいるのですから——。もっと周りを見て——一刻でも早くした

いと思うのは否定しませんが——貴女は毎回——一つのことには囚われすぎて
貴女が境界の妖怪だから仕方ないとは言え——少しは貴女も白墨の身体の特異
性を——今一度考え直して——貴女はいつも大したことない事に関しては
よく見れば気付くような事を見逃す癖が——、その怠慢が巡り巡って大きな落ち度
となり——そしてそれは普段からの習慣が——。他にも——。ですから——
。——、——、——。

長引かせないとはなんだったのだろうか？言葉の波に溺れそうになる

そんな中、ストレスと眠気で限界に近い中……1つの単語が頭を回る、頭の中を回る、
ぐるぐる回る

白墨、白墨、白墨、はくぼく、はくぼく、はくぼく……

「あ、ああ……あば、あばば……」

「それに……聞いていますか？」

そして——導火線に火がついた

「ああ——！絶対1ヶ月は飯抜きにしてやるッ!!」

第三十二話 厄神さまのお夕飯

結局、紫に1ヶ月ご飯抜きに刑に処された白墨は今晚の夕飯の為に、壊れた釣竿を持ってある店を訪れた

その店は白墨にとって特に思い入れのある場所という訳では無かった

強いて言うとならば、その店の店主に昔一度だけ大根を分けてもらったことがあるというぐらいだろう

そしてその時のお礼は既に済ませたつもりでもあった

だからその店の店主とはそれっきりで、特別白墨にとって何かあるということは無かった

しかし不思議な事に店の店主はそうでは無かったようで、来る度に白墨に色々とサーブしてしてくれるのだ

白墨も貰えるものなら貰ってしまおうと他より優先して足を運ばせていた

残念ながらその店はただの道具屋であった事から、白墨も多く通う事は無かったが、人里内では珍しく不気味がられている白墨にとって好意的な知り合いの一人だった

「おおう、白墨よく来たな」

店に入ると、好色な笑みを浮かべた店主が大きな声で白墨を出迎える

「前来た時よりもまた一段と繁盛しているようで、店内で物色していた客が来店してきた白墨を見てぎよつとしていた」

白墨は軽く会釈だけすると、まっすぐ店主の元へ歩く

互いに周りの目を全く意に介さずに話を始める

「最も話と言つても一方的に店主が喋り、それに対し白墨が相槌を打つたり打たなかったりというものが」

「んで、今日はどうしたよ?」

仕事の顔で店主が聞くと、白墨は無言で手に持っていた壊れた釣竿を差し出した

「それだけ見るとわかったように店主は席を立つ」

「ああ…お代はいいよ、倉に埃のかぶった物がいくつもあるんだ、適当に持つて行つてくれ」

白墨は金袋に伸ばしていた手を戻し、遠慮すること無く素直に頷き、店主の後に続いた

「これもいつもの事だった」

歩いている最中、店主が言う

「どうよ?へへっこの店も中々デカくなつただらう?久々に来たから驚いたんじゃない」

か？人も増えてきてなあ、今度支店も出来ることになったんだ」

返事は無かった、しかし店主は気にした様子もなく話を続ける

「…随分と間が空いたからもう来ねえんじやねえかと思つてたんだが、やつぱり気まぐれかな…。もしもう来なかつたら本当に礼を言う機会が無くなつてしまうからちよつと後悔してたんだけ、今日来てくれてほつとしたぜ」

「……安いから。」

久々に返つてきた返事に店主は驚いたように笑い、昔を懐かしむように話した

「ここまで来れたのもあんたのお陰なんだぜ？家業を継がずに家を出て、勝手に始めた商売だ。上手くいく訳もなく、明日食う物も無くて…自業自得とはいへ大変だったなあ…家を出た矢先親に頼るも出来ねえし、頑固だったから友を頼ろうともしなかつた…そんな時、突然どこからともなく食糧が送られてくるようになったんだ…そこからだつた、この店が繁盛しだしたのは」

そうして店主は歩を止め、白墨を指さした

「白墨、お前なんだろう？…ずつと、礼を言いたかつたんだ。それがお前を鼻負する理由、それで…これからもそうしてやる…だから…まあ、偶には顔を出せよ…」

店主はそれつきり話すのをやめて、薄暗い倉庫の中を歩いていった

白墨もただぼんやりと辺りを照らす蠟燭を見つめるだけで答えようとはせず、2人し

て蠟燭の明かりを頼りに進んだ

「どうして……家を出たんだ……？」

目的の物を取り、いざ倉を出ようと店主が扉に手をかけた時、驚く程平坦な声と共に白墨は店主を見つめた

予想外の事に店主は驚き目を見開き、そしてすぐに勝気な笑みを浮かべた

扉から僅かに零れる外の光を背に店主は声を高くして答える

「せつかくこうしてなんでも挑戦出来るんだぜ？何か大きなことをしなきゃあつまらんだろう！」



妖怪の山

先日俺が問題を起こしたばかりのこの山とは紫が色々頑張つて和解したらしく、俺も天狗達に嫌な顔をされながらも自由に入りができるようになっていた

ビシビシと敵意の視線を感じながらも山の川で釣りをする

のんびりと釣り糸を眺めるまで仕事、いや趣味か

気が付けば、少し遠くには口を謎肉でモゴモゴとさせたルーミアが座っていた
目を向けるとまだ釣れないのか？とヒマそうな視線を向けていた

「ねえ」

いい天気だと心が晴れやかになるから好きだ

釣りをしながらぼんやりと飛んでく雲の形を見るだけの時間が好きだったりする

「ねえってば」

ルーミアもこの気持ちのいい天気によられたのか眠そうに目を擦っていた

釣れたら起こしてとでも言いたげな目だ

絶対に起こさない、何があっても起こさない

「ね、ねえ…なんで私まで巻き込まれてるのよ…!」

釣りは黙ってやると相場が決まっているというのに…

もそもそと居心地が悪そうにしている小うるさい少女にため息をつく

緑の髪に特徴的な赤いリボンそれにゴスロリ風のドレスが印象的だ

「な、なんでため息吐かれるのよ…!わたし巻き込まれてる側なのに…!」

釣りをしていたら興味津々といった感じに遠くから見ていたので無理やり引つ張つ

て釣り竿を握らせた

途中で俺と自分を見比べながら「えっ?えっ?えっ?えっ?…」と困惑していたが釣り竿を

離さないようにしつかりと握ってしまっているあたり流されやすいのだろう

嫌ならそんな釣り竿投げ捨てて何処かへ行つてしまえば良いのに…

勝手に放り出したら迷惑とか考えているのかもしれない

そんな訳で名前も知らない少女は涙目になりながらも夕食確保の手伝いを強制的にさせられていた

ちよろい、ちよろすぎる、もちろん手伝わせる、カモだ。釣られるカモじゃなくて釣つてくれるカモだ、つまりは良いカモだ

意地でも手伝わないルーミアとは大違いだ

「そ、そもそも私の近くに居ると——」

「揺れてる」

「えっ？あつ…！ほんとだ、引つ張らなきや…！」

何か言おうとしていたのを遮って魚がかかる

明らかに不慣れな感じで危ない所もありながらも何とか釣り上げた

「や、やった…！私にも釣れた！」

息を上げながらも嬉しそうに自分の釣った魚を見ている

うんうん分かるよ、魚釣りってやっぱ楽しいよね

俺も釣れるとちよつと嬉しいよ

ちなみにこの少女が来ると、監視していた天狗達がみんな遠くの方に逃げていった嫌われているのだろう、友達も居なさそう

まるで人里に来た時の俺みたいだ、可哀想に

だからこれは無理やり手伝わせるのではなく親切心だ、断じて楽したいからではない

忘れてそうだったので直ぐに水の入った桶を差し出す

「あつそ、そうだったわね……これってどうやって釣り針取るの……」

しようがないなあ……と立ち上がって目の前で取ってやって、魚を桶に入れた

桶には既に8匹ほど俺が釣った魚が入っていた

「ありが……じゃなくて！私厄神だから！こんなに近くにいとくと厄が移っちゃう……はずなだけで……」

厄というのはさつきからこの少女の周りにうねうねと浮いている黒いモヤのことだろうか？

厄が移る心配つてのは今のところ無いし、近くにあつても悪い気はしないから無視していた

少女も厄が俺に移らないことを疑問に思ったのか、怒るのを中断して俺の事を見つめていた

「お、おかしいなあ…。普通だったら近くに寄るだけじゃなくて私に見られたり、見たりするだけでも…もつと言えば噂するだけでも厄が移ったりする人も居るのに……」

名前を言っちゃいけないあの人がよ、と心の中でツツコミ入れつつ釣り針に餌を付け直す

他はどうか知らないけど、俺は平気みたいだし興味ないなあ

少女が悩んでる間にもう一匹釣った後、2本のナイフを取り出し、そのうちの1つを少女に渡す

「え、えーと…貰えばいいの？」

少女はどうして渡されたのか分からない、と困惑気味に受け取った

察しの悪いやつだ

「なか」

それだけ言つて魚の下準備を始めると、ようやく気付いたのか同じように隣で始めた少女のナイフ捌きは温室育ちの現代っ子みたいに下手くそだった。魚に失礼だと感じるくらいには下手くそだ。

でもまあ魚の内臓とか何も取らないまま焚き火に投げ入れてた頃の妹紅に比べれば何倍もマシだと思つたので、特に口出しはしなかった

ちなみにルーミアにはやらせない、あいつにやらせると生のままバリバリ食べるから

だ、ふぎけんな。

お前だ、お前に言ってるんだよルーミア、半目で寝たフリしやがって……

出来上がるまでサボろうとしているルーミアに石を投げつける

「痛っ!」

額を擦りながら起き上がると、涙目で恨みがましい目を向けてくる

「枝」

「…はぁーい」

そう一言だけ言うと言めたかのようにそのそと歩き始めた

一通り下準備が終わると、少女の方も考え込むようにじつと俺の作業を眺め始めた

しばらくして魚に塩を塗りたくっていると、すっかり今の状況に順応し始めた少女が

話しかけてきた

「にしても不思議ね…なんで貴方には厄が移っていつちやわないのかしら?」

「……」

少女の方も答えが帰ってくると思っただけでなかったのか無視する俺を気に止めることは

無かった

「元々が負の存在だから関係ないんじゃない?」

そんな中、静寂を切り裂くように気の抜けた声がした

いつの間に戻ってきたのか、枝を抱えたルーミアが興味なさげに人を陰キャ扱いしやがった

…こいつの魚はへたくそな切り方をされたやつにしよう

乾燥された枝に妖力で無理やり火をつける

少し火力不足が否めないけど大丈夫だろう

パチパチと火の音を聴きながら3人で焚き火を囲った

ルーミアだけは少し離れたところに座って焼けるのを待っていた

その後も特に問題なく…強いて言うならルーミアが形の悪い魚を渋ったくらいだろうか

「下手つびだなあ…いつも魚食べないのか？」

「うっ…人里に行けないから釣竿なんて持つてないし、食べるものなら充分あったから自分で釣る機会なんてほとんど無かったのよ」

ほとんど何もしてないルーミアが厚かましくジト目で見ると、少女が気まずそうに言葉漏らした

「でも…悪くないわね」

はふはふと食べながらはにかんだ笑みで言う

そうだろう、そうだろう、やはり魚は偉大だ

いつも通り美味しい

ルーミアには色々言つたが、ご飯は人と食べた方が二割増しで美味しく感じるという気持ちもあつて悪くなかつた

夜というにはまだ早く、夕陽をバックに食べることになつたが、それも偶にはいいだろう

片付けながらそう思った



その日も厄神としていつも通りの日であつた

私——鍵山雛は生まれてから一度も誰かと食事を共にすることは無かつた

人間は厄を祓うことは出来ず、ただそれを人形に移すことしか出来ない

その雛人形達に集められた厄が勝手に人間達のところへ行つてしまわないように自らの周りに溜め込む、それが私の役目だつた

ある日突然この役目を負わされた訳でもないし、別に嫌々やつてる訳でもない、厄を溜め込む事だつて、それが私自身の力になるからという理由もある

だからそれを辛いとも悲しいとも思ったことは無かった

それに、全く誰とも会わないということも無く、妖怪なんかはある程度距離が離れていれば話すことだって出来た

人に嫌われている訳でもないし、むしろ時折寺子屋の半妖が人里の代表としてお礼に来てくれたりもする

近くで話せないという不便はあるけれど、不満は無い

けれど…けれどもやっぱり…

時々憧れる、羨ましく思う……寂しいと感じる

でも私にとってそれは当たり前の事で、仕方ないと切り離して考えてきた

だというのに変化は起きた

「今日はたのしかったなあ…」

ゆっくりと今日あった事を振り返っていると、一本の釣竿が目に入った

帰り際に無造作に渡されたその釣竿をそつと撫でる

焚き火の後からはまだぼんやりとした温かさを感じる

無いだろうと思っていたのに、あまりに突然やってきた非日常

突然過ぎて、驚きの連続だった

私のことを知らないのか、突然引つ張られて、気付いたら釣竿を握らされていて…

半ば流されて一緒に魚を食べる事にまでなった

それは私が想像していたものより静かで、予想と違っていて、それでも隣に誰かが居るといふのは悪くない

どうして彼が近くにいるても平気なのかは分からない。

彼はあまり喋らないし、表情も全然動かないから何を考えているかはさっぱりだったけど……

それでも、やっぱり……

「いいなあ……また、来てくれたりしないかなあ……」

一層静かに感じるそこで、私はそう独りごちるのであった

第三十三話 日々の中で

俺が地上に上がってからしばらく経った

しばらく経って俺の生活はほんの少し変わった

相変わらず人里に行けば避けられたり不気味がられたりするけれど…

でも俺が人里内をほつつき歩くのも大して珍しく無くなってきたのか、昔ほど警戒されるようなことは無くなった

なんだろう…昔はすれ違うだけでも青い顔して逃げていったのに、今じゃ…なんとうか道端に落ちてる糞を踏んだみたい…靴の裏にガム付いてたみたい…とにかく恐怖、と言うよりは『あーあ、縁起悪いもん見ちまったなあ』みたいな反応になった嫌がられてるのには変わりないけどね

ただ中途半端に怖がられてるからなのか、最近だと里のクソガキ達が度胸試しとか言つて俺に泥団子を投げつけるというチキンレースをやっている

妖怪は里から出てけ〜！みたいなこと言いながら楽しそうにやってくるのだ。妖怪退治ごっこみたいなのだろうか？

初めの頃は大人達がビビってる変なやつを見に行こうと肝試しみたいな扱いを受け

ていたが、チラチラ見てくるだけは飽きたのかイタズラまでしてくるようになってきやがった

睨み返すと変顔をしながら逃げていく。クソガキめ……

そんなクソガキ達も犯行がバレたらしく、寺子屋の半妖が顔を真っ青にして謝りに来た

いつの時代も教師つてのは謝り続けで大変だな

しつかり叱つてもらうために泥を投げてきたクソガキ達の名前はチクつておいた

名前を言った途端、半妖がさらに顔色を悪くさせていたし、普段は猫被つてる奴らなのかもしれない

ざまあみろ

他にあつた事と言えば、毎年秋には秋姉妹のお二人に挨拶もとい美味しい秋の味覚を貰いに行つたり、他の季節には雛やルーミア、河童の妖怪と妖怪の山で花見したりピクニックだったりもしている

地底の方もちよくちよくさとりに会いに行つたり……

主に本を届けに行くことがメインだが、金欠のときなどは飯をたかりに行っている
特に紅茶やコーヒーは地霊殿でしか飲めないから有難い

紫は相変わらず忙しそうだし、藍は俺にだけ敵しいし……

そりゃあ地底にいた頃に比べれば充実しているが、そこまで大きく俺の生活が変わることは無かった

もつと自由がなかったり、酷使されたりするもんだと思っていたけど…案外もつと早くに式になっておけば良かったかもしれない

まあ…地上に来てから起こった変化と云えばそれぐらいだ…

いや…ああそうだった忘れていた、大した事でないけれど、最近あつた事と言えbaum一つ…

—博麗の巫女が死んだ



あの日突然この人里に八雲の妖怪がやって来てから、もう二十年が経とうとしていた二十年、決して短くない時間だ

もうあの妖怪がやってきた日のことはすっかり昔のこととなつてしまい、あれだけあの妖怪の事を恐れていた里の人々も警戒する人は次第に減つていつていた…

おかしな話だ、あの日やって来てからあの妖怪は“何一つ変わつてはいない”のだと

言うのに：初めて来た時のように無言で、無機質で、無表情で：何も変わらずあの日のように：。あの命をなんとも思っていないかのような目は：何一つ変わってはいないというのに：

だと言うのにあの妖怪を恐怖する者は減っていった

未だ名前すら分かっていないその妖怪は、スルリと日常に入り込み、今やその妖怪の恐ろしさを知らない世代が生まれてきている程だ

私は怖い、いつものように授業で使う書物を纏めていたあの日：ただ淡々と妖怪を“処理”していたあの男が：

妖怪が遊びで人を殺すのとも違う、人が復讐心で妖怪を殺すのとも違う：！

もつとおぞましい、無機質に死体を眺めていたあの男が、私は：恐ろしい

二十年そこらじゃ：とても忘れられない

確かに人里内で悪さをしようとする妖怪は減った

十年も経てば、妖怪が人里内で人を襲おうとした、という事件は珍しいものになり：二十年も経てば、そんな事件を知らない子供も少なくなかった

あの妖怪の異質さは、人間だけでなく、妖怪にも効果はあったらしい

人があの妖怪の“仕事”を見る機会は減った

今の子供はあの妖怪が“仕事”をしている場面を見た事がない者も多い

もしかしたら、『何故か大人達が近寄らないようにと言っている怖い顔の人』程度の認識なのかもしれない

そうならない為に常日頃から授業で妖怪の恐ろしさというのを口を酸っぱくして言っていたのだが……しかしそれは起きてしまった

数日前から違和感があった

授業が終わった後、5人程の子供達がにやにやと楽しそうに人里を走っているのを何度か見た

まるで秘密基地に行く時のような歩調だったから、もしや人里の外に出てるんじゃないかかと一度問い詰めた事もあったが、どうやらそういうわけでもないらしい

じゃあ一体何をしているんだと聞こうとしたが、子供が楽しんでることに大人が首を突っ込みすぎるのも野暮だろうかと思ひ直し、追求はしなかった

なに、外に出ていないのならそう怒る必要もあるまい、とその時そう考えていた
もう一つの違和感は例の妖怪についてだった

というのもここ数日、髪も目も服も、その全てが灰色のあの妖怪が泥を付けて人里を歩いてた

ここに来た時から変わらないその灰色の服にべちゃりと茶色い泥が付いていたのだ

今まで全身を灰色に統一していたため、その泥の汚れが一際目立って見えたただ、変わったところと言えればそこだけ

泥で汚れている当の本人は、全く気にした様子もなく、それどころが泥が付いている事すら気付いてないのでないかと思うほどいつも通りに無表情だった

疑問に思うことはあっても、自らその理由を聞きに行く勇氣はなく、本人が気にしていないなら特に私が関わる必要も無いだろう思つて無視していた

そんな日が何日か続いた

あの妖怪に付いた泥の位置は会う度に変わっている

今度は肩に泥が付いているかと思つたら、前回泥の付いていた部分は綺麗さっぱり無くなつていたので、あの灰色の服の替えを何着も持つているのか、と私は脳天気なことを考えていた

だから私はその事については気にしていなかった

——授業後、子供達があの妖怪に泥をぶつけている、なんて話を聞くまでは…

◇

——失念していたッ！

あの妖怪と子供達とはよく同じ時間帯に会うということ、子供達の手が泥まみれになつてたこと…

よく考えればすぐ気付くことだった…!

ただ、あの妖怪に泥をぶつけるなんて…そんな事、する訳が無いと勝手に思い込んでいた!

来たばかりのあの妖怪を知っているなら、そんな恐ろしい事をしようとする筈がない、と…

まだ五、六才のあの子達は知る由もないだろう

とにかく、私はそのことを聞いた瞬間血相を変えて飛び出した

走り回って、ようやくあの妖怪を見つけて…そして今日もまた、その服に泥を付けているのを見て、私は一層顔色を悪くした

急いで近付くと、あちらも気付いたようでゆっくりと振り返った

「そ、その! すまなかった、私の生徒が迷惑をかけていたみたいで…服の方は私が弁償する、その泥はもう落ちないだろうし…」

そう謝罪して頭を下げた

いざ対面して、段々としりすぼみする

いつもと変わらぬ様で見られて体が硬直する

ただ普通に話すだけでも口が乾いてくる

なんでだ、なんで何も言ってくれない：せめて怒るなり注意するなりしてくれた方が話しやすい

謝罪に来たと言うのに相手が何も言わずにただじつと見てくるというのはとてつもなく気まずい

謝りに来た側の人間だからそのまま話を切り上げるなんて事も出来ないし：無視する訳でもなく無言で見られている場合、どうすればいいのか：

いや：泥を投げられ続けているのに何も仕返しをすることは無かったし、実は彼はそんなに怒っていないのかもしれない、と思い恐る恐る頭を上げると：

——信じられないほどの冷たい瞳と目があつた

思わず言葉が漏れそうになるのをすぐさま抑える

私は直ぐに自分の都合のいい甘えた考えを捨てた

何が怒ってない、だ。とんでもなく怒ってるじゃないか

なら何故今まで何もしてこなかったのか：？

：私が謝罪に来るのを待っていたのかもしれない

妖怪相手にこんな事をする子供達を放っておいて私が謝りに来るのを待っていた：。

だと言うのに当の私はそんなことも知らずに呑気に過ごしており、その上何日も遅れ

て謝りに来た

先程の冷たい瞳が思い出される

なんでも、なんでもいいから彼の怒りを鎮める為に何か言葉を投げかけないと…

そう思いついて口を開こうとした瞬間、私より先に彼が口を開いた

「柳沢 兼吉、本堂 洛家、佐々木 郎四郎」

「な…え…?」

「倉掛 敏夫、津之地 幸響」

目の前の妖怪が淡々と名前を挙げていく

私を冷たい目で見下ろしながら一人一人の、名前を…

背筋に冷たいものが走る

だって、だってそれは、他でもない——私の生徒の名前だからだ

「なん、で…名前を…」

調べられているのか、名前を

人里内で誰かと話しているところなんてここ最近じゃ一度もなかった…

ただ理由もなく人里に居た訳じゃない…あの子達を一人一人、調べていたのか…!?

ゾツとした

「…っ！な、なあ！頼む…！あの子達を許してやってくれないか！私が普段からあまり

強く言つてこなかったのが悪いんだ……最近の子達はお前の事をよく知らなくて……私の方から注意しておく……！だから……」

「……」

そう私が弁明している間も変わらない顔で、呆れたように、相変わらず冷たい目で私を見ていた

その目で見られて、身体が萎縮する

後悔が押し寄せてくる。

もっと早く気付けば、もっと強く言い聞かせていれば……

やがて興味を失つたのか、必死に弁明をする中無言で私の横を通り過ぎて行つた

私はそれをゆっくりと見て、居なくなつたのを確認した

確認して安心すると同時に疲れがどつと襲いかかつてくる

許されたのか……そうでないのか……

未だにあの顔からそれを読み取ることは難しい

「どうしたものか……」

疲れた体を引き摺って歩く

私は直ぐに例の子供達を集め、これまでで一番キツく叱りつけた

その後、その子供達の親御さん達にも事情を説明し、絶対に人里の外に出さないこと、

夜間は出歩かない事を言いつけた

親御さん…とは言っても全員私の元生徒だ、みんな顔を真っ青にして子供を叱りつけていた

当然のことだ、元来無力な人間が妖怪に喧嘩を売るなんて相応の報いを受けるのが普通だ

逆にこれぐらいの叱りで終わるなら良いのだが…

今一度人里での妖怪との関係について考え直さなければならぬ

あの妖怪に限らず、人と妖怪では考え方が根本から違うのだ

小さな人間の些細な行いで恨みを買う可能性だってある…そんなもの常識で、子供から老人まで知っていて当然の事だ…

だが最近だと、里全体でその意識が薄れていつているようにも感じる…

人が…妖怪の恐怖を忘れてきている…

習ったものとして知っていても、実際にその恐ろしさや残虐性を楽観視するものが増えている…

だがそれは仕方の無いことでもある

恐ろしい、と安心できる要素なんて無いのだ、と…そう理解しているはずなのに心のどこかで大丈夫だろうと楽観視してしまう…

かと思えば心配する必要のない安全な日々の中で些細な不安に心を覆われるでもそんな小さな矛盾こそが人の本質だ

妖怪には無い非合理的な矛盾した存在、それが人だからだ

「これは…近々稗田家とも話をした方がいいかもしれない…」

私はこの事について決して樂觀視出来ない案件だと認識するのだった

第三十四話 灰と神社

東端の長い階段を登ると神道世界であつた

軽くお辞儀をして、赤い鳥居をくぐつて参道を進む

神社の縁側では紫がお茶を飲みつつ手招きしているのが見えた

紫の前にはまだ幼さの残る少女が慣れない顔付きで俺を見ている

「ようこそ博麗神社へ」

この神社の巫女であろう少女がぺこりと頭を下げて言った

神社に相応しい真っ赤な色と、特徴的な少し露出の多い巫女服、俺にとっては苦い思い出のある服装だ

「話は聞いております…八雲の式神様よ。亡き先代に代わつて新しくこの博麗神社の巫女となりました、博麗——」

常人をはるかに超えた強力な霊力を持った少女

そんな巫女の話をもつて右から流し、ある疑問を持つて紫を見た

「——前のより弱い」

そう言うと、巫女はビクリと体を震わせ申し訳なさそうに顔を下げる

確かにこの少女は強い、そんじよそこらの妖怪なんて敵じゃないだろう…

けれども前の…俺が紫の式神となった時に居た巫女よりも弱い…そして俺が初めて戦ったあの巫女よりもずっと弱い

「あなたよりは全然強いわよ」

紫がやれやれといった具合にため息をついた

そりゃあそうだろう、博麗の巫女なんだぞ？俺より強いのかなか大前提として、勇儀を殴り飛ばすようなやつが普通じゃないのか？

この子も強いかもしれない、俺ぐらいなら簡単にボコボコにできるだろう…

でもこの子が勇儀に勝てそうかと聞かれたら無理だと思う

いや、前のも勇儀に勝てそうでは無かったけれど…

「……まあ確かに前の子よりも少し劣っているのは事実ね」

「…すみません、力不足で…」

そう言っただけでさえ小さい背を更に縮めて申し訳なさそうに俯いた

「まあまあ、あなたはまだなつたばかりでしょう？先代の子も初めはそんなもんだつたわよ」

「し、しかし…」

「大丈夫よ、その為に白墨を呼んだんだから…」

そう言つて紫はニンマリと笑みを浮かべてこちらを向いた

「?…なんだろう?…嫌な予感がする

今日はただ新しい博麗の巫女の紹介をするだけと聞いていたんだが……

不意に後ろから肩に手を置かれる…紫は前にいるのに、後ろから圧迫感を感じた

久々に見た黒い笑顔で紫は言う

「白墨、あなたはちよつと力不足な巫女の手伝いをして欲しいのよ。ほら、最近是人里での仕事もほとんど暇でしょ?」

咄嗟に無理だと言おうとして…肩が万力に挟まれたようにギチギチと悲鳴をあげる
い、痛い!こいつ前のちよつとやらかしちゃったことをまだ根に持つてるのか!?

「しかし表立つて巫女と妖怪が協力するというのは問題になりませんか?…」

そ、そうだ!巫女と妖怪と一緒に妖怪退治なんてしてたら妖怪側、人間側の両方から
バッシングを受けるぞ!

「大丈夫よ、そりゃあ二人一緒に共闘…なーんてしたら問題になるけど、あなたが捌ききれないような…例えば二箇所と同時に異変が起きた時とかにどちらか一方の問題を白墨にやらせたり、雑魚狩りだとか貴女が一人だと手が回らないような事に白墨を使えばいい」

まあ嫌な話ではあるけど理屈はわかる。あと肩痛い

つまりは“一緒に戦う”ということさえしなければどんな手伝いをしてもいいわけだ：俺の自由な時間を削ってな

でも紫のこの感じを見るに断れなさそうだ：この前怒らせちゃったしな。それと肩痛いし

仕方ない：雇われ金代わりのご飯を楽しみにしておこう

「紫、報酬」

肩の痛みを確かに感じながら紫に言うと、じとーつとした目で睨まれる

「今だって人里の仕事なんかほとんども無い癖してよく言う：でもそうねえ：あなたの頑張り具合では考えるわ」

ええー！と言いたくなるのをぐつと堪える、けどやっぱリムカついたので僕不満気ですって感じのオーラを漂わせて紫を見た

「不可侵条約」

「……」

まあ最近暇だったしな！既に毎日のお菓子と藍からのお小遣いもあるしな！あと肩痛いし！！



例の妖怪について事が起きてから約一ヶ月

私は子供達がなんの報復も受けていないことにひとまず安心した

一応警戒して見ていたが特にそれと言って変わったことも無かったのでこれからも大丈夫だろう

どうやら許された…？みたいだ

そうして自由な時間も出来たので私は自分の元教え子の元へ来ていた

「いるか？春水」

そう言つて人里内でも有名な道具屋の扉を開くと、昔とは大きく変わつて顎髭を生やした壮年の男が居た

「おや？慧音先生じゃあないですか。なにか必要なものでもありましたか？」

もう店仕舞いの時間らしく、掃除をしようといった所であつた

「いや今回は買ひ物をしに来た訳では無いんだが…珍しいなこんな時間から店仕舞いなんて、日を改めた方が良いか？」

「いやあとんでもない！何時でも来てもらつて大丈夫ですよ！なんでしたら久々に飲みませんか？」

大きくなつた春水は、それでもまだお調子者であつた頃の面影を残していた

手で杯をつくつて傾ける仕草までして随分とご機嫌な様子であった

いい歳してもそんな所は変わらない春水に嬉しいような呆れたような感情を抱きながらため息をついた

「お前……こんな時間にそんな事言っていると今度こそ馨子に愛想つかされるぞ」
前に起こつたことでも思い出したようで「ちよつと……それは勘弁願いたい」と苦笑いで誤魔化していた

冗談で言つたつもりだったが心当たりがあるらしい……

「まあ今はそれはいいとして……お前、あの妖怪とよく会つているだろう？」

そう言うのと真面目な顔に戻り、考えるように右手で髭を触つた

「あの妖怪……？ああ……白墨のことですか！まあよく会つていると言つてもあいつは気まぐれですからね、数ヶ月で来る時もあれば数年経つても顔を見せないような関係ですよ」

「白墨……あの妖怪、白墨というのか」

想像よりも随分と親しげに……それに名前まで知つていたことに私は驚いた

「それで、あいつのことではなにかあつたんですかい？」

そう聞いてくる春水に、言おうか迷つていたことを告げる

「春水、お前はもうあの妖怪……白墨とは関わらない方が良い。客と店員という関係なら

まだしも…お前とあの妖怪は少々近すぎる、危険だぞ」

それを聞きいた春水はゆっくりと目を瞑り、そつと柵の木目を撫でた

「それは、よくある人間が妖怪と親しくなるなってやつですか？」

自分の好きな事に頑固な春水はてつきり怒るかもしれない、と身構えていたので想像と違った優しい声音に肩透かしを食らった

「い、いや…白墨という妖怪が恐ろしいから…だ」

春水はもう一度噛み締めるように聞いて、それから十分間を空けてから口を開いた

「……それじゃあ聞けねえなあ…。里全体の守りごとならまだしも、俺個人の危険っていうならそりゃ俺の自由だぜ」

それを聞き、諦めて自分の緊張を解いた

「…敬語が抜けているぞ、歳上に対しての敬意が足りないな」

「——ハハ。元から敬語なんてまともに使えなくて、今までのごちゃ混ぜの敬語だつてカッコつけて言っていただけです。知ってるでしょう？それとも前みたく叱つてくれるんですか？」

私はそのどこか芝居がかかった言い方にすっかりと毒気を抜かれてしまい、白墨のこともなんだかそこまで心配する必要はないように思えてしまった

「そうだなあ…。もう今のお前には子供もいるし、頭突きをして、うつかり頭を割つてし

まったら大変だからな、今回は許してやろう」

ニヤリと笑いおどけて言ってみせると、また春水も同じように人好きのする顔で笑った

ひとしきり笑いあつたあと、でもなと続けて私は言う

「お前は自分の自由だとも言うが、今のお前には妻と…それに子供も居る。自分だけじゃないんだって事は頭に入れておけ」

「…まあ俺も、今なら母親の言っていた事もわかる。子供を得体の知れない奴から遠ざけようとする…きつと俺だってそうしていた。」

昔を懐かしむような目で語る春水に私は黙りこくつた

私の方が何年も長く生きているというのに、なんだか知らないうちに置いていかれてしまったような気分だ

「でもなあ…あいつと知り合つたのも、なんもかんも全部偶然だったけれど…。偶然関わりがあつて、偶然話してみても…。それで…。まあ、言うほど悪い存在じゃあないですよ。良い存在かつて聞かれたら答えに困りますがね…」

そう言つて、春水はハハハ…と力なく笑つた

「…なんだ、結局はお前もよく分らないんじゃないか」

「いやあ、ほらあいつつて何考えてるか分からないじゃないですか」

「お前なあ……」

そのあんまりにも適当な春水に呆れて再びため息をつく

そして軽く帽子をなおすと私は立ち上がった

「もう帰るんで？」

「ああ、言いたいことは言ったしな。それに……お前も元気そうだし、一応心配してたんだぞ？前はもつと辛そうな顔してたからな」

「……ははッ……それなら尚更大丈夫ですよ」

「尚更？まあ元氣そうなら良い……子供のことも、しつかりな」

春水の言い方に疑問を覚えつつもそう言い残し、返事も聞かずに店を出た

まだ白墨に対しての不安はある

信用出来る要素も未だ見当たらない

けれども私は気付く、春水の樂觀的な喋りに乗せられ、自分の足取りも幾分か軽くなっている、という事に

きつと……大丈夫なんじゃないか、と……話してみたら考えるほど怖い奴では無いかもしれない。今度会う時はいつもの先入観を捨てて話してみよう。そんな考えが頭に浮かんだ

静かな夜の道に自分の足音だけが響き渡り、私の心を揺らす

今夜は久々にゆつくりと寝れそうだった

第三十五話 天狗の性格

季節はすっかりと移り変わっていき、もう何度目かも数えていない春が来た

人里の端の方なんかはまだ雪がちらほらと残っている所もあったが、俺の近くの場所では春の匂いが漂っている

あの日から巫女とは直接顔を合わせることは無いが、よく妖怪退治に駆り出されるようになっており、いつも以上に色んな所へ出歩かなきゃいけなくなった。だからなのか余計に周りの変化には敏感になっていた

もしかしたらこの春の匂いは昨日見た、やたらと元気の良い春妖精が関係しているかもしれない

そんな事を考えつつ縁側に座って緑茶を飲む

湯呑みから伝わる熱は熱すぎず、でも決して温くは無い。丁度いい温度だ

うん、お茶は美味しい

ご飯も好きだけど、お茶を飲んだ後の心の充実感もそれに並ぶ程好きだ

しばらくそうやって楽しんでると、春の風とはまた違った風が吹いてくる

どうやら頼んでいたものが来たようだ

数歩あるいて外へ出ると、バサバサという音と共に、空から一際大きい鴉が降つてきた

いや、本来降つてきたという言葉は適切では無いが、予想外に大きな鴉だったのもあつてか、思いのほかずしりと着地したのだ

大きな鴉の頭には、やたらと丈夫そうな皿状の帽子が乗っている

丁寧に紐で固定までされていた

首からは長方形の箱をぶら下げており、中には丁寧に折られた新聞がギツシリと詰まっていた

そんなにギツシリと入れた所で買うやつはせいぜい片手で数えられる程度だろうに……

あたかも売れてるかのよう装っているそれに、若干の憐れみを感じる

俺は腰に付けていた袋から、数枚の小銭を取り出し、鴉の帽子の上に置いた

ガアツ！と鴉が鳴いたのを確認し、お金の代わりに新聞を一部だけ頂戴する

そういう契約なのだ

俺が新聞を取つたのを確認すると、鴉は次の購入者の元へ行く……ことは無く、真つ直ぐと妖怪の山に帰って行つた

いや……もしかしたら妖怪の山に買いたいと思う人が居たのかもしれない、あれだけ多

めに刷ってあるのだ、もう一人ぐらいは居るだろう…きつと…。

鴉が飛んで行ったのを見届けてから新聞を広げた

最近ではめずらしい横書きスタイルに、特徴的な時期遅れな内容

“花果子念報”それがこの新聞の名前だ

記事の内容やまとめ方はそこそこ良いと思うのだが、載っている内容がどれもこれもふた月以上も前のことだ

新聞なのに載っている記事が遅れている…というのはだいたい致命的な気もするが、記事自体は良くまとめられていて読みやすい

俺は、あゝそういやこんな事あったなあ…と懐かしむ事に使っている

もとより新しい情報が手に入るとは思っていないからな

ただそんな事よりもこの新聞の記者を見て驚いた

かなり…かなり前…妹紅と会うよりもっと前…俺は一度だけ名前も知らない妖怪に助けられた事がある

当時は本当に何も知らなくて、名前も知らなければ、どんな妖怪かも全くもって分からなかった。感謝を告げる間もなく飛び去ってしまったのを覚えている

そんな少女が妖怪の山で天狗として新聞を書いていたのだから、それはもう驚いた

案外近くにいるもんだ

ただその新聞、見たところ全然売れていない。全くダメダメだ。

軽く調べてみたところ、天狗が趣味で新聞を作る……というのは割とあるらしく、この少女以外にも多くの天狗達が新聞記者の真似事をしているのだが……なんとその天狗達の中でもダントツで売れていないのである

別にあの日の恩を返す……という訳では無いが、さすがに可哀想なので買わせてもらっているという訳だ

情報が遅れているということを除けばそこそこ良い新聞なので俺個人としては気に入っている。それに天狗達も元から利益を得るのが目的ではないようで、値段は安い。財布に優しいので大歓迎だ

ちなみに、買いたいですといった趣旨の手紙を送ってからは二、三日に一度こうやって鴉が送り届けに来てくれるようになった。結構楽である

そんな訳でこの新聞を買ってからかれこれ一年目

相変わらず内容は良い、面白おかしく事実を曲解した他の天狗達の新聞よりも、しっかりと分かりやすくまとめてあるこの新聞の方が好ましい

まあ内容は一、二ヶ月ぐらい前のものだけ……

◆
重苦しい空気の中、その女は値踏みでもするかのようじろりと私を見ては、ニヤニヤと軽薄そうな顔をする

ようやく結界の事も一段落してゆつくり出来ると思つたらこれだ、嫌になる

今私の目の前にいる天狗は妖怪の山を仕切つてゐる大妖怪、数ある天狗達のまとめ役であり、過去に鬼から妖怪の山を譲り受けた者：天魔その人であつた

「どうした紫、ずいぶんと老けた顔をするじゃないか。まあ気持ちはわかるぞ：かくいう私もここ数年でずつと歳を取つてしまつたみたいだよ、なにせ少しの外出から戻つてきたら家が丸々消し飛んでいたからな、その上山もボロボロときたものだ。酔つ払つた小鬼様が戻つてきたのかと思つたぞ」

その芝居がかつた言い方にため息を付いて答える

「何を適当な、事の発端は天狗でしように。部下の管理もまともに出来なかつたあなたの自業自得よ、あくまで私は降りかかる火の粉を払つただけよ」

「…ほう、言つてくれるな。だが紫よ、それは貴様にも言えた話だろう？ 酔つ払つた小鬼様が戻つてきたのかと思つたと言つたな？ それ山がこうまでボロボロになるのにそ

れ以外考えられなかったからだ。もし紫なら例えそれ相応の事であつても幻想郷の大勢力である我らと敵対する程の事はしないはず、しかし、話を聞けば山を壊したのは八雲の者と言う……考えられるものは二つ、八雲の名を騙る偽物か、貴様も想定外だった部下の行動か……教育不足はお互い様だ」

「よく回る口ね、終わつた事をネチネチと……今更どつちが良いの悪いのを言いに来たのかしら？」

「まさか、嫌味は言つたが否はこちら……今更難癖付けて要求したりはやらないさ」

「そう言つて天魔は居直した

どうやらここからが本番らしい

だつたら今までの会話はなんなんだと言いたくなるのをグツと抑えて言葉を待つ

長つたららしい嫌味が後に続くか、ただの趣味か……どちらにしろ面倒臭い事この上ない

「そう怒るな、わざわざお前が暇そうになつたのを確認してから来たんだ。お前でも、九尾の方でもなくあの妖怪を使ったのも、それほど結界から手が離せない状況だつたからだろう？……して、私が見たところ、その結界の事に関しては一段落付いたと見た……だと言うのにお前、今度は何を企んでいる？」

「そう言い天魔は私を鋭く睨みつけた

嘘を許さない力のこもった瞳には、天狗の彼女に似つかわしくない鬼の片鱗を垣間見た

「……幻想郷に新たな結界を張る」

目を細め、静かな怒気を滲み出す天魔に僅かな緊張を覚えた

「お前がそう言って幻想郷の勢力を大きく傾けるような結界を張ったのは、300年以上も前だったか……つい十数年前にも人里とのルールを喧伝したばかり……そして今度は懲りずにまた結界……か」

「全て幻想郷にとって必要な事だと説明したはずよ」

「ハッ……それはあれか？ 幻想郷でお前が支配者になる為に必要だ……という意味か？」

怒りが隠れ、今度は呆れたように笑った

「支配者……？ それこそまさかね、天狗でもあるまいし。いつの時代もみつともなく権威にしがみついて離れようとしなのはあなた達でしょう？ 長生きしてもこうはなりたくないいわね」

「確かに、天狗は山の支配者として長く君臨している……だがそれも古き時代から鬼の元で従順に従い、妖怪を管理し、そして山を譲り受けたからだ。お前のように居座つていただけでは無い」

「そうして山を譲り受けて、その結果が白墨一人にあのザマかしら？」

そこで初めて天魔が不機嫌そうに眉をひそめた

天魔にとつても悩みの種として決して無視できるものではないらしい

「…痛い所を突くじやないか、そうだな…確かに鬼から山を任された身としては情けないものであった…。ふん、だが次からは射命丸を出させる」

「あら、数十人がかりでもダメだったというのに、今更鴉天狗が一匹増えた事で白墨を相手に出来ると？」

私の言葉に、天魔は今までと打って変わって悠然と構えて答えた

「ああ、出来る。確実にな」

「……………」

「……………」

そのあまりの自信と説得力に私は一瞬たじろぎそうになり、沈黙が続く。

息が詰まりそうなほど私と天魔の間の空気は張り詰めていた。

そうして、私と天魔は二人して――

「はあ……………」

ため息を付くのだった。

「あー、うん。やめだ。やめにしよう。部下を使って張り合うなんてみつともない。

あー、駄目だな、隠岐奈にも仲良くしろと言われたが、お前が絡むとどうも喧嘩腰にな

る」

途端に緊張を解いてダラリと身体を楽にした

「…ええ、そうね。いい加減不毛だわ…でもそも最初の話からだいぶ脱線しちゃったし

——うん？ちよつと待って…：：：隠岐奈？なんで隠岐奈が出てくるのよ？」

突然なんの脈絡もなく出てきた名前に思わず反応すると、天魔が、ああそう言えば…：：：と思い出したように手を叩いた

「すつかり忘れておった、そもそも隠岐奈から『協力してやってくれ』と頼まれて来たんだった」

「…：：：へ？」

あつげらかんと言つてのける天魔に思わず呆けた返事をしてしまった

「おう、協力してやるぞ。お前は嫌いだが隠岐奈には借りがある。それに私も幻想郷が今のままでは駄目だということも、何となくだが理解している…：：：そしてそれをどうにかするならお前以外に適任が居ないというのもまた事実…：：」

「…：：：私の邪魔をしに来たんじゃ…？」

「…？馬鹿言えそんなこと一言も言つてないだろう？ただお前の計画とやらに反発する妖怪を抑えるのも面倒でなあ…：：だから憂さ晴らしに嫌味を言いに来ただけだ。協力はしてやるぞ？」

当たり前だと言わんばかりの物言いに、思わずこめかみに力が入る
そうだった、こいつはこういう奴だった

協力するならさっさとそう言いなさいよこの鳥頭！

文句を言いたくなるのをグツと……グツツツ！とこらえた

「ま、まあいいわ……それより、隠岐奈が口を出すつてことは……」

「ああ、『そろそろ過労で倒れそうだから手伝う』だそうだ」

その言葉に複雑な気持ちになりながらも少しばかり安堵する

隠岐奈は隠岐奈で幻想郷のたれに行動してくれてはいるのだろうが、イマイチ動機が
分かりづらい

その上に行動基準も謎だ

ただ隠岐奈自らが手伝うと言ってくれているのだから期待は出来るだろう

毎回口を挟むことなく傍観を決めているが、あれでいて大物だ

「そう……正直助かるわね。それで伝えることは終わり？」

案の定天魔は考え込むように唸った

「あーそうだ、そうだった。隠岐奈からもう一つ伝言だ。『灰色の式神をよく見ておけ』
だそうだ」

不可解な伝言に私は眉をひそめる

私に対して口を挟むことがほとんど無い隠岐奈が、わざわざ天魔に頼んだという点はどうにも引かかった

「…白墨のこと？まあ確かに、見ていないと何しでかすか分からない様な奴だけ…」
そう言うのと、次に眉をひそめたのは天魔だった

天魔のおかしなものを見る目に、私は自分がズレているような居心地の悪さを感じた
「本当か…？私でさえわかる。あの妖怪は…なんというか少し異質だ。てつきりお前はとつくに気付いていて、あえて近くに置いてるものだと思っていたが…私達の中じゃあこういうのにいち早く気付くのは大抵お前だ、本当におかしいと思わないのか？」

私は困惑した、確かに白墨は変なやつではあるが、ここまで異様なものとして扱われるだろうか…それも天魔だけならまだしも隠岐奈まで…

「異質って…どういう意味よ？」

「さあな、てつきり私はお前が知ってるもんだと…ただ異質なんだ。逆にあれだけ近くにいるのに何も疑問に思わない方がおかしいと思うがな。まあ言いたいことは言ったし、私はもう行くでしょう」

「え、ええ…それは別に構わないけど…」

元々なにか荷物を持ってきた訳でもない天魔は、立ち上がると、早々に自らの大きな翼を広げた

薄暗い空へと帰ってく天魔を見ながら考える

私にとって白墨が異質だと言われる理由はよく分からない。あの変な方向に思い切りのいい性格か、あの少し変わった身体の治りか…それ以外を指しているのだとしたら私にはお手上げだ。ただ、いつもは戯言だと聞き流す天魔の言葉が妙に引っかかる

だが今の私に必要なのは幻想郷の安定した体系の完成だ

白墨が何者なのかはそのあと調べればいい

どちらにしろ、夢への実現をすこしでも早めるために、あの妖怪は必要不可欠なのでから

第三十六話 博麗大結界

暖かな春の風が頬を撫でる、もう朝日が出ているというのにやけに霧が濃い

今ではすっかり当たり当たり前となった朝の新聞を受け取り、いつもの釣竿とバケツ代わりの桶を手にして妖怪の山へと向かった

最近は巫女からの依頼も少ないので自由に過ごせる時間が増えた

川辺に腰を下ろして糸を垂らし、左手で竿を固定し、右手で新聞を持った

時期遅れの新聞に目を通す。いつもならここらで元気な厄神少女が来るのだが、この日は珍しく来ることは無かった

まあ、いつもわざわざ呼びかけたりする事はしていない

特に連絡することも無く、気がつけば集まっていた…という風なので来るか来ないかはその日の気分だ

「今日は釣れないな…」

春の陽気に当てられた、気だるげな声が聞こえてくる

目を向けるとまだ眠たそうな目をしたルーミアが元気な少女の代わりに座っていたいや、こいつはいつも居るが…というか居ない日はほとんど無い

釣りやら山菜採りをしていると、どこからとも無く現われてはその一部を奪い取っていく妖怪だ。通称飯取りババアだ。ロリだけど。

「釣れなきや私の朝ごはんがく…」

手伝えよ

ルーミアはいつものように手伝えることはせず、ダラダラと横になりながら文句を言うでも釣りというのは暇な時間が結構好きだ

こう、暖かい日に、川のせせらぎに耳を傾けながら新聞を読むのは良い

逆に良く釣れると、それはそれで楽しいのだが、かえって手が忙しくなってしまう周りの風景を楽しんだり、ゆっくり新聞を読んだりする暇が無くなってしまふ

だから釣りはそこそこ暇なくらいが丁度いい。時間も潰れるしな

ゆっくり待とうじゃあないか…だからよ、ルーミア

暇だからって俺の手をガシガシと噛むんじゃあない。俺は食用じゃないぞ

…おい、離せ。離せつたら離せ、いや…強、力強くない？痛つ…おい！痛いつて…痛いつて！はなつ…離せ…！おい！離せ！いや力強つ！おい！

「あいたつ?!酷い!叩くなんて!」

折れてんだよ!指が!

口元を血で汚したルーミアが涙目で叫んだ

それに対して、俺は血だらけで半ば折れかかった手を見せつけた

「え、食べてもいいの……？」

「違えよアホ！もつかいひっぱたくぞ！」

ちくしょう……おかげで新聞にも少し血が飛んだ

……忘れてた、獣骨どころが人骨をバリバリ喰うよな奴だ、放っておいたら根本から食われる……

ルーミアは甘噛みじゃんかー、とか空腹を紛らわせようとしただけなのに、だとかを不貞腐れたようにブーブー言っている

しばらくして血塗れの手が灰に包まれて元通りになる。綺麗に戻ったのを確認してから、再び新聞を手を取った

「え、永久機関……無限の食材……！」

………。

目を輝かせながらこちらを見つめてくるルーミアと少し距離を取る

こいつと関わるのは控えよう

じりじりと猫のようににじり寄ってくるルーミアに辟易する

「釣り、邪魔。」

しつしと手で払う動作も加えて言うと、またもや不貞腐れたようにブーブーと文句を

言い始めた

「ブーブー、いーじゃんか別に。そんな面倒くさい取り方、私の封印を壊してくれば、魚なんて100匹でも1000匹でも取ってきてあげるのに」

“封印”俺にとつて色んな意味で…主に巫女関連で強く印象の残っている言葉に訝しんで見ると、興味を持たれたと勘違いしたのか、待つてましたと言わんばかりに飛び起き、ルーミアは話を始めた

「そんなに気になるなら教えてしんぜようか。これは肉体に科せられたものじゃないよ。妖怪はね、肉体に囚われず精神に依存するんだよ。生まれながらにして自らを知り、そして名前は自己を確立する。」

ルーミアは聞いてもないのに勝手に話を始めた。

いつもの無邪気な顔が消え、淡淡とした口調で語り始める

時々こいつはこういう顔をする。特に気にすることでは無い

「それは私も同じだね。例えば人への恨みから生まれた唐傘が、それでも傘である事を固執し、弱者である事を受け入れたように。無意識か、それとも私のようにやられちゃったか…とにかく、自己を歪め、本来の在り方さえも見失つて……なら本来自分が持つていたはずの“何か”は何処に行つたんだらうね」

いつの間にかルーミアはその両手で俺の顔を添えるように持ち、その爛々と妖しく光

る紅い瞳を近付けた

「記憶、無い?」

「さあ? 記憶が無いのか、名前を忘れたか、それともつと根本的な何かを落としたか……つま、そういうこともこの頭のリボンが消えればわかると思うんだよ。」

どこか妖怪としての怖さを彷彿とさせたまま、ルーミアは続ける

あと数センチでぶつかるといふ距離

その紅い瞳が僅かに揺れたと感じたその時、突然ぼつと身体から離れると、両手を大きく広げ、そのまんまるな瞳をこちらに向けた

「つとー言うわけで! そんな封印、ぶつ壊しちゃわないか我が肉友よ! 今なら肉やら魚が10000匹付いてくるオマケ付き!」

ルーミアは可愛らしくウインクしながらポーズを取った

ヒーローごっこをする小学生みたいだ

話の途中でようやくかかった魚を釣りあげながら応える

「やだよ」

ガーン! と、古典的なショックの受け方をしたルーミアが崩れ落ちてきた

「は、薄情者……肉友同盟なのに……!」

面倒くさいし、そもそも封印の解き方なんて知らないよ

知ってたら俺は真つ暗闇の地底で生活なんてしない。俺が教えて欲しいくらいだ
「お、お魚が1000匹付いてきても…?」

「…腐る。」

俺は一日に1000匹も食べないし、あつても10匹あれば満足だ

つというか封印ってなんだよ。目も見えるし、元気いっぱいだし、食欲旺盛だし……
あれ?こいつ封印要素皆無だな

試しに聞いてみる

「封印、困る?」

「……?いいや?」

何故そんなことを聞くのか分からない、とでも言いたげな顔でキツパリと答えた
じゃあなんで封印解こうとしてるんだよ

俺の心の声に応えるようにさも当然といった顔でルーミアは言う

「封印つてとりあえず解きたくなるものじゃん」

……。

ルーミアとのくだらない話の間に作っていたものを取り出し、ルーミアに渡す

「お……おお?なんだてつきり無視されたのかと……やっぱり白墨も封印解きたくなってき
ちやつ……おお、魚!ちやうど疲れてお腹減つてたところ」

釣るのも全部俺がしてるのだが……まあいい安い出費だ

ルーミアはいそいそと座り直して両手で魚を食べ始めた

知能の低さは封印のせいなのか、それとも元からか……

なんかもう魚を食べることのでいっばいで、封印の事とか忘れてそうだ……。

これで有耶無耶にしておこう、封印とか絶対面倒だし

口いっばいに魚を頬張り、誰よりも美味しそうに食べている

そんなルーミアから目を離して釣りを続けた、願わくば俺の分がしつかり残りますよ

うに……

薄い霧の中でそう願った



数百年前に八雲紫によって張られた大結界、『幻と実体の境界』

今なお幻想郷に存在するこの結界は、人と妖怪との勢力バランスを取る為に張られた

物だ

世界各地から力の弱まった妖怪達を、ここ幻想郷に集める効果を持つ強大な結果急遽作られたその大結界の効力は絶大だった、いや絶大すぎた

その結界は八雲紫本人でさえも扱いきれず、世界各地の妖怪以外にも数多の欠点まで引き込んだ

八雲紫が本当の意味で心休まる日というのは稀だっただろう

なにせ結界の綻びが広がれば広がるほど、大きな“何か”が流れ込んでくる可能性がある
あるのだ

例外は無い。ありとあらゆる物、例えば伝説上の妖魔本であったり、怨念の籠った呪物であったり……

少し目を離しただけで人里が容易に壊滅するような物が流れ込んで来る可能性もある
る

八雲紫からすれば、自らが張った結界によって人里が滅びかけるのだ、笑えない冗談
だろう

そんな大結界も、最近になってようやく安定してきていた

未だに小さな物が流れ込んでくる事はあれど、綻びが広がり、厄災が紛れ込んでくる
…なんて事にはならないはずだ。

「しかし本当に紫の言っていた通りになってきたな…私も秘神としてそろそろ動かなく

ては……後戸から見ているだけという訳にもいかなくなった……」

かつて紫が言ったことそれは妖怪の絶滅に等しい事であった

『今でこそ幻と実体の結界で、幻想郷内の人と妖怪との勢力バランスを保っているわ。でもこれも妖怪の弱体化を先延ばしにしただけ……近い将来、人は妖怪を忘れ、神を忘れ、空想の世界を忘れ……そして文明の中で生きていく。そうなる前に次の手を打たなければいけないわ、今度は延命なんかじゃない……1000年先も変わらない幻想郷を……』

妖怪達が足掻くよりも早くに世界は幻想を忘れていった

いずれはこうなると理解はしていた

だが、想定よりも早すぎる

紫の話を聞いた時は性急過ぎると思っていたが、今にして思えば正しいのは紫であった

だが、それでもやはり今の紫は冷静じゃない

急ぐあまり、周りをよく見れていない節がある

だからこそ私は過度に紫の手助けをしないのだ

同じ目的を持って、同じ方向を向いて進んでいく……場合によつてはそうする方が良いかもしれない

だが、関わらないからこそ見えるものもある。二人して同じ穴に落ちるような真似は

するべきでは無い

元より紫は一人で動くのが得意な奴だ。あいつの目の届かない範囲は私が補う。

そして今日、結界が完全に安定したことを確認した八雲紫によって、この幻想郷の地に新たな大結界が張られようとしていた

八雲紫と今代の博麗の巫女が、幻想郷の最高神である龍神様に許しを得るといふ形で張られる巨大な隔離結界

数百年振りに姿を現した龍神様、それに博麗の巫女と八雲紫が協力して作る最大級の
大結界

それは内と外を分ける結界

それは常識と非常識の境界

それは少女が追い求めてきた不変の世界

空は割れ、地表は大きく揺れ動き、幻想と現実は分けられた

1885年、その日この小さな楽園を覆うようにして

『博麗大結界』が成立した

博麗の巫女が亡くなったのは、それから3ヶ月ほど経った新月の夜であった

今年もまた、古びた神社に鴉天狗の羽根が降る

第三十七話 太陽の畑

風に乗った灰が、俺に色々な事を伝えてくる

人里では、もう三十の後半になった春水が、頑固な親父になつてきたとか：

太い腕、それに髭まで生やしていて、いかにも怖いオヤジさんといった感じだ

3人の息子達は、既に自立し始めている者もいるらしく、時の流れの早さを感じた一方で、妖怪の山では天狗達が忙しなく飛び回っている

なんでも先日死んだ博麗の巫女の代わりを探しているらしい

詳しいことはよく分からんが、幻想郷には博麗の巫女が必要らしく、『なんでこう、頻繁に死んでいくのよ!』と鴉天狗が愚痴っていた

死んだ巫女とはそこそこ面識があつたが、結局なんで死んだのかも分かっていないただゆつくりと弱つていつて死んだ。

紫なら何か知っているのかもしれないが、特に俺が知る必要のあることでも無いだろう

灰の運んできてくれた情報を適当に紙に纏めていく

なんてことは無い、いつもの定期連絡みたいなものだ。とりあえず作っておけば藍に

怒られる事もない

「あら、珍しく意欲的なのね」

突然声をかけられたので筆を置き、後ろを振り向くと紫がいた

前触れもなく背後に出てくるのはやめて欲しい、いつもビツクリする

目が合うと、紫はニコリと笑い、手をひらひらと軽く振る

うん、胡散臭い。いつもの紫だ

紫から来るのは珍しい

思えばここ最近紫と直接顔を合わせていなかったな…

「纏めてるって事は巫女が死んだのはもう知ってるのね。当然だけど、博麗の巫女が居

なくなつた今、巫女のお手伝いってやつはもうやらなくても大丈夫よ」

「…早いな。」

前の巫女の時よりも随分と早い代替わり、それを聞くと、紫はピクリと眉を動かした

「…元から身体が弱い子だったのよ。時期が悪かった、彼女の病の進行と、幻想郷の寿

命、何もかも”時期が悪かった”。でも次を待つ余裕もなかった。だから、彼女には悪

いけど、”仕方なかったわね”。」

「…そうか。」

仕方がないのなら仕方ない。紫がそう言うならそうなんだろう

そんな俺の反応を見てか、紫は満足気に身体を揺らした

「最近じゃあ幻想郷もだいたい安定してきて、人里内で暴動を起こすような妖怪もずいぶんと減ったわ。…ふっその様子なら結構暇なんじゃない？」

茶化すように細目で聞いてくる紫に、俺は顔を横にぶんぶんと振り回して答えた
せつかく自由な時間が増えたと言うのに…！また余計に仕事を増やされるなんてごめんだ

「はいはい…わかった、わかったわよ。まあ、あなたならそう言うと思っただろう。全く変わっていないくて逆に安心するわ。…はいはいって…いつまで顔振ってるのよ…

そ、そんなに嫌なの…？」

さとりから勧められた本だつてまだ読んでないのだ、仕事に時間を使いたくない

「はあ…大丈夫よ、直ぐに何かやらせたりつてのは当分無いわ。私の方も結界の修復も終わって時間に余裕が出来たし、あなたも今までどおりにして良いわよ」

呆れたような紫の言葉を聞き、ほっとする

そこまで話して気付く、なんとも言えない不思議な空間だった

紫はいつも通り胡散臭いけど、なんとと言うおうか、なんだか安心したような、肩の荷でも降りたかのような、少し柔らかい印象を受ける。そんな少し変わった紫だった。

結界関連のゴタゴタが終わって、紫も心に余裕が出来たのかもしれない

嫌では無かった、むしろ俺には居心地の良い空間にも思えた。そして、それはきつと俺だけではないのだろう

何処と無く優しい顔の紫を見てそう思った



よく人里では、行つては行けない場所については話されることがある

行つたら二度と戻つて来れない、そんな場所だからみんな口を酸っぱくして言う

第一に夜には人里から出ないこと

どこへ行くにも、それが夜ならば死に行くようなものだ。だから夜は出歩かない、それを大前提として、行つては行けない場所として挙げられるのは、大きく分けて三つ
一つ目は迷いの竹林

迷いの竹林は誤つて入つてしまつても、親切な案内人が人里まで送つてくれることがある。道中で妖怪に出くわしたりしなければ比較的安全だろう

しかし厄介な事にある程度の距離までなら迷うことがない分、加減を知らずに突き進

んでいき、遭難する者が後を絶たない

だから人里では間違っても近付かない様にと釘を刺される

竹を取るにしても、迷うか迷わないか……その境界を知っている者でなければ御法度とされている

二つ目は魔法の森

日が届かない薄暗い森

辺りは化け物茸による有害な胞子で溢れかえっており、普通の人ならば数時間留まるだけでも身体を壊す

その居心地の悪さから妖怪さえも住もうとしない森なので、妖怪に食われるという危険性は他よりも低い

しかし、どの道胞子の毒性による危険がある為、人間が入るべきでは無いとされている

この二つの場所は幻想郷内でも一際危険な場所、というのは人間達の間では共通だ
そしてもう一つ、絶対に近付いてはいけないとされる場所がある

名前通りの異様な雰囲気や漂わせている他二つとは違い、その様相は明るく、美しい。
来る人を魅了するその場所は、一見すると危険とは程遠い

しかし、その実誰も近付こうとはしない

この幻想郷で最も美しく、そして最も危険な場所

美しい花畑に魅了され、無遠慮に入ってきた者に待っているのはただただ無惨で苛烈な応酬

近付くな、興味を持つな、引き返せ

そして思い出せ、矮小で、瑣末な我々を

そんな卑小な命、大妖怪の気紛れで消え去るのだと

しかしそれも無駄であろう

危険と知り、恐怖を知り、それでもなお惹かれてしまう…そんな矛盾した存在が人なのだから

故に、ただ一人の妖怪によって恐れられているその場所を、その美しき花畑を、人々は畏怖と憧憬を込めてこう呼んだ

『太陽の畑』



がりがり、と少女は道具も使わず両手で土を掘っていた

思いの外柔らかい為か、手を大きく怪我をすること無く、けれど小さいその両手は土で汚れきつてしまい、爪の間はすっかり土で埋まつてしまっていた

そんな事を気にもとめず、ただ無我夢中に土を掘り続ける

幼いが故の狭い視野には、回りなど気にしている余裕は無かった

だからこそ周囲の変化には疎い

それこそ、“誰かがピツタリと後ろに立っていても”

ただ少女は必死に土をかく

両親から行つてはいけない、と口を酸っぱくして言われている：そんな場所だから急いで終わらせようと必死だったのだ

ようやく満足のいく程度に掘り返せた事を確認すると、横に置いていた一輪のたんぼを植え、掘り返した土を優しくかけ直した

それが上手く完成すると、少女は立ち上がり、植えたばかりのたんぼと、その隣に広がる色鮮やかなら花畑を見比べ、嬉しそうに頷いた

「何をしているの？」

「えっ!?!わっ!?!わっ!?!」

突然の声に驚き、尻もちをついて振り向くと、夕暮れをバックに日傘を差した一人の

女性と目が合った

綺麗な緑髪、白いシャツに赤いチエック柄のベストと、そのベストと同じ模様の長いスカート。夕暮れの太陽と重なるように差してある傘は彼女の優雅さを際立たせていた

お尻を泥んこにさせつつも声をかけてきたのが人であることに安堵し、胸を撫で下ろす

「あら、ここは危ないって知ってて来たの、悪い子ね」

「あつ……え、えと……」

怖い人、鋭い視線に少し冷たい口調が少女の恐怖を煽った

少女の中で一番怖かったのは顔を真っ赤にして怒鳴り散らす道具屋の店主だ
しかし、今感じる恐怖はそれとは別の、形容し難い冷たいもの

初めの優雅なイメージを受けたあの微笑が、今では薄笑いのようにも感じた
「た、たんぼぼが……えつと……寺子屋にたんぼぼがあつて……それで……」

さっきの達成感はどこかへ消え、涙の滲んだ声が出る

思わず顔を上げると、続きを待つようにさつきと変わらない微笑があつた
どうしてか、その顔を見て少し恐怖が和らいだ

さつきと、いや最初と同じ顔なのに、その微笑はコロコロと印象を変えていく

気付けばいつの間にか目線を合わせるように屈んでくれていた。

その様子にほんの少し冷静さを取り戻し、充分時間を置いてから勇気を振り絞る

「…たんぽぽが、一つしかなくて、その…寂しそうに見えて…ここ、ここならお花が沢山咲いてるから…えと、その…寂しくないかなって…」

風が彼女の頬を撫で、感情は分からない。

「…そう、でも…花の植え替えはかえって根を傷つけ、弱らせてしまうのよ。」

彼女は立ち上がり、花畑の方を向くと、諭すように話した

「……っ」

少女は何かを言おうとし、しかしギョツと口を噤んだ

そして目をうるませながら植え替えたばかりのたんぽぽを見つめた

今はまだ元気だ

見つけた時と変わらず綺麗な花を咲かせている

けれど花はいつも見えないところで枯れていく、目を離せば枯れてしまうのではない
か

そんな酷く不安な気持ちに迫った

そうしてうずくまっていると、少女の髪を華奢な左手が優しく撫でた

「……、？」

少女が不思議に思い、たんぼぼから目を離して彼女を見ると、美しい花畑に目を向けながらもゆつくりと優しく、それこそ花でも扱うような手つきで少女の頭を撫でた

「タンポポは強い花よ、そう簡単には枯れないわ」

「でも…」

少女はどこか納得のいかないような歯がゆい思いで見ると、彼女は淡々と話を続ける「全てのものにはそこで生まれたことに意味がある。人が集団の中で生まれるように、花にもそこで生まれた理由があるものよ。その場所ですら生きられない花だって存在する。次からは無闇に植え替えをしないことね」

「……うん。」

どこからか聞こえてくるカラスのなき声が少女の沈んだ気持ちを浮き彫りにする

そんな少女の様子を見てか、少し悩んだのち彼女は付け加えるように言う

「…でも、そうね…この花もここに來れたことを喜んでゐるわよ。」

「え…ほ、ほんとう!？」

一転してぱあつと明るくなって聞き返す

どういう訳か、少女にとつてその言葉が今を慰める為の妄想じみたものには聞こえなかった。花の気持ちを代弁するなんて、それこそ突拍子も無い事だが、なんの疑いもなくすんなりとそれを信じられた

「嘘は言わないわ。」

また同じ微笑を浮かべ彼女は言う

その微笑みは、やっぱり最初と変わらない

もしかしたら、変わっているのはずっと私の心情であつて、だから彼女の印象がコロコロと変化しているように見えたのかもしれない

そんな風に少女は考えた

「もう帰りなさい、日が落ちるわよ」

「あつ……ほんとだーは、早く帰らないと怒られる……!」

辺りを見ると、空はすっかりオレンジ色に染まつており、空の奥の方では色の濃い青が混ざっている程だった

少女は慌てた様子で土を払って立ち上がる

「お姉さんも早く里に帰ろっ!」

「ふふっ……どうして私が人里に帰るのかしら?」

少女の手をぬるりと避けて芝居がかつた風に言う

「ここは怖い妖怪が出るんだって、だから早く帰らなきやお姉さんも危ないよっ」

「あら、おかしなことを言うのね。なら尚更早く帰りなさい」

「おかしなことって——」

「さっきの言葉、覚えてる?」

少女の心に湧いた違和感を無理やり遮るように一段と強い声が響く

「あつ…お姉、さん…?」

さっきまではなかった威圧感、少女の身体は動かなかつた。息をするのも苦しい程の冷たい恐怖

「全てのものはそこで生まれてきたことに意味がある…それなら…ふふつ…さあて、私
がここにいる理由は何かしら…?」

唾っている。程度の低いものを、見下すように。最初と同じあの顔だ
カラスの声も何も聞こえない。

恐怖の中に生まれた静寂で、自分の心臓の鼓動がやけに大きく聞こえる事に少女は気
付いた

「顔色、悪いわよ。ふふふ…何を今更——知つて来たのでしょうか?」

一歩踏み込んでくる

「う、うああ!うあああああわあああああああ!」

タンツと地を叩く傘に反応し、ようやく動くようになった身体を使って全速力で走り
出す

疲れを知らない少女は転ぶのも気にせずただがむしやらに里への道を駆けていく

幸い、他の妖怪が襲ってくるようなことは無かった

幸運だったのが人里まで届いた強力な妖力に妖怪すらも逃げたこと。それのお陰で少女は人里まで辿り着いたのだった

日の落ちきった花畑、そこには妖怪が居た。一人の妖怪が。

走り去っていく少女の背を見て小さく笑う

「…恐れなくして学びなし……なんてね」



美しい花には刺がある

誰もが目を奪われるような花畑。そこには人間も妖怪すらも寄せ付けない花好きの大妖怪が居る

性格は残虐非道、他者の苦しむ姿を好み、理由も無しに相手をいたぶり、残酷に殺す人からも妖怪からも恐れられている大妖怪

そんな、そんな恐ろしい妖怪。

誰よりも花を愛する美しく、残酷な大妖怪、風見幽香

彼女は今日も花を愛でている

第三十八話 多種多彩の花と灰

夏の暑い日差しが気になる時期

その生命力を存分に使って鳴き続けるセミを眺めていた

そして、そんなセミの姿がぐにやぐにやと形を歪める……いや正確に言えばセミの手前の空間がぐにやぐにやりと揺れているのだ

陽炎と言うやつであろうか、今日は一段と暑い日なので、もしかしたらそれかもしれない

この身体は汗をかくことは無いので、そこまで大きな気温の差には気付かないけど……

ゆらゆらと揺れる陽炎をぼけーつと眺めながら麦茶飲んだ

少し爽やかな味が口に広がって、そしてゆらゆらと揺れる陽炎も広がった

……広がった？

陽炎はしだいに大きくなり、そしてその空間が“裂けていく”

なんとも嫌な光景だ

陽炎と思っていた夏の空気は、すっかりかの大妖怪を想像させるスキマへと変貌した

のだ

ゆつくりとスキマが開き、身構えた

スキマの中から手が伸びていき……

しかし予想していた妖怪と違い、出てきたのはふさふさの黄金色の毛を揃えた九尾
……八雲藍だった

結界が安定してからは顔の鋭さもちよびつとだけ柔らかくなったようにも見える。
やつぱりストレス溜まっていたのだろうか

「……む？ああ、白墨か。ちようど良かった。先日渡された報告書に気になるところが
あつてだな……少し来てもらおうぞ」

「スキマ……？」

「……うん？……ああそうか。お前は紫様とは仮契約だったか……私は紫様の式神だから
な、その恩恵として紫様の力のほんの少しを借りさせてもらっている」

スキマから予想に反して出てきた藍に驚いていると、相変わらずの察しの良さか、尋
ねるより先に説明が飛んでくる

なるほど、これが紫の言っていた正式な式神になるメリットと言うやつか

仮契約しか結んでいない俺にはそんな事出来ないが、藍は正式な紫の式神、スキマの
一つや二つ使えるわけだ

スキマを使えるということは自由に色んな所を行ったり来たりが出来るというわけか……ちよつとだけ羨ましい

俺も灰逃げで似たようなワープをする事が出来るが、あれは俺が作った灰の山にしか飛べない。…汎用性がなくて困る。それに比べてどこでも何時でもひよひよいと作れるスキマは凄い

「…便利。」

「いいや、そんなに都合のいいものでは無いと知っているだろう……いや、そうかお前が知らないのも無理は無いのか……そうだな、良い機会だ。お前は少し自分の主である紫様の力を知っておいた方がいい」

俺がボソリと呟くと、藍はそれを否定し、なんとも長そうな説明の体勢に入った。

最初の案件はどこへやら……

しまったな、地雷を踏んでしまったかもしれない。藍は紫の事になるとやや話が脱線する傾向にあるのだ……

「私が狐の妖獣であることは知っているな？ 私のようにある特徴を持って種族として纏められている妖怪と違い、紫様は一人一種族として組み分けされている」

知っている。

ついでに言うなら妖獣は何かと身体能力が高くてしつぽの本数がそのまま強さに直

結する

ちなみに俺も一人一種族の妖怪だ。俺と同じ特性の妖怪なんて見た事ないし、多分そうだろう

「紫様は一人一種族の妖怪として、自らを境界の妖怪と自称している。時に白墨、境界の妖怪とはどういうことかわかるか？」

その質問に顔を振る

境界、と言われても理不尽なワープをしてくるくらいしか俺は知らない。

境界の妖怪か。…俺なら灰の妖怪と名乗るのだろうか？

「紫様はただ単純に境界を操る…という力を持った妖怪では無い。境界を操るという事を定義付けられた妖怪だ。紫様の在り方そのものが境界によつて縛られていると言っても良い」

…？…？…？

急に話が分からなくなったぞ…。何が違うんだ…

「……。まあつまりはお前の思つてるような単純な力では無い。例えば全ての物には境界が存在する、水面が無ければ湖は存在せず、綾線が無ければ山も空も存在しえない。紫様はそれらの境界を自由に操れるのだ。生死の境界無くし、輪廻から外れた生きても死んでもいない、という存在に。妖怪の存在を曖昧にすればその妖怪の弱点さえも消す

ことが出来る。単純に速いとか力が強いだとかの次元では無い。紫様はその気になれば物事の定義を根本からひっくり返す事が出来る」

珍しく得意気に話すものだ

紫の力は……まあ凄いことが出来るんだなどはわかったが、いまいち強さがわかりにくいな。

……でもそうか、仮に春夏秋冬の季節の境界を操れば春なのに夏の花が見れたりとかも出来るのか、そう考えるちよつと楽しそうだが……

「紫様は確かに強力だ。使いようによつてはなんでも出来ると言っても過言では無い。……だが私や、ましてやお前が紫様の力を手に入れたとしてもまともに使えはしないよ」

まあそりゃあ俺が使えないのはそうだろうけど、藍までか？

紫程上手く扱うことは出来なくても、藍ならそこそこ使えると思うが……

「紫様は境界の妖怪だ、その在り方さえも境界に縛られる、と言ったな……境界を操る力、それは一つの物を二つに分けられた”何か”と捉え、二つに分けられた物を一つの”何か”と捉える力。これを利用して水のように形の存在しない”一つ”の空間に境界を作り、”二つ”の空間と認識してスキマを作る」

でも、と藍は話を続ける

「それは尋常ではない世界だ。ありとあらゆる境界が反転して見えるのだ、水を区別し、

空間を区別し：しかし空と大地の境界すらも認識出来ず、“一つ”の存在として認知する。考えられるか？何かを見る度、二つの事象を一つの事象と認識する世界を。色覚異常者と常人では世界の価値観は違う、世界の見え方が違うならそこに普通は有り得ない：紫様はある程度の調整の末に慣れたと仰っていたが、そこには常人では想像出来ない過酷な道があつたはずだ：私ではとてもじゃないがあの力を扱いきれはしないだろう」

言い終わると、藍はスキマを開き振り向いた

「どうだ？それでもまだ便利な力と思うか？」

話は終わったと言うように歩き始める藍の後を追う

正直なところ、理解が及ばない範囲だ

：…うーん、まあ身の丈にあつた力が一番良いという事か？

「お前：：私の話の何を：：はあ：：まあいい今は報告書についてだ：：早く来い」

おつと：：どうやら首を傾げていたのがバレたらしい

なんだかアホを見る目で見られている気がするが……

なんとも言えない感情を抱えつつ、藍の作ったスキマへ入っていく

ちなみに報告書の気になる所というのは新しく出来たお店の油揚げについてであつ

た

：……こいつ結果が安定してから結構自由じゃないか……？



今年の9月：というより今日の朝は一段とおかしな日だった

色々おかしい所があるが、まず第一に久しぶりにぐーたらと幸せそうに眠りこけてた紫が外を見ると、突然パニックを起こしたようにじたばたしながら外へ出ていった事だ
幸せな顔から一転、涙を浮かべて忙しく動いていたのが記憶に新しい

『まさか外からの侵略!』とか『なんでよ! 結界は安定したはずなのに!』と涙を浮かべて叫んで出ていった

これだけで十分おかしな日だ

：ああいや、紫が結界関連で泣いてるのはいつもの事かもしれないが、まあそれを差し引いてもあの慌てようは珍しい
次にびっくりなのが外の景色だ

秋もそろそろ始まりかという時期、だと言うのに外へ出てみれば、至る所に花が咲いている
道も雑草の生えた庭にも色んな花がびっしりと咲いている

菜の花、紫陽花、スイセン、コスモス……

知らない花も多くあるが…普通じゃない花の種類…

春夏秋冬…すべての季節の花がところ構わず咲き誇っている

もしや、この前藍と話していた時のように紫が境界をいじったのかとも思ったが、今朝の慌てようを見るに紫じゃないらしい……

明らかに異常でおかしな日だが……つま！それはそれとしてお散歩だ！お散歩しよう！

こんなにおかしなことはそうそう無い！というか1000年以上生きてきて初めてだ

いつ終わってしまうか分からない。

無くなる前に見ておこうと外へ飛び出す

パニックになっているのは紫だけではないらしく、妖怪の山では鴉天狗がこれ幸いと筆を走らせている

あいつよりも早くに…！と言った風に皆急いで新聞を作っている

ちなみにこの異常事態について原因を知っている者は居ないらしい。皆珍しいから記事にするだけだ。なんとも間抜けな種族である

でもまあ…俺の購読している花果子念報がこの事件を記事にするのは一、二カ月後だ

ろうな…

定期購読しているので頑張ってほしい

人里でも突然現れた季節外れの花々にてんやわんやしている

商売魂が逞しい奴なんかはこれを花の染料大サービステイとして採取に励んでいた
り…

ああ、それと幽霊がいっぱい居る。とてもいっぱい居る。

なんだか最近霧も濃いで嫌な感じだ

他の場所では妖精達が興奮しきって大はしゃぎ

自然の具現化である妖精なら知っているかと思ひ、一匹捕まえて聞いてみたが、何も知らないとの事。何も知らないけどみんながはしゃいでるから自分もはしゃいでいるらしい…まあ妖精なんてこんなもの、頭の弱い集団だ

それにしても相も変わらず幽霊だらけ…

わかったのは幻想郷中がお祭り騒ぎになっていて、幽霊もいっぱい居るということだ
けだ

まあ分からないことを考えても仕方ない、分からない事はどうせ紫が何とかするだろう
う

2、3日の間は観光気分でお散歩だ

辺りは一面の花畑、花畑…と言ってもやはり季節外れの花が多くあるが、この異常事態で最も多くの花が咲いているのはここだった

ついでに幽霊も多く居る。花見でもしに来たのだろうか…？

四季折々の花々は異様な雰囲気と、その特別感が少し楽しい

いつもは何の変哲もない公園が、夏祭りの時だけ全く変わって特別な場所になるみたいに、知っているはずの幻想郷のあちこちがとても新鮮だ

「何をしているの、八雲の妖怪さん」

大人びた声、それでいて気持ちのいい音だ。声のした方を向くと緑髪の妖怪が居た

何度か見た…：気がする。常日頃から幻想郷中の人や妖怪を灰越しに観察しているからいちいち覚えてはいないけど、赤いチェック柄のロングスカートは珍しいから記憶に残っている

とはいえ容姿が記憶に残っているだけだが…

「…無視かしら、言い方を変えるわね。何をしようとしているの？八雲の妖怪さん」

少し語尾が強くなり、視線も鋭くなった

何故だがピリピリしているようだ…一応初対面はずだが…

「あら、有名な自分の噂を知らないの？人里でも結構噂になってるわよ。…最も、人からも妖怪からも良い噂は一つも聞かなかったけどね…。もしかしてこの花の異変も貴方

の仕業？」

あくまで丁寧で紳士的な言い方だが、話す度にのしかかる妖力が増えていつているやはり怒っている。なんでかは知らないけど、この花の異変と俺の悪評のせいで話がダメな方向に進んでいるのは分かる

紫の評判が悪いって言うのも原因かもしれない。さつきから「八雲の」という言葉だけ強いし…

主従揃って評判が悪い。嫌になる

だがもう一触即発の場面だ…まずいぞ、何がまずいって戦ったらとてもじゃないけど勝てそうにもないくらい強そうっていうのと、俺の言語能力でこの場を収められる可能性が極めて低いってことだ

「…あら、何も言わないのね」

そろそろ痺れを切らした様で、彼女の日傘を持つ手に力が入っている

どうしたものか…敵じゃないです、なんて言っても殴られそうだ

…仕方ない、最悪戦闘になったら死ぬ気で逃げよう…。目の敵にされたら一生追つきそうな所が怖いが、やるしかない

俺は意を決して息を吸った



「…あら、何も言わないのね。それとも、(´)丁寧に肥料になりに来たの?」

突然の花の異変に、意味もなくやってきたあの胡散臭い八雲紫の使いつ走り。

この二つを関連付けるな言う方が無理な話だ

その上その使いつ走りにはいい噂など一つも無く、現在進行形で印象も悪い

何を言っても反応がなく、試しに妖力で圧をかけてもみたが変化は無し

特に不気味なのがあの無機質な顔だった

どう揺さぶっても表情を変えずあのままだ。こちらの威圧をもともせず何事もな

いかのような振る舞う

(癪に障るわね…殴って聞いた方が早いかしら…?)

そうして妖力を高め、一步を踏み出そうとした時、それは急に聞こえた

「……………気持ちの良い風だ。」

「…?突然、何を…………?」

相変わらず変わらない表情で、ぽつりと独り言のように零れた

「(´)は風が心地良い…。…風が運ぶ花の香りは、1000年経っても変わらず良いが、特別、今日は春にも…また、秋にも感ぜられない香りが届く。」

「…………。拍子抜けだわ、呑気な妖怪ね。」

まったくもって質問の回答になっていない。だが、暗にただ花を見に來ただけとも取れる呑気さに、呆れて肩の力を抜いた

「今みたいに見ているだけなら何も言わないわよ」

「…………言ってきたじゃないか」

「そういうのは自分を客観視出来るようになってから言う事ね。貴方のような者を相手に、問答無用で攻撃しないのは優しきでしょう？それとも、口以外が動かなくなるようにしてから聞くべきかしら？」

見た目に反して拗ねたみたいない方に、根に持つタイプなのかと幽香は感じた。意外も意外、おかしな妖怪だ

「それで、貴方はこの異変については何も知らないのかしら？」

それに対して白墨は小さく頷く

「そう、困ったわね。幽霊と花との関わりは強い。幽霊がやけに多いのも関わりがありそうね。…はあ、それにしても少し残念だわ」

白墨が「残念」と言う部分に反応して首を傾げた

顔には出ないが、行動には案外単純な思考が出ている

「そろそろ秋の初めでしょう？こころもおかしな季節だと、秋の香を楽しむのは先にな

りそうだわ。こればかりは秋の二柱に頑張つて貰うしかないわね」

諦めたような幽香の言葉に白墨はハツとする、四季折々の花を楽しんでいる場合では無い、と。

いざ秋も始まらんといつた時期に、予想外の異変のせいで泣きながら徹夜残業をしている不憫な秋の二柱の姿が白墨には想像できた

「…扇子？」

白墨は紅い紅葉模様の扇子を取り出すと、その紅い扇子を花畑に向け、ゆつくりと大きく扇いだ

その扇で扇がれた風は、秋風となつて花を揺らす

幽香はその様子をやや驚いて見た。目の前の妖怪が放つたそれは、確かに秋の香りを残した風であり、僅かだが神力も感じる

「良い扇だわ、それ。弱小でも神の道具ね」

「ああ。いいだろう」

白墨は自慢するように見せつけると宙に飛び上がっていった

そしてそのまま戻ってくることはなく、もう既にどこかへと飛び去っていったようだ
「…結局なんだったのかしら」

花を楽しんでいると思いきや突然思い出したかのようにどこかへ行ってしまった

そして、幽香は彼がどこかへ行つたと共に、たちまち溶けるように消えていく“霧”を見た

そもそも、いくら八雲の式神で怪しいからと言っても、この幻想郷で強者である自覚を持つている風見幽香にとつては“あんな妖怪ごとき”を相手にあそこまでの警戒をするのは異例であつた。初めから幽香が警戒していたのは彼、ではなく彼を中心に漏れ出た度を超えた妖力だ

初めはその滲み出ている妖力が彼から出ていると幽香は思つていた、しかし、彼を薄く“監視”するようにまとわりついている霧を見て確信した、その妖力の出処が一体誰なのかを。

彼は気付かないのだろう、だが、その背後についている八雲紫までもがそれに気付かないとは思えない……。つまりは主である八雲紫公認の監視という訳だ……

「文字通り、憑かれているのかしら？ つくづく変な妖怪ね。……でも、最後に良い風を貰つたわ。ほんの少し、秋が早まつた」

何から何まで変な妖怪だ。

だがそんな事幽香にとつては関係ない

しかし、この秋風は有難かつた。花畑の秋の花が活気付いているのを感じ、そして幽香はほのかに感じる秋の足音を楽しんだ



幻想郷を騒がせた一大異変

犯人も動機も何も分からずじまい……そんな分からないだらけの謎の異変を記事にしても良いものか……と悩む鴉天狗こと射命丸文に入った情報は、新聞記者としてはなんとも言えないものだった

何せこの事件には動機はおろか犯人すらも居ないのだから

事の顛末はこうだ

外の世界で多くの人間が亡くなる時期と60年周期で訪れる大結界の緩みが重なり、そして外の世界の幽霊が大量に幻想郷に流れ着いた

もちろん普段からサボり気味（サボっていなくても無理だが）の死神では捌ききれぬ量ではなく、行くあてのない幽霊達が多種多様な花々に乗り移った……というのが原因らしい

つまり、ほっとけば死神がせつせと幽霊を運び、いつも通りに戻るといふ訳だ

聞いてみればなんといふことは無い、言つてしまえば自然現象のような物

「…うーん、これはこれで珍しくて綺麗なものですが、せっかく幻想郷中が大混乱するほどの事が起きたんです。黒幕の一人や二人が居て欲しいですね…。これだとインパクトに欠けるといふかなんといふか…」

「へえ、ならそれっぽく脚色して作つちやえばよかつたのに」

妖怪向けの酒屋で割と不謹慎な愚痴を零す文の隣に、同じく新聞作りに精を出す鴉天狗、姫海棠はたてが平然と座つて言うと、それに反応して声を荒げた

「はんー！ 真実こそを第一にしている私にあんなゴシップまみれの新聞を作れと?！」

文は本気で嫌そうな顔で頭を振つた

文が言っている“あんな”新聞とは他の天狗達の書く新聞の事である

ゴシップや娯楽性重視の新聞だ。

真実のみを記事にするという文の流儀とは対極に位置する

「つま、そうよね〜」

はたては文の予想通りの返答にわかつていたと軽く答える

「他にあるとしたら、噂話だけど異変の最中に涙目の八雲紫が幻想郷中で見られたとか
 なんとか…」

「それも眉唾ね…大方興奮した妖精達が遊んでたとかでしょ」

「だよね〜」

真偽不明の噂を切って捨て、軽口を吐きながら杯を傾ける

ふと、はたてが窓から外を見てみると、とつくに異変は終わり既に十月中旬だというのに紅い葉は見えない

去年の今頃はどこを見てもあのオレンジがかった紅い紅葉で埋め尽くされていた、それは毎年当然のようにくるものであったが、いざそれが無くなってしまうのは少し悲しく思えた

「秋、来ないわね」

「仕方ないでしょ、あれでも頑張つて秋を早めているらしいけど…まあこの調子じゃあ紅い葉を付けると同時に落とす羽目になりそうだけど」

「これじゃあせつかくの新聞も映えないわね」

基本白黒の新聞では、紅葉なんて関係無しに映えないだろうと思いつつ、文も秋の景色が無いのは少し残念に思っていた

「まあ、はたての時期遅れ新聞を読むのに、そこを気にする人は居ないわよ。安心しなさい」

「…なつ！ど、どういう意味よ！」

「ああ、すみません、居ませんでしたか、買う人。」

「居るわよ！買ってくれる人くらい！自分だって人気ないくせに陰湿な……！あとそのわざとらしい敬語をやめろ！」

必死になつて言い返すはたてを見て、文は小さく、しかしはたてに分かるように鼻で笑った

「うっ……！け、けど言うのが五十年遅かったわね！もう昔とは違うわ、今じゃ定期購読してくれる妖怪もいるんだから！」

「ほう、定期購読。……それで、最近ちゃんと寝てますか？」

芝居がかかる言い方は、明らかに小馬鹿にしたものであり、文は定期購読の件を完全に嘘だと決めつけている

「幻覚じゃないわよ！結構前からしつかり買つて貰つて……あつ！ほら今朝の新聞を渡しに行つた遣いカラスが帰ってきたわよ！」

はたては嬉しそうに窓を開けると、大きなカラスからほんの少しの小銭と手紙を受け取った

「どうよ！ちゃんと売れてるでしょ！」

「……驚いたわ、ほんとに定期購読なんてしてる酔狂な奴が居たのね……」

ドヤ顔で報告してくるはたてに文が素直に驚いたように見た

「でしょー！もう何十年も買い続けてくれる私の新聞のファンなんだから！」

サラツとディスプレイされたのに、はたてはそれすら気にせず誇らしげに胸を張る
「……ん？その手紙はどうしたの？」

カラスが持ってきたのは少ない小銭と一通の手紙

はたても手紙が付いてくるのは初めてらしく、不思議そうに見ていた

「確かに……いつもは手紙なんて無いのに……あつ！もしかして私へのファンレター……
！」

「まあ、とりあえず見てみなさいよ」

はたては人生初のその手紙に、ウキウキしながら封を切った

文自身もファンレターなんて貰ったことないので、どんなものかと気になりその手紙
を覗いた

もう少し新しい内容を取り上げて欲しいです

「……………ぶつ、あつはははは!!もう少し、新しいって!し、新聞なのに…!新聞なのに…!新しい内容で書けて…!ひー!!あはは!!素早く情報を伝える為の新聞なのに!!そんな要望が送られてくるなんて前代未聞だわ!!くつくくははは!駄目、お腹痛い!あつははは!」

「……………うっ…うっさいわね!!そんなに笑わなくてもいいじゃない!!それにつ!わざわざ内容の改善を求めるくらい他が良いって事でしょ!」

その手紙を見て、文はもう耐えきれないといったふうに腹を抱えてゲラゲラと大爆笑した

よほどツボにハマったのか、涙すら浮かべている

一方、はたても同じく涙を浮かべながら声を張り上げていた

恐らく涙の理由は全く違うだろうが……

「くつくくく!羨ましいわ、私は…くふふ…ファンレターなんて貰った事ないから!」

「あ、あ、——もう良いじゃない!良いじゃないのよ!」

「わ、悪かった、悪かったわよ。アンタの言う通り、そんなに遅れた記事なのに何十年も買つて貰えてるなら他はいいと思われてるのよ」

文はこれ以上やつたら本当にはたてが泣き始めそうだと思い、なんとか笑うのを堪えた

「…うー、自信なくなるわ…あれ、まだ何か挟んである」

包むように折られた紙を広げ、挟まれていたものを取り出した

「…紅葉？」

「あら、綺麗な紅いもみじね」

中に挟んであったのは、ここらでは見れない綺麗な二枚の紅葉だった

「本当だ、綺麗なもみじ…でも一体どこで？妖怪の山だつて、まだ全然なのに…」

文が不思議そうにもみじを見るはたての肩に手を置いた

「つま…なんだかんだ言つてはたての新聞も気に入られてるつてことよ。良いもみじじゃない」

「え…そ、そうかしら」

それを聞き、はたては少しだけ嬉しそうにもみじの葉を眺めた

(ちよろいわね…)

心の中で再び笑う文の横で、はたてはそのもみじの葉の匂いを嗅いでみた

まだ秋の来ない中、はたての周りだけに、あの秋の乾いた匂いが広がる
その瞬間だけ、小さな秋が来たのであった

第三十九話 灰の天敵 前編

人には刺激が必要だ

今の自分の安全が当たり前のものでは無く、ある日突然壊れるかもしれないと思わせるような刺激が必要なのだ

そうしないと人は恐怖を…あの日の慎重さを忘れる。

思えば俺は幻想郷に来てからは苦戦という苦戦をした事が無かった

外の世界にいた頃は博麗の巫女にちぎっては投げ、ちぎっては投げ…と完膚無きまでにやられ、地底に封印されていた頃は、勇儀によって捕まえられては殴られ、蹴られ、吹っ飛ばされて…

それが今やどうだろうか？

幻想郷に来てからは戦いという戦いは殆どしてこなかった。

人里内で人間を襲う妖怪は簡単に殺せるし、特定の頭のおかしい妖怪に追いかけて回されることも無く、時々来る巫女からの協力要請も、その殆どが作業のようにプチプチと殺すだけ

一番危険な戦いであった天狗との争いも、受けた傷と言えば精々腕を切り落とされた

程度

その程度の傷、巫女と勇儀に殺されまくった事と比べれば擦り傷みたいなものだ

俺は幻想郷に来てから調子に乗っていたのかも知れない。相對する妖怪は殆どが格下。負けることは無く、傷を負うことすら珍しい日々：

その穏やかな毒が俺の感覚を鈍らせ、肝心の場面で致命傷となつて傷を残す

だからこそ時を戻せるなら自分に言いたい、お前は弱い妖怪なのだ。プライド無く逃げ回る事しか能のない妖怪なのだ…。

常に脅威に囲まれていたあの頃を思い出せ…と。

例え、自らを脅かす脅威が無いとしても、そう思つて生活する事が上手に生きていくという事だと思ふ

血にまみれ、ひしやげた身体を見て強く、強くそう思つた。



秋姉妹の御二方の助けになろうと走り回つて色々やってみたが、結局大して役に立つ事はなく、控えめな秋の匂は去つていき、徒勞に終わった

『ごめんね、楽しみにしてくれてた秋はちよつと減っちゃった……。あつても白墨もちやんと役に立っててくれていたわよ？あなたは個人では驚く程の信仰心を捧げてくれているから居てくれてるだけでもちよつとだけ力が増すの。今年は残念だったけれど、来年はそれはもう色鮮やかな秋の葉を見せてあげるわ！楽しみにしててちょうだい』

……と、申し訳なさそうに言われてしまい、返って静葉様に気を遣わせてしまう結果になつてしまった……。

情けない限りだ……。

もしこの異変に犯人がいるのなら永遠と嫌がらせしてやろうと思ひ、情報を集めまくつたのだが、どうやらこの事件に特定の犯人は居なく、自然現象のようなものだといふことがわかつただけであつた。

強いて言えば、60年周期で結界に緩みが生まれるといふ欠陥要素を作つた紫のせいだ

おのれ紫め

仕方が無いので静葉様から貰つた扇子を使い、自分の周りに小さな秋の景観を作つて気を紛らわせた

この扇子も出来る事と言えばほんの少しの秋を作るだけ

この小さな空間を維持するのが精一杯なのだ

「……残念だ。」

ボソリと呟いてお茶を飲んだ。

「ええー！せつかくの綺麗な紅葉だつてのに飲むのはお茶かー？」

ありえないといった驚きを含んだ幼い声が聞こえる

…おかし

灰の目を使って周りに誰も居ないことを確認したはず…だと言うのに振り向くと瓢箪を片手に、フラフラと酔っ払った幼女が居た

……なんだコイツ。どこから来た。

「いやあ…にしても見事な紅葉だね。今年は無いのかとガツカリしてたけど、良い物が見れた。ほらお前さんも呑むかい？こんなにも綺麗な紅葉、見るだけなんて勿体ない」

「いらない」

酒臭い酔っ払いが瓢箪を差し出してそんな事を言ってくる

「うん？なんだお前、遠慮してるのか。まあ確かにこいつ一級品だ。…だが！美しい紅葉を見せてくれたお礼だ！じゃんじゃか呑んでけ！」

そう言つてグイグイと瓢箪を押し付けてくる

酒臭い

「いらない」

「ええ!? 確かにいつもお茶や水だけだったけど…坊主だったか? 禁酒は毒だぞ?」
「いらぬい」

酒はそんなに好きじゃない

信じられないものを見る目で見られているが、俺はあの変な味が嫌いなんだよ
あつちいけ、シツシ!

「ええー…一人で呑むだけかあ…」

というかこいつ…:幼い外見はともかく…:無類の酒好きで、頭に生えた二本角…:
「……鬼。」

「おつよく知ってるね。感心、感心…:まあ地底から来たから知ってるか」

…:出たよ、その無駄に偉そうな態度

鬼と聞いて一歩、二歩…:いや十歩くらい離れておく

小鬼と言えど鬼は鬼。なぜ鬼が地上に居るんだと言いたいが今は後

鬼は嫌いだ。大嫌いだ。何しに来たんだ

「…:おろ? そんなに離れて…:本当に呑まないのか?」

「いらぬい」

「ちえ…:やった後だと呑めないだろうから、今呑もうって言ってるのに…:…」

…:めんどくさいな、この小鬼。いや酔っ払いは総じてめんどくさいものか

もういつその事……

「なんだ、もう逃げ腰か？……いつもそうだ、お前さんは少しでも面倒臭いと感じたら話を聞こうともせず逃げようとする。卑怯な事だ」

声が、変わった

今までの見た目相応の瞳が、鋭く貫禄のあるものへと変わる

見透かすようなその目に一瞬たじろいだ

「今日はお前の性根を叩き直しに来たんだ。本当は私に気付いた時にしようと思っていたが……お前、あれだな……勘が鈍い！特にここ最近はわざわざ存在感を強めてやったつてのにちつとも気付かないじゃないか！」

怒ったようにそんな理不尽な事を喚く

気付く……？なにを言っているんだこの小鬼は

一応、定期的に自分の周りに灰を出しては周囲の様子を確認しているんだぞ、誰かがいて気付かないわけがない

「……会いに来る時は、その前に話を通して、菓子折り持ってきて来るのが普通だ。」

いつの日か……誰かに言われた言葉を思い出して使う

言外にさつさと帰れと伝える

仮にも俺は八雲の式神。この幻想郷の権力者、八雲紫様の下っ端だぞ……と脅して帰ら

せよう

「ほう、なんだ地霊殿の主のような事を言う。よくもまあ躊躇いなく逃げ道を作るものだ、男のくせに」

ニヤニヤと酔っ払いが責めるように言ってくる

「……」

知ったことか、なんとも言う方がいい。

なんの為の式神か、権力は使うためにあるんだ

「つま！安心しなよ、お前さんとこの大将とは友人だからね。そんな面倒な手間必要ない。存分に時間を使おう」

逃げ道を塞ぐようにそんなとんでもない事を言った

紫の…友人……。

や、厄ネタじゃねえか！俺の経験上、紫の名前を出して来るやつは総じて頭がおかしいんだよ！勇儀とかな！

信用出来るのは八雲紫という名を聞いてげんなりしていたさとりんだだけだ

目の前の小鬼への警戒度が、俺の中で数倍上がる

なんなら面倒事になる前にさっさと逃げた方が良いかもしれない

「紫みたいにして逃げようとも思っているな…？嘘はつくし、面倒な事が起こったら

すぐ逃げようとする…そしてその上卑怯者。こりやほんとに根本から叩き直した方がいいかもね。」

「……………」

なんでかは知らないが灰逃げの事がバレてる…。

「不思議か？だがお前の事はお見通しだぞ！何せ…………霧となつてずつとお前の事を見ていたのだからな」

「…………？」

なんだ…？一体なんのことを……

理解の追いつかない俺を置いて、目の前の鬼は畳み掛けるように指さした

「お前さんはやつぱりダメだ。まるで自分の事以外どうでもいいと言わんばかりの興味の無さ…いや、自分の事さえ他人事。楽な方へ楽な方へとばかり考えている。今だつて私から逃げれば良いと考えているんだろう？逃げるにしたつてそうだ。あんたはいつもやりすぎる。十分すぎるほどに場をかき乱してから、さも自分は初めから関わりがなかつたかのように知らんぷり。卑怯なんだよ、あんたは。」

小鬼風情が好き放題言うもんだ……

「——もう一度言おう！私は今日、お前の性根を叩き直しに来たツ！逃げたいのなら逃げればいい！卑怯な手を使うなら使えばいい！その全てを砕いてやろうツツ！」

その瞬間目の小鬼の妖力がグンっと上がる

所詮は戦う事以外の考えを持たない鬼め、何となく分かっていたが、やり合うか…！
小鬼言えども流石鬼。随分と高い妖力だ

だが天狗達をまとめて吹き飛ばす程には俺も強い

地底にいた頃は鬼の最強格である勇儀に毎日のように殺されてたんだぞ…！

それに比べれば所詮は小鬼

上等だ、かかって来いよ小鬼風情が。お前らの嫌う卑怯な手とやらで返り討ちにして
くれる

怒りは溜まっている、充分過ぎるほどに。秋は来ず、お茶の時間を邪魔されて、その
上偉そうな説教だ。

丁度俺もイライラしていた所に売られた喧嘩…ぶっ飛ばしてやる

俺は向かってくる幼女の体軀をした小鬼に、わかりやすいように中指を立てた

それを見た小鬼はニイツと好戦的な笑みを浮かべ、嬉しそうに叫ぶ

「その意気やよオシツ!!」

どうしてか、その顔が一瞬あの日の勇儀と被ったような気がした

向かってくる小鬼の速度がどんどん上がっていき、それに比例するように妖力もどん
どん上がっていき…おい待て、ちよつと上がりすぎじゃないか？

既に並の鬼の妖力を超えて――

「行くぞオー！白墨ツツ！」

とどろく轟音。

小さな体から放たれた軽い拳は、いとも容易く俺の体を撃ち抜く

なんだ……なんだこれは。

まるで伸びきったばねが弾かれるみたいに一瞬で小鬼が見えなくなるほど吹き飛んだ。

身体が重い。

肋骨か、臓物か、もしくははその両方が確実に壊れた。

嫌な記憶、忘れていた記憶。

もうないだろうと思っていたあの記憶。

この重みは俺のトラウマを呼び起こす、俺の天敵を思い起こさせる

これは――いや！まだだ！

壊れた身体に灰が集まり元に戻る

確かに強い。正直舐めていた。

だが俺だつて黙つて殴られた訳じゃない。殴られる直前、あの鬼に“灰”を付着させ

俺が本領を發揮する上で最も難しい事、それは相手に近付いて灰を付ける事だ
 これが出来なきや俺は戦えない

逆に言えば灰さえ付けられれば俺の勝ちだツ!!

幸い吹き飛ばされて距離は離れた

鬼の方向に手を向ける

距離と灰の付着…条件は揃った!

薄く何重にも折り曲げられて生まれた一本の結界の槍

山の天狗達、勇儀、そして巫女…防がれた事さえあれど、効果が無かったことは一度も無い

その結界の槍を鬼目掛けて解き放つ。

風を切り、周囲の木々を吹き飛ばし、そして直線上を突き進む

その槍に減速は無く、ただ加速のみ。

「…ッ!来たか!天狗に使ったその技を——うおっ!はっ速ッツ…いい!?!」

初め、面白そうにその槍を見ていた鬼はすぐさま顔色を変え、結界の槍を防ごうと腕を盾のように前に出す

「ぐっ!——なんツ!?!いや硬っ!?!うえっ!?!硬ッツ!いやっほんとなんだこれ!?!かったア!?!」

結界の槍は鬼の腕に深々と突き刺さり、ほぼ貫通した状態で止まった効いてる……!

すぐに二発目を放とうとして困惑する。

さつきまで正面にいた鬼の姿が無い……いや、違う既に横に……!

「お返しだッ!」

いつの間に距離を詰めていた鬼が横から飛び出してくる

その勢いのまま着物を掴まれ、地面に叩きつけられる

俺はのしかかる重力に耐えきれず血を吐いた

パワー系がスピードも兼ね備えているなんて反則だ……!

「やるなあ白墨、こりやあまともに受け続けたら無事じゃすまないね」

感心したような鬼の言葉に、心の中で舌打ちする

数秒経って、身体が治る。

それと同時に顔面につま先を入れられ、俺はそのまま蹴り上げられた。

「道理で分かっているも避けづらいつつ思った。お前の攻撃は想像以上に凄い。初速を見て、まだ当たらないと油断していたら速くなる。加速していく都合上、お前のその攻撃は距離感が掴みづらい。瞬きする内にとんでもない速さになっているのは少々肝が冷えたね……オマケにとつともなく硬い……こんなに深い傷を負ったのは久々だ」

そうやって、鬼は血だらけの腕を見せつけるように振った

そうしている内に、俺は躊躇いもせず二発目の結界の槍を撃つ

その腕を血だらけにした攻撃だと言うのに、焦った素振りも無く、鬼は豪快な笑みを浮かべた

「その槍は凄いい。だがね……欠点も多い」

言い切ると同時に、結界の槍が鬼の真横を“素通り”していった

「……ッ」

……おかしい。結界の槍の特性上、動かない敵に当たらないなんて事ある筈が……

慌てて三発目、四発目を撃つと同じように真横を通り抜けて行く

「少しは学びな、もう無駄だよ。……私は色んな物の密と疎を操れる。自分の身体の密度を下げて霧状にしたり、自分の身体に付いた“灰”を疎密にして取り除く事も出来る。気付かないでも思ったかい？いつも霧にまで存在を薄められる私が、身体に付いた灰を見逃す筈がないだろう？」

そんな絶望的な事を言い、一歩前に出てくる

「……ッ」

こいつは……マズイ！

結界の槍は相手に付着した灰に向かって飛んでいく……逆に言えばその灰を取り除か

れると全く当たらない

結界の槍がこんな形で封じられるとは思わなかった…!! 理性と本能、その両方が俺に逃げる事だけを伝える

この鬼は速い、だがそれでも1秒の猶予はある! 俺は鬼がまだ油断している内に灰逃げを発動させた

場所は人里なら何処でもいい。流石に人里までは追って来れない筈…!

未だに余裕の笑みを崩さない小鬼に対して安堵した。1秒の油断で俺は逃げられる

とりあえずは灰逃げが問題なく発動し、身体が足の先端からただの灰へと変わっていく

危なかった…こいつの対処はまた今度考えよう。とてもじゃないか俺の手に負える妖怪じゃない。

寧ろもつと上の――

「誰から逃げられると勘違いしている? 言っただろう、私は密と疎を操るつて。…この私から逃げられると思うなよ」

「…ッ!?!」

既に灰となって分解されていた身体が再び萃められ、強引に人の形に戻される

「ほら、力入れときな」

これは本当にマズツ——
意識が、反転、する。

自分が何をくらったのかもわからない。ただ物凄い力で吹っ飛んだということだけ
理解する

下に空が広がっており、横を見ると、鬼がいた。

小さな鬼が、いた。

……ツ！ほぼ反射的に掴みかかろうとして逆に二の腕をガツシリと捕まれる

「朦朧とした意識の中で即座に反撃しようとするのは大したもんだね。だが、何よりも
力が足りない」

瞬間、視界が回る

腕を掴まれたままグルグルと振り回され：肉のはじける音ともに放り出される

何処かの地面に叩きつけられたらしく、右腕を見ると根元から千切られていた

さつきまで俺がいたのは空だったらしい……とてつもない遠心力がかかったせいか、

お腹が目でわかるほどに潰れている

随分と……酷いこと、するもんだ……。

「タフとは聞いていたけど、こりゃタフと言うよりしぶとっていう方がしつくりくる」
身体が治っていく俺を見て、まるで他人事のように鬼が言う

「確かにお前の槍は強力だ、だが対処出来れば尽く弱くなる。普通の妖怪ならそれが破られた時の為に、別の対策を考えていくものだ……だがお前にはそれが無い。大方、通用しなければ逃げればいい……なんて甘い考えで生きてきたんだらう？立ちな、白墨。お前のその甘えきつた性根を叩き直してやる」

これは本当にマズイ……。俺の手の殆どが封じられている

本当に、本当にマズイ事になった。かつてここまで追いつめられた事は無い。

じよ、冗談じゃないぞ……。あの紫にだって灰逃げは通用したつていうのに……

俺がゆっくりと弱々しく立ち上がると、鬼は満足そうに頷いた

「よおし……よく立ち上がった！偉い………なら準備運動は終わりだ、ここからが本番……」
そんな、ふざけたことを言った鬼が、傍若無人な鬼が……その見た目からは想像出来ないような貫禄を持ってどっしりと構えた

こんなの、こんな力、ただの鬼が持っているわけない。この理不尽さは……どちらかと言おうと勇儀のような……

「——私は山の四天王が一人！伊吹萃香！精々遊んでやるから殺す気で来い!!」

心が折れそうになるのを堪えて前を見る

寄りにもよつて、なんで四天王が……。こんな……こんな理不尽があつて……たまるか……。

俺の技を無効化し、絶対の信頼を寄せていた逃げも封じられ：その小さな体躯から考えられないような、俺を遥かに凌ぐ鬼として完成された身体能力。

言うなれば、天敵。絶対的に適うことがありえない存在

人生で初めての天敵に、俺はただ、膝を着くことしか出来ない

そんな、戦いとも呼べないような一方的な虐めが始まった

第四十話 灰の天敵 中編

妖怪の山にある、ありふれた古風な家のその一室。

なんてことは無い、どこにでもあるような天狗の部屋に、ドタドタと激しく足を叩きつける音が響いた

「あやー！いるー？いるわよねー？あやあー！」

「…ああもうっ！うるさいわね。集中出来ないじゃない！」

騒音を撒き散らし、強引にふすまを開けて入ってくるはたてに苛立ちをぶつけるように振り向いた

「そんな事より大変なのよ！」

「あやや、それは大変ですね。じゃあ頑張つて」

「待つてよ!?!まだ何も話してないじゃない！本当に緊急事態なのよ！」

無視してペンを手に取ると、うるささを増して、今度は肩を強く揺らしてくる

「あーもう、なんなのよ」

諦めてはたてに向き直ると、息を整えるように二、三度深呼吸してから口を開いた

「私の新聞の購読者が妖怪に襲われてるのよ！」

必死になって話すはたてに、思わず眉を顰める

「……妖怪同士の抗争なんて良くあることじゃないの」

なんでそんな事に今更必死になっているのだろうか？

もしかして自分のお得意様だからとでも言うのだろうか？ いや、いくらたてでもそんな事……

「……私の唯一の定期購読者が死んじゃうじゃない！」

「……。……そ。じゃあ私は今忙しいから」

なんて呆れた自分本位の理由だろうか。

私は再びペンを手に持って机に向き直った

「ちよつと!? まだ話は終わってないわよ！ ねえ文、少しだけだから！ すぐ行って、逃げられるようにしてあげるだけだからっ！」

「おわつ！ ちよ、ちよつと播らさないでっ！ だ、大体なんで私も行くのよ、あんただけで良いじゃない！……それにどうして襲われてるなんて分かるのよ」

「うっ……それは……。ぐ、偶然！ 偶然、念写してたらちよつと写ったっていうか……」

言いづらそうに言葉を濁らせながら、あくまで偶然という部分を強調しつつ、ごにょごによと言ってくる

「えっ……あんた自分の新聞を買ってくれた人を念写してるの……？……それってストー

カーじゃ……」

「なによ！あんた友達でしょ！ちよつと手伝うくらい良いじゃない！」

私の言葉に被せるように言い放つ

いつもはライバルとかなんとか言っていた癖に……

にしてもはたて……誰も新聞を買ってくれないからつてここまで拗らせてるのか……。

私はちよつと引いた。

「あつそうだ！ほら、今回のことをネタにしてもいいから！いつもネタが無いって言ってるじゃない！」

「妖怪同士の争い……なんてありふれた話に誰が興味持つのよ」

「くっ……！時間が無いのに……！こうなつたら無理矢理連れていくわ！」

「えっ!?ちよつと！あんた急に何を……！」

もう待つてられない、といったふうには飛び掛かかってきたはたてが正座している私の脇に手を入れ、強引に持ち上げようとしてくる

「わかった！わかったから！行くからつ！だからそれ止めなさいつて！」

「本当!?あんたが頼りなんだからお願いな！」

私は根負けして頷いた

これ以上もみ合っていたら、纏めていた机がめちやくちやになっていたかもしれない

はたては私の了承が得られると、黒いその翼を大きく広げ、そのまま風でふすまを吹き飛ばすと、弾けるように部屋を飛び出した

「ええ!？」

「……めん!急いでるから!」

嫌な予感がして後ろを見ると、突風の影響でひっくり返った机が目に入った

「ああもう!後で覚えておきなさいよ!」

念の為、戦闘用の団扇を手にし、はたてに続いて部屋を出る

ものの数秒ではたてに追いつき、追従するように後ろに張り付く

余程急いでいるらしく、その速度はどんどん加速していった

「ちなみに戦ってるってどんな妖怪よ?」

「もう着くからわかるわよ。ただちよつと一人じゃ苦戦しそうなよね。だから頼りに

してるわよ文」

「ふうん」

はたての言い分からはぐれ天狗程度の実力はあるのだろうか

あんまり強いと面倒だな考えていると、突然はたてが速度をあげる

「——着いた!頼むわよっ!」

そう言つて加速して近付き、はたてはなにかに向かつて躊躇いもせず妖力を纏わせた

風を飛ばした

どこか感じた事のあるようなはたてとは別の妖力に、疑問を持ちつつ私も急ぐ

「そこまでよー——」

そこまでよ、だなんて張り切っちゃって。あわよくば好感度を稼げるとでも思っているのかもしれない。

「うん？その翼、天狗かお前。何しに来た？」

…？

あれっ……？

「何しに来たも何も、その妖怪を助けに来たのよ！私の数少ない購読者なんだから！やらせないわよ！」

「ちよっ！はたてアンタもしかして——！」

未だ私からは木が邪魔して相手の姿は見えない。しかしどこか記憶に残っている一人の妖怪を思い浮かべ、顔が真っ青になる

「ほう！天狗が私にそこまで啖呵を切るか！私の事を知ってその態度かい？」

「知ったこっちゃないわよ肩書きなんて。私はただその妖怪を助けに来ただけ」

威勢良く吐き捨てるはたてを見て、泡を吹き出しそうになる

だって、だってこの方は、この御方は……記憶が正しければ、きつと……

記憶が間違っていますように、この勘が外れていますように……

そう願って下を見ると、そこに居たのは――

幼い見た目に長くねじれた二本の角、かつて妖怪の山の頂点に立っていた四人のうちの一人

山の四天王、伊吹萃香その人だった

「あつあ、あ、あんたっバカ！本当に馬鹿っ！謝りなさい！今すぐに！」

なんで！寄りにもよつてこの御方に喧嘩を売つてるのよ!?

泣きそうになりながらもはたての頭を下げさせようと力を込める

「ちよ、ちよつと急に何するのよ！今大事な所でしょ」

未だ事の重大さに気付いてないはたてに恐怖すら覚える

なんて事をしてくれたんだ

思わずぶん殴りそうになるのを堪えて現実逃避する。

「……ん？おお！誰かと思えば射命丸か」

「ひやつひやいいい！お、お久しぶりです萃香様、今すぐこのアホは謝らせますのでどうか

お許しを！」

「謝るって……今から戦う相手じゃない？」

「戦わないのっ!!」

「なんだ射命丸、その妖怪とは仲間じゃないのか？」

「い、いえ！滅相もない！こいつはただの……」

「仲間よ!!」

黙つてろ！このバカ!!

どうしよう、どうしよう！とんでもない事になった……!

「す、すいません萃香様！お恥ずかしいことにこの天狗は萃香様の事を知らないみたいで……」

「……知ってるわよ？昔は山に居たわよね」

空気が固まる。

こつちがフォローを入れようとしてやってるのにつ！

何言ってるんだ、とまるでこつちが常識知らずみたいな言い方だ

「あつはつはつは！知っててその態度か！」

ほんとにつ！ほんとにつ!!

「さつきからどうしたの？ちよつとおかしいわよ文。そんなに早く帰りたいなら私も急ぐから落ち着いてよ」

ちよつと引き気味のはたてに血管がキレそうになる

なんでこいつはこんなに平然としてんのよ!?あんた引きこもりだけど仮にも天狗な

んでしよう!？」

「もしかして騙し討ちを狙ってるの…?文、流石に騙し討ちは良くないと思うわよ…」

「騙し討ちは良くないなあ…」

うんうん、と萃香様が愉快そうにはたての言葉に同意した

なんで私がおかしいみたくなってるのよ!？」

マツハでストレスが溜まっていく、明日の胃の調子が心配…なんてもんじゃない…!」

「~~~~!!ああもうっ!はたて、あんたわかつてる!?!この御方は山の四天王の萃香様なのよ!?!あんたの上司、その更に上の大天狗様達でさえ頭の上がない御方よ!戦う相手どころか本来は味方するべき大将でしようが!」

妖怪の山の支配者はかつてはこの地に住まう鬼達だった

全ての天狗は鬼の支配下に置かれ、その頂点には鬼の四天王が座っていた。

今でこそ山の権力の全てを握っている天魔様さえ、かつては鬼の統治の元、天狗達のリーダーとしてその腕を買われていたのだ。

あらゆる山に住まう妖怪は鬼に頭が上がらず、それは鬼が山を去った今でも変わらな
い。

鬼というだけで妖怪の山では最上級の扱いを受け、一言声をかければ大天狗様が動く
だろう。それが山の四天王となれば尚更だ。

つまり鬼に敵対するという事は天狗と敵対するという事でもあり、並の妖怪ならするはずもない

それが同じ天狗なら言うまでもなくありえない事だ。

だからこそはたてが萃香様と敵対するなんてあつていいはずが——
「今敵になつたじゃない。」

はたては、なんでもないのでそう言い放つた。

鬼は笑う。かつての長が、その大言壮語な言葉を聞き、実に愉快そうに大きく笑う。その嘲笑に確かな怒気を孕ませながら……

「天狗が随分と威勢のいい事を。だが、私を舐めての発言なら後悔するよ。あんたはもう私を“敵”と言つたんだ。既に天狗と鬼の昔のよしみ……なんてものが通用する境界は超えている。——覚悟は出来てるんだらうね？」

文はもう後戻りなんて出来ないことを悟つた

安易にはたての後を付いてきた愚かさを深く後悔すると同時に、ある宴の夜に、今夜は無礼講だと気分よく酒に酔つた大天狗様の頭を、これまた気分をよくしていたはたてがぶつ叩いた事を思い出した

覚悟があるとか無いとかでは無い、はたては、いやこのバカは変な所で恐知らずになる……はたてには天狗の常識が通用しないのだ

だが文は思う：こんな相手につ！そんな思い切りの良さを出すな！と：ただ途方に暮れるしかない

「天狗も鬼も：そんな事でピリピリしないでもっと楽しく生きればいいのに」

火に油を注ぐようなその発言に萃香様はただ黙ってはたてを睨みつけた

それが伊吹萃香の心に静かに火を着けたように見える

ああ、終わった…。

こうして静かに怒る鬼を文は久々に見た、そしてその怒りを向けられているのが自分達であるという事実泣きたくなる

文にとって、伊吹萃香の怒りを買うというのは初めての事では無かった。だからこそあの日の恐ろしさを思い出してはブルリと身体を震わせる

「……。…なんだ白墨、狸寝入りはもういいのか」

萃香様に向いた方向にに目線をやると、灰色の男がゆっくりと立ち上がっているのが見える

「あれがはたての言っていた妖怪…。ここまで来たら腹をくくるしかない…！」

念の為持ってきていた団扇を取り出して構える

はたても覚悟を決めたのかそうじゃないかはわからないが、気合いは込めているようだった

「…でもなあ…うくん、困った。今日は白墨の方を見にきたんだけど…。まあ別に約束には入ってないし…うん！いつか！この際3人纏めてかかってきな！鬼の本気だ、半端な覚悟なら後悔させてやる！」

そんな適当な言葉を皮切りに、くだらない戦いが幕を開けた



なんの構えもなしに空気がビリビリと振動する錯覚を覚えるほどの威圧…そんな緊張した空気の中、冷や汗を垂らす暇もなく、灰色の男から何かが萃香目掛けて音速で放たれる

それを見て、文は更に顔を青くする。

その光の矢は天狗に取つての苦い思い出、黒歴史と言つてもいい。かつて中級妖怪として舐めてかかっていた山の妖怪に、その妖怪達の傲慢さを笑うように山を穴だらけにした攻撃

たった一人の妖怪によって超遠距離から放たれたもの。異次元の命中精度とその破

壞力を前に、妖怪達はどうする事も出来なかつたのだ

未だに一部の天狗達はその妖怪が山に入ろうとすると逃げ出していく

よりにもよつて、そんな天狗達から敵視されているような妖怪がはたての新聞の購読者なのだ

(はたてのやつツ！はたてのやつツ！これ以上厄ネタ増やしてどうすんのよ！)

文は泣いた。誇張抜きで心の中で涙を流し、はたてに意味の無い呪詛を吐き続ける
ここで勝つても負けても、同族にバレれば反逆の意思ありと見られるだろう

鬼だけならまだ良かった。いや、全く良くないが、鬼の価値観は他の妖怪と全く異なる、そこを利用して上手いこと言い逃れる事も出来た。だが、明確に天狗達が敵視している白墨と手を組むというのは山に住む天狗として本当に良くない事であった。

それを平然としているはたてに、恐れすら抱いた

文にとって、いつの間にも厄神様と接触したのかと疑う程の不幸の連続に頭を抱えたくなる

「なんて…なんて事に巻き込んでくれたのよ……!!」

さんざん胃を痛めた結果、文は考えるのをやめた。もう何も考えずに戦うことにした。諦めからくるその思考停止は、『どうせ考えてもここで死んだら意味が無い』というなんとも情けない理由だった。

そして涙を堪えて白墨の放った攻撃を見た

“それ”は光の線を残して進む、文の目から見ても確実に萃香に当たると確信できるものだった。

しかし……当たるはずだった“それ”は萃香が何かに気が付くと、途端に右にズレていき、やがて地面に触れて爆発音を轟かすだけに留まった

「お前も学ばないね、何度やっても当たらないよっ！」

萃香はそう言い遠くに離れた白墨に向かって大岩を投げ飛ばす

「あやっ！」

「わかってる！わかってるわよ、もうっ！やってやるわよ！」

その質量に見合わない速度で飛んでいく大岩を自慢の風で吹き飛ばす

とにかく今は後のことを無視してこの戦いの事だけを考えて

(当時の天狗達の話が正しければ、白墨は山を単騎で制圧出来るほどの攻撃と無尽蔵に近い再生能力を持っているはず……)

天狗と八雲の式神である白墨との戦いについては惨敗の結果であるにも関わらずこ
と細かく記録されてある

恥を残す事よりも次相対する時に少しでも多く情報を残す事を重要視した為だ。こ
れは良い噂の聞かない上層部の老害達にしては珍しく英断だった

射程距離は最大で人里から妖怪の山まで。

それほど離れていてもほぼ誤差のない精密射撃……また、驚異的な逃走技術を有しており、接近戦に持ち込もうとしても身体を灰にして逃げられる。

これにより、当時の天狗達は、どうすることも無くただ的として逃げ回る事を強いられる事となった

しかし、と文は疑問に思う

(どうしてさっきの攻撃は当たらなかった？途中までは真つ直ぐ萃香様に向かつていたのに萃香様が特に動いた様子も無く、不自然に途中からズレた……普通に考えて中級妖怪が持つには破格の性能、発動までに何か条件があるはず……)

文は上空から冷静に戦況を見つつ、白墨の攻撃について考えていた。

一方、地上でははたてが萃香の攻撃を誘うように中々距離を維持して立ち回る

しかし、相手は鬼。いくら天狗とて捕まるのは時間の問題だ。それを鬼相手にあえて懐に入り、すぐさま離脱するというはたての怖いもの知らずな戦い方で補っていた

「うひゃあつ……ッ！これが鬼の攻撃……当たったら流石に痛そうねっ！」

「痛いので済むか、試してみるかいッ！」

萃香の攻撃範囲から離脱しようとするはたてに、そうはさせるかと萃香が強引に距離を詰め、腕を振り上げる

「…ッ！はたて！」

萃香が踏み込むその寸前、上空から戦況を見ていた文がすぐさまフォローを入れる。萃香が丁度踏み込むうとしていた地面を風で削り取り、その接近を妨害してその隙にはたては萃香の攻撃範囲から離脱する

そんな片方がミスをすれば一瞬で瓦解するような危うい戦いを繰り返していた「やるなあ！こりや戦いづらい…！良いやり方だ！」

しかし想像以上のやりづらさを感じていた萃香は素直に感心した。こちらから攻め込もうとするとはたてが急接近し、攻撃しようとするの一瞬で離れていく…それを無視して強引に詰めようとすれば上空の文から風の刃による援護が入る…

鬼の懐という危険地帯にあえて突っ込むはたての度胸、そのミスをカバーするように援護に徹する文の攻撃

どちらも一介の鴉天狗の技量を卓越している、その事を萃香は嬉しく思った。

そんな超人的な戦いに一人場違いな男が参戦する

「えっちよっ！白墨!?!」

まさか接近戦をしに来るとは思わず驚愕するはたてとは対照的に、萃香は分かっていたように振り返る

「…！まあ、お前はそうするしかないだろうねっ！」

萃香はその身軽な身体を生かして飛び掛かり、そのまま白墨の顎に飛び膝蹴りを叩き込む。

呆気なく顎を打ち砕かれた白墨は後方の木に叩きつけられ血を吐く結果となった。文が慌てて様子を見に行くも、白墨は初めと変わらない無傷の状態で立ち上がる。

「…なるほど、驚異的な再生能力は確かでしたね。」

天狗でさえそこまでの傷を治すのに数時間から数日はかかると言うのに、それを数秒で済ませる白墨は異常だった。

しかしそれを知ってか知らずか、白墨は気にした様子もなく、萃香に照準を合わせるよう手を向ける。

はたての援護を忘れずに、しかし文は注意深く白墨の攻撃を見ていた。

再び放たれた結界の槍は、やはり途中から軌道を外れて彼方へと飛んでいく。外れた自分の攻撃を見た白墨が、また同じように萃香相手に近付いてく…

白墨の攻撃が思うようにいっていないのは文の目から見ても明白だ。

文は拮抗状態である今のうちに打開策を模索することが大事だと考えていた。

しかし、文の心には確実に焦りが生まれていた。3対1とは言え、鬼の無尽蔵に近い体力を考えれば、時間を掛けて不利になるのは確実にこちらだった。

そしてもう一人の天狗である姫海棠はたては、大きすぎるリスクを払った立ち回りの

上でも、鬼相手に大打撃を与えられるほどの力が無いことを悟った

もしそれが出来るとしたら、今もなお必死に頭を悩ませている射命丸文か、先程から当たるとはなく通り過ぎていく例の槍だろう…と。

「結構キツイわね…鬼相手じゃあ足りないわ…ッ」

「いいや、お前さん…ただの鴉天狗にしては十分すぎるよ。度胸もあつて動きも良い、正直ここまで出来るとは思つてなかつた」

苦しさから溢れ出たはたての言葉を萃香が否定する

萃香としては純粋な評価であつた。もし半端な覚悟と実力ならば相応の痛みを与えてやろうと考えていた。しかしそんな怒りや本来の目的を忘れて感心するほどには、はたての事を認めていた

「あら…そう?…ありがとうねっ!」

はたても純粋な萃香の評価に純粋な喜びを持って答える。あんまりにも素直で屈託のない顔で言うので、萃香も思わず目を丸くする

だがそれはそれ、これはこれ

萃香は嬉しい気持ちも隠して地面を力強く踏み抜く。

デタラメな力で踏み抜かれた地面が、地表を伝つて破裂する

「い…ッ!」

驚き慌てて空へ飛んだはたてを無視し、萃香ははるか上空からこちらを見下ろす一匹の天狗へ目を向ける

「……ッ！狙いは私か！」

「暇そうじゃないか射命丸！」

地面を踏み抜いた反動で浮かび上がった砂塵や割れた地面の破片が、不自然に空のあ
る一点に向かって上っていく

「ぐっ……！」

文の視界を埋め尽くさんばかりの破片と砂塵が地上から一気に飛んでくる

「……っ！あやつ！」

（しまった……やられた……！）

文はその攻撃の意図に遅れて気付き、顔を歪める

「馬鹿……はたて!!あんたが本命よ!!」

文自身に向かってくる砂塵や破片は団扇を一振すれば問題なく撃ち落とせる。しか
し、だからこそ文は焦った。

たった一振……その一瞬、文がはたてに援護を入れられない僅かな時間が生まれる。

大袈裟な攻撃ではたての注意を引き、その上で文が援護に入れない、その僅かな時間
を作る事こそが萃香の目的だった

そしてそこで生まれた隙を萃香は見逃さない

「本命つて……えつちよつ……うそお!」

「捕まえたあ!」

未だ事態を飲み込めないはたての足を掴んだ萃香が、大きく笑う

そのまま両手ではたてを掴み、ハンマー投げのように遠心力を掛けて回り始める

「今度はもつと周りをよく見るんだね! なかなか楽しかったよ…ッ!」

「そう言い残し、回転の速度は更に上がっていく」

「ええっ!? ちよ、ちよつと! 私…これっ——ひゃあああああああああああ

あああああああああ

はたてが何かを言うより先に萃香がその手を離すと、天狗もびつくりな速度で吹き飛んでいく。

ほんの一瞬の出来事。文が団扇を一振して様子を見た時には既にはたては空の向こう……

「さて、まずは一人」

手首を鳴らし、鬼が振り返る

山の四天王である伊吹萃香を相手に、たった一度の小さな失敗から、文達は早々に二対一を強いられるという絶望的な状況に立たされるのだった。

第四十一話 灰の天敵 後編

一瞬で飛んでいくはたてを確認し、萃香は満足そうに瓢箪に口を付けた。

そして、隙だらけの背中を狙う白墨を、萃香は逆に軽々と押さえつける

「逃げずにも向かってくるのは良い。けどあんたの力じゃ無理だよ、頭を使いな。」

そう言い放ち、再び白墨を投げ飛ばす

文は考えうる限り最悪の状況になった……とこの先の展開を絶望視して悪態をついた
「ああもう！はたてのやつ……あんなに言っておいていの一番に退場させられてるじゃないの！」

悪態をつく文に、萃香は余裕の笑みを持って近付いた

「かなり遠くに吹っ飛んだからね。いくら天狗でもあと5分は戻って来れないはずだ。戻ってくるまで」昔のように「逃げ回ってくれても構わないよ？さあ！どうする射命丸！」

5分は戻って来れないと言ったが、実際には防御もままならず鬼の力で投げ飛ばされたのだ。正直、はたての意識が残っているとしてもあの怪我ではここまで戻ってくる事は不可能だろうと萃香は考えていた。

一方、文は昔のように、と意地悪く強調された言葉にブルリと震える

ずっと昔、調子に乗っていた若い自分が鬼相手に遊び半分でちよつかいをかけた事件。当時自分の速さに絶対の自信を持っていた射命丸文は何を血迷ったのか、鬼：それも伊吹萃香を相手に調子に乗ってしまった事があった。結果としては自身の全力を持つてして一週間以上も逃げ回った挙句、捕まって地獄を見せられた：というものだなまじ一週間以上も逃げ続けたせいで、山の四天王である伊吹萃香に変に目をつけられる事となったという、文にとって何よりも無くしたい黒歴史である

萃香の言っている“昔のように”と言うのは明らかにこの時のことであり、言外に逃げてても無駄だという事を文に言っているようなものだった

萃香が隙を晒しながら平然と歩み寄ってくる。それと同時に飛ばされた白墨が起き上がった。

じわじわと近付いてくる萃香を余所に文は思考を加速させる

文から見えて白墨の動きは素人そのもの：それを異常な再生速度で無理やり補っている。とてもじゃないがはたてのような動きを期待するのは無理だ

「私が前線を張るしかない…」

文は重い覚悟を決めて団扇を握る

はたてが萃香相手にある程度善戦出来ていたように、文にも同じことが出来る。しか

しはたての時には的確に援護の出来る者が居たのに対し、今の文にはそれがなかった。

援護ありでようやく成り立っていた戦い方を自分一人でやらなければいけない

いつその事自分がはたての代わりに飛ばされたかった：そんな考えが文の頭を行ったり来たりする。それぐらいには状況が絶望的なのだ

普通にやっても時間稼ぎにすらならない。だからこそ文は普段なら絶対にしないような不確定要素に全てをかける。

「はあ……これも全部はたてが悪い……」

文は本来出来るだけ白墨とは会話をしないように避けていた。個人ではなく、天狗として関わる事がまずかったからだ。

しかし、そんな事はもはや意味無い程に関わりを持つてしまった上、そんな事を言っている余裕も無い

文は諦めて白墨に話しかける

「……白墨さん、私が前に出ます。合図を出すので援護をお願いします」

少し考えたのち、文は白墨に声をかける

どうせこの現場を同胞に見つかれば一発アウトなので、どうにでもなれ……という自暴自棄だ。

むしろこんな事になるなら前もって取材という形で力の詳細を聞いておけば良かった

たと深く後悔していた

「…無理だ。…当たらない。」

天狗の宿敵であるその妖怪は、たつぷり間を空けてから声を発する

文はこの時初めて白墨の声を聞いた。

抑揚のない無機質な声、しかしその声音に僅かに諦めの感情がある事に気付いた

白墨の心は既に折れていたのだ。そして、ただどうすることも出来ないのでも今も情性で戦っている。

文はそんな白墨と同じ感情に飲まれそうになりながらも気を強く持つて答える

「…私が当たるようにします。良いですか？当たり前さえすればまだ希望があるんです。

頼みますよ…」

本当ならここで白墨の力について確証が欲しい……」が

「そろそろやろうじゃないか。私を倒す算段は付いただろうか？」

萃香からその強力な妖力が滲み出てくる

「…まあ、待つてはくれないうすよね……」

文は風を纏つて直進する。そして萃香の懐まで飛び込んだ。

はたての時とは違う、自分がやっていたような援護は無い。つまり実質鬼との一対一

のタイマン

（白墨は攻撃が失敗する度に近距離戦が苦手なものにも関わらず、わざわざ萃香様に近付いた…それはつまり、あの攻撃の為には接近する必要があるということ。どういう原理かは分からない…！けど、天狗には当たって萃香様には当たらない、この違いが出るとしたら確実にそこしかない…!!）

「私との戦いで考え事かい？ ずいぶん余裕そうじゃないか」
「く、うツ…！」

文は楽しげに放たれる萃香の攻撃に、冷や汗を垂らしながらも何とか避けていた（どこを見て余裕そうだななんて思ったのよ、一発当たるだけでも危ないつてのに…！ むしろそつちの方が…）

「…ツ！ あぶ…ないツ！ …！」

素早く繰り出される一発一発が大地を揺らすほどの攻撃、それを間一髪のところまで風を叩き付けて避ける

「よく避けた！ だが何度もそうはいかないよ」

一発避けても二発目が、二発目を避けても三発目が…

そしてその全てが必殺の威力。しかし文は確実に追い詰められながらも思考をやめない。

それを鬼は実に楽しそうに見ていた

何か策があるなら試せば良い、それすら楽しもうとする萃香の攻撃は、文の身体を少しずつ傷付けていく

「どうした射命丸！このまま終わるか！」

「……………」

文は萃香の挑発には反応せず、ただ何かを考えるように黙々と攻撃を避け続けていた。萃香の挑発には反応しなかった、しかし、突然文の動きが切り替わる。今まで常に逃げて徹していた文の動きが、まるで迷いが無くなったかのようにキレのあるものへと変化化する

（来るッ！本気になったか、射命丸!!）

常に安全な位置を維持しようとしていた筈の文は“それを捨てた”

元より不完全だった安全性を捨て、守りに使っていた風を攻撃に、萃香に切り込む為に…。

消極的だった守りから積極的な攻めへの変化

文字通り空気が変わる。

天狗の本気、それは自分の纏う風だけでは無く、辺り一体の小さな風すらも味方に付ける

萃香は久方ぶりに感じるピリピリと肌を刺激する高揚感に歓喜した

ありとあらゆる場所から飛んでくる風の刃による不可視の一撃。

萃香は身体に切り傷が出来るのも気にせず、文の攻撃に応えるように自身の攻撃の苛烈さを増していく

文と萃香に少しずつ傷が増えていく、しかし文の受ける傷の方が圧倒的に多く、避けきれなかった萃香の拳が、何度も何度もその肌を掠めていった。

直撃こそないものの、掠めただけでこの威力。

それに対して萃香の方は血こそ多量に出ているが、どれも薄皮を切る程度で肉を断ち切るには至らなかった

故に萃香は笑う。血にまみれ、獣のように獰猛な笑みを浮かべて文を追い詰める

しかし、文も笑った。萃香のような戦いを悦ぶもの顔では無い、自分の不利を知らながらも苦しさを誤魔化すように、小さな勝機を見据えて笑っていた。

だが、そんな文の健闘も虚しく、ついにその時が来た

「いっ……が、あ、あ、ッ！」

これまではどうにか避けていた萃香の拳がとうとう文の脇腹に直撃する

尋常ではない衝撃、山をも壊すと言われるその一撃に、文は自身の骨が一瞬で砕かれていくのを感じる。

痛みに悶絶するという経験は文にとって実に数百年振りの事だった

「ほんの少し焦ったな、射命丸」

その言葉を聞き、文は失いかけていた意識をなんとか保つ

まだ、終わる訳にはいかない。

なぜなら文の策は、まだその途中なのだから。

同じ山の四天王が相手でも、星熊勇儀だったならば文の策は通じないだろう

例えるならば、勇儀は山そのもの。常に大地に根を張るようにどっしりと構え、どんな攻撃を食らっても関係ないと言わんばかりに押し潰す。

地に足をつけた状態の勇儀はまさに不動であり、発する威圧感は、山のそのものが迫ってくるような錯覚を起こさせる

いくら文が策を講じたとしても、そんな勇儀をどうこうするというのは不可能だ。

しかし、萃香は、伊吹萃香は違う

勇儀と違って萃香の見た目は幼く、身長は10歳程度の子供と変わらない。

しかし、その軽さを利用した素早い飛び込み、そして、そこからしきりに放たれる即死級の攻撃。それこそが萃香の強みでもあった。

だが身長が低ければ手足も短く、手足が短いということはリーチが短いという事

萃香は文と比べても頭二つ分程背が低く、短いリーチを補うように、無意識の内に地面から足を離して飛びかかるようにして戦う

それこそが勇儀と萃香の違い。

萃香だから白墨の攻撃は当たらない。しかし萃香だからこそ隙がある。

文はそこに僅かな勝機を見出した

だからこそ、わざわざ萃香の攻撃を受けたのだ

これは意地だった。大妖怪としての：射命丸文としての忘れかけていた小さな意地

文が歯を食いしばって前を向くと、目を見開いて自身を見る萃香と目が合った。

鬼の本気の一撃を直で食らっても倒れず、それどころがまだその瞳は諦めていない。

常に手を抜き、本当に危なくなる前に逃げていく：そんな天狗の当たり前を知っていたからこそ、文がここまで意地を見せるとは萃香も思っていなかった。

そう、文の賭けはここからだった。

そして最も重要な事を確認せんと目を動かす

拳を振り下ろした体勢で止まっていた萃香の足は、地面から“ほんの少し浮いていた

”
「……ツツ!!!」

それを見た瞬間、文はずっと前から右手の羽団扇に溜めていた妖力を風へと変換させ、爆発させる!!

それは大妖怪の本気……天魔を差し置き、かつて“風神”と謳われた少女の力

「その妖力……仕掛けてくるか——!!」

「暴風よ、吹き飛ばせッッ!!」

その号令と共に羽団扇を大きく振り上げる

慌てた萃香は、咄嗟に腕で顔を守るように防御すると、次の瞬間……文が米粒程にか見えない程、遙か上空へと飛ばされていた

「——ッ!?!」

(瞬き程度の僅かな時間でここまで飛ばしたのかッ!?)

萃香が風でここまで吹き飛ばされたのだと気付くと、遅れて強い衝撃が全身を走った文が飛ばしたのは萃香だけでは無い……文が飛ばしたものは周辺の地形そのもの。

深く根を張っていた大樹がいつも容易く舞い上がり、そこら一帯の重力が反転したかのように地面が挟れて空へと浮かび上がる

まるで世界の法則が狂ってしまったかのような光景。

しかし、それだけでは終わらない

「……ッ……まだっ!」

文は再び妖力を強く込め、新たな風を生み出していく

そして、空高く飛び上がっていく大樹や大地の一部であった物が、萃香を中心に大きく渦巻きを描くように上っていき、更に足りないと言わんばかりに近くの木々を吸い上げる。

やがてその荒れ狂う暴風は竜巻となって萃香を閉じ込め、その竜巻の中は目を開けることすら出来ない程の暴風域となっていた

ただの小石や土ですらも弾丸のような速度で襲いかかり、そしてその上トドメと言わんばかりに巨大な大樹が向かってくる

普通なら中にいる妖怪はまず原型を留めてすらいないだろう……そう、それが普通の妖怪ならば……。

「あ、たある、かぁー!!」

萃香は小石や木々の破片を無視し、四方八方から飛んでくる大木を持ち前のデタラメな力で粉碎して対処する

結果として、萃香はこの竜巻の中、最大限攻撃を防ぎ続け、その被害を肌が切れる程度に留めていた

これで倒れてくれるほど甘くは無い。元よりこれが効くのなら、最初に空に打ち上げた時点で身体がバラバラにねじ切れていただろう

並の妖怪なら容易に屠るこの竜巻は、しかし鬼相手では足止めにしかならない。

それでも文は攻撃の手を緩めなかった。考えるのは白墨のあの白い槍

天狗には当たり、萃香には当たらない攻撃：決め手となるならそこしかない

(天狗達と萃香様の違いなんてそれこそ数え切れない程ある。けど萃香様にかすりもせず、あの槍の方から避けていくなら話は別!! 少なくとも単純な“力”の差や物理的な違いじゃない! 天狗達には無くて萃香様だけが持つている性質的な“力”：それが関係しているのなら……!)

「今ですッ! お願いしますっ!」

意を決して叫ぶと、いつの間にかかなり遠くまで移動していた白墨からあの白い槍が放たれる

この戦いの中で文は常に考えていた

当たるはずであった白墨の攻撃が、いつも途中で誘導されるように逸れていく

外れる方向に規則性は無く、右にズレたり左にズレたり、そして斜めにも。

そうやって何かに引つ張られるように軌道を変える……

そもそも文には人里から妖怪の山まで離れていながら1.6 m程度の人型を正確に捉えられているとは思えなかった

そしてあの槍の発動条件である対象への接近

確証は無い、他の可能性なんて幾らでもあるし、文自身もこじつけに近い仮説だと

思っている。しかし、情報が圧倒的に足りてない今、文はその仮説に全てを賭ける事にした

それは妖怪の山での事件の時から疑問に思い、考えていたこと：

“もし、白墨が萃香を狙っていないとしたら”

白墨が狙っているのは萃香に付けた“何か”だとすれば：

その“何か”が何なのかは分からない。自分にだけ分かる妖力の印だったり、もしくは呪いに近い力なのかもしれない

どちらにせよ、そう考えれば不可解な白墨の行動も、攻撃の目印を萃香に付ける為だと説明出来る

そして天狗達には無い萃香の性質的な“力”

密と疎を操る力によって、白墨の攻撃が外れていくのなら、少なくともその“何か”には質量があるはずだと文は考えた

実体があり、質量の存在する“何か”を目印に攻撃しているのなら、あの槍を萃香に当てることが出来る

だから文は白墨の攻撃の瞬間を見ていた。この戦いにおいて何度も見てきたもの。それを今度は確証を得るために見る

そしてはつきりと見た。竜巻の中に居る萃香に、白墨が躊躇いなく白い槍を放つ姿を

(やはり白墨は萃香様を視認することを必要としていない：!!萃香様を見ないで狙っている！)

竜巻は周辺の木々や地面を吸い上げ、とてもじやないが中の様子は分からない。だと言うのに、白墨はまるで萃香がどの位置にいるか分かっていたかのように槍を放った。そして白墨の槍は空のある一点を指して直進する

自分の考えが当たっていた事を確認し、文は安堵した

あとはあの槍を当てるだけ……!

「……ッ！白墨か……だが、何度やろうと変わらない！」

白墨の攻撃に気付いた萃香がそう吠える

言葉の通り、途中まで萃香目掛けて一直線に進んでいた槍が、途端に横にズレ始める
「……ッ！」

白墨の槍がズレたその瞬間、文は萃香の周りの風を変化させる

萃香の密と疎を操る力には、存在そのものを消滅させる力は無い。極限まで薄めるだけで、無くなりほしくないのだ

萃香は密と疎を操って白墨の付けた目印を空気中へと弾き出していたのだろう、と文は考える

今までの白墨の攻撃は萃香を避けていったのではない、萃香から弾き出された目印に

向かって飛んでいったのだ

白墨の攻撃が右へ左へと規則性無く外れていくのは恐らくそれが原因

白墨の攻撃は掠りこそしなかったが、大きくズレることは無く、常に萃香の周囲を通り過ぎていった…。

つまり弾き出されたばかりの目印は、萃香から離れてもまだその周りに残っていると
いう事。

ならば、その弾き出された目印を…もう一度萃香に付けてしまえばいい
文が再び羽団扇を使用する

今まで使ってきた荒れ狂う暴風では無い、生み出すのは繊細な風の流れ

初め、萃香を閉じ込めるように吹き荒れていた風が、今度は萃香の背後へ収束するよ
うに流れ始める

かつて一人の天狗は言ったという、大木を揺らすより一枚の葉を落とす方がずっと難
しい…と。

文は戦いの最中にそんな古い言葉を思い出した

最近の天狗は知らないような、今では廃れてしまった古い考え方。

今自分がしようとしている事は、その言葉の内容よりも遥かに難しい。その事実
に冷たい汗が頬を伝う

それは尋常ではない精密な風の操作。風を自在に操る天狗の絶技

文には白墨が萃香に付けた目印が何なのかは分からなかった。少なくとも目に見える大きさでは無いだろう：

しかしそんな事は関係ない。少なくとも対象の近くにあるはずだ、と……それさえ分かればいい。文は萃香の周りの空気全体をただ一点に収束させ、留めつつける。

それこそ灰の一つすら残さずに：

上手くいつているかは分からない。

しかし文は視覚よりも、長年付き添ってきた自分の風を信じた

そして……

「外れていかない……？なんだと……槍が真っ直ぐ進んで——そうかつ！射命丸かつ！」

萃香が焦りと驚きの混じった声で叫ぶ

白墨、萃香、そしてその後ろに小さな灰がひとつ。

斜めに並んだ三つの点、加えて十分に離れた距離

既にラインは出来ていた

結界の槍は更に加速を続けて突き進む

萃香はその焦り顔をますます青くする

当たればタダでは済まない、しかし避けようにもそこは踏ん張りの利かない空の上。

あの速さでは身体が動くより先に直撃する

萃香はここに来て白墨の攻撃に追い詰められるとは露ほどにも思っていないかった
それどころが戦力外と判断し、そう判断したが故に今苦境に立たされている

だが実際、結界の槍を封じられた白墨は確かに萃香が気にする必要も無い存在だった。

動きは素人、力も弱く、ただ治りが早いだけの肉体。

その上、白墨の戦い方には早々に諦めの色が出ていた。知恵を振り絞ってどうにかしようという気概も無ければ、ただ時間が過ぎ去るのを待つようなやる気のない姿勢……結界の槍が無い白墨は中級妖怪以下の存在だった

それをここまでの驚異に変えたのは、他でも無い射命丸文だ

天狗の中でも指折りの実力者であり、思慮も深い。

自分の足りない部分を補うように白墨を利用し、現にここまで自分を追い詰めた萃香はその事を手放しで褒めたい気持ちになりながらも、手を抜く気は無かった
迫り来る白い槍

本来なら確実に当たると一撃。だが萃香にはただ一つこれを避けるすべがある

しかし、この展開まで運んで来た文への称賛として、このまま食らっても良いとすら萃香は思った

当初の予定では遊ぶ程度に留め、そこそこの頑張りを見たら終わりにしようと考えていたのだ。

だと言うのに想像以上に動ける文を見て、萃香は思ってしまった……勝ちてえな、と。文は強い、それこそ鬼としての本能が刺激され、形だけでも勝ちを譲る……なんてしたくはないと思ってしまう程度には……

つまり萃香は負けたくなくなってしまったのだ。他でも無い。本気で勝とうとしてくる文を見て……。反則に近いような自身の力を使ってでも勝ちたいと思ってしまった

だからこそ、萃香は大人気ないと思いつつも、自分の欲が上回ってしまったのだから仕方ない……と鬼らしく心の中で言い訳を建て、声高に言う。

「惜しかったぞ射命丸——！本当に！あと一歩だった！」

文がもう勝ちを確信し、後はあの槍が当たるのを見届けるだけ……という時に、今ピンチの真っ只中であるはずの萃香が自信満々にそんな不吉な事を言った

（あ、あの状況からどうにかするなんて不可能なはず……これ以上はもうっ……）

動揺する文を無視し、萃香は絶望的な事を言う

「だが！抜かったなッ！覚えているだろう？私の霧状化をッ!!」

「なっ?!?!」

伊吹萃香の最大の反則技

自身の身体を霧レベルにまで薄め、問答無用で物理攻撃を無効化する萃香の反則技。萃香がその気になれば、こちらからの攻撃は一切通らず、しかし萃香は好きなタイミングで攻撃ができる……という理不尽な事さえ出来てしまう。

文からすればどうしようもない技

その瞬間、文は自身の敗北を悟った。どうしようもない鬼の理不尽さに、今までの苦労がただの徒労であつたと知る

白墨の槍は当たらない。二回目以降は同じ戦法は通用しないだろう、それどころが萃香の霧状化に対する対策が一つも存在しないのだ。

文は完全に詰んでいた。

薄い勝機を掴んで、その結果がこれなのか、と唇を噛む

萃香から見て、文は十分過ぎる程に頑張っていた。文の勝利と見ても良い程には鬼相手に善戦していたのだ。

(だが、それでも勝負は勝負！最後の最後で詰めが甘い!!)

いよいよ防ぎきれない程の速さにまで達した白墨の槍を見据え、身体を霧に変化させようとしたその瞬間——音速の黒い影が飛来する

その黒い影は、未だ激しい風が吹き荒れ、木々やその破片が高速で回っている……そん

な危険地帯へ、なんの躊躇いもなく突っ込んでいく

速度が速度…拳大の石でも当たればそれだけで大惨事になるであろう危険地帯

しかし、恐れを知らぬその黒い影——姫海棠はたては更に加速する——!!

「は、はたて!?!」

竜巻の中を強引に突っ込み、回避不可能な破片達が次々と突き刺さるのもお構い無し。

そして、そのまま萃香に向かって直進していく

「……させるかあああああああああ!!!」

音速にも迫る速さ。

そこから繰り出されるのはただの蹴り。

萃香の後頭部目掛けて放たれるその蹴りは、空間全体を振動させ、鈍い打撃音を響かせる

「……!?!痛ったあ?!?!…なッ!最初の天狗だど?!」

まだ五分も経っていない、それどころが帰って来れないとすら思っていた萃香にとつて、はたての攻撃は完全な不意打ちとなった

全くもって予想外の攻撃に萃香が驚き、そして振り返る

萃香が振り返ったのは突然衝撃を食らった事による反射的な行動だった。

ただ強い衝撃を加えられ、その発生源を探して振り返る。
そんな当たり前の動作。

しかし、その一瞬の行動が戦いを大きく分ける

「今度は周りをよく見るこゝねっ！お返しするわよ、この言葉」
はたては全身に傷を負いながらも意趣返しが出来たと得意気に言つて笑う。

「あー！し、しまった！まずい！！」

向き直ると、白墨の槍がもう目の前にあつた

(これだけ離れていても加速するのかわ！)

ここに来て萃香は痛根のミスを犯した

はたての攻撃は致命傷にはなり得ない、せいぜいほんの一瞬だけ萃香の気を逸らすのが限界だ

しかし、一分一秒を争うこの場においてはその一瞬が命取りになる。

白墨の槍はもう目の前、今からの霧状化はもう間に合わない。

はたての意趣返しだが、萃香に対してあまりに深く突き刺さる

萃香は感心する暇も無く、覚悟を決めた

避けられるはずだったその攻撃が、白い残像を残して襲ってくる

逃げ場は無い。

避ける手段は潰された。

萃香は自らの焦りを隠すように大袈裟な笑みを浮かべる

そして両手を顔の前でクロスさせ、全身に力を込めた

「こうなったら正面から受け切つてやる!!」

妖怪の中でも最上級の硬さを誇る肉体、それを更に妖力で強化する。

強化された肉体は、ちよつとやそつとの攻撃では傷一つ付かない。

無敵の防御、鋼の肉体。

鬼の身体はそう比喻される程の硬度を誇る

しかし、そんな萃香の肉体を、妖力を込めた本気の防御を……白墨の槍はいとも容易く貫いた。

「……ツツ！ぐツうう……!」

白墨の槍は、萃香が防御のために重ねた両腕を纏めて貫き、そのまま顔にも迫る

しかし萃香は顔を避けるように身体をひねり、その槍を肩で受け止めた。

「オ、オオオ!!……ツ！と、止まれええええ!!」

右腕と左腕、その両方を貫通し、今度は肩へと突き刺さる

萃香の両腕と肩を縫い合わせるように突き刺さる槍は、鼓膜を揺らす不快な音を響かせる。

「ぎっいいいい……重い……!!」

血は絶え間なく流れ続け、萃香は苦渋の声を漏らす。

白墨の槍は進む、萃香の背後の灰を直指して。

しかし、そうはさせないと萃香は力を込める。

肩を突き抜けようと進む槍と、それを止めようとする鬼。

先に押し負けたのは槍の方だった。

次第に加わる力は落ちていき、そして萃香の肩と両腕に突き刺さったまま、とうとう

動きを止める

「と、止めた！危なかったが……耐え切ったぞ……この喧嘩、私が勝つツ……!!」

萃香は安堵と喜びのこもった声でそう宣言する。

白墨の攻撃も二発目は避けられる。

文は既に万策尽きている。

はたてでは決定打にならない。

萃香は両腕と肩を貫かれ、今も尚その身体には槍が刺さったまま。

しかし鬼はこの程度では倒れない。

今度こそ勝ちを確信する萃香に、文は団扇を強く握り締めて近付く

そして迷うこと無く団扇を振るった

「二度も同じ手を喰らうか！」

文から放たれた強風を、萃香は自身が飛ばされないように妖力で防御し、砂埃だけが巻き上げれる

遙か上空に吹き飛ばされた一度目と違い、今度は空中に留まった

最初よりもいくらか力の落ちた文の攻撃を、萃香はやぶれかぶれの一撃だと判断した。そしてここまで粘った文達を認め、せめて一撃で墮としてやろうとして……ゆつくりと身体が後ろに引つ張られるのを感じた。

初めはゆつくりと、しかし段々と引つ張る力は強くなつていく……

「一体何が——いや、これは……まさかっ!？」

萃香がハツとして前を見ると、顔をニンマリとさせた文と目が合った

萃香は知っている、あれは勝ちを確信した天狗の顔だと……

文がその行動を思いついたのは、ほぼ偶然の閃きだった

白墨の攻撃が防がれたとわかった瞬間、身体は反射で動いていた。身体が勝手に動くように団扇を持つて萃香の前へ飛び出したのだ。

あるいは、度重なる思考の末、ほぼ無意識下で最適な行動を選び取ったのかもしれない

いは
もはや勝利は絶望的、そんな状態でありながらも、文は萃香に風をぶつけた

萃香はその風を初めより弱く、やぶれかぶれの一撃だと感じていたが、それは違う。なぜならその風は萃香に向けたものでは無いからだ

正確には、萃香の背後の“空気”に対して放った風。

もつと正確に言えば、白墨の攻撃の目印となっていた小さな“灰”それを狙って風を放った

白墨の槍は地面や壁に当たると、消えていく。それは文がこれまで白墨の攻撃を見続けてわかったことの一つ。

そのすべてが例外なく綺麗さっぱりと消えてしまうのだ。

だと言うのにどうして萃香に刺さった槍だけは消えずにそのままなのか。

何か消える条件があるのか

それとも白墨が意図的に残しているのか。

白墨の攻撃は“灰”に向かって吸い寄せられるように飛んでいく…

それはこの戦いを観察し続けた文にとって絶対の法則であり、覆ることは無い。

だから文は風を飛ばした。強い風である必要は無い

なにせ、飛ばすのはたかが灰一つ。

人が息を吹きかければ、それだけで簡単に吹き飛ぶもの。

そしてその灰に、槍は吸い寄せられていく

果たして、文の団扇で飛ばした灰は、どこまで飛んでいったのだろうか？

そんな事、誰が分かるというものか。それを知れるのは、この槍だけだ

……ゆっくり、ゆっくりと萃香の身体が斜め上へと動いていく

少しづつ“加速をしながら”

「な、なあ射命丸？お、お前……まさかこれって……」

何かに気付いた萃香が顔を青くする

しかしもう遅い

萃香の身体に突き刺さった槍が、どこかへ飛んで行った灰を指し、空へ、空へと更に加速を繰り返して浮かび上がる……” 槍に突き刺さったままの萃香と一緒に……”

「お、おい！いくらなんでもこんな……！せめてどちらかが倒れて終わるとか……！せつかくあんなに気持ちの良い喧嘩をしたって言うのに……っ！」

「……いやあ……これは、”勝負”なので——」

焦る萃香に文は実に天狗らしく答えた

白墨、文、はたて……三人でかかっても萃香には勝てない

故に文は萃香を空の彼方へ吹き飛ばすという荒業で対処する

そうして抵抗虚しく萃香はどんどん速くなっていき……

「ちよ、ちよっと！本当に!? 本当にこんなつ……く、お、覚えてろよおおおお……」

そんな捨て台詞のような言葉と共に、伊吹萃香は空の彼方へ消えて行った
空へと消えた、灰を追って……

第四十二話 灰の天敵 後日談

「いやあ……にしても驚いた。今の時代にあんな思い切りのいい天狗がいるとはね。最近の天狗はつまらない奴ばかりだけど、そういえば昔の天狗はあんなのが多かったっけなあ」

完全に力を抜いた萃香の身体が、プラプラと風に揺らされる

依然として萃香の身体には白墨の槍が刺さっており、そして槍の動きは未だに止まる気配はしない。この速度の中だと迂闊に霧状化するのも問題だ。

しょうがないので、萃香は流れていく景色を背景に、先程までの戦いを思い返していた。

「射命丸もあそこまで出来るとは思ってた……今回は完全にあいつにしてやられたか。うん……またやりたくなるね！まあそれいいけど、肝心の白墨がなあ……うーん……式の癖して……」

白墨は勝ち目もなく、逃げる事も出来ないと思つてと悟ると、途端に諦めたように動きが鈍くなつた

確かに普通の妖怪が萃香と戦えば、戦意喪失して諦める事もあるだろう

その上、萃香の一部の能力は白墨の上位互換のようなものだ

力量差に絶望するのも無理は無い

だが、それでも白墨ならば…と萃香は思う。

例え奥の手を封じられたとしても、諦めずに試行錯誤を続ければ、一矢報いる事だつて出来ただろうに…

実際に射命丸は練りに練った策で萃香を追い詰めた…対して白墨は無理だと悟るとすぐ諦める。

大妖怪クラスの射命丸と中級妖怪である白墨を比較するのもおかしい話だが、白墨だつて中級妖怪にしては少し異質な存在だ

決して不可能では無いと萃香は考えていた

現に白墨の槍は中級妖怪にしては強力だ

今だつて距離が伸びるほど加速を続けて――

「…あれ？まだ速くなるのか？時間も…結構経つたはずだけど…。……紫に頼むか？おーい！ゆかりー、拾ってー」

辺りには誰も居ない。居たとして萃香の飛んでいく速度には着いて行けない。

だと言うのに萃香は自分を見る誰かが居ることを確信して、虚空に話しかけた

「……………」

しかし、その気の抜けるような声は風に溶け、応える者は誰もいない

返事が無いことを不思議に思い、首を傾げていた萃香の顔が、みるみるうちに青くなる

「あ、あれ？もしかして怒ってる？い、いや／＼確かに話してたよりもちよつとだけ激しくやっちゃったけど…ほ、ほら！紫だつて自分の式神がどれくらい動けるか知りたかつたんだらう？」

「……。」

「お、おい！ゆかり！見てるんだらう!?そろそろこれ洒落にならないんだけど…いや、全然！まだ全然大丈夫なんだけどさっ！」

「……。」

やはり言葉が返ってくることは無く、ただ風を切る音がするだけ

そしてまた一段と背景の流れる速度が速くなる

見えては消えて…やがて色の異なる線しか見えなくなつて……

「な、なあ！紫！これっ…！これどこまで加速するんだい!?ほんとに…！…つて、あつ！やつぱりいるじゃんか！」

最初の余裕も無くなり、身体に力を入れて堪えていると、ようやく馴染み深いスキマが姿を現した

しかし、出てきたスキマは記憶にあるものより遥かに小さく、萃香の顔の半分程度の大ききしかない小さなスキマだ。

スキマの奥は悪趣味な瞳だらけの空間が広がっているだけで、肝心な紫の姿は見えない。

「……ねえ」

姿は見えない……しかしそのスキマの中からは、努めて冷静になろうとする紫の声が漏れる

「私、殺し合いはやらないで、程々にしてねって言ったわよね？ 限度を考えてって……言ったわよね？……あら、あらあら……おかしいわね？ おかしいわよね?? いつからあなたは嘘つきになったのかしら……？」

「う、嘘つきイ!? 失礼な！ 嘘なんか死んでもつくか！ いいかあ紫！ あれは殺し合いじゃなくて本気の“喧嘩”だ！ 全然違うぞ！」

紫の怒りを押し殺したような声に対し、萃香は心外だと言わんばかりに声を荒らげた
少しの間を置いて再び紫が口を開く

「……。……地形……原型留めてないのだけけど。」

「ああ！ 楽しい喧嘩だった！ いやあ久々に……」

「萃香。」

「うえっ!? な、なに?」

重々しい声が萃香の言葉を遮る

静かな怒りがヒシヒシと紫から伝わってくる事に萃香は狼狽した

「地形のね、原型がね……留めていないのよ。ねえ?」

「い、いや……あれをやったの射命丸だし……わ、私じゃないよ……?」

萃香は目を逸らし、自分のせいでは無い事を弱々しく主張した。

まるで子が親に叱られるのを恐れるように……

紫からすればどっちがやったかよりもどんな被害が出たのかの方が重要だった。

故に、その返答は今まで堰き止めていた紫の感情を爆発させる。

「な……な……っ、なああぁんで天狗とも戦かつてるのよッ! 私そんなこと一言も言っていないわよねえ!? あなたがやりたいって言うから条件付けてお願いしたのよ!」

「わ、悪かった! 悪かったよ! でも天狗と戦っちゃダメなんて一言も言っていないだろう!? それに紫も白墨がどうするのか知りたいって言ってたじゃないか! あれの手を完全に封じられるのは私だけだから……って!」

「本当にこの鬼は……いつもいつも屁理屈捏ねて……! ええっ! ええそうね! 白墨の事もよく知れたわよ! 十分以上にね! ついでに私の怒りも知りたいかしらッ!」

これまで声しか通さなかったスキマから、二本の腕が勢いよく飛び出し、萃香の長く

ねじれたツノを鷲掴みにする。

「わああああああ！待って！ホントに悪かったって！謝る！謝るからツノをグリグリしないでくれえッ！い、今バランスを崩したら肩が……肩がア！」

「あらあ？良いじゃない！肩の凝りが良く取れるんじゃないかしら！」

「肩が取れちゃうよ!？」

痛い、痛い泣き叫ぶ萃香を無視して、紫は思う存分日頃の鬱憤を晴らす。

「鬼と天狗が戦ってたなんて知られたらなんて言われるか……！私はどつかの小鬼さんの後始末をしなきゃいけないのよ。しばらくはそうやって飛んでいなさい！」

涙目で抵抗する萃香に、青筋を立てた紫が言い放つ。

言い終わると同時に、それまで開いていたスキマはピシヤリと閉じて消えた。

「ええ!?今も結構な速さで加速してるのに!?ちよつ!ちよつと……!か、帰った!?本当に帰ったのかい!?ゆかり!ゆかり!ゆかり……!」

誰にも見られず、見ることも出来ず、ただ一人空を加速する。

空気は冷たく、未だ角度は斜め上。まだ折り返しすら済んでいない。

身動きなんてしようものなら身体が外側へ吹き飛びかねない。萃香に出来ることは身体全身に力を入れて、飛ばされないように固定するのみ

結局、萃香はそれから少しの間を置き、雲の上にて紫に回収された。半冷凍され、鼻水を垂らした萃香は言う、喧嘩の後の方がよっぽど疲れた…と。



後日談となるが、突然始まった萃香との戦いは、何故か突然やって来た二人の天狗に助けられる形で終わった。

一人ははたて、もう一人は射命丸と呼ばれていた天狗。

存在は知っていたが、まさかあそこまで強いとは…。天狗も未だに底がしれない。

理由は分からないけど、味方してくれて本当に助かった…正直敵に回ったら勝ち目なんか無さそうだ。

ただ、射命丸が一言も無しに山の方へと急いで帰っていったのが気にかかる

脇腹抑えてたし、多分骨の何本かは折れてると思うんだけど、なにやら焦った様相で行ってしまったので、礼を言う暇さえ無かった

ちなみにはたては逃げた

射命丸が焦った顔して山へ帰ったのとはまた違う

目が合って話しかけようとしたら『か、花果子念報をよろしく!!』とだけ残り、あた

ふたしなから逃げていった。

天狗社会には感謝を言わない、言わせない風習でもあるのだろうか
思えば初めてはたてに助けられた時も感謝を言うより先に逃げられ気がする
突然やって来て、助けてくれて、そして何も言わずに帰ってしまった…
かと思えば、後日はたてからは新聞と一緒に手紙が送られてきたのだ。

お身体をお大事に!!!!

どうしよう、訳が分からない。

結局なんで助けてくれたのかわからずじまいだし…いや、それとも天狗つてそういう
種族なのか…?

正直分からないことだらけだが…

うーん……。

…まあ、よくわかんないけど助けられたつてのはわかる。とりあえず助かったんだ、天狗様々だな。

今度会った時に恩を返せば良い。だから天狗の事は後回しで良いのだが……それよりも問題は萃香の方だ。

いつまた襲われるか分かったもんじゃない。

対策のしようがないってのが最悪だ。

灰を付けても外されるし、灰逃げも通用しない。灰逃げを使わずに逃げようにも相手は霧だ。その気になれば近付かれていることすら気付かず殺される。

武力でどうこうなんて出来るわけではない。

かなり困った事に、正直逃げられる気がしない。

冗談じゃないぞ……せつかく地底から出れたというのに……また鬼か。

……ああ……本当に……ほんつとうにろくでもない種族だ。



呼吸する度に痛みが走るのも気にせず、文は大急ぎで荷物を纏めて、何時でも逃げ出せるように待機していた。

鬼との戦闘に、白墨との共闘。

文の首が吹っ飛ぶのには十分すぎる。

特に白墨と共闘したというのが良くなかった。明確に天狗達と敵対したようなものだ：その場で即斬り捨てられても文句は言えないだろう。

結局その日から、文はいつ他の天狗が攻めてきたとしても逃げ出せるように、常に家に引きこもり、一切気を緩めずに警戒し続けた。

次の日も：その次の日も……。

一方はたてはと言うと、自分の家に戻るなり、よだれを垂らしてだらしく布団で眠りこけていた

どうせ白墨の背後にいる妖怪が、どうにかバれないようにするだろう、と気を緩めきっていたのだ。

なんならはたては初めからそのつもりで思いつき好き勝手動いていた。

どれだけめちやくちやにかき乱したとしても、大事にしたくないであろう背後にいる大妖怪がなんとかするはずだ：と。

もちろんそんな保証はどこにもない。

はたての勘違いで、寝ている間に戸を蹴破られる可能性だつて大いにある。

しかし、はたては大丈夫だろう、と気楽に、そしていつもと変わらぬ様で眠り始めた。バレたら一発で終わるのに……だ。

……控えめに言つて、はたては肝が据わりすぎだった。

しかし、現に白墨の背後にいる妖怪……八雲紫によつて、鬼と天狗の地形が変わるほどの戦いを知るものは、誰一人として居ない。

そして、その事を知った文が家から出てきたのは、戦いから一週間も経った後だった。ボサボサ頭に目の下のクマ。

文がはたてをぶん殴ろうと決意するのに、さほど時間はかからなかった。

第四十三話 時間の進み

人里のある一角、かつては多くの人で溢れかえっていた道具屋。

今ではその頃の面影は無く、あの活気づいていた雰囲気は感じられない。

そんな人氣の無い木造建築を訪れる妖怪が居た。

人里ではある意味で最も不気味と言われている妖怪、白墨だ。

前来た時とはずいぶん違う、そんな店の変化も気にせず、白墨は暖簾も無い引戸を、ガタガタと音を立てて開ける。

店内は薄暗く、多くの商品が飾ってあった棚には、ホコリしか残っていない。

そんな寂れた店内を、白墨は慣れた様子で進む。歩いて、歩いて…そして仕切りの奥の席に座る老人を見つけた。

白髪に少しだけ見えるシミの付いた肌色。

身体はやせ細り、角張った骨とシワの多い皮が張り付いた身体。

その痩せ衰えた肉体を見ると、とても記憶の中の男と同一人物だとは思えないだろう。

そんな老人に、白墨は驚いた様子もなく、コツコツとごく自然に近付いた。

初め、老人は近付いてくる白墨を表情を変えずに見つめていた。

しかし、ある程度近くになると、今度は細めていた目をギョロリと大きく見開き、そして驚いたように口を開く。

「……お前、白墨か……？」

「ああ。」

信じられないものを見たような声

調子の良い、軽口ばかりのあの声では無い。頑固親父として有名だった、あの威厳のある野太い声でも無い。

酷く掠れた、しわがれた声。

「お前は……十年か……？いや二十年は……。な、なんで今になって……」

震える手で頭をかいたり、机を触ったり……と落ち着きのない老人に、白墨は無言で手に持っていた壊れた釣竿を見せる。

それを見ると、老人は動くのをピタリと止めて、やがて懐かしむように顔を綻ばせた。
「……は、ハハハ……。そうか、そうだったなあ……。お前はそういう奴だった。……ハハッ……
なんだ、今日はそれを買いに来たのか？」

「安いから。」

その言葉を聞き、老人はまた一層嬉しそうに笑う。

その声はやつぱり掠れており、昔とは似ても似つかない。

店内は寂れ、あの活気づいた空気は無く、薄暗い。

しかしそんな寂れた空間でも、白墨と老人の会話は昔と全く変わらないものだった。あの頃のように淡白な会話。

ずっと無表情で、感情の起伏を感じさせない声。

老人にとつて、それがどうしようもなく懐かしかった。

とても……とても懐かしかったのだ。

老人は……いや、かつて里一番と言われていた道具屋の店主、春水は、厄介者とされる白墨の来店を、誰よりも深く喜んだ。二十年前の今のよう。

「ずいぶんと……ずいぶんと……久しいなあ」

「ああ、長持ちした。」

本当に、昔と変わらない。

白墨は釣竿が壊れたから買いに来た。ただそれだけなのだ。

他には何も無い。見た目も何も、春水と違って全く変わっていない。

（いや、昔に比べて、ほんの少しだけ話すようになったか……）

かつての白墨と照らし合わせ、春水は少しだけ考えを変えた。

「でも……そうか、そうか……そんなに長い間持つちまったのか……。道具の良さが仇にな

るとはなあ……ハハ……。なら、もうちつと古いのを渡すべきだったか……」

惜しむような春水の言葉に、白墨が不思議そうに首を傾げる。

「ああいや、何でもねえ。……ただ、すまねえな。悪いが、もう売ってねえんだ……」

「……そうか。残念だ。」

ズラリと並べられた何も乗ってない棚を見て、春水は寂しそうにそう言うと、白墨は小さく肩を落とした。

分らないように見えて、白墨の感情は意外と行動に出る。その事も、春水にとっては、また懐かしかった。

「お前は変わらねえなあ……妖怪なんだ、当たり前か……」

「……お前は………少し、老いたか……?」

「少し、か！クツ……！ハツハハ！見た目だけか！」

熟考した後、出てきた言葉に、春水は思わず吹き出した。

変わったところなんて、もつとあるだろうに。それとも、妖怪からすればこんな変化は小さな物なのか……

そう言うと、白墨は更に困ったように顎に手を当てる

「見た目だけだろう」

何を言っているのか分からないといった様子で白墨が聞いてくる。

人と妖怪の違いなのか、それとも特別白墨がズレているのか……春水は変わってしまった自分を思い出し、少しだけ悲しい気持ちになった。

「…違うぞ、白墨よ。人はそれなりに歳を取れば、堅物を気取ろうとするし、他人の助けも嫌になる。人はな、見た目が変われば性格も変わるんだよ」

諭すように、思い出すように春水は言った。

「…そういうものか。」

「ああ、そういう……そういうものなんだよ……」

「……。」

しばらく間を置き、春水が声色を変えて話す

「釣竿は……悪かったな、せつかく来たつてのによ……。」

「……ああ。」

「ここから西の方に俺の息子達の店がある。少し手間だがよ、釣竿はそこで買ってくれ」

春水は、そのやせ細った指で西を指した。

「……息子はどうした。」

思い出したかのように白墨が問う。

春水の3人の息子は、全員家庭を持って生きており、なおかつ人里でそれぞれが自分

の店を構えている。

だと言うのに、老いぼれて尚、この家に一人で住み続ける春水に、白墨は今更ながら疑問を覚えた。

そして、その白墨の言葉に春水は驚かされる。

白墨が、他人の込み入った話に興味を持つとは思っていなかったからだ。

「あいつらは……全員追い出したんだ。もうガキじゃねえんだから、独り立ちくらいやってみろって言つて尻を蹴つ飛ばしたよ」

何をもって春水がそんなことをしたのか、白墨には分からない。ただ春水の自虐的な言葉を、不思議と聞いていた。

「なんだ……本当に珍しいな、お前がそんなに興味を持つなんてよ……。ああ、いかん……いかな……歳を取ると、心が弱くなる……。ははっ……人間つてのは、矛盾だらけだな……」

震えている……でも安心した声。

やがて、春水は意を決したように、ポツリと……弱々しい声で話し始めた。

「俺の親父はよ……俺を助ける為に死んだんだ。好奇心から里を出た俺を連れ戻す為に、飛び出して……それで、そのまま俺を庇つて妖怪に食われたんだ……」

遠い目をした春水が自身の罪を告白するように言う。

しかし、決して後悔している者の顔では無かった。どちらかと言うと、羨むような顔

だ。

「当時は自分を責めたけどよ……今思えば、親父は上手く死んだよ。もう顔もあやふやだけど、あの光景だけは覚えてる。死の恐怖に、あの背中の頼もしさ。俺は今でも親父に感謝してるし、尊敬してるんだ……。何年経っても、何十年経っても……ずっとだ」

「……………」

「俺は……長く生きすぎた……。人はな……長く生きると色々壊れてくるんだよ……お前ら妖怪と違って……不変の存在じゃないんだ。記憶も薄れていくし、もう身体だって思うようには動かない」

酷く疲れた目で、自分の身体を見る。

立ち上がるだけでも苦勞するであろう骨と皮ばかりの小さな身体だ。

白墨には分からない。春水が何に絶望しているのか、言葉で言われても、心で理解することが出来ない。

「……………長く生きるのが罪か?」

「いいや……不自由に生きるのが害なんだよ」

悲しい顔で春水は白墨の疑問を否定する。

「最近じゃあ、小便だって辛いんだぜ。みつともねえだろ……?男が一人で便所にも行けねえなんてよ……。こんな死にかけのジジイの世話をやらせるか?……俺が子供なら、例え

血の繋がった父親だろうと、思うだろうぜ……早く死んでくれねえかなって……」

春水の言葉には同情を誘うようなものは無かった。ただ自分の思う人の心の移り変わり、その残酷さを誰よりも恐れていた。

「情けない、みつともない話なんだがよお……怖いんだよ。死ぬ事じゃねえ。死んだ後、ああ……ようやく死んでくれたって、そう思われるのが怖い……！だつてよ……！悲しいじゃねえか、寂しいじゃねえかよ……死んで誰かに喜ばれるなんてよ……」

それは、きつと春水がずっと隠してきた心の弱さ。誰にも言えず、誰にも言うつもりが無かったであろう本音。

「なあ、白墨よ……人間、長生きなんてするもんじゃねえのさ。人の好意つてのは期限付きで、時間が経つほど薄れてく……消えるのはまた違う。上書きされていくんだ……嫌な印象で埋め尽くされていく。みつともなく生き続ける老害なんて、その最たるものだろうよ」

吐き捨てるようなその言葉が、他でもない春水自身のことを言っているのだと白墨にも分かった。

「俺は……俺は……親父のように、誰かに思われて死にたかった……思い返された時、良い父親だったと……そう思われたかった……。それが無理でもよ……せめて頑固で口煩かった父親で終わりたいんだ……だからよお……白墨、俺を——」

声は落ちきっていた。歳を取って他者を拒み、孤独に死を待ったその末に、春水は白墨に救いを求めるように顔を上げる

「――俺を頑固で口煩い父親のまま終わらせてくれねえかなあ……」

それを黙って聞いていた白墨は、初めと変わらない無表情のまま、ゆつくりと春水に近付いた。



葬式は、春水の三人の息子達と二十人程度の里人達によって行われた。

死因は老衰、一人寂しく、椅子の上で眠るように亡くなつたらしい。

ぼうぼうと燃え上がる炎からは、小さな灰がパラパラと零れ出ていた。

俺はその葬式を遠目から眺めていただけだから、詳しくは分からない。

しかし、燃え上がる炎の横では、春水の三人の息子達が、涙を流して別れの言葉を告げているのが見えた。

火葬が終わると、春水の遺骨は妻の隣に埋められ、日が完全に沈む前には全てが終わった。

外が真っ暗になると、もう人の気配は無い

あいつは酷く恐れていたが、なんだ：存外愛されていたでは無いか。
「……………」

手の中に残る灰を見つめる。まだ少し温かい。

春水の言っていた、見た目が変われば性格も変わるといふのは、少し違うと思う。

少なくとも俺の前では、春水は春水のままだった。

あいつの見た目が変わったから性格が変わったのでは無い、きつと：あいつの周りの見た目が変わったから、それに合わせるように自分の性格も変えていったのだ。

息子が少しづつ大人に近づくのに合わせるように、変わったのだ。

特別それが悪いという訳ではないと思う。ただ、それが原因であいつは誰にも本音を言えなかったのだろう。

そして、だからこそ俺には話したのだ。

少し、不思議な感覚だ。

人里で唯一俺を好意的に思っていた人間だったから、残念だ。

今日は新月、街灯なんて人里には勿論存在しない。

前も後ろも真つ暗だ。そんな暗闇を歩いて、そして目的の場所へとたどり着いた。

特にみすばらしくも何とも無い、普通の墓。

墓石にはあいつの名前が刻まれている。

俺は袂から取り出した饅頭を、その出来たばかりの墓の前に置いた。

あいつの好きな物なんて知らないが、饅頭が嫌いな人間なんていないだろう。パンパンツと適当に手を合わせて立ち上がる

……こういう時つて音鳴らしちやダメなんだったか？まあいいか。

もう用は済んだし帰ろう。

来た道を戻ろうと振り返ると、真つ暗なはずの道に、ゆらゆらと揺れる提灯の光が目に入る。

段々と近付いてくる提灯の持ち主は、寺子屋の教師をやっている慧音だった。

なんでこんな時間に？

彼女も人が居ない時間が良かったのだろうか。

十分に近付くと、慧音の方も気付いたらしく、一瞬驚いたように俺の顔を見た。

珍しいが、特段話すような事は無い。

さっさと帰ってしまおう

「……なあ」

しかし、そのまますれ違おうとした俺を慧音は引き止めた。

面倒臭い、いちいち呼び止めないで欲しい。

一応、足を止めて慧音の顔を見る。

酷く沈んだ顔。目元には隈を作り、今にも倒れそうな顔色だ。病人だってもう少しマシな顔をしている。

慧音は何かを言おうとしては飲み込んで、目を左右に不安気に揺らして：そんな挙動不審な行動を3回ほど繰り返し返す。

もう無視して帰ってしまおうかと悩んでいると、ようやく覚悟が決まったのか、深呼吸をして俺を見た。

「……………春水を」

慧音はそれだけ言って、一度を固唾を呑む。：そして、今度は少しでも力強く俺を見て、そして……………

「春水を殺したのは：お前だろう……………？」

ドクン、と心臓が跳ねる

こいつなんて言った……………？

どうして？

あそこには誰も居なかった。入念に確認した。

外傷は無い。そうやった。

なのに、なんでこいつは……………

いや今はそんな事どうでもいい。

証拠はないはず、何を聞かれても無視でいい。

いや、ダメだ。人里の人間に不信感を抱かれる事が問題だ。

不味い、どうしよう紫に殺される。

表情どころが、指先すらも動かしてはいない。だと言うのに、慧音は納得したように目を伏せた。

そして、俺を通り過ぎて歩いていく。

心臓がかつてないほどにうるさく鳴る。

理由は分からない、けどバレた。

音を立てずに後ろを向くと、不用心にも俺に背を向けて歩く慧音が見えた。

「……。」

そんな不用心な背中に、俺はゆっくりと手を向けようとして……

「……良かった」

ピタリと、手が止まる。

「……そうか、春水は……お前が殺したのだな……一人で……一人で死んだのでは、ないのだな……。看取ってくれる者が、居てくれたのだな……そうか……」

涙が混じり、喉が震えて……それでいて、とても安心したような声。

「私は……わたしは……！……てつきり……誰にも知られずに死んだのかと……。でも……でも……そうか、あいつは……あいつは一人じゃなかったのだな……」

どうしたものか……。

慧音は泣いていた。後ろからでもはつきりと分かるほどに肩を震わせ、嗚咽をこらえて泣いていた。

「本当は、気付いていたんだ……春水が悩み、自分を追い詰めていた事も……。ただ、同時に恐れていた……あの明るかったあいつが……変わっていくのを見たくなかった。本当は会いに行くべきだったのに……邪険に扱われるとしても、一言いってやるべきだったのに……私は……」

春水の墓の前で、慧音は懺悔するように滲み出た後悔を吐き出していた

死者に対して……きつともう届かない。

でも不思議な事に、人が誰かに強い感情を抱く時は大抵相手が死んだ後だ。

死にこそ強い感情がのしかかる。……けれど死人に想いは届かない。

「ほんと、変な生き物だよ。意味なんて無いっての」

いつの間にか背後に立っていたルーミアが、心底理解出来ないといった風に言う。

新月の夜というのも相まって、ルーミアの姿は殆ど認識できず、消え入りそうなその

声は、聞こえづらい。

しかし、そんな暗闇の中で、紅い瞳を光らせて俺を見る。

「殺しといた方がいいよ。あの半獣」

相変わらず聞こえづらいその声に、慧音は気付かない。

「……いい」

「なんで？バレたんでしょ？」

ルーミアは理解が出来ないといった様子で手を上げる。

「…多分、大丈夫。」

「後悔するかもよ」

「ああ…。」

曖昧な返事をする俺を、ルーミアは紅い瞳で睨んだ。

「矛盾してるよ、その考え」

「……………」

「適当だなあ…あーあ、どうなっても知ーらない」

根拠は無い。実際多分大丈夫だろうと思って本当に大丈夫だった事は三割くらいだ。

だからこそルーミアも納得がいかないのだろう。口を尖らせ、そのまま闇の中へと引

きこもってしまった。それでも…まあいいじゃないか。

適当な行動つてのが案外上手くいく事だつてあるかもしれない。

俺も…戻るとしよう。

未だすすり泣く音が響く夜道を、今度は振り返ること無く帰った。



涙を拭いて家路につくと、私の家の前で誰かが座り込んでいるのを見つけた。

「ああ、やっと帰ってきた」

もう深夜だと言うのに、平然と声をかけてくる

特徴的な腰まで伸びた真っ白な髪、誰かと思えば竹林に住む少女、妹紅だった。

「一体どうしたんだ、こんな夜更けに」

「ほら、さつき人里で煙が上がってたから火事かと思っただけど…この様子じゃあ勘違いだったかな」

「ああ、なるほど…。恐らく妹紅が見た煙というのは火葬の煙だろう」

煙…と聞いてピンとくる

黒い煙だったのも相まって、心配になって来たのだろう。

「そっか」

妹紅はそれだけ言つて、言及しようとはしてこなかった。

妹紅自身、こういう事柄に関しては思うところがあるのかもしれない。

「…とりあえず家に入ろう。時間が時間だ、妹紅も今日は泊まつていつてくれ」

「うーん…じゃあ、お言葉に甘えて…」

少し迷つた後、妹紅は申し訳なきように頬をポリポリとかいた。

「なあ、妹紅…一つ、聞いてもいいか…？」

「どこことなく気を遣われているような感覚。そういえばまだ顔に涙の跡が残っているかもしれない…」

「なんだか気まずい雰囲気なのも相まつて、聞いてみることにした。」

「んー？そうだなあ…つま、人生のほとんども無駄に過ごしてきた私が答えられるかは分からないけど…それでも良いなら何でも答えるよ？」

「無駄だなんて…」

「そこまで言つてハツとする。さつきよりも自分の言葉が軽く出る」

妹紅の言い方は時折見せる自虐的なものではない。

「…やはり気を遣われていたか。こうしてみると、長い間生きているのだと思わされる。」

ジト目で睨むと、妹紅は片目を閉じておどけて見せた

「まあまあ、落ち着いて」

「……全く。だが、まあ……その、助かる……」

「良いよ、話してみてもよ」

その言葉に少し温かみを感じる

私はゆっくりと腰を下ろしては、ゆらゆらと揺れるろうそくの火を眺めた。

「……妹紅は、大切な人が亡くなつて……後悔した事があるか……？」

妹紅はゆっくりと目を閉じて、小さく頷いた。

「……すまない。妹紅に対して……言いづらい事だった」

「いいや……確かに、私はいつも残される側だからね。後悔は……あるよ、何回も。今もそ

の途中だ」

不死人故の哀愁のこもった言葉に達観しきつた顔。

「でも、慧音のそれは正しい感情だよ。大切なものだと思う。少なくとも、忘れようとするものでも忘れるべき事でもない」

「それは……」

まるで……自分は正しい後悔をしてこなかったかのような言い方。妹紅の過去を思い返す顔は苦いものだった。今度は気遣いではない。

「私の場合はさ、死に目に会うことは珍しかったから。…見た目の事もあって、一つの場所に留まらない生活を続けていたからね。一度話した人達でも百年経てば、もう誰も残っていない。死んでしまう前に会っておけば良かった…話しておけば良かった…そんな後悔は何度もしてきた」

目を細めて話す妹紅の顔には、言葉の通り後悔があった。

しかし、それでも今と昔をきつぱりと分ける妹紅の達観したような、割り切つてしまつたような言い方に疑問を覚える

「妹紅はその後悔に納得出来たのか…?」

この心にもやもやと積もつた言い表せない感情を、どうやつて…?

妹紅は少し悩んで困つたように笑つた

「私は…納得なんて出来てないよ。ましてや慣れてなんて。ただ、時間と共に風化していくだけ…だから、私も途中なんだ。長く生きて、折り合いをつけているように見せるだけでさ…」

確かな矛盾。

今度は妹紅が気まずそうに髪を触つた。

そうやつて言えるようになるまで一体どれほど時間がかつたのか…
分かつているつもりではあつたが、不老不死である妹紅の言葉は重い。

「何度も、か……」

「まあ……ほら！もう幻想郷に来てからも長いしね」

まるで既に終わった失敗談を語るように妹紅は笑う。

人との別れに見切りをつけ、そしてその事を引き摺ってすらいないかのような振る舞い。諦めたようにろうそくに灯った火を見つめる妹紅の背中には、人でありながら、他者との時間を共有する事の出来ない形容し難い孤独があった。

そんな空元気とも取れる態度の妹紅に、私は何かを言おうとして……口を噤んだ。

半獣で、人より長く生きる私でさえも、妹紅にとっては時間を共有する事の出来ない他者に他ならない。

「あつても、もう居ないとは言つても、全員つてわけじゃないんだ」

そんな中、妹紅はふと思ひ出したかのように、声を明るくさせた

「そうなのか……？」

妹紅が幻想郷に来てから既に七十年以上は経っており、私以外の人間とはほとんど顔を合わさないようにしていたので、疑問に思つて顔をあげる。

「そいつは妖怪で、昔私が蓬莱人になったばかりの頃、よく一緒に旅をしていたんだ。変なやつでさ、人の意見は聞かないし、突然蹴ってくるし、かと思えば蹴った理由も話さうとはしてくれないし……。今思ひ出しても理不尽な奴だったけど、それでもどうしてか

「私と一緒に飯を食べてくれたんだよ…。その理由も結局話してくれなかったけどさ」
昔を語る時、いつもどこか辛そうにしていた妹紅だったが、今日は珍しく、楽しかった過去を振り返るように声を弾ませていた。

「ふふっ…そんなに嬉しそうに話すということは、よほど仲が良かったのか？」

「いやあ…どうだろ。常に何考えてるのかよく分からない奴だったからなあ。案外、ただ一緒に飯を食べる奴を、探していただけなのかもしれない」

「なんだそれは」

困惑して聞くと、また嬉しそうに妹紅は笑う。

「まあ普通はそう思うよな。変なやつだったんだよ、色々。今じゃあ顔も声もほとんど覚えちゃいけないけど…でも楽しかったな…」

そう言つて懐かしむ妹紅の横顔は、ほんのりと寂しげだった。

「もう会っていないのか…？」

「ああ…最後に会ったのが、もう1000年以上前からね…。あつても、覚えてないつてのはまた別の話でさ、というのも全然話そうとしなかったんだよ。ずっと無言で、話しかけても殆ど無視で…。とにかく話すのを面倒くさがる無口で迷惑な奴だった。そんなんだから声なんて殆ど聞けなかったんだよ」

「…？変わった妖怪だったんだな」

そういうえば、ちようどさつきまで話して白墨も、口数の少ない奴だったなと思ひ出す。妖怪だとそういうのも珍しくないのかもしれない

「加えてピクリとも表情を動かさない奴で、笑った顔なんて一度も見たことが無いんだ。無口で無表情で…でも行動だけは一際目立つ、そんな奴だった」

「……うん？」

とても既視感がある妖怪

自分の頭の中に無口で無愛想な灰色の妖怪が浮かんでくる

もしかして…妹紅の言う妖怪は……

「……っ」

「…どうしたの？」

その妖怪の事を知っていると伝えようとして、すんでのところで押しとどめる。

不思議に思ったのか、妹紅がひよこつと私の顔を覗き込んできた。

「あ…ああついや、なんでもない」

思わず否定する。1000年以上も昔に会った妖怪が、そんな都合良く現れるだろうか。共通する特徴は無口で無表情と言うだけだ。

その妖怪が幻想郷に居ると言つて、もしそれがただの人違いだったとしたら…

…さつきの妹紅の顔を見た手前、ぬか喜びはさせたくない。

いや、そもそも冷静に考えて無口で無表情な妖怪なんて他にもいるだろう。人里でも、白墨の事はよく話題になっていた。

1年、2年ではない。白墨が人里に来てから数十年は経っている。

幻想郷縁起には載っていないが、人里で最も有名な妖怪の一人だ。

普段は竹林から出てくることの無い妹紅と言えど、知らないという事はないはず…。

やはり妹紅の言う妖怪とは別人…か。

「慧音…？」

「…会えるといいな、その妖怪」

「…え？あ、ああ…うん」

「さあ、もう寝よう。布団を出そうか」

未だ不思議そうに私を見てくる妹紅をよそに、私はろうそくの火を消した。



布団で寝るといふ久々の体験。

横からは規則的に息を吸う音が聞こえてくる。

いつも座って寝ているからか、横になって寝るといふのはどうにも身体に合わない。

ろうそくの火すらない部屋は全くの暗闇で、目を凝らしても何かが見えることはなかった。

…そうだった、今夜は新月だ。

隣で寝ている慧音も、この規則的な呼吸音がなければ気付かないかもしれない。

「…後悔、か」

ふと、さつきまでの会話を思い出す。

顔に涙の跡を残した慧音が、珍しく思いつめた顔で聞いてきた話だ。

私は後悔があると言った。

死んでしまう前に会っておけば良かった…話しておけば良かった…そんな後悔は何度もしてきた…と、確かにそう言った。

その言葉に嘘は無い。

確実に歳を取り、老いていく者と、何年経っても変わらない私の姿。

私はその違いが怖かった。恐れていた。

何かと理由をつけて、会わないように、これ以上傷つかなくてもいいように…そう思つて…：…そして時間だけが過ぎた。

しかし、時間が過ぎて、安心するのは一瞬だけだった。

やがてじわじわと後悔が生まれてくる。私の人生はいつもその繰り返しだ。

だから、慧音に言った言葉に嘘は無い。

…嘘は無い。だけでもう一つ、もう一つだけ…隠していた後悔があった。

初めに話したもので無い。もっと…根本的な後悔。

ずっと思っていたこと。

——初めから会うことさえなければ。

話さなければ、会わなければ、興味なんて…持たなければ。

一人でいると、気が楽だった。

誰かと関わりを持つ度、その後の事を考えて息ができなかった。

…何十年も誰とも話さない生活を続けていると、気が狂いそうになった。

誰かと話すことに意味はなかった。関わりを持てば持つほど、時間が経てば経つほど、次に会うのが怖くなった。この異形の身体を知られるのが恐ろしくなった。…そして逃げるようにそこを離れて、後には何も残らない。

ならば、初めから誰とも会わなければ。

孤独でいる恐怖を無視して、唯一人で生き続けるだけの絶望を肯定出来れば。

……それでも……そう思っても……思い出す。思い出してしまう。

人の温かさを、誰かと一緒にいるだけで得られる安心感を。

だって、だってあの日、確かに救われたと感じてしまったから。

…消えてくれない。もう顔も、声すらも思い出せないというのに。あの日の幸福感と、あの魚の味が…ずっと、ずっと離れてくれない。

いつからだ？人と会う度、残りの時間を考えるようになったのは。

慧音の命も有限だ。人より長いとは言え、それでも半獣。

あとどれくらい？100年か？200年は…無理そうか？

ドキリと心臓がはねて、嫌な汗が身体を伝う。

…またこの感覚だ。

誰とも会わないと決意したというのに、50年も経てばこの有様だ。

私は…後悔している、“今”もその途中だ。

なあ、白墨。お前は今、どこに居るんだ？

お前はあの日、またいつかって…確かにそう言った。

でも…最近じゃあ、それも都合の良い夢だったんじゃないかと思うんだ。だって言っ

た証拠なんてどこにもない。そこに居たのは千年以上も昔の私と、お前だけだ。

千年だ…千年も経った。

…声も、思い出せないんだよ…本当に。

一人で旅をするようになってからも、お前の噂は度々聞いていた。

相手をバカにするように少しの甘味を盗んでいく…そんな変な妖怪として当時は有

名だった。

そこから少し時間が経って、段々と話を聞くことも少なくなつて……

そして、知ろうとしなくても入つてきた、灰色の妖怪の話は、知ろうとしなければ聞かなくなつた。

それでもまだ、聞くことはあつた。

そんな些細なことに私は密かに安心した。

遠いから噂が途切れたのかもしれない。前とは違つて、少し自制するようになって、噂が減つたのかもしれない。実際はどうか分からない。ただ、そう考えていた。

そんなある日、突然灰色の妖怪の噂は聞かなくなつた。

初めは特に気にしなかつた。来年頃になれば、また変な噂を聞くだろう……と。

毎日のように特定の噂を聞くなんて事は無い。人から人へ、数ヶ月と時間をかけて噂は回る。一年前の話が、さも昨日のことのように語られるのだから珍しくない。

だから私は呑気に待つた。

一年経つて、新しい話は聞かなくなつた。

三年経つて、もう神社に盗みを働くようなことはしなくなつたのかと、私は笑つた

五年経つて、退治屋連中も話題に挙げなくなつた。

七年経つて、妖怪達すら忘れていつて。

十年経って、灰色の妖怪を目の敵にしていた神様でさえも忘れていた。五十年経って、私は悟った。白墨はもう居ない。

どこで？誰に？どうやって死んだ？

退治したという話は聞く事がなかった。

いや、もしかしたら、昔のような素っ頓狂な生き方はやめて、ひっそり人目に付かない所で呑気に生きてるかもしれない。

……本当に？

あいつのあんな性格で？

毎度毎度、ご飯の為なんて言うくだらない理由で、命をかける様な奴だ。

そんな奴が、今更考え方を改めるのか？

…決して強者と言われる部類の妖怪では無かった。

だと言うのに、神やら大妖怪の縄張りなんかには散歩感覚で入っていつては、何かしらの甘味やらを奪って逃げてくる。

ありえない事だ。中級妖怪程度の妖力で…普通はとつくに死んでいる。

現に私は何度も死ぬ羽目になった。

でも…それでも…。

あいつは…いつ死んでもおかしくない様な生き方ばかりを好んでしていたのだ。

いつ居なくなっただのかも、最後にどこに居たのかも…正確な情報は何も知らない。
だが、あれから千年経った。千年が、経ったのだ。

恐らくは…もう……………

ああ…本当に……………本当に…

「—寒いなあ…」

博麗の巫女と灰

第四十四話 幼い巫女と灰

ちょうど美味しい朝ごはんを食べた後の事だった。

違和感を感じて服の中をまさぐると、ポロリと一枚の紙が落ちた。

紙には『お披露目会、直ぐ博麗神社に来るべし』とだけ。

直接呼んでくれればいいものを……こんな事してくるのは紫しかない……

……どうやって入れたんだ？ビビるからやめて欲しい。

特にすることもなく、諦めて腰を上げる。どうせろくでもないことだろう。

博麗神社へと続く長い階段は、掃除がされた様子もなく、落ち葉で足元が見えないような状況だった。

登りきって鳥居をくぐると、巫女服を纏った小さな少女が待っていた。

「よ、ようこそ博麗神社へ！」

昔見たな……この構図。

案の定、神社の縁側には紫が居た。お茶なんて啜って、おばちゃんみたいだ。

俺は不慣れな挨拶をする少女を無視して紫を見る。

「前のより弱い」

その言葉に反応してか、少女が顔を僅かに曇らせる。

紫はというと、わざとらしくため息をついては、やれやれといった具合に頭を振った。

馴染み深い、赤い巫女服の少女は適当に見てみても霊力も低く、弱い。

傍目から見てもわかるほどに弱い……というより若い。

少女……いや、幼女と言ってもいいか。

前回の巫女も若かったが、それでも十代前半の少女だった。それに対して今回の巫女は七歳にも満たない幼女だ。

歳の割には特別霊力が多いとかでも無い、いたって平凡だ。まあ、少し人より多だろうか……？

「はあ、幼い子相手なんだから言葉くらい選んで欲しいって言うのは……まあ、無理ね……」

紫の言葉を聞いて、幼い巫女はその表情を更に暗くした。

「め、面目ありません……」

申し訳なさそうに言うなあ……年齢よりも賢そうだ。よく見たら顔も少し見覚えがある……恐らくは人里の出身だろう。

紫は落ち込む巫女の肩に手を置いて微笑んだ。

「そう落ち込むのはやめなさい。あなたはまだ若いのだから…先代も初めはそんなものだったわよ」

「…？ 数倍違う。」

紫は何言ってるんだ？ 同じわけないだろう。

前の巫女も、前の前の巫女より弱かったが、それでもこの巫女より全然強かった。

「……………」

「しよ、精進します…」

笑顔のまま固まった紫に、泣きそうな顔の幼女。

次の瞬間、ペシンと頭を叩かれた。

…痛い。やっぱり紫は理不尽じゃないか……

「……最近話していなかったから忘れていたわ」

俺も忘れていた、大妖怪って基本理不尽だ。

「……少し早かったわね。私は白墨と話すことがあるから、貴女は先に神社で待っていてちょうだい」

「…はい」

その後、幼い巫女は二言ほど何かを伝えられると、しよんぼりと頭を下げた戻って行った。

「こほん…さつきも貴方が言っていたように、あの子はまだ幼く、そして弱いわ。…長い間、幻想郷の根幹を成す存在である、博麗の巫女が不在だったでしょう？博麗の巫女としての絶対の条件として、陰陽玉を扱えるものでなければならぬ…のだけど、今の時代に陰陽玉を扱える人間があの子しかいなかったのよ。だから、あの子はまだ幼いけれど、れっきとした博麗の巫女よ」

わからないな、陰陽玉つてのはランダムで使用者を決めているのだろうか？ずいぶん前からあるし、あれも変な道具だ。

でもまあ、なんでこんな若いのが巫女なんだと思っただが、あれしか居なかったのか。博麗の巫女が、深刻な人材不足じゃないか。

それも唯一の巫女も、辛うじて博麗の巫女としての資格を持つてるだけだ。あれじゃいくらなんでも…

「…弱すぎる。」

陰陽玉を使えるとは言っても、流石に弱すぎるだろう。

あんな様では簡単に喰われるぞ。

「そうね、せめて最低限の強さにはなつてもらう必要がある。いつもは先代の子が手取り足取りつて感じに教えてあげるのだけど…まあ、もう随分前から居ないから、私がかわりにしましょうか。最近じゃあ結界も安定しきつていて、時間も余っているしね」

妖怪が人間に妖怪退治の技を教えるのか……なんだかとても矛盾してないか？それ。まあ紫が暇そうにしていたのは事実だし、何でもいいが、問題はその後だ。

このパターンはもう何度か見た事ある……そう、大抵この後は……。

「あら、察しが良いじゃない。そうそうこつからが貴方にとつての本題ね。仕事の話しましょうか」

パチンと扇子を閉じては目を細める。

紫お得意の胡散臭いポーズだ。こういう時はろくなことを言い出さない。

「貴方にはね、博麗の巫女を敵視している妖怪達を、適当にあしらって欲しいのよ。前と同じように……ね、簡単でしょう？」

ほら来た、いつものだ。

ご丁寧に簡単という言葉強調してきやがった。

……だがな、前はそれでも仕方なくやったが、今回は違う。前の時は結界関連で紫も藍も手が回せない状況だったかもしれないが、今はそうじゃない。

「……藍がいる。」

結界も安定しており、現に紫も暇してる。

見える……見えるぞ……どの油揚げを買おうかと暇そうに頭を悩ませる狐の姿がな！

「うふふ、予想通り……言うと思ったわ。でもね、ほら、力関係ってあるでしょう？表立つ

て藍が出てきたら、敵対してくれる妖怪がいなくなっちゃうじゃない」

ちよつと待て：…なんだそれ、まるで敵対して欲しいかのような言い草だ。

「弱い巫女を守らなければならぬ、けど妖怪の存在意義を損なうような事もまた出来ない。妖怪が人を襲い、恐れられ、それを巫女が退治する。これは人と妖怪の大昔からの習わし。どちらかが相手に屈服するなんてあつていいはずがありませんもの。ある程度の反抗意識を残しつつ対処する。でもそれじゃあ藍だと都合が悪いでしょう？ それに比べて貴方なら適任ね」

ほらやつぱり適任だわ、と念を押すように紫は手を合わせて胡散臭い笑みを浮かべた。

…確かに、反抗する度に藍が出てくるようじゃあ誰も敵対しようとしないうだろう。

そして、それは事実上の巫女への降伏のようなものだ。戦って殺されるのはまた違う、戦う意思すら折られ、妖怪としての存在意義を失うのだ。

妖怪にとって、その状況は少し不味い：…らしい。俺にはよくわからないが…。

「……。」

「貴方なら敵対している妖怪の数から内情まで調べるのも容易でしょう？ 正直、情報収集能力に限れば、藍より貴方の方が一段上だと考えているわ：…これでも貴方以外を選ぶ理由が他にある？」

ニコニコ笑って、俺を見る。

反論があるならどうぞご自由に……とでも言わんばかりの余裕顔だ。

文句なら山ほどあるよ。

反論?……ある訳ないだろ。あつたとしてもどうせ言い負かされるのがオチだ。

どうせ、最初から選択権なんて無かつたんだよ……。



早朝の山登り。

道中で、かっぱの少女やぼつちな厄神とはたてに出会い、適当な挨拶だけして山を登る。

目的地は妖怪の山、その頂上……俺が過去に吹き飛ばした天狗の住処だ。

紫との嫌な会話の後、思い出したかのように持たされた手紙のお使い。

なんでも新しい巫女と、俺や紫の今後の対応についての詳細が書かれているらしい。

正直、スキマから天狗の家に、手紙をポイつとすれば良いじゃないかと思つたが、面

倒臭いしがらみがあるらしい。下っ端の俺に手紙を持たせたのもそれが理由だ……と言っていたが、正直紫なりの天狗達への嫌がらせ目的な気もする。

その推察の真偽はわからんが、天狗達は俺を見かけるたびに顔を真っ青にしては全力で逃げていく。

特に何かしてくる訳ではないが、やけに過剰な反応をするのでこつちもびつくりするのだ。

こんな扱いをされているのを見ると、陰で紫が笑っているように思えてならない。紫って性格悪いし。

まあそれでも仕事。しつかりやれば報酬……もといちよつと豪華なご飯が貰えるので良しとしよう。

ちなみに今回ののはマグロだ。海のない幻想郷でどうやってマグロを取っているかは謎だ。

これもいつものこと。

そう考えている間に天狗もあまり見なくなってきた。

目に映る建物もやたらと大きいし、こちら辺は大天狗達の住処だろうか？

厳かな建物に雄大な自然、妙な静けさも相まってなんだか神妙な雰囲気か漂っていた。

「生まれよ妖怪。そこで良い」

バサリとした翼の音と厳格な女の声が辺りに木霊する。

値踏みするような冷たい顔。天狗であろうことはわかるが、覚えは無い。灰の目ですら見たことはない。

「…紫からの手紙だ。天魔に渡すように言われている。」

八雲の印を見せつけるように手紙を取り出すと、その天狗は目を細め、馬鹿にするように鼻で笑う。

歓迎されていないのは一目瞭然だった。

「受取人の顔も知らずに暢気なものよ。危機感のない空っぽの頭じゃ生きていくのも可哀想そうだ。なあ八雲の人形よ」

「……」

…なるほど、この天狗が天魔だったか。…けど仕方がないじゃないか。天魔はここよりもっと上、山の頂上に住んでるって聞いていたし、近くの天狗で案内してくれそうなのはいいなかったし…

黙っていると、天魔はパツと表情を変え、今度はいたぶる様な笑みを浮かべた。

「そうそう、人里では人形に綿を詰めて作るのが流行っていると聞くが、人の考えることは面白い。人を模した人形に、わた^綿を詰めて作るなど…人間は今も昔も言葉遊びが得意

らしいな」

そう言つてケラケラと滑稽そうに天魔は笑う。……その笑い声に隠し切れぬ嫌悪感を滲ませて……

よくもまあコロコロと感情を入れ替える。話題もそうだ、意味の分からない話の転換には違和感を覚える。理解のできない感情を含んでいるのだからなおさら意図が掴めない。長きを生きた大妖怪ほど厄介なものはないということか。

さつさと手紙を渡して帰つてしまおう。

「……。紫からの、手紙だ。」

再度それだけ言い、手紙を渡そうと近づいた。

たつたそれだけ。だが、次の瞬間、突然身が固まるような重圧がのしかかる。

「腐臭を纏い、耳まで腐つたか？止まれと言つたぞ半端もの。これ以上その醜悪な身体で山を汚すな。臭い、ああ……本当に臭くて敵わない……鼻がひん曲がりそうだ」

わざとらしく鼻を抑え、しかし本気で軽蔑したような声で天魔は罵る。

「……なあ八雲の”人形”よ。お前はそこに何を詰めている？その臭い……腸の代わりに人の死骸でも詰めているのか？汚らわしい……一体何なのだ貴様は」

「……？人を食べたことは、ない。」

そう言うのと、天魔はさらに機嫌を悪くしたように眉間に皺をよせる。

そして投げやりに手を払った。

「……ああそうかい。……おぞましい。継ぎ接ぎ、貼り付けて……一生そうして人のふりでもしてるといい。……だがな、忘れるなよ。お前のその臭いは人のそれより余程おぞましく醜いものだ。その醜悪には人間らしきなど、欠片ほどもないと知れ」

怒気を孕み、嫌悪を込めて……そして吐き捨てるように言い放つ。それはよく知る天狗のものではない、感情を前面に出す……まるで鬼のような……

直後、突風が吹き、思わず目を瞑る。

ようやく風がやんだ時にはすでに天魔は消えており、また手の中にあつたはずの手紙も無くなっていた。



八雲の人形——白墨は少しの間だけ空を見つめ、そして風に溶けるように消えていった。

「帰ってしまったてよろしかったのでしょうか？」

私の劍幕にすっかりビビってしまった大天狗が、おずおずといった風に聞いてくる。

「あれも既に八雲の所有物だ。どうこうすることはできん」

「一体なぜそこまであの妖怪を……？」

大天狗が顔色を窺うように言葉を続ける。

「わからん」

「え？」

そんな大天狗の疑問を私はバツサリと切り捨てた。

「わからん……だからこそ恐ろしい。故も知らぬおぞましき……正体不明の恐ろしさとは、妖怪の最たるものだ。だがあそこまで自らを晒しておきながらも存在する、あの得体のしれなさは異常だぞ。ましてやそこに人の面影を感じるなど……もつてのほかだ。紫はなぜ気付かない……あんな矛盾の塊……早急に消すべきだ……」

恐怖の根源が「未知」だというのはよくある話だ。それが隠されているが故の未知なら良い。秘匿された情報をそのまま恐怖とする妖怪もいる。

恐ろしいのは……隠そうともせず、その素振りすら見せず、ただありのままの自然体でお存在する未知である。

理屈がわからず、何を源に生まれたのか……その起源も知りえない。

人によく似た性質を持つ、人ならざるナニカ。

「だが、それでも断言できる。あれは、良くないものだ。わからぬ恐怖なら、わかりやすい肉片にすれば良い。あれは…あんなものは、存在してはいけないのだから」

第四十五話 幻想郷経過報告—異常なし

初めはどうであつただろうか。もう昔の記憶はあまり覚えていない。母のことも父のことも、良く知らない。

ただ博麗の巫女となつた私が今日まであまり歪まず、こうして身も心も健康であつたことからそう悪い家庭ではなかつただろう。

そんなことも今ではあやふやだが、きつと良い家庭だつた……と思うことにしている。どつちかわからない時は自分の都合のいい方に解釈するべきだ……なんてどうでもよさそうに語っていた者を覚えているからだ。

いつも無口で怖い顔だが、時折脈絡もなく真理を突いたようなことを言う奴だつた。真理を突いたようなのは雰囲気だけで、実際に言葉を思い返すとふざけたことばかりだつたが、あの人の適当な生き様をそのまま表したようなその言葉には救われた……というには言いすぎだが、決して無視するような言葉でもない……時折思いだし、ほんの少しだけ心を軽くしてくれる、そんな言葉だ。

悩みに悩んだ末、そんな適当な言葉に身を委ねるとはなんとも呆れる話だが、だからこそ……こうして晴れやかな気持ちで約束出来る。

…他者の、それも大妖怪の心を人が推し量ろうだなんて滑稽な話だろうが、それでも私は、私にとって都合の良い方に解釈をした。傲慢で、我儘で…そういうのはいつだって妖怪の専売特許だった…が…なあ紫、偶にはそれも良いだろう？

どうせお前は言葉を信用するような奴じゃない。妖怪つてのは総じて頭が固いものだ。



巫女になってからの時間の流れは、とても早く、毎日が大変の一言だった。学ぶことは好きだ。けど好きなだけで飲み込みが早い方ではない。

だが紫様は毎日毎日覚える内容を増やしていった。まだ前日に言われた事もまともにできないのに、ぽんぽんと増やしていく。まだ前日に言われた事もまとも

掃除に洗濯、言葉遣い、話の長いおぼちゃんとの会話の切り方…最後のは紫様に実践してみたが、すごく怒られた。チョップが痛い…。

覚えることはまだまだある。

今度は主に巫女修行。霊力の使い方に御幣の振り方、御札の作り方に结界についての授業だったり：あとは空を飛んだり、神降ろし？なんかも教えられた。

その過程でやたらと狐の撫で方や猫のあやし方を教え込まれたりもした。巫女になるために最も重要なことらしい。

だが、どうやら私には才能がないらしい。

霊力というのがいまいちつかめない、それがわからないので空を飛ぶこともままならない。結界なんて何をしているのかちんぷんかんぷんだ。神降ろしに関しては才能が全くないと断言されてしまうありさま。

唯一褒められたのは御札の作り方くらいだった。筆を使うとはなんとも楽しいことで、使う度に手になじむ。ただ褒められたのは本当にそれだけ。

紫様はまだ幼いのだからと慰めの言葉をかけてくれているが、空を飛ぶことに苦戦する私を見ていた時のあの感情のない瞳が、まるで捨て時でも考えているようで恐ろしかった。

私はきつと根本から向いていないのだろう。

あの冷たい瞳を否定したくって、どうにか身体を動かす。しかしそれは空に溺れるように不格好で：もがく度に嫌な想像が頭をよぎった。その想像はやがて近い将来のようにも思えて来て：そうなるともう駄目だった。酷く汗をかき、フラフラと落ちてい

く。息は信じられないほど上がっており、結局その日は、初めて空を飛んだ時よりも上手くいかなかった。

どうにもできない事をどうかしようと焦ると大抵初めよりも悪くなる。

これも、もう何度も繰り返した失敗だった。

落ちた私を優しく捕まえる紫様の手と、その手と似ても似つかない値踏みするようなあの瞳。

幸いまだ捨てられてはいない。

冷たい顔……といえどもう一人、時々ふらりと神社に来る妖怪がいる。

紫様は普段ニコニコとしているのに対してその妖怪の顔はいつも変わらない無表情。冷たい瞳に固く閉ざされた口。

どこことなく近寄りが見たい雰囲気から感情を読み取るのは無理だと分かった。

ただ、時折じつと私を見ているときがある。何を考えているのかもわからないあの瞳で。

その瞳は私の失敗を思い起こさせる。たちまち私の体は硬直し、息が上がリ、汗がにじみ……そして私は空から落ちるような錯覚をするのだった。

その日から、その妖怪は私の中で怖い人になった。

「ああ、やつと新しい巫女が決まったんですね。巫女が不在の状況が随分と続きましたが、今地上はどうなっているんでしょうか？少し不安です」

不安…という言葉とは裏腹に、その少女はいつもと変わらぬように珈琲を飲んでた。

そうして先程まで読んでいた本を閉じ、来訪者に目を向ける。

「異常はない…ですか。相変わらず危機感が無いですね。何か問題があってもおかしくないでしょうに。長期間の巫女の不在に加えて新しい巫女は十にも満たない幼子…これで異常が起きない方が不思議です。実は貴方が知らないだけでも既に裏では事が起きてたり」

少女は片目を閉じてそう言った。

部屋は地底特有の暖かさ、一人の少女が話すだけの奇妙な空間となっていた。

少女が話しかけている男はというと、眉一つ動かすことなくただじつと少女の顔だけを見つめていた。そんな男の様子を気にも留めず、少女は再び口を開いた。

「それはあり得ない……ですか。ふむ……灰の目、でしたっけ。そういうえばそんなのありましたね。確かに幻想郷広しといえどもあなたほどの“目”を持つ者はそういないでしょうね。うん……？あー、はいはい言葉の綾でした。確かに幻想郷はそう広くはないですけれど……ああもうそういう話ではなく……」

そこまで言つて少女は頭を押さえ、そしてカップに手を付けた。

「……ふう。冷めちゃいましたよ。」

「まあそうですね、何はともあれ……やはり宝の持ち腐れ、と言う奴でしょうか。はあ……だつてそうでしよう？あなたは地上の状況を異常はないと断言しましたが、大有りじやないですか。長期間の巫女の不在に、10にも満たない幼子が代役……八雲紫が居ながらこの現状、そのことが大問題なんですよ。……ほーらやつぱり、貴方は前提が機能してない」

少女が呆れた顔で首を振る。男は依然として動かない。

「異常を異常と感知できなくなるのは生きていくうえで最も忌むべき大事です。特に貴方にとっては……」

何も変わらない会話の中で、しかし突然男は顔を横に向けた。何もない空間を……まるで親の敵にでもあつたように。

「ああ……自分の危機となると反応が早いですね。確かにそろそろ約束の時間でした。そ

の察知能力を地上でも遺憾なく發揮してくれることを祈っていますよ。じやないと最悪私にも飛び火しそうですね。ああ、あと本ありがとうございました。お陰で暫くは……もう行きましたか」

少女が言い終わる前に男の体は崩れるように消えていった。ぼんやりと消えた後に目をやっている、ガチャリと扉が開けられ、気分良く一人の妖怪が入ってきた。

「さとりさま、紅茶持つてきま……あれ？」

お盆に紅茶を乗せた赤毛の妖怪は、部屋に一人しかいないので、不思議そうに首を傾げた。

「ごめんなさい、お燐。頼んでおいて悪いけど、そろそろ勇儀さんが来る時間だから下げてもらえる？」

「……う……ああ……さとりさまは紅茶飲みませんでしたね！」

さとりは自らのペットの考えることに呆れ、ため息をついた。

「……お燐、何度も言ってるけど白墨さんとはそこまで仲が良いわけではないですよ。大体来るのもあつちの気分次第で別段会う約束をしているわけでもありません」

もう何度目かになる訂正と、それでも納得していなさそうなお燐の心の声に若干の諦めを感じていると、再びお燐が不思議そうに口を開く。

「うーん？でもさとりさま、今日なんて来てくれることを見越して紅茶を頼んだんじや

ないんですか？」

その一言にピタリと止まる。

「……慣れとは恐ろしい。私としたことが……やはり異常と認知できなくなるのが最も忌むべきです。今凄くぞわつとしました」

そう言い、顔を青くしてぶるりと震えた。

「……貸して下さい。その紅茶は私が貰います」

その言葉に今度はお憐が心配するように顔色を変える。

「だ、大丈夫ですかさとりさま？ トイレが近く……」

「漏らしませんよ」

第四十六話 古い友人

テーブルを埋め尽くさんとするほどの多くのご飯。

桃髪の少女はそれらをえっさほいさと口に入れ、そしてその度に喜色満面の笑みを浮かべる。

みるみるうちに空になっていくお皿……それを隣で見ていた紫は呆れた様子で苦笑いした。

紫が驚いたりしないのは、これがこの少女の食事時においては特別おかしなことではないと知っているからである。

「紫は食べなくていいの？妖夢の手料理は絶品よ？」

やや引き気味に見ていた紫は気付き、桃髪の少女は楽しそうに聞いた。

「その速さで空になっていくお皿を見たら食欲もなくなるわ……見てるこつちのお腹が苦しむ」

「あら、羨ましい」

その能天気な物言いに、紫はまた一つ、ため息をついた。

ふと外の庭へと目をやる、庭に植えられた桜の木は、ただ一つを除いて見事な桜の花

を咲かせており、季節外れな桜の花びらが、ゆらゆらと静かに通り過ぎた。

冷たく、ひんやりとした空気に心地の良い静けさ。半端に開いたふすまから吹き抜ける風が肌を滑る。

暗い空とそれを感じさせないほどの明るい光。夜の太陽が爛々と辺りを照らしていた。

深く、沈んでしまいそうな…そんなごく普通の夜の魅力。

それがこの少し異質なはずの空間を自然と馴染ませていた。

「…何度見ても変わらさず綺麗ね」

「そうねえ…でも、確かに変わっているのよ。だって今の庭師は妖夢だもの」

その返しに紫は諦めたように薄い笑みを浮かべた。

「変化だってそう悪いものじゃないわ。どう変わったって、案外楽しいもの」

「今のあなたみたいに？」

桃髪頭に付いた三角巾を見て紫は言う。

「う〜ん、楽しむためにはもう少し必要ねえ…具体的に言えばデザートとか」

桃髪頭の少女は冗談めかしてそう言うと、くるりと向き直り、閉じているふすまへと体を向ける。

それと同時に、銀色の髪に黒いリボンを纏った少女がふすまを開けた。

「な、何ですか幽々子様？」

部屋に入るなり期待のこもった目で見つめられ、銀髪の少女、妖夢は委縮したように尋ねる。

しかし、そんな従者の表情を無視して、幽々子の視線は妖夢の手元へと滑っていく。そして、お茶の一つが乗っただけのお盆を見て、小さくため息をつくのだった。

その仕草に、妖夢は怪訝そうに首を傾げた。

「…？つてうわっ!?八雲紫!?い、いつのまに！」

主のため息の理由も知らず、妖夢は遅れて八雲紫の存在に気が付く。

「あーあー、なんだか喉が渴いたわ。お茶の一つでも欲しいわねえ」

未だに状況が分からず、右往左往している妖夢を紫はクスクスと笑い、そして芝居がかったように声を変えた。

「ツハ!?お茶!?いやっそれよりなんで…」

なぜか部屋にいる八雲紫に平然としている自分の主…混乱しきった妖夢に幽々子は落胆したように首を振った。

「もう、妖夢ったら気が利かない…それじゃあまだまだ半人前よ。ごめんなさいね、紫さん。恥ずかしいところを見せちゃって」

「つえ!？」

「いえいえそんな、可愛らしい庭師さんですこと。おしやべりでもして気長に待ちましよう？」

「ええ!？」

「ほら妖夢、紫さんもこう言ってくれてるのだからお願いね。あつあと私のお饅頭もわすれずに」

「え!?!つあ!?!わ、わかりました! 饅頭と、ゆ、紫さんのお茶も今すぐに!」

そう言うのと、妖夢は慌てた様子で姿勢を正しては、台所へと駆け出した。：お茶の乗ったお盆を持った状態で。

ドタドタと音を鳴らして走る妖夢の背に目を向け、そしてその姿が完全に見えなくなつてから、二人は吹き出すように笑い始めた。

「うふふ…ふふつ…聞いた? 妖夢ったら…ふふつ紫さん…紫さんですつて…んふふふ」
耐えきれないといった様子で幽々子が言う。

「いいじゃない、ふふふ…いじりがいがつて、可愛らしくて…いやあ初々しいわねえ」
「私としてはもう少し柔軟になつてくれたら安心なんだけどねえ…」

「いやいや、あれくらい可愛い方が丁度いいのよ。藍なんて、昔はゆかり様、ゆかり様つて来てくれたのに、今じゃ、布団干したいので早く起きて下さい。つてめんどくさそうに言ってくるのよ」

「そうかしらねえ……でも、初々しいと言えばあなたのところにも新しい子が来たんでしよう?」

変わらず、間延びしたような声で尋ねると、紫は苦いものでも嘔んだかのように表情を歪ませた。

「あれは最悪よ。凶々しいと失礼の具現化みたいなものだもの。一つの問題を解決するたびに二つの問題を持つてくる。それを悪いと思つていなさそうなのもたちが悪い」

その紫の物言いに、おかしなものでも見たかのように口元を緩ませる。

「ふふっそれは大変ね、でもそれつて良い事?それとも悪い事かしら?」

「……幻想郷にとつて良い事で、私としては悪い事よ」

思いがけない問いに、紫は少し間をおいてからそう答えた。紫自身、白墨の普段の行動を考えてみて、ぴったりの答えだと思った。

しかし、そんな紫の答えをわかつていたかのように幽々子はうなづく。

「なら良い事ね。幻想郷にとつての良い事は、紫にとつての良い事でしょう?」

それは八雲紫にとつての絶対であり、だからこそなんだかんだと愚痴を吐いても白墨を手元に置いているのだということを幽々子は知っていた。

それをなんとも複雑そうな顔で聞いている紫に、幽々子は満足気に顔を緩ませて言葉を続ける。

「紫の選択は大抵紫を苦しめるけど、それが悪い事だったことはそうそうないわ」
「納得しないわ……！それじゃあ私が頑張れば頑張るほど苦勞が増えていくじゃない……！」

紫の中で、それはいつかの勇儀が話した自分の将来と重なって聞こえた。

「まあまあ、氣樂に生きましよう？先の苦勞より楽しい今。そろそろお饅頭も来る頃だろうし」

「じよ、冗談じゃないわ……！私は先の苦勞を今清算するのよ……！」

勇儀に幽々子、勘のいい二人に同じような未來を宣告された紫は顔をぶるりと青くさせ、そしてその勢いのままスキマを作ってはの中へと消えていった。

突然出て行ってしまった紫に驚いたりしないのは、それがこの友人との交流においては特別おかしなことではないと知っているからである。

しかし、それでも別れの挨拶くらいしていけばいいのにと幽々子はため息をつく。

幽々子からしてみれば、紫は何に対しても急ぎ過ぎだった。

少し広くなった部屋に、また一層冷たい冷気がふすまを縫ってくる。

外に目をやれば、あの桜の木があった。

紫がここを訪れると、必ず見ていたあの桜の木。何か後ろめたい事でもあるかのようににちらりと見ては、とても寂しそうな顔をして目を背け、そして何事もなかったように

それを戻す。

幽々子には、あの花を付けない桜の木が何なのかわからなかった。紫のあの顔の意味も、何も分からない。

しかし、そんな友人の表情が、ずっと頭から離れなかった。不意に見せるあの寂しそうな顔を……しかしそれを隠そうとしている紫に聞こうとは思えなかったのだ。

「た、ただいま持つてきました……ってあれ……」

緊張した声と共にふすまが開かれる。

妖夢はさつきまでそこにいたはずの紫を探すように二度三度、首を回し、そして普段とは違った面持ちで外を眺めている幽々子に気付いた。

「ゆ、幽々子様……？」

「……寂しい桜ね」

消え入りそうな声に妖夢は身を固くする。

「一際大きいのに、ただの一つの花も付けないなんて。どんなに大きな幹を持つとも、この子の美しさは誰も知らない。この子自身にだって、きつとわからない。でも世界にとってはそのんな今が正常なのね」

「……？」

幽々子はそつと目を閉じて、そして瞼の奥で花を咲かせぬその桜に友人を重ねて視る

の
だ
っ
た。
。

第四十七話 頭痛が痛い紫様

巫女の代替わりから一年が経った。

幸い未だ幻想郷内で特筆するような問題は起こっていない。白墨の存在が抑止力となっているおかげで今は安定している。

しかし巫女の方はというと、そう上手くいかなかった。

当初見た通り、今代の巫女は基礎能力と成長速度が歴代に比べても著しく低い。

凡人と言っても良いただの幼子が博麗の巫女の神器でもある陰陽玉を扱えるのは奇跡と言ってもよかった。いや、贅沢は言うまい。博麗の巫女になりうる存在がいただけでも幸運だったのだ。

長年巫女が不在だった幻想郷にとって、今この子を失えばそれこそこの楽園の基盤が崩れる。これまで以上にこの巫女は大事に扱わなければならないのだ。

そのためにも一刻も早く一人前の巫女としての力を身につけさせる必要がある……のだが、そう考えるとやはりこの凡庸性には齒がゆさを感じずにはいられない。

前の代の子に、博麗の技のノウハウでも教えてもらえば良かったかもしれない。

まあ会えたとしても恨み言を言われるだけだろうが……

博麗大結果が張られるまでは結界の整備に追われ、その後は巫女の成長を急ぎ……。時間に余裕を作るために式神を手に入れたというのに、なぜ私はこうも時間に追われる日々を過ごしているのか甚だ疑問に思う。

「…はあ、私も気分転換に美味しいものでも食べてゆつくりしたいわ…」

そんなボヤキをこつそり吐いて、ふすまの方へと意識を向ける。

ふすま越しに小さな影がひよつこり表れ、そしておずおずといった様子でふすまが開かれた。

「あ、あの…言われていた御札、作り終わりました」

幼い巫女はそう言い、やや怯えた表情で御札を渡してくる。

「見させてもらおうわ」

協力的とはいえ仮にも私は大妖怪。人の…それも幼い身からしたらそれはそれは恐ろしく映るだろう。

実際私も深く温かみを持って接することはしない。

人間が妖怪を恐れることこそ正常であり、その心が妖怪側に傾くなどあつてはならない。

しかし彼女は博麗の巫女だ。妖怪を畏れ、しかし妖怪に恐れるな…というのはまだ難しいようだ。

「あら、良くできているわね、字も達筆だわ。元来、文字や言葉には人の想いや力が宿る。今作っているお札もそう。何枚も作るからと手を抜くと、いざという時に痛い目を見るものよ。今後このまま丁寧に作りなさい」

実際渡された御札の出来は見事なもので、妖力の込め方さえ直せば実践でも十分使えるものだった。

この年齢にしては十分すぎるほどの達筆。今のところ最も才能のあることかもしれない。

「は、はい。ありがとうございます」

「御札作りは得意？」

「どうでしょう……ただ筆を使ってものを書くというのは……楽しいです」

「そう悲観することはないわよ。好きこそ物の上手なれ、それは伸ばすべき長所よ。その調子で頑張りなさい」

そう言うと、幼い巫女はやや照れ臭そうに小さく頷いた。

他のことも御札作りと同じくらい上達してくれたら安心なのだが……まあそう上手くいくものでもないだろう。焦らず急いで進めなければ。

そう考えていると、どこからともかく、ぐうぐうと気の抜けるような音が鳴った。

「きよ、今日はありがとうございます！夕食の準備をします！」

思わず目を丸くして見ると、幼い巫女は顔を赤く染め、すぐさま逃げるように台所へと消えていった。

そんな後ろ姿を見て小さく笑う。空はもう夕暮れ時である。

私もお暇するでしょう。そろそろ藍が夕食の支度を始める頃合いだ。

静かにスキマを開き、体を入れようとした途端、あっ!?!という幼い叫び声が木霊した。

スキマを使い、こっそり台所の様子を窺ってみる。

そこには空っぽの戸棚を見て、ため息を吐く幼い巫女の姿があった。どうやら晩御飯用の食材を切らしていたらしい。

人里の店なんかはもう閉まっている頃だろう。

こういうドジなところはなんともこの子らしいが、米すらないというのは問題だ。これで明日の修行に影響が出て困る。

仕方あるまい。やれやれと首を振り、私はおもむろにスキマに手を突っ込んだ。



座布団の上にちよこんと座り、やや下手くそに箸を動かす。

幼い巫女はちやぶ台に載る色とりどりのおかずに夢中だった。

そんな様子を横目でちらちらと見ていた私は安心したようにほっと息をついては味噌汁に手を付ける。

(塩味…よし！久々に作ったけど変わらず美味しい…流石私！結界の成立後はずっと藍に作ってもらってたから不安だったけど良かったわ…)

にしても…と再び横を見る。

(この子の食事姿を見るのは初めてだけど…これはテーブルマナーも教える必要がありそうね。博麗の巫女が箸も使えないようじゃ笑われるわ)

(でも…)

「こ、こんないろんなのは初めてです…!」

「そう」

せわしなく箸を動かし、口元を汚す、そんな姿を見るとその気もそげてくる。

もう夕食には遅い時間、準備するのが遅かったので仕方ないが、外はもう真つ暗だ。だというのに珍しい人影がまっすぐ博麗神社に向かつて来ている。

時間と言えば、ちようど“仕事”を終わらせてきたところだろうが。

だがそれにしても彼が博麗神社に来ることなど滅多にない。最後に来た時なんて私

が呼んだ時くらいだろうか？

そんな考え事をしてるうちにその人影が入ってくる。

「全く珍しい事もあるのね……こんな夜更けにいったい何の用かしら？」

幼い巫女は私が声をかけた方を向き、驚いたように箸を落とす。

そんなことは気にせず、彼……白墨はいつも通りの顔で、しかし珍しく口を開いた。

「報告。変わったから。」

相変わらず色々欠けた言葉のチョイスに頭を悩ませる。

報告？変わった？

報告は恐らく今現在白墨に対処を任せている妖怪たちのことについての報告……という意味だろう。

変わった……というのはなんだ？ 対処を任せている妖怪達の何かが変わったということか。それとももつと別の意味？

そもそも報告は大抵藍にしているでしょうに今日に限ってなぜわざわざ私に……？

緊急性の高い異変が起きているなら藍が先に気付くだろうし……

ため息を吐いては頭を振る。改めて白墨の顔を見ても、やはりいつもと一ミリたりとも変わらぬ無表情。

だめだわさっぱりわからない。長いこと一緒にいるがこういう時何を考えているの

か分った試しがない。

けどこれでもまだ喋っただけいつもよりはマシな方だ。大抵は無言で首を軽く振る程度。それに比べれば幾分もマシ。マシなはずだ…。

「…ふう。それで？変わったっていったい何のこと？」

無意味な思考を止めて、素直に聞く。意外なことに白墨はまた喋った。

「日に日に相手をする数が増えている」

数が増えてきた…まあそんなに不思議なことではない。藍なんかと違って白墨は程よく毎度瀕死になっているので、次なら殺せる…とでも思われているんじゃないだろうか。大した問題でもないしいったい何が…いやまた言葉足らずな白墨のことだから真意が分かりにくいだけかもしれない。

「ふうん…数が増えている…それで？」

「…？」

今度の問いかけに対して、白墨は首をコテンと傾けた。

なんだかむずむずとした会話のかみ合わなさを感じる。いやかみ合ったことなどないが。

しばらく双方無言の時間が続き、そして思い出したように白墨が口を開いた。

「…紫、箸が一膳、足りないが…」

「…うん？んん？」

ちやぶ台の上を見渡して、おかしな奴がおかしなことを言い出した。

「箸の数…合っているわよ」

「合っているのか…？」

「ええ、合っているわ」

食い気味で答えた。

棒立ちの白墨が、人差し指でゆっくりと自分を指す。

「もともと二人分の食事しか作ってないわよ？」

「なんだと…!？」

「ヒッ！」

ほんの少し目を開き、心底驚いたといった様子で白墨が言う。

巫女は白墨が怖いのか怯えた様子で縮こまった。

「ないのか…。」

「いや、無いでしょ」

白墨はのつそりとした動作でちやぶ台の上を見渡し、そして諦めたように二度、三度と首を振った。

「ひっあつ…た、食べないでください…」

「ちよ、ちよつと」

何を勘違いしたのか、幼い巫女は四つん這いになりながら私の後ろへと身を隠す。白墨はパツと見ても分かるほどしょんぼりと肩を落としている。

私はそんな光景に頭が痛くなってきた。

「ああ…情けない。巫女が妖怪を恐れて妖怪に縋りつくなんて…。ああもう貴方もそんなところに隠れてないで出てきなさい。幼いとはいえ博麗の巫女よ」

巫女の両脇に手を入れてすくつと持ち上げる。

まだまだ手足の短い幼い巫女は、ばたばた、ぶらぶらと抵抗するが、地に足もつかない体では無抵抗のようなものだった。

「うっ…。や、やめてください。こわいです、怖いです紫様。た、食べられてしまいます…！」

「食べない、食べないわよ。はあ…ねえ食べないでしょう？」

過剰に怖がる様子に少々呆れつつ白墨に問いかける。

「…人は、食わん。」

「こつちはこつちでまたずいぶんとテンションが低い。」

「ほら、食べないって」

「い、いま人はって言いました。ひ、人以外は食べるに違いありません。怖いです、怖い

です紫様」

「あーもう落ち着きなさい、落ち着きなさいって。あなたも今さつき人以外のものを食べたばつかでしように。ああ本当に、頭が痛い」

「こ、怖いものは怖いです。怖いのです」

顔を真つ青にした幼い巫女は声を震わせてそんなことを言う。

いくらなんでも怖がり過ぎだ……とため息をつく。

確かに白墨の顔は無機質で冷たいが、外見だけで言えばほとんど人間、そうグロテスクな見た目ではない。

「はあ……あなたこの子に何かしたの？」

「……。」

質問には答えない。もう関係ないと言わんばかりに明後日の方を眺めて無視だ。

いつも通り……少し違うと言えばその肩がいつもより少しだけ下がっているというこ
とだけ。

……落ち込んでいるのか？ いや、まさか……と思うが感情表現に乏しい白墨にしては珍
しい。

もしかしてこの子に嫌われたから……？ いやいや、それこそまさか……。いやでも村の子
供達から泥を投げつけられても特に怒るそぶりも見せていなかったし、実は子供好き

の……?

「いやいや流石に……!流石に……あら?」

ふと周りを見て、広くなった空間に気付く。

「白墨は……?あ、あの子帰ったの!?!ええ!?!結局何しに来たのよ!?!報告はどうしたのよ!?!き、嫌われたのがそんなにシヨックだったの……?何なのよ一体……これじゃあ夕食確認しに来ただけじゃない……!」

目を離すとすぐ消えているところは変わらないが、いくらなんでも突然すぎる。

そうやってさつきまで白墨がいた空間を眺め、そして手元の違和感に気付く。

「うっ……うっ……」

さつきまで青い顔をしていた幼い巫女は目じりに涙を溜め、唇をわずかに震わせていた。

「えっ!?!な、泣くほどのなの!?!ちよっ漏らしたりはしてないわよね!?!」

持ち上げた状態の巫女を下ろすわけにもいかずに、シトシトと流れる涙が手にかか

る。私はもはやどうすることもできず、ただ顔を引きつらせて天を仰ぐのだった。

巫女の成長までの道のりは長い。



「おかしい……今晚の夕食の食材がない……たしかにお昼に買ったはずなのに……」

主と自分の二人分の食材がまるつきり全て無くなっている。

八雲藍は空つぽの戸棚を見て目を細める。

「紫様は……いやあの人が自分で料理するわけないか……。となると……」

頭の中に一人の男を思い浮かべ、そして舌打ちをする。

「白墨め……小遣いを要求するだけに留まらずとうとう盗みまでやり始めたか……ふっふっふ……少し甘く見てやったらこれか」

藍は空つぽの戸棚の前に、こぶしを強く握りしめた。怒りを胸に……いつかぶん殴つてやろうと決意を込めて。

第四十八話 博麗の巫女との共同作業

自分には力というものがなかった。

空を飛ぶのもままならず、少ない霊力をまともに扱うこともできない。

結界の構築すらまともにできず、相手に攻撃するのも自分が攻撃されることも慣れていない。

自分には巫女としての才能が……いや戦いの才能が大きく欠落していた。

どこまでいっても平凡で、けれど今いる立場は特別だった。

頼れる大人はいない。父と母はいたかどうかもわからない。

いつも自分を見てくれる紫様は怖く、その式神だという灰色の男はもつともつと恐ろしかった。

紫様は私の失敗を咎めることをしなかった。上手にできれば褒めてくれ、失敗すれば改善点を挙げて見てくれる。

ただそれでもなんとなくわかる。言葉で言われなくても、顔に出ていなくても、雰囲気ですら察してしまう。

上手にできた、と振り返った時、紫様はいつもと変わらない笑みでよくできてるわ、な

んで褒めてくれて：でもそれがただのお世辞である事なんか分かりきっていて：誇ら
しげな感情なんてちつとも沸いてこなくて：焦りだけが胸中に広がる。

どこが悪かったのか、何がいけなかったのかはわからない。わかることはただ一つ、
また私は紫様の期待に応えられなかったということだけ。

上手くできたと思つたことですら紫様の期待するものではないのだ：と。

疎外感が増えていく一方で、努力はどれだけでも平凡の域を出ない。

生まれる時代が違ければ：そうすればきつと自分なんかよりも才能のある者になつ
て：いや、せめて自分に才能さえあれば：

現状を呪い、立場を恨み：でもそれだけだ。自分を見つけ、ここまで連れてきた紫様
を恨むことはできなかつた。どこまでいっても私は弱いのだ。

この理不尽に対する怒りなど、所詮は恐怖で霞んでしまう。ただ、怖い。あの微笑み
の裏で私のことをどう思っているのか：考えたくもなかつた。

自分は特別な存在でなければいけないくて、でも私はどこまでいっても平凡で。
毎日泣きそうだった。

きつと私はあの人のために息をつかれただけでも壊れてしまう。それは命が危ないか
らだとか：そういう恐怖ではなく、私が常日頃感じている孤独感による恐怖のせいだ。

一人で住むにはあまりに広い神社の一室、そこで布団に包まる私はひどく惨めだった

だろう。

そんな私も三年が経つ頃には現状や立場にグチグチいうのも飽きて来て、その矛先を新たに陰陽玉へと変えた。そうだ、元を辿せば陰陽玉だ、と。

未だに私は平凡で、紫様も怖くて、でもそれを仕方ないとも思うようになってきたころだ。

あんな玉ところが私を使用者なんかを決めたのだ。それが悪い。それさえなければここまで自分のことを嫌いになることすらなかったのに。

一度そう考えると、ふつつつとした怒りが沸いてきて私は布団を？いで走り出した。

陰陽玉は初めて紫様と会ったときに一度だけ見てそれつきりだったが、なんとなくどこに置いてあるのか知っていた。

一度も入ったことのなかった先代の巫女様の部屋。そのふすまに手をかけて…。

そこで私は一度を手を止め、深く息を吸ってからふすまをそーっと動かした。

何十年も人がいなかった部屋にしては小綺麗で纏まっており、その奥には質素な台座の上に置かれた陰陽玉が月明かりに照らされていた。

そこで私の胸の中にあつたふつつつとした感情は萎えていき、緊迫した空気が辺りに広がった。

怒られるかもしれない。冷静になった頭でそう考えた。

それでも足を一步前に踏み出したのは、いつもよりも意固地になっていたからだ。ゆっくりゆっくりと：同じ神社の一室なのにどこか神秘的なようにも感じる。

陰陽玉の前で止まり、そして恐る恐ると手を伸ばした。

触れようとした瞬間、わずかに陰陽玉が震え、手が止まる。その震えはさつきまで忌々しく感じていた博麗の巫女としての確かなつながり…。

唾を飲み、私は意を決して：触れた。

予想に反してわずかに暖かく、心地良い。

そして直後に湧き上がる全能感。

その瞬間、なぜ自分が博麗の巫女に選ばれたのかをようやく理解した。ちゃんと望まれて博麗の巫女になったのだと、理解したのだ。

その夜から、私は紫様が怖くなくなった。



「よ、妖怪退治ですか？」

「ええ、あなたもここに来てずいぶん経つし、そろそろ博麗の巫女として本格的に動いてもらおうわ」

そう告げると、彼女は緊張したように姿勢を正した。

巫女としていつかはやらなければいけないとは思っていたのだろう。しかし、それでも自信がないのか、声は小さかった。

「あなたもいい加減博麗の巫女として経験しておく必要があるわ」

「で、ですが、紫様との修行でも私はポロポロでした…」

「そりゃあポロポロになるようにやってるもの。相手が鬼じゃあるまいし、今のあなたなら木つ端妖怪程度、十分倒せるわよ。安心しなさい」

自信のなさは元からで、そして彼女の決して少なくないここでの経験がそれを裏付けてしまっている。

そして、だからこそその実践投入だ。まずは経験を…そうして少しずつ慣らしていく。

「でもまあ、不安なものも分かるわ、あなたも初めてだしね。だから…助っ人を呼んだわよ」

「…助っ人？」

「ええ、もう何十年もこの仕事を続けている子よ。あなたも何度か顔を合わせたことがあるはず…ほら、来て頂戴——」



月の光が良く映える夜、俺と巫女はその時を待っていた。

「ひっあ、よっよろしくお願いします…」

「……。」

目を左右に揺らし、怯えたような声が絞り出される。

それを聞いて思わずため息を付きたくなった。

足手纏いだ、どう見ても。

紫に頼まれて…というより半強制的にやっているが、もう嫌な予感しかない。

最初に紫からこの話を持ってこられた時に厄介ごとだと思っただ、どうやら想像以上らしい。

もちろん全力で嫌がったし、俺が適任ではない理由なんかも必死に伝えたが意味はない。

『…足手纏い。仕事が増える。』

『酷い言い草ねえ…将来のあなたの仕事を減らすためでもあるのよ?』

『…紫の方が適任。』

『私がやるんじや緊張感が出ないでしょう?安全が確約された戦いじや意味ないわ』

『……』

もう口論でどうにかしようとするのは諦めた。

俺が嫌がってもどうにかなる話じやないらしい。めんどくさいがやるしかないんだろ。

まあ、嫌がっているのは俺だけじやない。

最初に紫に呼ばれて顔を出した時の絶望したような巫女の顔は、最近じやあそうそう見れないものだろう。

俺の顔を見ただけであんな顔をするなんて100年近く前の人里の人間達くらいだ。

本当にどうしたものか…。

もう何度目かになるため息をつき、巫女から目を離して森の方を向く。もとより俺から教えられることなんかないし、話すだけ無駄だ。

紫の方も俺が何か教えたりというのには期待していないようだった。ただ経験を積ませるといのが目的らしい。

互いに無言の時間がしばらく続いたのち、始まった。

ざわめく森にいくつもの足音、経験のない巫女もそれが分かったらしく、顔を強張らせて森を見る。

森の奥から姿を現すのは何十もの妖怪達。すべてが雑兵、数だけ合わせた弱小妖怪の寄せ集め。

俺からしたら見慣れた光景で、向こうも俺がいることを予想していたかのように進んでくる。

それはもはや俺と向こうの妖怪たちにとって当たり前のこと。違いがあるとすれば俺の横にいる紅白姿の巫女だけだ。

「相も変わらずそちら側に立つか、腰抜けめ。今日こそ再生もできないほどに壊してやるぞ」

「……………」

ある程度進んだところで足を止め、そんなことを言ってくる。

もちろん俺は何も答えず、妖怪達もそれを気にした様子もない。もう何度も繰り返してきたこと。

どちらも慣れた様子で、しかし巫女だけは少し気圧されたように後ずさりした。

弱いとはいえさすがにこんなに多くの数だとは思わなかったのだろう。

そんな緊張しなくても雑魚の寄せ集めなだけだな。

ほら今だって槍やらなんやら武器なんか持ち出して、いかにも弱小妖怪だ。

「あ、あのど、どうすれば……」

救いを求めるような顔で聞いてくる。

……仕方ない、本位じゃないとはいえ俺が先輩でこの巫女は新人だ。

俺はまっすぐと妖怪たちの大群を指さす。

「……あれ、全部倒す」

言葉と同時に大群目掛けて走り出す、待つてました言わんばかりに妖怪側も駆け出してくる。俺を殺したくて仕方ないって感じだ。

「えっ……えっ?」

慌てて巫女が後を追いかける。

先制攻撃はこちらから。俺は走りながらそれぞれ両手に結界弾、妖力弾を生み出し適当に投げ飛ばす。

あの数だ、わざわざ狙わなくても誰かに当たるだろう。

最前線にいた妖怪たちのうち何体かが沈み、後ろの妖怪たちはそれを踏み越え前へ出る。

妖力弾を投げては誰かが倒れ、それを気にせず向かってくる。後ろでは巫女が俺と同じように靈力のこもった光の玉を打ち込んでいた。

距離が縮まるまでは何度か同じことを繰り返し、いくらか数の減った妖怪たちは武器を掲げて突撃してくる。

「困んで殺せ！」

これでさつきと同じように安全に攻撃はできない。誰かに攻撃をすれば他の妖怪から反撃をもらおう。

もう目前にまで迫った妖怪達を相手に攻撃が当たるか当たらないかのギリギリを維持して動き回る。

しかしそれでも何度か槍が掠り、赤い血を飛ばした。

弱小とは馬鹿にしたものの、武器を持ち、リーチを得た妖怪たちの相手は少し厄介だ。

「あ、あのっ！これ後ろに引きながら攻撃した方が良かったんじゃ……！」

後ろで巫女が焦ったように声を上げる。

ちらりと見て見ると、顔を右へ左へとせわしなく動かし、ふわふわと動きながらなんとか攻撃を避ける巫女の姿があった。

言っていることは理解できるが、その戦法だと妖怪たちが逃げた時に面倒だし何より時間もかかる。どうせこいつら以外にもいっぱいいるんだ、今日出てきた奴らは逃がさない。全員殺す。

俺は巫女を無視して森の中を駆け回る。

まあ巫女の戦い方には危うさがあるが見ている感じ案外平気そうだし、大丈夫だろう。

走り回って、走り回って……そして、全員の妖怪の近くを通り過ぎたのを確認してからくるりと踵を返して巫女の近くまで退こうとする。

巫女も俺の存在に気付いたのか、余裕のない表情の巫女と目が合う。

そして余裕のなかった巫女の顔が、俺を見つけて気が抜けたように脱力する。

その瞬間、俺は足に妖力を込めて全速力で巫女に近付き……そしてそのまま巫女を蹴り飛ばした。

突然の出来事に巫女は驚く間もなく吹き飛ばされる。

それと同時に俺の身体がガクンと重くなった。

「……は、白墨さんっ!? お、おなっお腹が……」

起き上がった巫女が顔を真っ青にして口をパクパクとさせる。

下を見て見れば、自分の腹から生える一本の槍が目映った。

最悪だ、本当に。だから嫌だったのに。

遅れて口から咳き込むようにして真っ赤な血の塊が出る。

それを見て、さらに慌てた巫女は自分の周りにいた妖怪を遠ざけて膝をつく俺に駆け寄ってくる。

「すつすいません…わた、私のせいで…血が…ど、どうすれば…!」
「抜いて。」

泣きそうな顔になっている巫女の言葉を遮って言う。

「……………え?」

俺の言葉に巫女が固まった。

内臓系の損傷は治ったけど、肝心の槍が突き刺さったままだ。

妖力で身体強化して槍を引つ張るが、みぞおちを貫通されている状況では力が入らず
上手く抜けない。

「早く。」

戸惑う巫女に苛立ちながらも、急かすように言う。

覚悟を決めたように巫女は震える手で血で汚れた槍を掴もうとして……。

「……………遅い。」

俺は再び巫女を突き飛ばす。

当然…というべきか、巫女を突き飛ばすと同時に俺は横から来た妖力弾に被弾し、ゴ
ロゴロと飛ばされては木に衝突した。直前、巫女の叫ぶような声が聞こえた気もしたが
知らん。

ちくしょう二回目だぞ。いってえ…。

敵に囲まれている状況でよくそんなにちんたらしていられるものだ。

特に今は片方が深手を負っているんだ。相手からすれば絶好の機会。時間をかければ攻撃されるなんて当たり前だ。

遠目には焦りながらも巫女がなんとか妖怪たちを相手取っていた。

：まあ突き飛ばされた後に固まらず、動けてるだけいいか。

俺は巫女の戦いを見ながら両手で槍を握る。

そのまま能力を使つてパラパラと槍を崩していく。時間はかかるが、自力で抜けない以上こうするしかない。

その間巫女は一人で戦うことになるが：まあ頑張ってもらおうか。

当たりそうで当たらない：フラフラと飛んではなんとか避けて…。

その戦い方からはやはり才能というものは感じられない。歴代の巫女達から感じた力強さはない。

だが：なるほどやはり博麗の巫女か。

当初紫の話を聞いたときには、俺はもつと巫女が成長してからするべきだと紫に言った。すべてが平凡なあの巫女に初陣からこんな妖怪の大群と戦わせるなんて無謀が過ぎる…と。単純に力不足だと感じたからだ。

それに対して紫は大丈夫だと言い切った。陰陽玉を用いて戦う巫女を見て、その意味

が今になってようやくわかった。

歴代の博麗の巫女には向き不向きこそあれど、それぞれ特筆した得意分野がある。

近接戦闘においては無類の強さを誇り、大妖怪すら退けた巫女。

その逆に、圧倒的な弾幕で中距離の戦闘に秀でていた巫女。

人の脆さを補うように治癒に重きを置いた巫女。

誰よりも巧みに結界を操り、博麗大結界の成立にも大きく関わった巫女。

それぞれ個々の強さに差はあるが、他の巫女にない特筆した力を持っていた。

そしてその巫女達の道具として必ず用いられてきたのが陰陽玉。使用者によつて大

きさも能力も変化する博麗の巫女の神器。

それを扱えるものはその時代にただ一人、博麗の巫女を除いて他にいない。陰陽玉を使えることこそが博麗の巫女である最大の証明だ。

歴代の巫女の陰陽玉は使用者の特筆した力をさらに押し上げるように補助として力を変えてきた。

なら今代の巫女は？

飛行も下手で近接戦闘などでんで駄目、霊力弾だつて狙いも甘ければ力も不安定、結界を張るのも手際が悪い。神降なんて一切できない。

考えれば考えるほどなぜ巫女に選ばれたのか不思議でならないようなありさまだ。

だが、それでも——才能はあった。少し得意なんて言うちんけなものではない。それは歴代のどの巫女も持っていなかった特筆した力。

俺は目を細めてその光景を見る。必死に飛び回り、周りに浮かべた“4つの陰陽玉”を操って戦う巫女の姿を。

まだ危うい巫女の足りない部分を補うように陰陽玉は妖怪達を粉碎していく。

飛行も下手で近接戦闘などでんで駄目、霊力弾だつて狙いも甘ければ力も不安定、境界を張るのも手際が悪い。神降なんて一切できない。

だが、それでも…：今代の巫女は歴代のどの巫女よりも陰陽玉を使うのが上手かった。そう、この巫女にはだれよりも上手く陰陽玉が使える才能があつたのだ。

気付けば東の空から差し込む朝日が巫女を照らしていた。

辺りに動いている妖怪はもういない。結局、あの妖怪の大群を彼女は一人で倒してしまつた。

身体やその巫女服のいたるところに返り血をべつたりと付け、そしてそのことを気にかける余裕もないといった様子で激しく肩で息をして…。

俺はそれを見てゆつくりと立ち上がり、巫女に近づく。

突き刺さっていた槍はとつくに消えていた。だがあえて、そうあえて巫女の成長の為

に静観していたのだ。

「はあっ……はあっ………ツ?! 白墨さん?! いっげホッゴホ! 生きて…きつ傷は!?

お腹の傷は……あれっ」

よほど驚いたのか、せき込みながらも不思議そうに傷一つない俺の身体を見る。

「……あの程度、日常茶飯事だ。」

「に、にちじよっ…え?…え?」

地面に落ちてる妖怪達と俺を見比べては目を白黒させる。

「……昔の巫女にはもつと酷い事をされている。」

「え、!?!」

衝撃を受けたように固まる巫女を無視して歩き始める。

「帰るぞ。」

「あつは、はい!」

しばらく固まっていた巫女はビックリと反応してついてくる。

久々に痛い目にあつた…巫女は思いのほか使えたが、今回のようなことはもうごめんだ。紫にはしっかりと文句を言って団子でも買ってもらおう。

そんなことを考えてとぼとぼ歩く。

後ろでは巫女が何か言いたげにしていたが、結局最後まで何か言ってくることはな

かった。

博麗神社に付くと、それはそれは満足そうな顔をした紫が手をひらひらとさせて出迎えていた。

うん。団子と饅頭も付けてもらおう。

そんなこんなで紫に巫女を引き渡して俺の長い一日は終わったのだった。